

岩手県埋文センター文化財調査報告書第21集

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書

安代町 荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・越戸Ⅱ遺跡

(財)岩手県埋蔵文化財センター
日 本 道 路 公 団

東北縦貫自動車道

関連遺跡発掘調査報告書

安代町 荒屋 I 遺跡・荒屋 II 遺跡・越戸 II 遺跡

序

岩手県内には数多くの遺跡が存在することは広く知られている所であります。昭和55年3月の県教育委員会文化課調査によりますと、県下に所在する埋蔵文化財包蔵地は4,719ヶ所の多きとなっております。この数は今後分布調査の範囲の拡張によって更に増加するものと考えられます。この埋蔵文化財包蔵地は、我々の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であります。この貴重な文化遺産を後世に守り伝える責務が我々に課せられているものと考えている所であります。

近年岩手県においても東北縦貫自動車道建設をはじめ、御所ダム建設等大型公共事業が実施され、その対象地内に多くの埋蔵文化財包蔵地が包括されております。これら対象地内の包蔵地について、事業実施以前に事業者と県文化課の間でその取り扱い方を協議し、その保護につとめています。しかし事業とのかかわりにおいて発掘調査を行ない記録保存をする所もで参ります。

当センターにおいては、埋蔵文化財保護の立場に立って、これら事業にかかわる埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に取り組んで参りました。発掘調査によってこれまで数々の貴重な資料を得ております。例えば、集落地としては、都南村湯沢遺跡、松尾村長者屋敷遺跡、盛岡市つなぎⅢ遺跡、水沢市膳性遺跡等、遺構・遺物としては盛岡市稗内遺跡の舳、足跡、弓、大型土偶など数多くございます。又これらの資料の整理、報告書の公刊についても職員一同一丸となって鋭意努力しておる所でございます。

今般その成果として、ここに本報告書を刊行いたすことになりました。内容については不十分の点が多々あるとは思いますが、本報告が、いささかでも関係各位の参考に供され、斯学向上の一助となれば幸甚と存じます。

最後に県教委、委託者をはじめ、関係各位に多大なご協力、ご援助を頂きましたことに厚く感謝申し上げます。今後のご指導、ご協力を合わせてお願い申し上げます。

昭和56年3月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新里 盈

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	新里 盈	(県教育長)
副理事長	古館尚一郎	(県教育次長)
常務理事	菅原一郎	(県埋蔵文化財センター所長)
理事	土門隆三	(県農政部次長)
〃	佐々木益人	(県林業水産部長)
〃	菊池岩人	(県土木部次長)
〃	森 嘉兵衛	(岩手大学名誉教授)
〃	板橋 源	(岩手大学名誉教授・県立博物館長)
〃	草間俊一	(岩手大学人文社会科学部長)
〃	小形信夫	(前常務理事)
監事	熊谷正男	(県文化課長)
〃	及川久男	(県財務課長)

職員

所長	菅原一郎			
総務課長	小笠原喜一	調査課長	瀬川司男	専門調査員 三浦謙一
庶務係長	岡沢成治	主任専門調査員	近藤宗光	〃 鈴木隆英
主事	佐藤久四郎	〃	遠藤勝博	〃 高橋文夫
〃	立花多加志	〃	山口了紀	〃 高橋正之
〃	及川賀子	〃	国生 尚	〃 種市 進
技能員	佐藤春男	専門調査員	村上達夫	〃 四井謙吉
補助員	広瀬陽子	〃	畠山靖彦	〃 吉田 洋
〃	田鎖光子	〃	高橋与右工門	〃 工藤利幸
〃	藤田真弓	〃	鈴木恵治	〃 光井文行
		〃	小平忠孝	〃 中川重紀
		〃	大原一則	〃 佐藤 勝
		〃	本沢慎輔	〃 高橋義介
		〃	田鎖寿夫	〃 松野恒夫
				〃 佐々木清文

緒 言

1. 本報告書は、東北縦貫自動車道建設予定地内に所在する岩手県二戸郡安代町荒屋 I 遺跡・荒屋 II 遺跡・越戸 II 遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。3 遺跡に共通する事項は一括して「序論」として掲載した。
2. 発掘調査の結果に関する分析および考察は、追って報告することになっている『安代町有矢野遺跡・上の山 X 遺跡発掘調査報告書』にもり込む予定である。
3. 発掘調査は各遺跡の調査要項に示した期間に行なわれた。室内整理作業は昭和54年11月5日から同55年3月31日までの期間に行なわれた。
4. 各遺跡の発掘調査担当者は次のとおりである。
荒屋 I 遺跡・荒屋 II 遺跡（第 2 次）・越戸 II 遺跡……………小平忠孝、種市 進、四井謙吉
荒屋 II 遺跡（第 1 次）……………金沢光孝、四井謙吉 調査協力員 小泉修栄
5. 発掘調査にあたっては、次の方々からご教示をいただいた。
町田 洋（東京都立大学助教授）、松山 力（青森県立八戸高等学校教諭）
6. 発掘調査においては、次の諸機関のご協力をいただいた。
日本道路公団仙台建設局西根工事事務所・安代工事事務所、安代町役場
7. 発掘調査の作業には、上沖連次郎氏をはじめとする地元の方々にご協力をいただいた。
8. 本報告書の執筆にあたり、石器の石質鑑定を岩手大学教授 橘 行一氏に依頼した。
9. 本報告書の執筆分担は、次のとおりである。
I. 序論 1 ……瀬川司男 2（1） ……四井謙吉 （2） ……小平忠孝
3（1） ……種市 進（2） ……小平忠孝
II. 荒屋 I 遺跡 1～3 ……四井謙吉
III. 荒屋 II 遺跡 1～3 ……四井謙吉
IV. 越戸 II 遺跡 1（1） ……小平忠孝（2）～（4）遺構…種市進・出土遺物…小平忠孝
2～3 ……小平忠孝
10. 図版・写真図版の作成および遺物の復元にあたっては、次の方々のご協力をいただいた。
滝村キヨ、阿部蓉子、家子珠枝、鈴木スズ子、浅沼朝子、大沼幸恵、白沢ケイ子、中島ヨシ、南館恭子、佐藤満恵、藤島ヒロ子、浅沼啓子、村上幹子、川村京子、武蔵アサヨ、浅沼幸子、越場ミチエ、吉田律子、勝政タカ子、瀬川幸子、浅沼光子、川村ミチ子、吉田京岩館のぶ子、大木エサ、武蔵ヒサ、吉田サン、佐藤リエ、北条恵美子、佐々木キヌ、天沼キミエ、佐藤ヨシ、佐藤良子、大木絹子、佐藤和也

本文目次

序

緒言

I. 序論

1. 調査に至る経過	6
2. 調査方法と室内整理の方法	7
(1) 調査方法	7
(2) 室内整理の方法	9
3. 遺跡の立地と環境	14
(1) 地形・地質	14
(2) 周辺の遺跡	24

II. 荒屋 I 遺跡

1. 検出遺構	33
(1) 竪穴住居址	33
(2) ピット	41
(3) 焼土遺構	44
2. 遺構外の出土遺物	52
(1) 土器	52
(2) 石器	55
(3) 土製品	56
3. まとめ	66

III. 荒屋 II 遺跡

1. 検出遺構	95
---------	----

(1) 竪穴住居址	95
(2) ピット	108
(3) 陥し穴状遺構	117
2. 遺構外の出土遺物	154
(1) 土器	154
(2) 石器	156
3. まとめ	167

IV. 越戸II遺跡

1. 検出遺構	225
(1) 竪穴住居址	225
(2) ピット	243
(3) 陥し穴状遺構	244
(4) その他の遺構	245
2. 遺構外の出土遺物	257
(1) 土器	257
(2) 石器	259
3. まとめ	263

図版目次

I. 序 論	
図版 1 岩手県全体図……………	3
図版 2 遺跡位置図……………	5
図版 3 荒屋 I 遺跡グリッド配置図……………	11
図版 4 荒屋 II 遺跡グリッド配置図……………	12
図版 5 越戸 II 遺跡グリッド配置図……………	13
図版 6 地形区分図……………	16
図版 7 ……………	18
a. 荒屋 I 遺跡層序	
b. 荒屋 II 遺跡層序	
c. 荒屋 I・II 遺跡地形断面図	
図版 8 ……………	21
a. 越戸 II 遺跡地形断面図	
b. 越戸 II 遺跡層序	
II. 荒屋 I 遺跡	
図版 1 遺跡地形図……………	29
図版 2 遺構配置図……………	31
図版 3 D II-1 住居址 (平面・断面) ……	38
図版 4 ……………	39
a. D III-1 住居址 (平面・断面)	
b. D III-2 住居址 (平面)	
c. D III-3 住居址 (平面)	
図版 5 D III-4 住居址 (平面・断面) ……	40
図版 6 ……………	46
a. D II-51ピット (平面・断面)	
b. D II-52ピット (平面・断面)	
c. D II-53ピット (平面・断面)	
d. D II-54ピット (平面・断面)	
図版 7 ……………	47
a. D III-51ピット (平面・断面)	
b. D III-52ピット (平面・断面)	
c. D III-53ピット (平面・断面)	
図版 8 ……………	48
a. D II-151焼土遺構 (平面・断面)	
b. D III-151焼土遺構 (平面・断面)	
c. D III-152焼土遺構 (平面・断面)	
図版 9 遺構内の出土遺物 (1) ……………	49
[D II-1・D III-1 住居址]	
図版 10 遺構内の出土遺物 (2) ……………	50
[D III-2・D III-3・D III-4住居址, D II-51・D II-52・D II-53ピット]	
図版 11 遺構内の出土遺物 (3) ……………	51
[D III-51・D III-52・D III-53ピット]	
図版 12 遺構外の出土遺物 (1)[土器] ……	58
図版 13 遺構外の出土遺物 (2)[土器] ……	59
図版 14 遺構外の出土遺物 (3)[土器] ……	60
図版 15 遺構外の出土遺物 (4)[土器] ……	61
図版 16 遺構外の出土遺物 (5)[土器] ……	62
図版 17 遺構外の出土遺物 (6)[石器] ……	63
図版 18 遺構外の出土遺物 (7)[石器] ……	64
図版 19 遺構外の出土遺物 (8)[石器・土製品]	65
III. 荒屋 II 遺跡	
図版 1 遺構配置図……………	93
図版 2 D II-1 住居址 (平面・断面) ……	103

図版3	E I-1 住居址(1)(平面・断面)	104	図版14	133
図版4	E I-1 住居址(2)(断面)	a.	E I-102 陥し穴状遺構(平面・断面)	
図版5	E II-1 住居址状遺構(平面・断面)	106	b.	E I-103 陥し穴状遺構(平面・断面)	
図版6	E II-2 住居址(平面・断面)	図版15	134
図版7	114	a.	E I-104 陥し穴状遺構(平面・断面)	
a.	E I-51ピット(平面・断面)		b.	E I-105 陥し穴状遺構(平面・断面)	
b.	E I-52ピット(平面・断面)		図版16	135
c.	E I-53ピット(平面・断面)		a.	E I-106 陥し穴状遺構(平面・断面)	
d.	E I-55ピット(平面・断面)		b.	E I-107 陥し穴状遺構(平面・断面)	
図版8	115	図版17	136
a.	E I-56ピット(平面・断面)		a.	E I-108 陥し穴状遺構(平面・断面)	
b.	E I-57ピット(平面・断面)		b.	E II-101 陥し穴状遺構(平面・断面)	
c.	E I-58ピット(平面・断面)		図版18	137
図版9	116	a.	E II-102 陥し穴状遺構(平面・断面)	
a.	E I-59ピット(平面・断面)		b.	E II-103 陥し穴状遺構(平面・断面)	
b.	E II-51ピット(平面・断面)		図版19	138
c.	E II-53ピット(平面・断面)		a.	E II-52ピット、E II-104 陥し穴状遺構(平面・断面)	
図版10	129	b.	E II-105 陥し穴状遺構(平面・断面)	
a.	D I-101 陥し穴状遺構(平面・断面)		図版20	139
b.	D I-102 陥し穴状遺構(平面・断面)		a.	E II-106 陥し穴状遺構(平面・断面)	
c.	D I-103 陥し穴状遺構(平面・断面)		b.	E II-107 陥し穴状遺構(平面・断面)	
図版11	130	図版21	140
a.	D I-104 陥し穴状遺構(平面・断面)		a.	E II-108 陥し穴状遺構(平面・断面)	
b.	D I-105 陥し穴状遺構(平面・断面)		b.	E II-109 陥し穴状遺構(平面・断面)	
c.	D I-106 陥し穴状遺構(平面・断面)		図版22	141
図版12	131	a.	E II-110 陥し穴状遺構(平面・断面)	
a.	D I-107 陥し穴状遺構(平面・断面)		b.	E II-111 陥し穴状遺構(平面・断面)	
b.	D I-108 陥し穴状遺構(平面・断面)		図版23	142
c.	D I-109 陥し穴状遺構(平面・断面)		a.	E III-101 陥し穴状遺構(平面・断面)	
図版13	132	b.	E III-102 陥し穴状遺構(平面・断面)	
a.	D III-101 陥し穴状遺構(平面・断面)		図版24	143
b.	E I-54ピット、E I-101 陥し穴状遺構(平面・断面)		a.	E III-103 陥し穴状遺構(平面・断面)	

b. F I-101陥し穴状遺構(平面・断面)

図版25 遺構内の出土遺物(1) ……144
〔D II-1 住居址〕

図版26 遺構内の出土遺物(2) ……145
〔E I-1 住居址〕

図版27 遺構内の出土遺物(3) ……146
〔E II-1 住居址状遺構〕

図版28 遺構内の出土遺物(4) ……147
〔E II-2 住居址、E I-55ピット〕

図版29 遺構内の出土遺物(5) ……148
〔E I-55・E I-56ピット〕

図版30 遺構内の出土遺物(6) ……149
〔E I-57・E I-58ピット〕

図版31 遺構内の出土遺物(7) ……150
〔E I-59ピット〕

図版32 遺構内の出土遺物(8) ……151
〔E II-51・E II-53ピット、D I-103・D I-106・E I-101・E I-102陥し穴状遺構〕

図版33 遺構内の出土遺物(9) ……152
〔E I-104陥し穴状遺構〕

図版34 遺構内の出土遺物(10) ……153
〔E II-103・E II-104・F I-101陥し穴状遺構〕

図版35 遺構外の出土遺物(1)〔土器〕 ……158

図版36 遺構外の出土遺物(2)〔土器〕 ……159

図版37 遺構外の出土遺物(3)〔土器〕 ……160

図版38 遺構外の出土遺物(4)〔石器〕 ……161

図版39 遺構外の出土遺物(5)〔石器〕 ……162

図版40 遺構外の出土遺物(6)〔石器〕 ……163

図版41 遺構外の出土遺物(7)〔石器〕 ……164

図版42 遺構外の出土遺物(8)〔石器〕 ……165

図版43 遺構外の出土遺物(9)〔石器〕 ……166

IV. 越戸II遺跡

図版1 遺跡地形図 ……222

図版2 遺構配置図 ……223

図版3 ……236

a. D III-1 住居址(平面・断面)

b. D III-2 住居址(平面・断面)

図版4 D III-3 住居址(平面・断面) ……237

図版5 D IV-1 住居址(平面・断面) ……238

図版6 D IV-2 住居址(平面・断面) ……239

図版7 D IV-3 住居址(平面・断面) ……240

図版8 E IV-1 住居址(平面・断面) ……241

図版9 E IV-2 住居址(平面・断面) ……242

図版10 ……247

a. D III-51ピット(平面・断面)

b. D IV-51ピット(平面・断面)

c. D IV-52ピット(平面・断面)

d. E IV-51ピット(平面・断面)

図版11 ……248

a. E III-101陥し穴状遺構(平面・断面)

b. E IV-101陥し穴状遺構(平面・断面)

図版12 ……249

a. C I-151炉址状配石遺構(平面・断面)

b. E III-151焼土遺構(平面・断面)

図版13 遺構内の出土遺物(1) ……250
〔D III-1・D III-2 住居址〕

図版14 遺構内の出土遺物(2) ……251
〔D III-2 住居址〕

図版15 遺構内の出土遺物(3) ……252
〔D III-3・D IV-1 住居址〕

図版16 遺構内の出土遺物(4) ……253
〔D IV-2 住居址〕

図版17	遺構内の出土遺物（5）	……254
	〔DⅣ-3住居址〕	
図版18	遺構内の出土遺物（6）	……255
	〔EⅣ-1住居址〕	
図版19	遺構内の出土遺物（7）	……256
	〔EⅣ-2住居址、DⅣ-51ピット、CⅠ-151炉址状配石遺構〕	
図版20	遺構外の出土遺物（1）〔土器〕	…260
図版21	遺構外の出土遺物（2）〔土器〕	…261
図版22	遺構外の出土遺物（3）〔石器〕	…262

写真図版目次

II. 荒屋 I 遺跡	
写真図版 1 遺跡航空写真……………71	b. D III-51ピット (土器出土状況)
写真図版 2……………72	c. D III-52ピット
a. 遺跡遠景	d. D III-53ピット
b. D II-1 住居址	写真図版 8……………78
写真図版 3……………73	a. D II-151焼土遺構 (断面)
a. D II-1 住居址炉	b. D III-151焼土遺構 (断面)
b. D II-1 住居址炉 (断面)	c. D III-152焼土遺構 (断面)
c. D II-1 住居址 (遺物出土状況)	d. C II区土器出土状況
d. D III-1・2・3住居址	写真図版 9 遺構内の出土遺物 (1) ……79
写真図版 4……………74	[D II-1・D III-1 住居址]
a. D III-1 住居址炉 (断面)	写真図版10 遺構内の出土遺物 (2) ……80
b. D III-2 住居址炉	[D III-2・D III-3・D III-4住居址, D II-51・D II-52・D II-53ピット]
c. D III-3 住居址炉	写真図版11 遺構内の出土遺物 (3) ……81
d. D III-3 住居址炉 (断面)	[D III-51・D III-52・D III-53ピット]
e. D III-4 住居址 (土層断面)	写真図版12 遺構外の出土遺物(1)[土器]82
写真図版 5……………75	写真図版13 遺構外の出土遺物(2)[土器]83
a. D III-4 住居址	写真図版14 遺構外の出土遺物(3)[土器]84
b. D III-4 住居址炉 (断面)	写真図版15 遺構外の出土遺物(4)[土器]85
c. D II-51ピット	写真図版16 遺構外の出土遺物(5)[土器]86
d. D II-51ピット (土層断面)	写真図版17 遺構外の出土遺物(6)[土器]87
写真図版 6……………76	写真図版18 遺構外の出土遺物(7)[土器]88
a. D II-52ピット	写真図版19 遺構外の出土遺物(8)[石器]89
b. D II-52ピット (土層断面)	写真図版20 遺構外の出土遺物(9)[石器]90
c. D II-53ピット	
d. D II-54ピット	III. 荒屋 II 遺跡
写真図版 7……………77	写真図版 1 遺跡航空写真(遺構配置状況)175
a. D III-51ピット	写真図版 2……………176
	a. 遺跡遠景

b. D II-1 住居址	f. E I-54ピット (土層断面)
写真図版 3177	写真図版 9183
a. D II-1 住居址炉	a. E I-55ピット
b. D II-1 住居址炉 (断面)	b. E I-55ピット (土器出土状況)
c. D II-1 住居址 (土器出土状況)	c. E I-55ピット (崩壊状況)
d. E I-1 住居址 (土層断面)	d. E I-56ピット
e. E I-1 住居址 (土層断面)	e. E I-56ピット (土層断面)
写真図版 4178	写真図版10.....184
a. E I-1 住居址	a. E I-57ピット
b. E I-1 住居址1号炉	b. E I-57ピット (土層断面)
c. E I-1 住居址1号炉 (断面)	c. E I-58ピット
写真図版 5179	d. E I-58ピット (土層断面)
a. E I-1 住居址2号炉	e. E I-59ピット
b. E I-1 住居址2号炉 (断面)	写真図版11.....185
c. E I-1 住居址埋設土器	a. E II-51ピット
d. E I-1 住居址埋設土器 (断面)	b. E II-51ピット (土層断面)
e. E II-1 住居址状遺構 (土層断面)	c. E II-53ピット
写真図版 6180	d. E II-53ピット (土層断面)
a. E II-1 住居址状遺構	写真図版12.....186
b. E II-2 住居址	a. D I-101陥し穴状遺構
写真図版 7181	b. D I-101陥し穴状遺構 (土層断面)
a. E II-2 住居址 (土層断面)	c. D I-102陥し穴状遺構
b. E II-2 住居址炉	d. D I-102陥し穴状遺構 (土層断面)
c. E II-2 住居址炉 (断面)	写真図版13.....187
d. E II-2 住居址 (土器出土状況)	a. D I-103陥し穴状遺構
e. E II-2 住居址 (土器出土状況)	b. D I-103陥し穴状遺構 (土層断面)
写真図版 8182	c. D I-104陥し穴状遺構
a. E I-51ピット	d. D I-104陥し穴状遺構 (土層断面)
b. E I-51ピット (土層断面)	写真図版14.....188
c. E I-52ピット	a. D I-105陥し穴状遺構
d. E I-53ピット	b. D I-105陥し穴状遺構 (土層断面)
e. E I-54ピット	c. D I-106陥し穴状遺構

d. D I-106陥し穴状遺構 (土層断面)	a. E I-108陥し穴状遺構
写真図版15……………189	b. E I-108陥し穴状遺構 (土層断面)
a. D I-107陥し穴状遺構	c. E II-101陥し穴状遺構
b. D I-107陥し穴状遺構 (土層断面)	d. E II-101陥し穴状遺構 (土層断面)
c. D I-108陥し穴状遺構	e. E II-101陥し穴状遺構 (検出状況)
d. D I-108陥し穴状遺構 (土層断面)	写真図版22……………196
写真図版16……………190	a. E II-102陥し穴状遺構
a. D I-109陥し穴状遺構	b. E II-102陥し穴状遺構 (土層断面)
b. D I-109陥し穴状遺構 (土層断面)	c. E II-103陥し穴状遺構
c. D I区陥し穴状遺構群 (配列状況)	d. E II-103陥し穴状遺構 (土層断面)
写真図版17……………191	写真図版23……………197
a. D III-101陥し穴状遺構	a. E II-104陥し穴状遺構
b. D III-101陥し穴状遺構 (土層断面)	b. E II-104陥し穴状遺構 (土層断面)
c. E I-101陥し穴状遺構	c. E II-105陥し穴状遺構
d. E I-101陥し穴状遺構 (土層断面)	d. E II-105陥し穴状遺構 (土層断面)
e. E I-101陥し穴状遺構 (崩壊状況)	写真図版24……………198
写真図版18……………192	a. E II-106陥し穴状遺構
a. E I-102陥し穴状遺構	b. E II-106陥し穴状遺構 (土層断面)
b. E I-102陥し穴状遺構 (土層断面)	c. E II-107陥し穴状遺構
c. E I-103陥し穴状遺構	d. E II-107陥し穴状遺構 (土層断面)
d. E I-103陥し穴状遺構 (土層断面)	写真図版25……………199
写真図版19……………193	a. E II-108陥し穴状遺構
a. E I-104陥し穴状遺構	b. E II-108陥し穴状遺構 (土層断面)
b. E I-104陥し穴状遺構 (土層断面)	c. E II-109陥し穴状遺構
c. E I-105陥し穴状遺構	d. E II-109陥し穴状遺構 (土層断面)
d. E I-105陥し穴状遺構 (土層断面)	写真図版26……………200
写真図版20……………194	a. E II-110陥し穴状遺構
a. E I-106陥し穴状遺構	b. E II-110陥し穴状遺構 (土層断面)
b. E I-106陥し穴状遺構 (土層断面)	c. E II-111陥し穴状遺構
c. E I-107陥し穴状遺構	d. E II-111陥し穴状遺構 (土層断面)
d. E I-107陥し穴状遺構 (土層断面)	写真図版27……………201
写真図版21……………195	a. E III-101陥し穴状遺構

b. E III-101陥し穴状遺構 (土層断面)	写真図版45 遺構外の出土遺物(9)[石器]219
c. E III-102陥し穴状遺構	
d. E III-102陥し穴状遺構 (土層断面)	IV. 越戸II遺跡
写真図版28.....202	
a. E III-103陥し穴状遺構	写真図版1269
b. E III-103陥し穴状遺構 (土層断面)	a. 遺跡遠景
c. F I-101陥し穴状遺構	b. 深掘り土層断面
d. F I-101陥し穴状遺構 (土層断面)	写真図版2270
写真図版29...遺構内の出土遺物(1).....203	a. 深掘り土層断面
〔D II-1・E I-1住居址〕	b. D III-1住居址
写真図版30 遺構内の出土遺物(2).....204	写真図版3271
〔E I-1住居址〕	a. D III-1住居址(土層断面)
写真図版31 遺構内の出土遺物(3).....205	b. D III-1住居址(土層断面)
〔E I-1住居址、E II-1住居址状遺構〕	c. D III-2住居址(土層断面)
写真図版32 遺構内の出土遺物(4).....206	写真図版4272
〔E II-2住居址、E I-53・E I-55ピット〕	a. D III-2住居址
写真図版33 遺構内の出土遺物(5).....207	b. D III-2住居址炉
〔E I-55・E I-56ピット〕	c. D III-2住居址炉(断面)
写真図版34 遺構内の出土遺物(6).....208	写真図版5273
〔E I-57・E I-58ピット〕	a. D III-3住居址
写真図版35 遺構内の出土遺物(7).....209	b. D III-3住居址(土層断面)
〔E I-59・E II-51・E II-53ピット、D I-103・D I-104陥し穴状遺構〕	c. D III-3住居址炉
写真図版36 遺構内の出土遺物(8).....210	d. D III-3住居址炉(断面)
〔E I-101・E I-102・E I-104・E II-103・E II-104・F I-101陥し穴状遺構〕	写真図版6274
写真図版37 遺構外の出土遺物(1)[土器]211	a. D IV-1住居址
写真図版38 遺構外の出土遺物(2)[土器]212	b. D IV-1住居址(土層断面)
写真図版39 遺構外の出土遺物(3)[土器]213	c. D IV-1住居址炉
写真図版40 遺構外の出土遺物(4)[土器]214	d. D IV-1住居址炉(断面)
写真図版41 遺構外の出土遺物(5)[土器]215	写真図版7275
写真図版42 遺構外の出土遺物(6)[石器]216	a. D IV-2住居址
写真図版43 遺構外の出土遺物(7)[石器]217	b. D IV-2住居址(土層断面)
写真図版44 遺構外の出土遺物(8)[石器]218	写真図版8276

a. D IV-3 住居址	d. E III-151 焼土遺構 (断面)
b. D IV-3 住居址 (土層断面)	e. E IV区土器出土状況
c. D IV-3 住居址炉	写真図版15 遺構内の出土遺物(1) ……283
写真図版9 ……277	[D III-1 住居址]
a. D IV-3 住居址炉 (断面)	写真図版16 遺構内の出土遺物(2) ……284
b. D IV-3 住居址 (土器出土状況)	[D III-2 住居址]
c. E IV-1 住居址 (土層断面)	写真図版17 遺構内の出土遺物(3) ……285
d. E IV-1 住居址炉	[D III-2・D III-3 住居址]
写真図版10 ……278	写真図版18 遺構内の出土遺物(4) ……286
a. E IV-1 住居址	[D IV-1・D IV-2 住居址]
b. E IV-1 住居址炉 (断面)	写真図版19 遺構内の出土遺物(5) ……287
c. E IV-1 住居址「出入口」状施設(断面)	[D IV-3 住居址]
写真図版11 ……279	写真図版20 遺構内の出土遺物(6) ……288
a. E IV-2 住居址	[D IV-3・E IV-1 住居址]
b. E IV-2 住居址炉	写真図版21 遺構内の出土遺物(7) ……289
c. E IV-2 住居址炉 (断面)	[E IV-2 住居址、D IV-51ピット、C I-151炉址状配石遺構]
写真図版12 ……280	写真図版22 遺構外の出土遺物(1)[土器] 290
a. D III-51ピット	写真図版23 遺構外の出土遺物(2)[土器] 291
b. D IV-51ピット	写真図版24 遺構外の出土遺物(3)[土器] 292
c. D IV-51ピット (土層断面)	写真図版25 遺構外の出土遺物(4)[石器] 293
d. D IV-52ピット	
e. E IV-51ピット	
f. E IV-51ピット (土層断面)	
写真図版13 ……281	
a. E III-101 陥し穴状遺構	
b. E III-101 陥し穴状遺構 (土層断面)	
c. E IV-101 陥し穴状遺構	
d. E IV-101 陥し穴状遺構 (土層断面)	
写真図版14 ……282	
a. C I-151 炉址状配石遺構	
b. C I-151 炉址状配石遺構 (断面)	
c. E III-151 焼土遺構	

表 目 次

II. 荒屋 I 遺跡

表 1	荒屋 I 遺跡遺構名訂正表	68
表 2	荒屋 I 遺跡出土石器計測表	69
表 3	荒屋 I 遺跡 ¹⁴ C 試料測定結果表	69

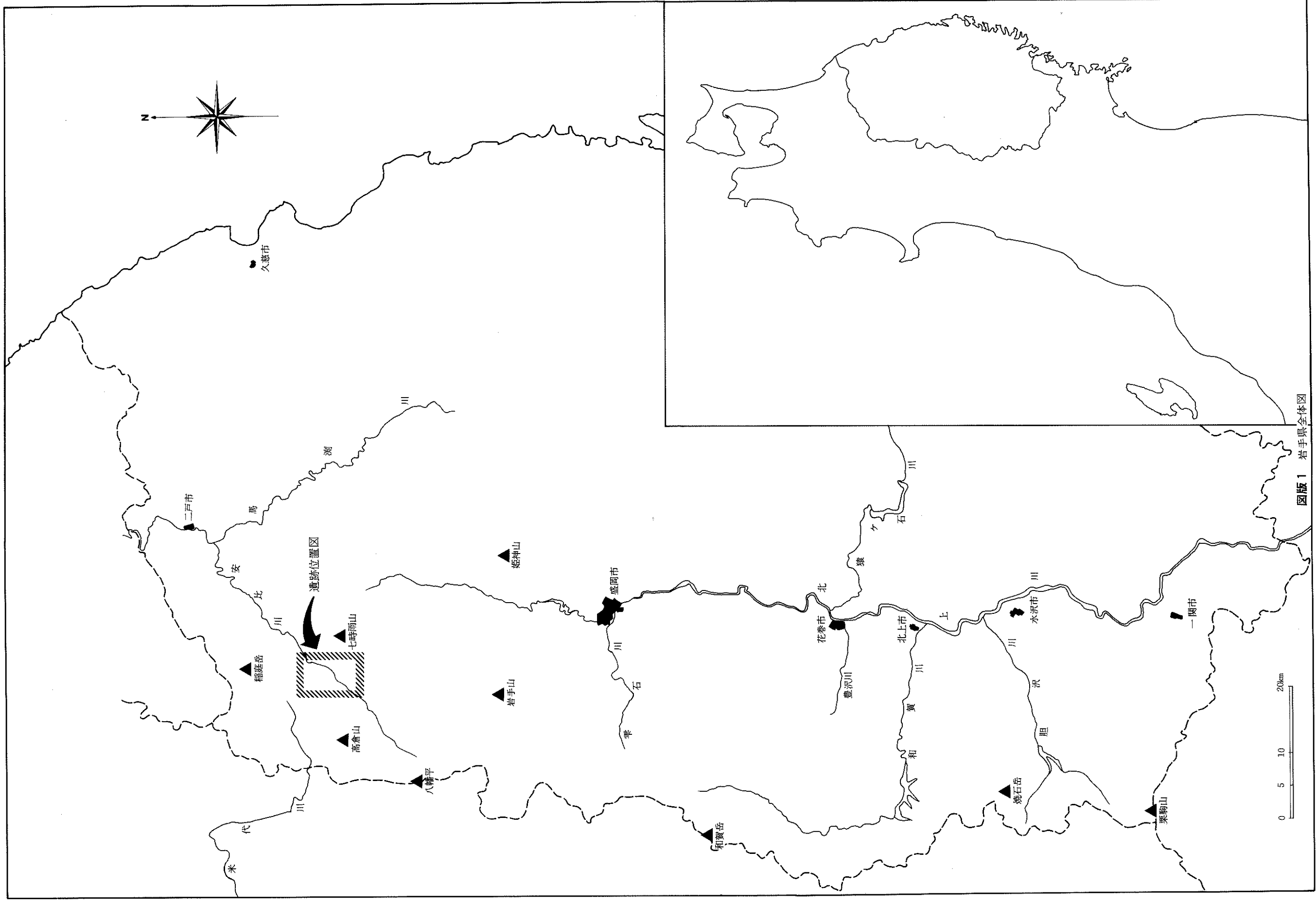
III. 荒屋 II 遺跡

表 1	荒屋 II 遺跡遺構名訂正表	171
表 2	荒屋 II 遺跡出土石器計測表	172
表 3	荒屋 II 遺跡 ¹⁴ C 試料測定結果表	174

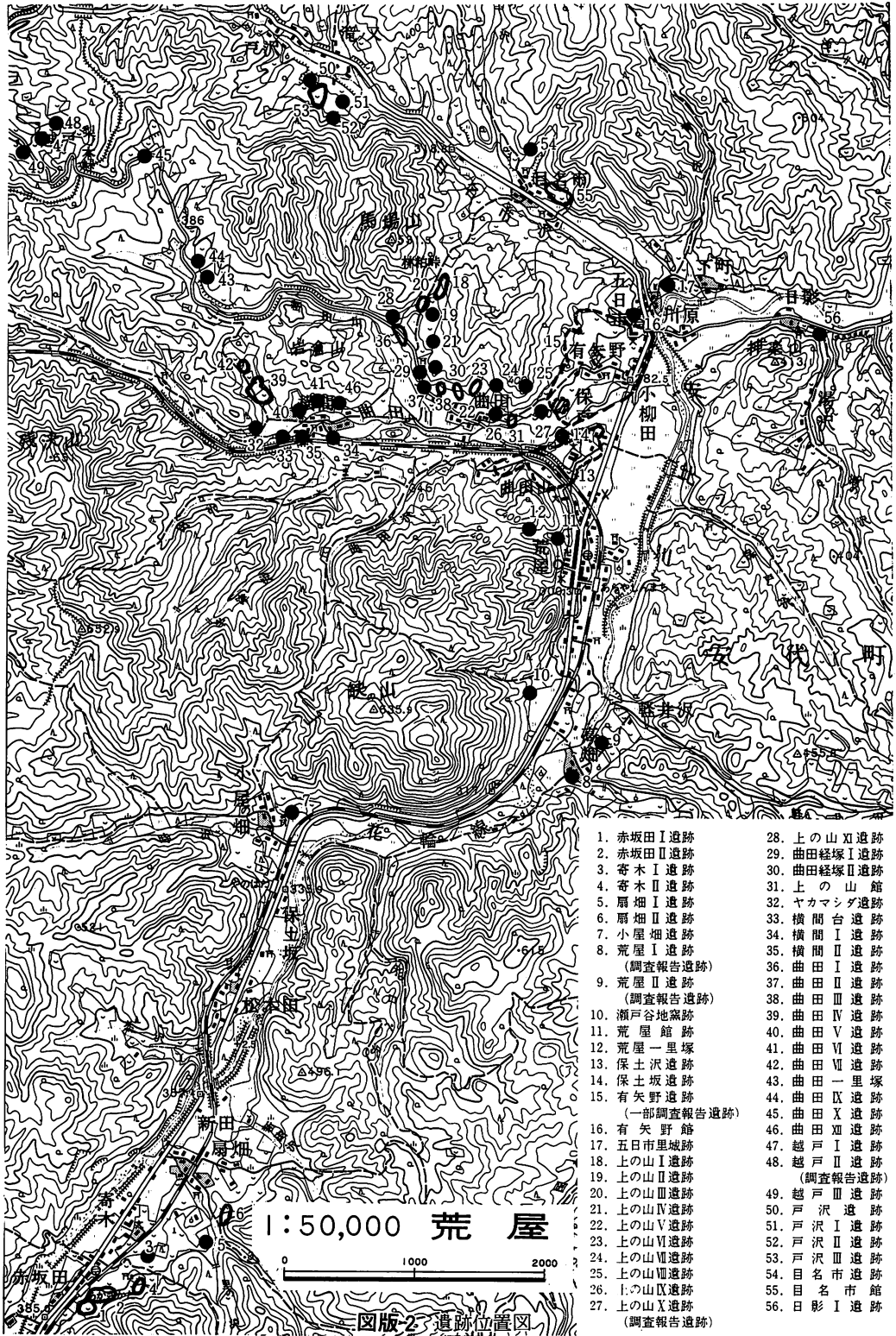
IV. 越戸 II 遺跡

表 1	越戸 II 遺跡遺構名訂正表	265
表 2	越戸 II 遺跡出土石器計測表	266
表 3	越戸 II 遺跡 ¹⁴ C 試料測定結果表	267

I. 序 論



図版1 岩手県全体図



- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. 赤坂田 I 遺跡 | 28. 上の山 XI 遺跡 |
| 2. 赤坂田 II 遺跡 | 29. 曲田経塚 I 遺跡 |
| 3. 奇木 I 遺跡 | 30. 曲田経塚 II 遺跡 |
| 4. 奇木 II 遺跡 | 31. 上の山 館 |
| 5. 扇畑 I 遺跡 | 32. ヤカマシツ遺跡 |
| 6. 扇畑 II 遺跡 | 33. 横間台 遺跡 |
| 7. 小屋畑 遺跡 | 34. 横間 I 遺跡 |
| 8. 荒屋 I 遺跡 | 35. 横間 II 遺跡 |
| (調査報告遺跡) | 36. 曲田 I 遺跡 |
| 9. 荒屋 II 遺跡 | 37. 曲田 II 遺跡 |
| (調査報告遺跡) | 38. 曲田 III 遺跡 |
| 10. 瀬戸谷地窯跡 | 39. 曲田 IV 遺跡 |
| 11. 荒屋 館跡 | 40. 曲田 V 遺跡 |
| 12. 荒屋 一里塚 | 41. 曲田 VI 遺跡 |
| 13. 保土沢 遺跡 | 42. 曲田 VII 遺跡 |
| 14. 保土坂 遺跡 | 43. 曲田 一里塚 |
| 15. 有矢野 遺跡 | 44. 曲田 IX 遺跡 |
| (一部調査報告遺跡) | 45. 曲田 X 遺跡 |
| 16. 有矢野 館跡 | 46. 曲田 XI 遺跡 |
| 17. 五日市里城跡 | 47. 越戸 I 遺跡 |
| 18. 上の山 I 遺跡 | 48. 越戸 II 遺跡 |
| 19. 上の山 II 遺跡 | (調査報告遺跡) |
| 20. 上の山 III 遺跡 | 49. 越戸 III 遺跡 |
| 21. 上の山 IV 遺跡 | 50. 戸沢 I 遺跡 |
| 22. 上の山 V 遺跡 | 51. 戸沢 II 遺跡 |
| 23. 上の山 VI 遺跡 | 52. 戸沢 III 遺跡 |
| 24. 上の山 VII 遺跡 | 53. 戸沢 IV 遺跡 |
| 25. 上の山 VIII 遺跡 | 54. 目名市市館 |
| 26. 上の山 IX 遺跡 | 55. 目名市市館 |
| 27. 上の山 X 遺跡 | 56. 日影 I 遺跡 |
| (調査報告遺跡) | |

1. 調査に至る経過

東北縦貫自動車道建設にかかわる調査は、昭和47年4月より県教育委員会事務局社会教育課によって開始された。調査区間は一関―盛岡間約90kmで、47年度においては用地買収が先行した花巻工事事務所管内の金ヶ崎町、北上市、花巻市に所在する遺跡調査を行なった。しかし調査工程と工事工程との間に大幅な差のある事、東北新幹線関連遺跡も47年10月より開始された事も重なり、調査体制の整備が強く要望された。

この要望に答え、文化行政の強化のために昭和48年4月に県教育委員会事務局に新たに文化課が設置された。

一方東北縦貫自動車道建設、東北新幹線建設工事に刺戟されたかのように、県内各地で大型開発が行なわれ、これに対応することが必要となってきた。

しかし調査は工事工程とのかかわりから厳冬まで行なわれ、文化庁主任調査官の水野正好氏を驚かせるという一幕もあった。この調査の強行は当然、整理・報告書への皺寄せとなり一冊の報告書も刊行できない状態となっていった。

この事態の解決と恒久的な調査体制への指向を目指し、昭和52年に財団法人岩手県埋蔵文化財センターが発足した。これによって県が行なうべき埋蔵文化財にかかわる調査は(財)岩手県埋蔵文化財センターが実施することになり、昭和53年度からは特別な調査を除いては全て実施している。

東北縦貫自動車道建設関連の調査は、県文化課と(財)岩手県埋文センターの協議によって、年度としては昭和52年度、区間としては第5次区間の西根インターまでを県文化課が実施すること、西根インター以北の第5次区間及びそれ以降実施される第7・8次区間は県埋文センターが実施することとなった。

西根インター以北の遺跡に係わる経過をたどると、昭和48年度に2km幅の分布調査が関連公共調査の一環として県文化課及び学識経験者を中心に行なわれ、49年500m幅の分布調査が行なわれ、50年度に中心杭が打たれ路線発表後にルートに沿って再度分布調査が県文化課によって行なわれた。この時点において安代町越戸館が、ルート内に所在する事が判明し、ルート変更を強く要望した。このルート変更については日本道路公団が応じ破壊を免れた。

ルート決定が終わり、県文化課、日本道路公団との間の協議が進み、昭和53年に(財)県埋文センターとの間で調査に関する委託契約が結ばれた。

昭和53年度調査は西根町、松尾村を中心に進められた。安代町関係の遺跡は荒屋II遺跡のみが対象となった。しかしこの遺跡の調査も粗掘りを中心に一部精査を行ない昭和54年度継続調

査とした。この調査によって、県北では未発見タイプの陥し穴状遺構が検出された。

昭和54年度は東北縦貫道関連遺跡調査は松尾村長者屋敷遺跡を除き安代町に集中した。

工事工程との関係についての協議が昭和53年暮から54年3月まで行なわれた。公団側は安代インターまでの調査完了を要望し、文化課、埋文センターは安代インターのみの調査を主張した。その後の協議により、調査完了遺跡4、粗掘り遺構検出のみ5（但し粗掘りの途中において再協議を行なう）とすることにした。即ち

調査完了遺跡 荒屋Ⅰ・Ⅱ、有矢野、上の山Ⅹの各遺跡

粗掘り・遺構検出遺跡 赤坂田Ⅰ・Ⅱ、安代寄木、扇畑Ⅰ・Ⅱの各遺跡

である。

調査開始後、天候に恵まれ順調に推移した。昭和54年7月初旬に道路公団、県文化課、県埋文センターの三者協議をもち、粗掘りグループのうち扇畑Ⅰ遺跡を9～10月に精査し調査を完了すること、安代寄木遺跡は遺構が検出されないことから調査対象外とすること。調査完了グループの進行が予定より順調であることから、越戸トンネルの越戸側に存在する越戸Ⅱ遺跡を追加することとした。

越戸Ⅱ遺跡を最後に全ての調査を11月完了した。

2. 調査方法と室内整理の方法

(1) 調査方法

①座標軸の設定（図版3～5）

荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・越戸Ⅱ遺跡の発掘調査において、次のように座標軸の設定を行なった。各遺跡とも調査対象区域内の自動車道中心杭の中から、基準点としてそれぞれ任意の2点を選びその一方を座標原点とした。選定した2点間を結ぶ直線と、座標原点を通りこれに直交する直線を基準線とした。調査対象区全体を30mごとに大区画し、これらに対して南北方向には北からA・B・C・……のアルファベットをふり、東西方向には西からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・……のローマ数字を付した。地区名は両者の組合せによって、例えばAⅠ区・BⅠ区……のように表わした。また30mの大区画を南北方向および東西方向にそれぞれ10等分し、3m×3mのグリッドを設定した。これらのグリッドには北からa～jのアルファベットをふり、西からは0～9のアラビア数字を付した。グリッド名は、以上のアルファベット・数字の組合せによって、例えばAⅠa0・BⅠb1……のように表わした。なお各遺跡の基準点として選定した自動車道の中心杭は以下のとおりである。

- 荒屋 I 遺跡 S T A. 296+00(座標原点)・S T A. 296+20、座標中軸線の方位 N-48°17'40"-E
- 荒屋 II 遺跡 S T A. 299+00(座標原点)・S T A. 299+20、座標中軸線の方位 N-35°40'00"-E
- 越戸 II 遺跡 S T A. 56+80(座標原点)・S T A. 57+00、座標中軸線の方位 N-28°11'00"-W

②粗掘り・遺構検出

3 遺跡とも遺構検出面までの土層を短期間で除去するために、粗掘りの段階で重機(パワー・シャベル)を1台導入した。重機によって土層を除去した後は、作業員を投入して遺構の有無を確認した。そして遺構がないことが判明した区画については土捨場にあてた。この一連の作業をほぼ大区画ごとに行ない、最終的に全調査対象区域について遺構の有無を確認した。

遺構が発見された場合には、その平面形の把握に努めた。検出された遺構にはその種別に関係なく大区画単位内で、例えば D I-1・D I-2……のように通し番号の名称を与えた。これらの遺構は、整理作業の段階で種別に編成しなおし、大区画単位で、住居址は1～、ピット類は51～、陥し穴状遺構は101～、その他の遺構は151～と一連の番号をつけた。なお新旧の遺構名を各遺跡ごとに「遺構名訂正表」として末尾に掲げた。

③精査方法

住居址は4分法、ピット類・陥し穴状遺構は2分法を原則として、移植ベラおよび竹ベラを使用して遺構精査を行なった。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を行なった。しかし住居址やピット類の中で埋土が単層で構成されているものについては、その性状をField Card に記載しただけで土層断面図の作成は省略した。出土遺物の取り上げは次のように行なった。遺構内のは遺構名・出土位置・出土レベルを、また遺構外のは地区名あるいはグリッド名とともに出土層位を記入の上取り上げた。これらの出土遺物の洗浄・注記を現場のプレハブにおいて野外作業と並行して行なった。

④実測方法

遺構が集中している荒屋 II 遺跡については、6 m 単位の遣り方を設定して実測を行なった。遺構が比較的分散している荒屋 I 遺跡・越戸 II 遺跡については、グリッドの基準杭にトランシットを据え基準線を起こす簡易的な遣り方実測を行なった。遺構の実測図は $\frac{1}{50}$ の縮尺を基本とし、炉や埋設土器などはその状況に応じて $\frac{1}{25}$ の縮尺とした。遺構のレベル計測は50cm 間隔で行なったが、必要に応じて計測の間隔を細かくした。遺構の実測・埋土土層注記はすべて作業員の中から養成した実測班が行なった。実測班は計測者・作図者の2人1組とし、殆ど女子作業員で構成された。調査員は実測にあたっては、その指示と点検のみを司った。

⑤写真撮影

各遺跡とも6×7 cm判カメラ1台と35mm判カメラ2台を1セットとして使用した。写真撮影は現場で養成したカメラマン(大森公世)が主として担当した。撮影にあたっては当埋文セン

ター作成の「撮影カード」を使用し、写真整理の際の資料とした。

⑥その他

発掘調査に先立ってミーティングを行ない、調査担当者間で次のような事項を確認しあった。

- 調査員は、フィールドにおいては原則として作業内容の指示・点検、遺跡からの情報収集の任に当たる。
- 遺跡からの情報収集には、当埋文センター作成のField Card を使用し、観察事項を詳細に記録する。
- お互いに他の調査員の書いたField Card に目を通し、得られた情報を共有のものとする。
- 調査員間で遺構の重複関係などについての事実認識に相違が生じた場合には、フィールドで討議し調査班としての統一見解をまとめる。
- その他フィールドに関する問題は、フィールドの中で解決し室内整理の段階にまでもちこまない。
- 作業員への指示系統は一本化し、指示事項に混乱をきたさないようにする。
- 作業全体にムダをなくして、調査を効率的に行なう。

(2) 室内整理の方法

室内整理作業は、次の様な方法で行なった。

①作業内容及び分担

整理作業は、遺構図面のトレースと遺物の仕分け、復元を並行して進め、その後に遺物の実測、拓本、トレース、図版作成と順次行なった。これらの作業は、調査員の指示・点検のもとに室内整理協力員が担当した。

②遺構の図面

遺構配置図は、発掘調査時に作成した平面図を基に $\frac{1}{200}$ の縮尺図を作成した。各遺構の図は、発掘調査時に作成した実測図をトレースし、それを以下の縮尺で載せた。

住居址の平面図・断面図： $\frac{1}{50}$ ～ $\frac{1}{100}$ 、炉の断面図： $\frac{1}{15}$ ～ $\frac{1}{20}$ 、ピット類： $\frac{1}{50}$ 、陥し穴状遺構・その他： $\frac{1}{50}$

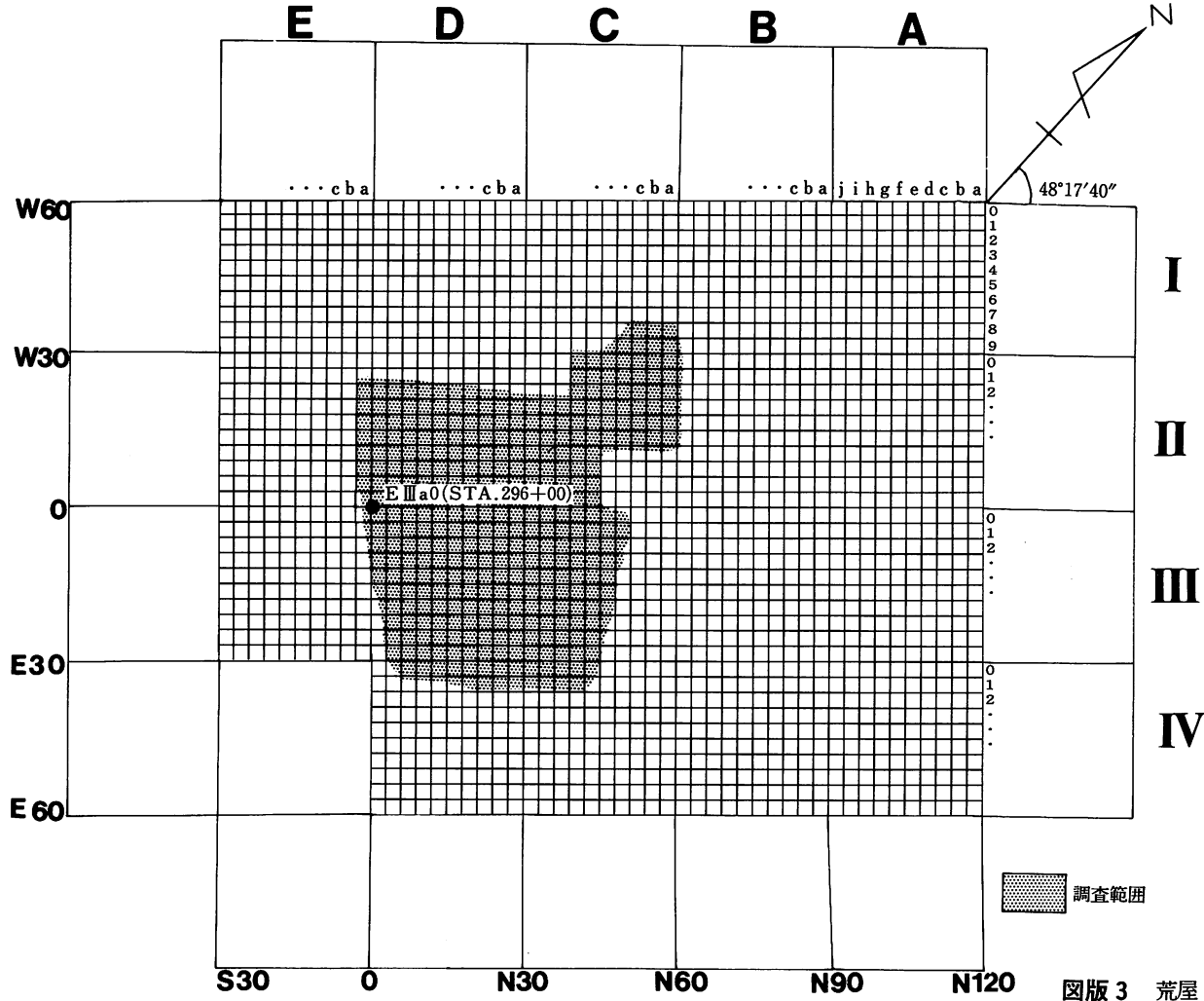
これら各遺構の図には、掘りすぎ、焼土及び十和田 a 降下火山灰を図上で明確にするため、スクリーン・トーンを使用した。その指示は次の通りである。なお、礫は「G」で示した。

 当該遺構で掘り過ぎた部分  焼土  十和田 a 降下火山灰

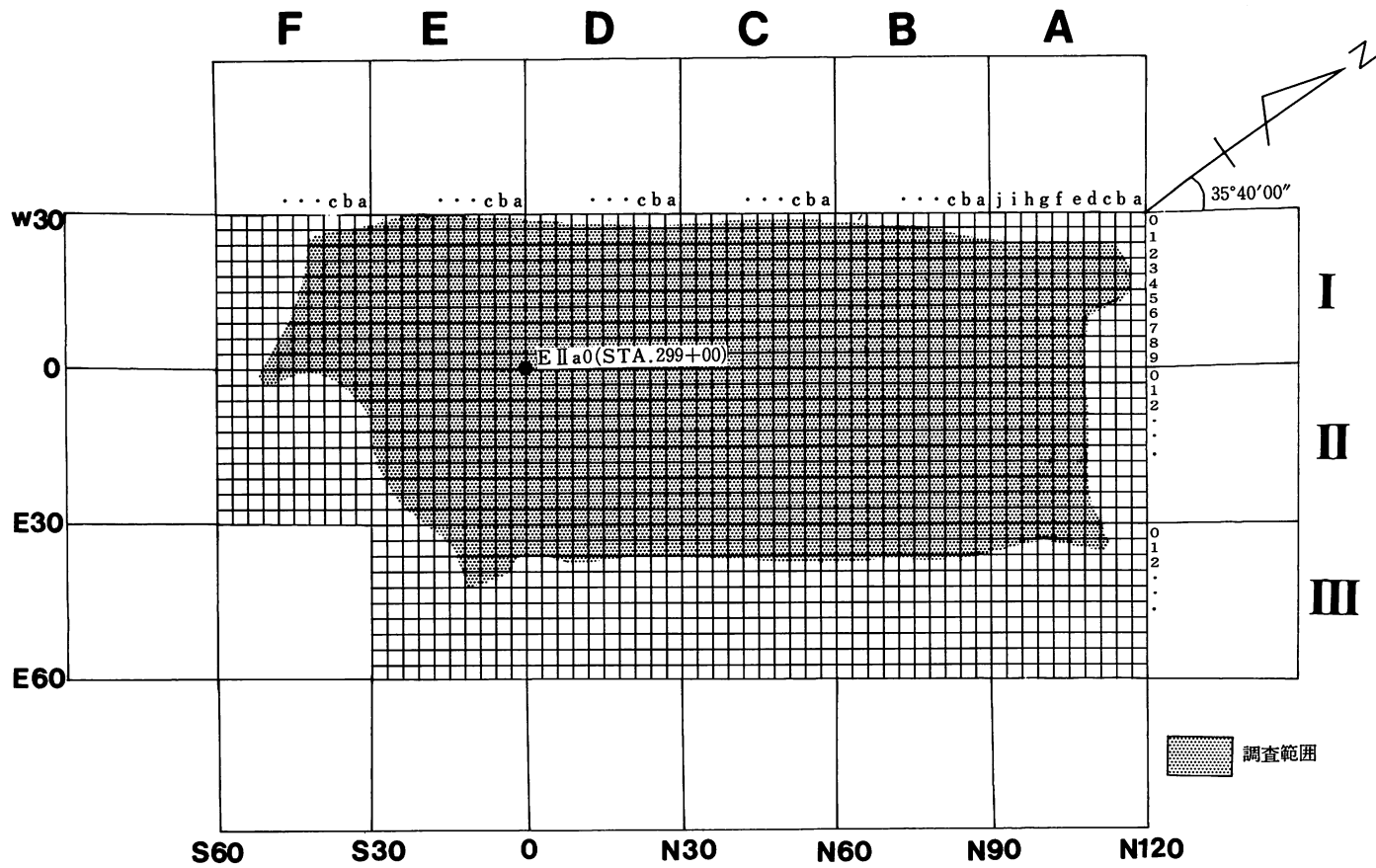
③土器と土製品

復元した土器と土製品を実測し $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ で載せた。他の土器片は、文様を有する破片を中心に

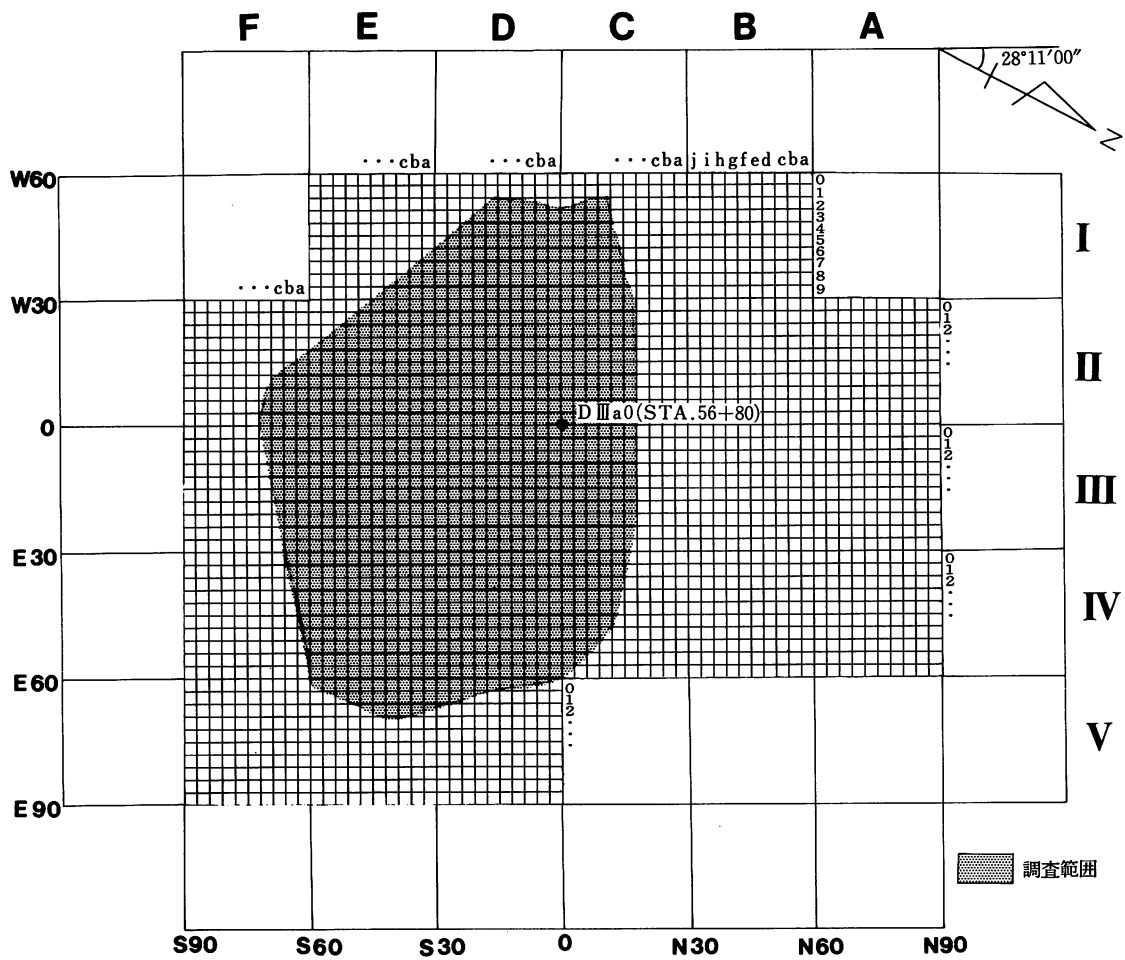
分類し拓影を $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{3}{4}$ で示した。実測図の中で上部に記載した数値は、口径、底径、器高を示す。
なお、—— は計測不可能なものを示し、()の数字は、残存部からの推定値である。



図版 3 荒屋 I 遺跡グリッド配置図



図版4 荒屋Ⅱ遺跡グリッド配置図



図版 5 越戸Ⅱ遺跡グリッド配置図

3. 遺跡の立地と環境

(1) 地形・地質

安代町では、1975年に保戸沢遺跡、1978～1979年に荒屋 II 遺跡、1979年に扇畑 I 遺跡・荒屋 I 遺跡・有矢野遺跡・上の山 X 遺跡・越戸 II 遺跡、1979～1980年に赤坂田 I 遺跡・赤坂田 II 遺跡・扇畑 II 遺跡、1980年に上の山 VII 遺跡・上の山 XI 遺跡・曲田 I 遺跡・上の山館遺跡が発掘調査されている。

町内の遺跡に関する調査資料は、現在までのところ非常に乏しく、わずかに「岩手県遺跡分布図」と「保戸沢遺跡調査報告書」それに上記遺跡の現地説明会資料などが知られているに過ぎない。

本報告書では、安代町の地形概観と各遺跡の立地、周辺環境を記すに止め、上記各調査遺跡の相互の立地関係は、後日他の報告書で述べられるので、ここでは特に触れていない。

〈水系と流域〉

安代町の水系は、安比川（馬淵川の支流）と米代川の 2 系統によって構成されている。町域内における両河川の流域割合は、それぞれ約 5 割を占めている。以下その本流流域について地形を概観する。

安比川は、八幡平黒谷地湿原の北方にその源を発し、安比岳（1493m）と茶臼岳北方の恵比須森（1496m）との間に浸蝕谷を形成しつつ北流する。その後安比高原を開析して急峻な谷間を作った川は、細野及び豊畑付近で大規模な扇状地を形成し、さらに北流を続ける。その東方には深沢山（690.4 m）、御月山（954.4 m）、国樽山（580.0 m）、七時雨山（1060m）が西方には黒森山（972.0 m）、大尺山（741.2 m）などの山地が連なっている。赤坂田付近の東岸部には、川からの比高38m前後の河岸段丘が、長さ約 700 m の範囲で後背山地から張り出している。さらにその北方の寄木・扇畑付近では、支流の深沢・見岳川・新田沢によって形成された複合扇状地が連なっている。小屋の畑付近では、西方に比高20m前後の段丘が発達している。川はこの付近で東に向きを変え、屈曲し高畑方面に流れた後、高畑付近で再び流れを大きく変え、北方の荒屋新町へと流れていく。

高畑付近には、合流する不動川と軽井沢との関連によって形成された段丘面が、3 段に発達している。そのうちの最上位の段丘面上に荒屋 II 遺跡が、中位の段丘面上に荒屋 I 遺跡が、それぞれ立地している。荒屋新町付近から北方の五日市付近にかけて、やや広い沖積地が広がっている。この沖積地に西方から流れ込む曲田川と目名市沢の河岸部には、いくつかの段丘群が発達しており、これらの段丘面上に多くの遺跡が立地している。沖積地をぬけ、五日市付近で

東方に流向を変えた安比川は、石神、中佐井付近で右岸に比高35m前後の段丘を形成し、蛇行を続け浄法寺町方面に流れ、やがて一戸町鳥越付近で馬淵川に合流する。

一方米代川は、青森県田子町と安代町を境する分水嶺付近に根石川としてその源を発する。周囲には、北方に大倉森（896.9 m）、東方に稲庭岳（1078m）がそびえている。南流する米代川は、長者前、栗木田をぬけ、やがて田山付近にさしかかる。ここで東方から流れ込む矢神山と合流する。その周辺部には、やや広い沖積地が形成されている。その後、川は西方へ流向を変え国鉄花輪線沿いに、戸鎖、館市、兄畑と曲りくねりながら下る溪流（穿入曲流）となって、秋田県鹿角市大里付近にぬけていく。

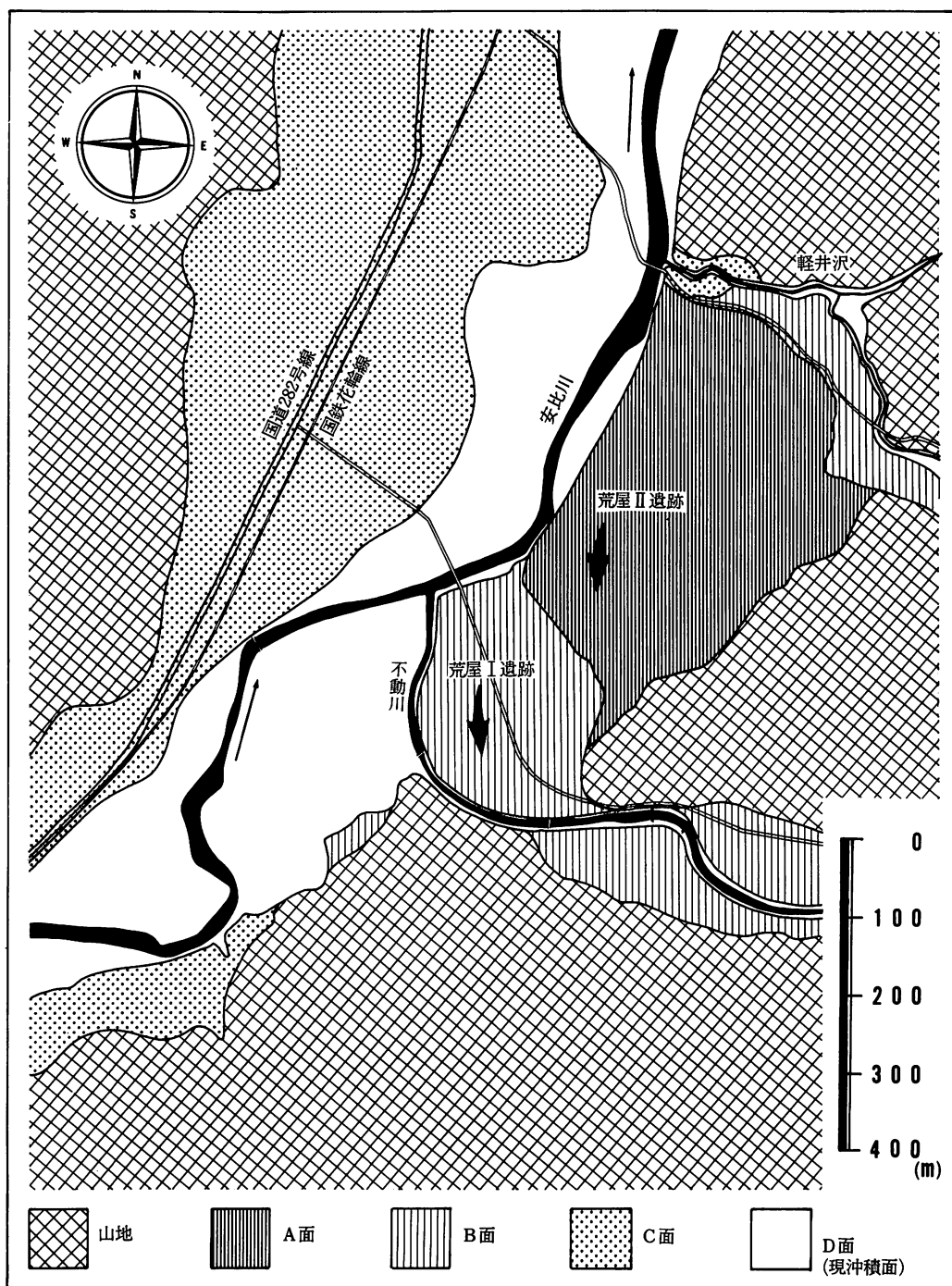
〈分水嶺・峠〉

安比川と米代川の水系を分ける分水嶺は、北から黒森（727.3 m）～上の木（768.5 m）～貝梨峠（450 m）～梨木峠（476 m）～残決山（651 m）～大尺山（741.2 m）～高倉山（1051.3 m）～比山（1037.8 m）～鍋越峠（710 m）～野沢欠峠（792 m）～桂久保山（902.5 m）～安比岳（1493 m）を結ぶ稜線である。この稜線上にはいくつかの鞍部がみられ、中でも最も標高の低い部分は、貝梨峠付近と梨木峠付近である。

両峠付近では、上記の両水系が背反する形で流れ始まる最初の川の谷が、稜線付近まで深く入り込んでいる。その様子は、次の2つの状況の中にもみることができる。貝梨峠付近では、安比川水系の目名市沢と米代川水系の矢神川が、分水嶺を境に東西へ流れており、梨木峠付近では、安比川水系の新田川と米代川水系の越戸川が、同様に分水嶺を境に東西へ流れている。その中で、前者より後者の河岸の谷の傾斜が、幾分緩やかであり、さらには峠付近の傾斜も緩やかである。前者の貝梨峠の場合、その傾斜は、20度以上30度未満であるのに比し、後者の梨木峠の場合、その傾斜は、急なところでも20度未満であり、多くは15度未満と緩やかである。この梨木峠の田山側の緩傾斜地に、越戸II遺跡が立地する。

以上の事実からも示される様に、当地域の分水嶺の中にあつて最も越えやすい条件を備えているのは、梨木峠であると言ってもよい。そのため、この付近を近世には「鹿角街道」が通っている。この「鹿角街道」は、南部藩領内に於ける脇街道であり、3本の街道の総称である。第一は、盛岡から寺田・荒屋・曲田・田山を經由して鹿角に至る街道、第二は、福岡から浄法寺を經由して荒屋の曲田に至る街道、第三は、三戸から田子を經由して鹿角に至る街道である。それよりも更にさかのぼった平安時代に既に『三代実録』元慶2年（878年）10月12日の条に蝦夷討伐のため坂上好蔭が兵二千人を率いて流霞道（七時雨山道）から秋田営（秋田城）に至ると記されており、梨木峠は、この「流霞道」の通過区間であった可能性も十分予想することができる。また、縄文時代にあつては、この沢沿いに多くの遺跡が分布することから、既にこの頃から、現在の秋田県北と岩手県北を結ぶ交通の要衝として機能していた様子が伺われる。

この様なことから、安代町地域が、地形的にみて、古来北日本に於ける東西の交流の場としての要衝であったことをも推察することができる。



図版6 地形面区分図

a. 荒屋 I・II 遺跡の地形・地質

両遺跡とも明瞭な段丘面上に立地し、周辺にも小規模ながら段丘が発達している。現在までのところ安比川流域の段丘区分に関する文献資料はほとんどない。そこで、遺跡の立地説明のため遺跡付近の段丘の地形面区分を試みた。もちろん、より正確な段丘面区分を行なうには、安比川流域全体にわたる検討を必要とするものであるが、時間的な制約により、今回の報告では、安代町他地域の観察資料との対比をもとに遺跡周辺部のみに限って記述する。高位から順に以下に示す通りである（図版6）。

A面： 荒屋II遺跡の載る面である。安比川の支流である不動川と軽井沢との間にみられ、後背山地から張り出す。当地域での高位面であり、標高約330～347mに発達し、面上の開折も進み、ゆるやかな凹凸がみられ、残丘状を呈する小丘もある。安比川からの比高は、約27～34mである。基盤岩は新第三紀荒屋層の凝灰岩類である。その上位には約4mの厚さで段丘砂礫層が載り、さらに浮石流堆積物が厚く堆積し段丘を構成している。

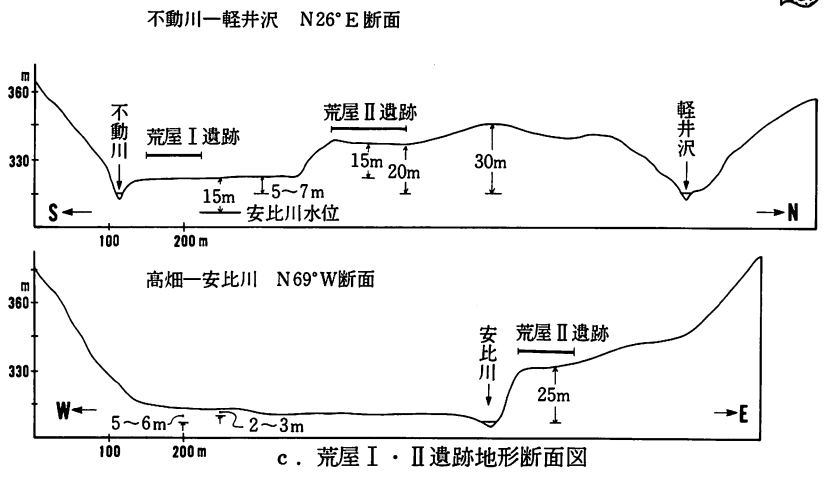
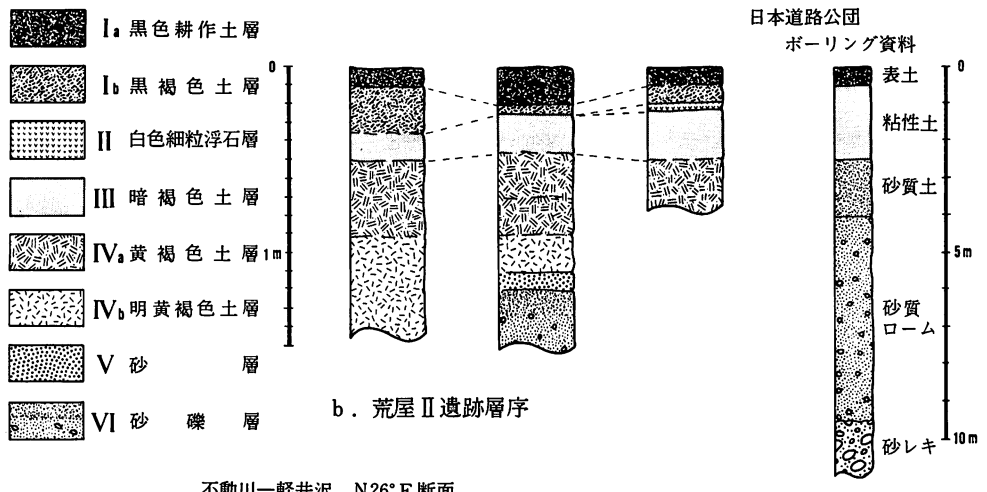
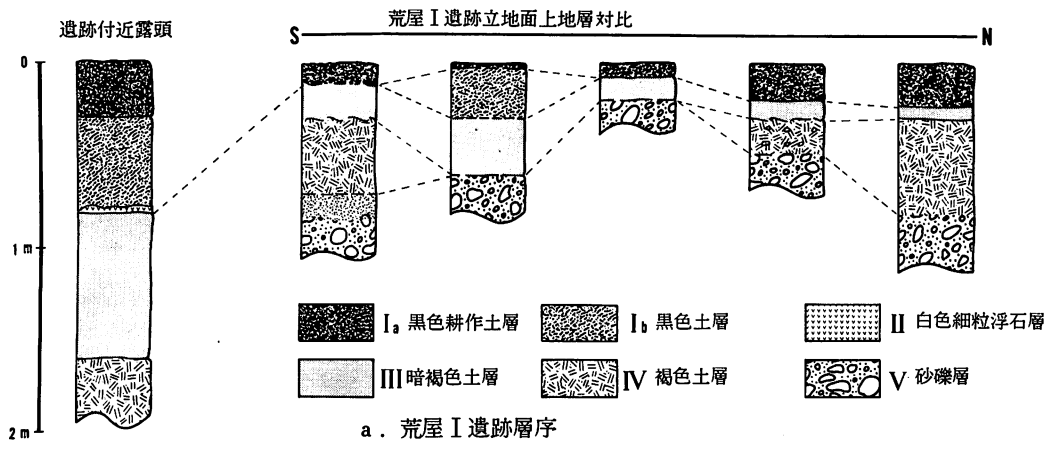
荒屋II遺跡は、A面の南方に位置する。ここは東方の山地からゆるやかに張り出す傾斜面となっている。西方は段丘崖となり安比川へ急崖として落ちる。北方は、同一面上であるが、ゆるやかに斜面が上昇している。南方には面上に標高336mの残丘状の小丘があり、それを越えると段丘崖となる。この段丘崖下位には、一段低いB面の広がりがある。

B面： 荒屋I遺跡の載る面である。A面南側段丘崖下位から不動川までと、不動川沿いに発達してみられる。遺跡の載る位置で標高314～315mである。不動川からの比高約5m、安比川からの比高約9m、A面との較差約17m、A面の段丘礫層の上面までの高さ約9mである。A面と同一の基盤岩上に段丘礫層が載り、その上に約20～80cmの表層が堆積している。礫層の上面には凹凸があり、形成期の河道の変化等が伺われる。畑地として利用されている。

荒屋I遺跡は、荒屋II遺跡の南西方向のA面を取りまくB面上で不動川寄りに位置している。段丘礫層までの深さは浅く、かつ礫層上面は凹凸が激しい。このため遺構は、比較的土層の深い部分に構築されているようである。

C面： 沖積古期面と考えられる。A・B面とは隣接せず、安比川を隔てた西方に広く分布し、西方の山地の裾からほぼ水平に広がっている。安比川からの比高は、約5～6mである。下位D面とは、約2～3mの緩やかな段差をもって接する。現在、国道282号線、国鉄花輪線の位置する面であり、水田、畑地、宅地として利用されている。

D面： 現沖積面である。安比川の両岸に沿って分布する。A・B面とは段丘崖で接する。



〈荒屋Ⅰ遺跡基本層序〉（図版7-a・c）

調査区域内の層序は図版で示されているように隣接地点であっても同じでない。又層厚も一致していない。これは下位層の礫層の凹凸に起因しているためである。

遺構検出面は、Ⅳ層上面とした。調査区域内及び付近の露頭の上層観察結果をもとに、基本層序を上から順に述べる。なお、遺跡内での層厚を（ ）内に示した。

- I a：黒色耕作土層（5～30cm） 耕作による攪乱が著しく草根が数多く混入し、下限の凹凸が激しい。
- I b：黒色土層（30cm） I層の耕作による攪乱のない部分である。全体にやわらかくシルトによって構成されている。II層の細粒浮石が混入する場合もある。
- II：白色細粒浮石層 十和田a降下火山灰と考えられる。遺跡内では断続的ブロック状にみられる。付近の露頭では連続する層としてみられ、その厚さは10～15cmである。分級され堆積した層相を呈している。
- III：暗褐色土層（10～35cm） 遺物包含層である。I b層よりはしまりのあるシルトによって構成されている。炭化物を少量含む。下位のⅣ層とは明瞭に境することができず、マダラ状に漸移している。
- Ⅳ：褐色土層（25～60cm） 火山噴出物を起源とする層であり、5mm丈の淡黄色の浮石を多く混入している。この層は、層内に不規則に中円礫を混入していること及び分級された砂層を界して下位Ⅴ層の礫層に漸移することにより、二次的な湖沼性又は河川の堆積層とみられる。
- Ⅴ：砂礫 安山岩類の小礫～大礫を主体とする礫層である。基質は、上位層の砂質火山灰又は砂であり固結していない。この礫層は凹凸が大きく表層近くまで盛り上がる部分もみられる。

〈荒屋Ⅱ遺跡基本層序〉（図版7-b・c）

遺跡の載る地層は、火山碎屑物又はそれを起源とする浮石流堆積物によって構成されている。基本層序は、2ヶ所の深掘り及び陥し穴状遺構の壁面を対比してとらえた。遺構検出面は、Ⅳa層上面とした。

- I a：黒色耕作土層（10～20cm） 耕作による攪乱が著しく草根が数多く混入している。やわらかいシルトからなる。
- I b：黒褐色土層（5～25cm） I層の耕作による攪乱のない部分である。シルトからなり、I aよりはしまりがある。粗粒のスコリアと浮石を微量に含む。
- II：白色細粒浮石層（2～10cm） 降下堆積を明瞭に呈する浮石層である。断続的かつブロック状を呈するところもあり、消失している部分もある。陥し穴状遺構の埋土上位

に、明瞭に堆積している場合も多い。非常に良好な分級状態を示し、十和田 a 降下火山灰に対比される。

III : 暗褐色土層 (15~25cm) 下位 IVa 層の風化帯と考えられる。IVa 層にはマダラ状に漸移し明瞭な境界はない。粗粒の浮石が微量に混入する。

IV a : 黄褐色土層 (40~45cm) シルトからなり、かなり硬くしまっている。浮石、スコリアを少量含む。乾燥するとクラックが少し生じる。竪穴住居址の壁・床面は、この層を削剝して構築されている。

IV b : 明黄褐色土層 (20~60cm) 主として 1~5 cm 台の浮石を多量に含む砂質シルトからなる。下位又は中位に粘土化の進んだ部分があったり、明褐色やにぶい黄橙色を呈する互層部分があったりし、場所によって堆積状況が異なるため、一括して IVb 層とした。陥し穴状遺構やピットの底部の多くは、この層まで掘り込まれている。

V : 砂層 (10cm) 浮石質の砂層である。陥し穴状遺構の深いものは、底部がこの層まで達している。

IV : 砂礫層 かなりかたく固結が進んでいる。基質はにぶい黄橙色を呈し、かなり粘土化が進んだ層である。風化した礫が全体に含まれる。一部 1 cm 台の高師小僧が入る。

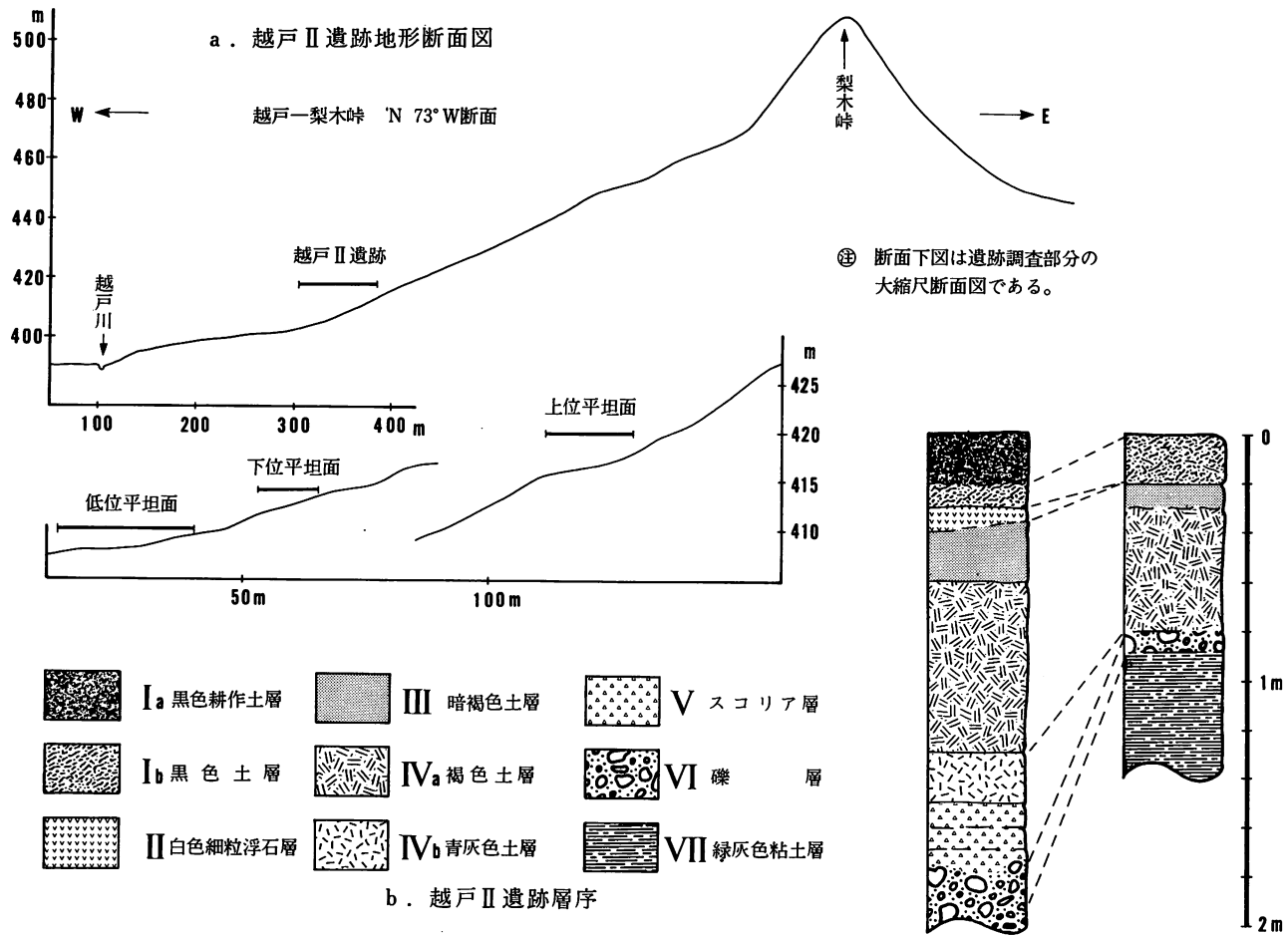
b. 越戸 II 遺跡の地形・地質 (図版 8 - a・b)

越戸 II 遺跡は、梨木峠を田山側に下ったところに位置する。この場所は、越戸川の谷頭部分であり、梨木峠の分水嶺直下まで延びてきている。この谷頭部分は、標高 500 m 前後の山稜に囲まれたスリ鉢状の地形をなしており、梨木峠の曲田側にも同様の地形がみられる。

遺跡は、このスリ鉢状の地形の斜面上に載っており、斜面の傾斜角度は約 8 度と比較的緩やかである。その中であって斜面途中にところどころ小規模ながら平坦部があり、そこに遺構が集中している。本報告では、便宜上下記の 3 段に分け、遺構の位置を記述した。

標高 415 ~ 418 m の平坦部	→ 上位平坦面	} 斜面上にある平坦部
標高 411 ~ 413 m の平坦部	→ 下位平坦面	
標高 405 ~ 409 m の平坦部	→ 低位平坦面：沖積面に続く平坦部	

この傾斜面では、どこを掘り下げても湧水がみられ、低位面の黄褐色土中には赤褐色を呈した褐鉄鉱の団塊が多く、パイプ状の形態をもつものが多い。これらはこの斜面が湿地であることを示唆している。しかも地域民からは、鉄砲水がよく発生する場所であると聞いている。このような状況の中であって遺構の載る平坦面は、1.5 m ほど掘り下げても湧水がみられないほど湿気をもたない土地であり、住居を構築する上で限られた立地場所であったと考えられる。特に遺構の集中する場所は、上位平坦面の下方斜面に寄る部分である。



図版 8

〈越戸II遺跡基本層序〉（図版8-b）

遺跡の立地する基盤は、新第三系田山層の凝灰質泥岩である。この上位に堆積している地層は、深掘り2ヶ所の観察をもとに上位から順に次のように分けた。遺構検出面は、IVa層上面とした。（ ）内の数値は層厚を示す。

- I a：黒色耕作土層（20～30cm） 調査区域全体が牧草地であり、その耕作土である。I層の大部分を占めている。
- I b：黒色土層（10～20cm） 林地にかかる部分でわずかに残っており、しまりのないシルトからなる。
- II：白色細粒浮石層（5～10cm） 場所によって消失しているが、傾斜面上では薄く平坦面で比較的厚く堆積している。粗粒から細粒へと分級して堆積している。陥し穴状遺構にはいずれもレンズ状に堆積している。十和田a降下火山灰と考えられる。
- III：暗褐色土層（20cm） 下位の堆積物を起源とする風化帯である。粘質シルトによって構成され、炭化物を微量に含む。
- IV a：褐色土層（50～70cm） この層の上面を遺構検出面とした。この面上には安山岩の大礫や中礫が多く点在し泥流による堆積状況を呈している。遺構はこれらの少ないローム質粘性土の部分を選んで構築されている。2～3cm台の不定形浮石、5～6cm台の礫（最大20cm台）、2～3cm台の火山礫、5cm台の凝灰岩及び泥岩の礫が不均一に混入している。
- IV b：青灰色土層（30cm） 上記層に連続する層である。
- V：スコリア層（40cm） 1～5mm台の赤色スコリアの層であり、基質は灰白色粘土である。ラミナが発達し3層に分けることができる。
- VI：礫層（20cm以上） 安山岩の亜角礫で大礫より構成されている。基質はローム質粘性土である。下位に凝灰質泥岩の細礫が堆積している。
- VII：緑灰色粘土層 基盤の凝灰質泥岩の強風化帯である。砂質部分がわずかに残るもののほとんどが粘土によって構成されている。

参考・引用文献

- 岩手県 1954 『岩手県地質説明書』
- 二戸科学教育研究会 1978 『二戸の地学』
- 青森県 1972 『青森県の地学』
- 岩手県 1974 『土地分類基本調査』「荒屋」
- 大池昭二 1963 「八戸浮石層の絶対年代について」『青森地学第8号』
- 大池昭二・他 1965 「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」『第四紀研究第5巻第1号』
- 大池昭二 1972 「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究第11巻第4号』
- 大池昭二 1973 「十和田火山東麓の火山灰」『東北の土壤と農業』
- 東北地方第四紀研究グループ 1967 「東北地方における第四紀海水準変化」『地学団体研究会・専報第15号・日本の第四系』
- 寺田公民館 1957 「寺田地区の歴史的展開」『寺田地区基本調査』
- 岩手県教育委員会 1980 「鹿角街道」『岩手県歴史の道調査報告書』

参考資料

- 『三代実録』 「元慶2年10月21日の条」
- 『日本後記』 「弘仁2年3月20日の条」

(2) 周辺の遺跡

安代町の荒屋新町を中心とした付近一帯には、数多くの遺跡が知られている。これらの遺跡は、八幡平黒谷地湿原を源として北流する安比川及びその支流によって形成された三つの段丘の内、上位二段の段丘面とその縁辺部にほぼ立地している。ここでは、本報告書で扱う荒屋 I (8)、荒屋 II (9)、越戸 II (48) の 3 遺跡と後日報告される有矢野(15)、上の山 X (27)、の 2 遺跡の歴史的環境を理解するために周辺の遺跡について概観してみたい。

第 2 図は、荒屋新町を中心とした付近一帯の遺跡群を岩手県遺跡地図及び岩手県遺跡地名表(岩手県教育委員会・1980)に基づいて示したものである。この範囲内において現在までに確認された遺跡数は56である。これらの遺跡は、1961年以後の遺跡分布調査によって知られているものの他に、東北縦貫自動車道建設に伴う緊急の遺跡分布調査によって新たに確認されたものも含まれている。この様に多くの遺跡が知られていながら、正式に発掘調査された例は1975年の安代中学校体育館改築に伴う保土沢遺跡の調査(安代町教育委員会・1975)のみで、1979年に東北縦貫自動車道関係の遺跡調査が開始されるまでほとんどなかったと言ってよい。従って各遺跡の具体的な様相は、大部分が未だに不明であり、今後の調査に期待される面が大きいと言えよう。以下現在までに判明した各遺跡の具体的な状況を簡単にみていくことにしたい。なお、旧石器時代の遺跡は、未だ確認されていないので縄文時代以降の遺跡について述べる。

○ 縄文時代の遺跡

縄文時代の遺跡は40ヶ所確認されている。その内13遺跡は、縄文時代の遺跡であることが確認されているものの、細かな所属時代は不明である(3・11・19・22・31・34・35・37・38・49・50・54・56)。次にこれらを除いた27遺跡の主なものについて述べる。

早期の遺跡として知られているのは、安比川とその支流である曲田川が合流する地点の北西側一帯に発達した段丘上に立地する有矢野遺跡(15)のみである。この遺跡は、縄文時代の大遺跡として以前からよく知られており、早期から前期、後期、晩期の全時期にわたって大集落を形成した複合遺跡と推定されている。しかし、その実態は調査資料が乏しくほとんど不明であった。1979年に発掘調査された東北縦貫自動車道建設予定地内の有矢野遺跡は、この遺跡の一部にあたり南西端の段丘縁辺に位置する。今回の発掘調査によってさらにこの遺跡、平安時代の遺跡でもあることが確認された。

前期の遺跡としては、有矢野遺跡以外、小屋の畑遺跡(7)、横間台遺跡(33)、曲田 I 遺跡(36)、上の山 XI 遺跡(28)の5遺跡が知られている。小屋の畑遺跡は、小屋の畑地域の安比川西岸の段丘上に立地し、円筒下層 d 式土器を中心とする遺物包含地として知られている。曲田 I、上の山 XI 遺跡は、安比川の支流曲田川に注ぐ新田川の北側、馬場山南麓部に発達した

崖錐性扇状地縁辺部に立地する。縄文時代の遺物包含地として知られていたが、1980年の発掘調査によって、この両遺跡は、地形的に一連の遺跡で、縄文時代前期、中期、後期、晩期、弥生時代、中近世にわたる複合遺跡であることが確認された。前期の遺物として、大木1式土器がピット中から出土している。

中期の遺物は、縄文時代の遺跡のうちで最も多く知られており、その数は有矢野遺跡を始めとして16遺跡である（4・8・9・13・15・21・23・24・26・31・33・36・44・48・52・53）。

本報告で扱う荒屋I遺跡（8）、荒屋II遺跡（9）、越戸II遺跡（48）の3遺跡と後日報告される有矢野遺跡（15）においてもその主な内容は、縄文時代中期である。上の山VII遺跡（24）は、曲田川によって形成された北岸の段丘上に立地し、以前から縄文時代中期から後期にかけての遺跡として知られていたが、1980年の発掘調査で、それが確認されるとともに平安時代の集落址であることも確認された。縄文時代中期の住居址は、大木9、大木10式土器を伴出する住居址4棟が検出されており、他に、中期末葉から後期初頭に入ると思われる住居址10棟が検出されている。この遺跡に隣接する上の山館（31）でも1980年の発掘調査で、中期末葉の住居址2棟が検出されている。また、上の山IV（21）、上の山VI（23）、上の山IX（26）の各遺跡でも大木9、大木10式土器が表面採集され、中期末葉の遺跡として知られている。

後期の遺跡としては、赤坂田I遺跡（1）を始めとして13遺跡が知られている（1・2・6・8・15・16・20・24・26・27・28・45・47）。

赤坂田I遺跡（1）と赤坂田II遺跡（2）は、赤坂田地域の安比川東岸に形成された段丘上に立地する。1979年～1980年にかけての二次にわたる発掘調査によって赤坂田I遺跡においては、安行II式土器を伴出する住居址4棟、赤坂田II遺跡では、安行II式土器を伴出する住居址7棟がそれぞれ検出された。この様に両遺跡は、縄文時代後期末葉を中心として小集落が形成された遺跡であることが確認された。また、1980年に発掘調査された上の山XI遺跡では、後期初頭の大湯式土器伴出の住居址4棟とピット類が、扇畑II遺跡では、同じく後期初頭の大湯式土器伴出の住居址7棟とピット類がそれぞれ検出されている。なお、後日報告される予定の上の山X遺跡も、後期の遺跡で、後期初頭の遺物と遺構が検出されている。

晩期の遺跡としては、上の山III遺跡（20）を始めとして12遺跡が知られている（1・8・13・15・20・28・32・36・45・51・52・53）遺跡数が比較的多い割には、他の時期に比べて遺跡の実態が余りよく解っていない。その中で、上の山III遺跡は、上の山I（18）、上の山II（19）、上の山XI（28）、曲田I（36）の各遺跡と同様、馬場山南麓部に発達した崖錐性扇状地上に立地し、表面採集で碧玉、岩製品、管玉等、及び後期～晩期（大洞A'式土器片が多い）の土器片が多数採集され、以前から後期～晩期の集落址ではないかと推定されている。なお、すぐ近くの上の山XI遺跡からは、1980年度の発掘調査で、晩期前葉から中葉にかけての住居址5棟が検

出されている。

○ 弥生時代の遺跡

弥生時代の遺跡としては、上の山Ⅰ（18）、上の山Ⅱ（19）、上の山Ⅺ（28）のわずか3遺跡が確認されているにすぎない。これらの遺跡は、土器などの遺物が若干発見されているのみで、遺構は、1980年度に発掘調査された上の山Ⅸ遺跡で検出された墓壇を除いて、ほとんど確認されていない。この中で上の山Ⅱ遺跡は、所謂「天王山くずれ」の土器片が表面採集されており、以前から弥生後期の遺跡として安代町内で知られていた唯一の遺跡である。なお、3遺跡とも、馬場山南麓部に発達した崖錐性扇状地上に立地する。

○ 古代の遺跡

古代に属する古墳、奈良、平安時代の遺跡で確認されているのは、奈良時代の戸沢Ⅰ遺跡、(51)、平安時代の赤坂田Ⅰ（1）、扇畑Ⅰ（5）、扇畑Ⅱ（6）、荒屋館（11）、保土沢、(13)、保土坂（14）、有矢野（15）、上の山Ⅴ（22）、上の山Ⅶ（24）、上の山Ⅹ（27）の11遺跡である。戸沢Ⅰ遺跡は、馬場山の北麓目名市沢の南側に立地し、粟俵式に比定される土師器片が表面採集されている。この遺跡は、現在までのところ荒屋新町周辺で知られる唯一の奈良時代の遺跡である。扇畑Ⅰ、扇畑Ⅱの両遺跡は、安比川の支流である見岳川によって形成された扇状地に立地している。見岳川を挟んで南側に扇畑Ⅰ遺跡、北側に扇畑Ⅱ遺跡が位置している。この両遺跡は、1979～1980年の発掘調査で、扇畑Ⅰ遺跡では、平安時代の住居址10棟が検出され、扇畑Ⅱ遺跡では、平安時代の住居址3棟が検出された。保土沢遺跡は、安比川とその支流曲田川によって形成された段丘上に立地する。この遺跡の上に安代中学校が存在し、1974年にここの体育館が改築されることになり、それに先立って建設予定地内の試掘調査が行なわれ、遺構の存在することが確認された。翌1975年に本格的発掘調査が行なわれ、その結果、平安時代の住居址が5棟検出された。

この調査は、安代町荒屋新町地区での初めての発掘調査であり、かつ奥羽山地の真只中に位置する安代町付近にも平安時代の大規模な集落址の存在する可能性のあることを予想させた画期的な調査であった。その後、1980年度に発掘調査された上の山Ⅶ遺跡（24）において、その予想どおり平安時代の住居址39棟が検出され、大規模な集落址であることが確認された。

中世以降の遺跡としては、城館跡（11・16・17・31・55）、経塚（29・30）、一里塚（12・43）、窯跡（10）などがある。

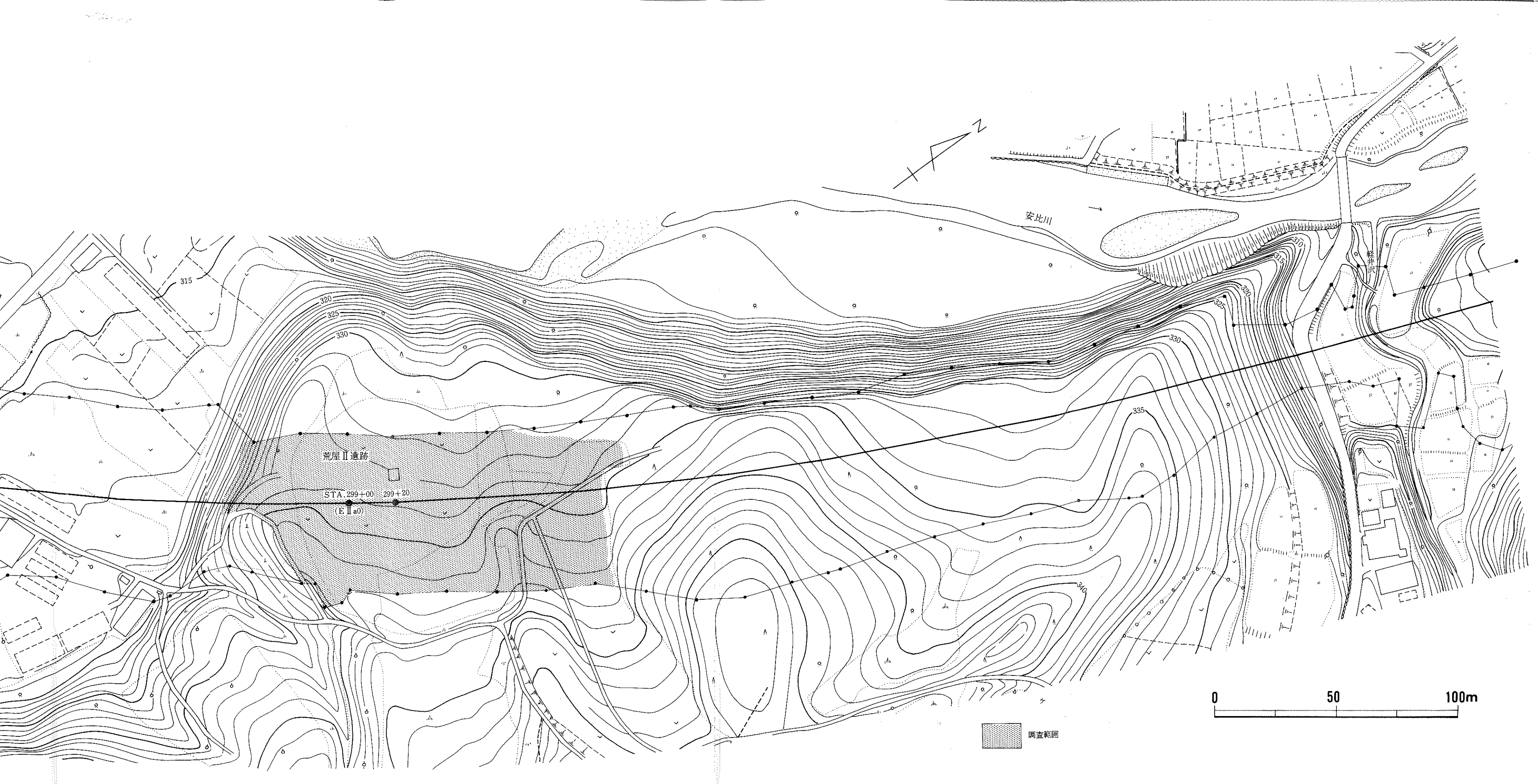
以上簡単に荒屋新町周辺の原始・古代を中心にその遺跡を概観してきたが、この地域での遺跡の立地等について種々の特徴点がみられる。しかし、その詳細について今後さらに検討の必要があり、ここで述べることは省略する。

II. ^あら^や 荒屋 I 遺跡

1. 遺跡所在地 二戸郡安代町字高畑
2. 調査期間 昭和54年5月14日～6月16日
3. 調査対象面積 6,000m²
4. 発掘面積 3,600m²
5. 遺跡記号 AY-I79



图版 1 遺跡地形图





図版2 荒屋I遺跡遺構配置図

1. 検出遺構

(1) 竪穴住居址

D II区

D II-1住居址

遺構 (図版3・写真図版2-b、3-a~c)

調査区域中央部のやや西側に検出された住居址である。規模は径3.1m±×3.0m±を計り、形状は不整な隅丸形状を呈する。

埋土は粒径1cm±の褐色土の小ブロックを含む暗褐色土層によって構成されている。この土層中には炭化物がわずかに包含されている。単層であるため Field Card にその性状を記載しただけで、土層断面図の作成は省略した。

床面はほぼ平坦で堅い面となっているが、炉の周辺部分は浅く凹み他よりさらに堅くしまっている。柱穴は検出されなかった。

壁高は北壁12cm±・東壁15cm±・南壁7cm±・西壁10cm±を計る。

炉は住居址の中央部よりやや北寄りに位置する土器埋設炉である。土器は直立に埋設されており、床面から土器下底部までの深さは10cm±を計る。埋設土器周辺の掘り方は暗褐色土によって埋められている。この暗褐色土は住居址の埋土とよく似た性状を示すが、住居址のものより褐色土が卓越し堅くしまっている。埋設土器内部は炭化物を少量含む黒褐色土で充填されていた。またこの黒褐色土の下底部中には、粒径1cm±~3cm±の安山岩類亜角礫が10個ほど包含されていた。これらの礫はいずれも表面の一部が灰黄色から赤褐色に変色している。炉を断ち割った際、埋設土器直下に厚さ7cm±の範囲に渡って黒褐色土と褐色土がマダラ状に混合しているのが観察された。この部分は、掘り込みの痕跡がみられないことや住居址の床面下の褐色土層(IV層)と土性が同じであることなどから推測して、土器内を充填している黒褐色土中の腐植物質が下方へ浸透したことによって形成されたものと考えられる。炉はあまり焼成を受けていない。

出土遺物 (図版9-1~9・写真図版9-1~7)

出土遺物は、炉に使用された埋設土器(1)と埋土下位から得られた土器片(2~8)・石器(9)である。

1は体部下半部~底部が欠損している小型深鉢である。口縁部文様帯は、撚糸圧痕が施されている隆起線文とこの隆起線文に沿って連続的に施文されている刺突文とからなる。この土器

の器表面が非常に摩滅しており隆起線文を構成している粘土紐の剥落が目立つ。2は波状口縁の深鉢の破片であり、口縁部に扇状突起をもつ。口縁部は内弯気味に立ちあがる。地文は単節の斜縄文である。3は小型鉢の底部であり、外面全体にやや粗いミガキが施されている。4も波状口縁の深鉢の破片であり、口縁部に丸味を帯びた扇状突起をもつ。隆起線文によって口縁部文様帯が構成されている。5は立体的な把手をもつ深鉢の破片である。6は隆起線文と刻目状の刺突文で口縁部文様帯が構成されている深鉢の破片である。7は小型鉢の破片であり、口唇部が肥厚し複合口縁状を呈す。口唇部の器表面には単節の斜縄文が施されている。8は沈線による縄文区画文が施されている深鉢の破片である。これらの土器は、縄文時代中期中葉に属するものである。

9は半円状扁平打製石器である。石器の長軸に平行する縁辺に敲打痕と研磨痕が認められる。なおこのほかに、埋土下部から台石と思われる扁平な安山岩類亜角礫が2個出土している。

この住居址は、以上の出土遺物からみて縄文時代中期中葉に位置づけられるものと考えられる。

D III区

D III-1 住居址

遺 構 (図版4-a・写真図版3-d、4-a)

調査区域の南端の段丘崖寄りに検出された住居址である。段丘堆積物を観察する目的で深掘りを行なった際にパワー・シャベルによって住居址の約2分の1ほどを破壊したことや南壁の一部が木根の攪乱によって破損していることなどのために、正確な規模・形状を把握することができない。

埋土は大別して褐色土層・暗褐色土層・暗赤褐色土層によって構成されている。これらの土層中には、炭化物・焼土・粒径1cm±~25cm±の安山岩類亜角礫が包含されている。埋土中の炭化物は、この住居址と重複関係にあるD III-2住居址や近接した位置にある他の住居址(D III-3・4住居址)のものよりも多量であり、特に暗褐色土層中に集中している。また焼土は暗赤褐色土層に多く含まれている。

床面はやや凹凸をもつ面で、全体的に堅くしまっている。柱穴は残存部分の精査では検出されなかった。

壁高は南壁15cm±・西壁15cm±を計る。

炉は一部を除いて深掘りの際に破壊されたためその詳細は明らかではないが、残存部の状況から推測すると、西方に開口する斜位埋設土器を伴う摺鉢状の形態を示すものと考えられる。炉の使用面から埋設土器下底部までの深さは5cm±を計る。この埋設土器内は炭化物・焼土を

少量含む暗赤褐色土で充填されている。炉はよく焼成を受けており、炉の使用面下には火熱により層厚6cm土の赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。

この住居址は層位的にDⅢ-2住居址の下位に位置する。

出土遺物（図版9-10~14・写真図版9-8~12）

出土遺物は、炉に使用された埋設土器の破片（10~12）と床面上から得られた13・14などの土器片数点である。

10~12は、口縁部が内弯気味に立ちあがる粗製の深鉢の破片である。地文は無節の斜縄文であるが、口唇部の一部分には縄文が横位に施されている。内面の一部に輪積み痕がみられる。13は帯縄文が施されている深鉢の破片である。2条の平行する帯縄文と曲線的な帯縄文とによって文様が展開されている。14は袖珍土器の破片であり、口縁部に2条の沈線が巡らされている。地文として細かい撚糸文が施されている。以上の土器片は、縄文時代後期前葉に属するものである。

この住居址は、以上の出土遺物や炉の形態からみて縄文時代後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

DⅢ-2住居址

遺構（図版4-b・写真図版3-d、4-b）

調査区域の南端の段丘崖寄りに立地し、DⅢ-1住居址などとの重複関係が認められる。炉とともに床面の一部が検出されたことから住居址と認定したものである。深掘りの際に住居址の北側部分を破壊してしまったことや、DⅢ-1住居址の埋土と識別がつかず掘り過ぎて壁が把握できなかったために、規模・形状は全く不明である。

埋土の詳細も明らかではないが、残存部の土層の状況から推測して、炭化物を少量含む暗褐色土の単層で構成されていたものと考えられる。

確認された部分の床面はやや凹凸をもち堅くしまっている。柱穴は検出されなかった。

炉の構成礫の一部が消失しているため炉の詳細は明らかではないが、残存部の状態から推定すると「コ」の字形の形状を示す石囲炉と考えられる。構成礫は粒径15cm土~25cm土の安山岩類亜角礫で横位に埋置されており、焼成を受けたため表面の一部が赤褐色に変色している。

この住居址は、DⅢ-1住居址を切り、DⅢ-3・4住居址によって切られている。

出土遺物（図版10-15~18・写真図版10-13~18）

出土遺物はいずれも土器片であるが、炉の使用面上からのもの（15）と床面上からのもの（16~18）とがある。

15は無文の袖珍土器の底部である。外面全体に入念なミガキが施されている。16は口縁部が内弯気味に立ちあがる深鉢の破片であり、口唇部上面に縄圧痕がみられる。17は帯縄文が施さ

れている深鉢の破片である。18は小型鉢の破片であり、細かい捺糸文を地文としている。これらの土器片は縄文時代後期前葉～中葉に属するものと思われる。

この住居址は、以上の出土遺物や炉の形態からみて縄文時代後期前葉～中葉に位置づけられるものと考えられる。

D III - 3 住居址

遺 構 (図版4 - c・写真図版3 - d、4 - c・d)

調査区域の南端の段丘崖寄りに検出された住居址で、D III - 4 住居址とほぼ同一位置にある。壁際の埋土と検出面下位の土層の層相が近似していたため、この両者の識別がつかず全体的に掘り過ぎたことから、この住居址の正確な規模・形状を把握することができない。しかし残存部の状態から推定すると、径3.0 m 土の規模をもち円形状の形状を示すものと考えられる。

埋土は炭化物を少量含む暗褐色土層で構成されている。単層であることやその大半が掘りあげられてしまったため、土層断面図は作成しなかった。

床面全体の状況も明らかではないが、残存部分はほぼ平坦で堅くしまっている。柱穴は残存部の床面上にも検出されなかった。

壁高は東壁10cm 土・南壁8 cm 土を計る。

炉は住居址の中央部よりやや北側に位置する径55 cm 土の円形の石囲炉である。構成礫は、粒径10cm 土～25cm 土の安山岩類亜円～亜角礫で、床面から8 cm 土の深さに埋置されている。東側炉縁は構成礫が二重になっている。構成礫は焼成を受けたためかなり脆くなっている。炉の使用面は床面と同じ高さであり、この下位には火熱により層厚8 cm 土を計る暗褐色の現地性の焼土が形成されている。

この住居址は、D III - 2・4 住居址を切っている。

出土遺物 (図版10-19～21・写真図版10-16～18)

出土遺物は、いずれも土器片で床面上から得られたものである。

19は口縁部がやや内弯気味に立ちあがる鉢の破片である。口縁部は沈線が施されたような状況を呈しているが、これは横ナデ調整によって生じたもので意識的に施文した沈線ではない。20は19の体部の破片と思われる。21は口縁部が外反する鉢の破片である。これらの土器片は縄文時代晩期に属するものである。

この住居址は、以上の出土遺物や炉の形態からみて縄文時代晩期に位置づけられるものと考えられる。

D III - 4 住居址

遺 構 (図版5・写真図版4 - e、5 - a・b)

調査区域の南端の段丘崖寄りに検出された住居址であり、D III - 3 住居址とほぼ同一位置に

ある。規模は径 2.8 m 土 × 2.4 m 土を計り、形状は不整な楕円形を呈する。

埋土は炭化物や粒径 5 cm 土 ~ 15cm 土の安山岩類亜角礫が包含されている暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

床面はほぼ平坦で大変堅くしまっている。柱穴は検出されなかった。

壁高は、北壁38cm土・東壁31cm土・南壁43cm土・西壁47cm土を計る。

炉は住居址のほぼ中央部の位置で、D III-3 住居址の炉の直下に近い部分に構築されている。炉は径55cm土の円形の石囲炉であり、その構成礫は粒径 5 cm 土 ~ 15cm 土の安山岩類亜角礫である。構成礫は、一定の間隔を置いて環状に埋置されている。床面から構成礫の最下部までの深さは 4 cm 土を計る。炉の使用面は床面より 5 cm 土低い位置にあり、断面形が皿状を呈する。この使用面下には火熱により層厚 5 cm 土を計る暗赤褐色の現地性の焼土が形成されている。なお炉の北側の床面上には炭化物が径55cm土×40cm土の楕円形状の広がりをもって分布している。

この住居址は、D III-3 住居址によって切られ、D III-53ピットを切っている。

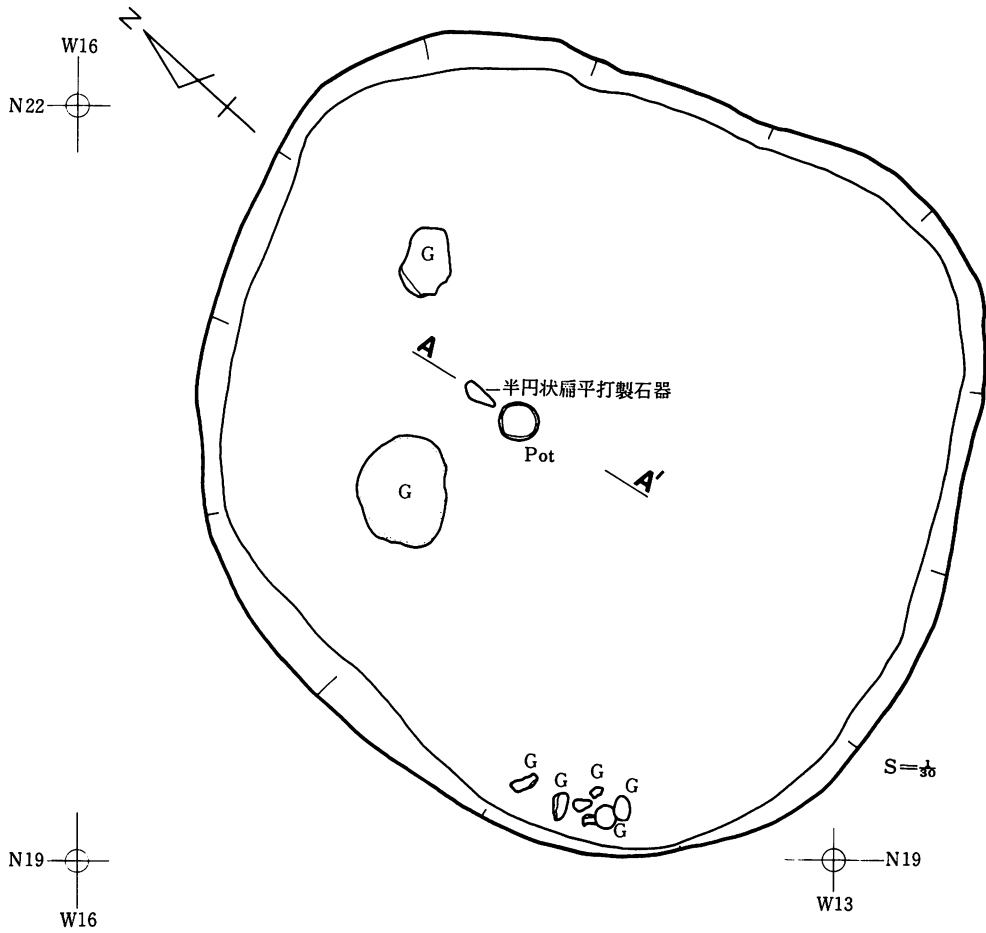
出土遺物 (図版10-22・写真図版10-19)

出土遺物は、床面上から出土した土器片 1 点 (22) だけである。

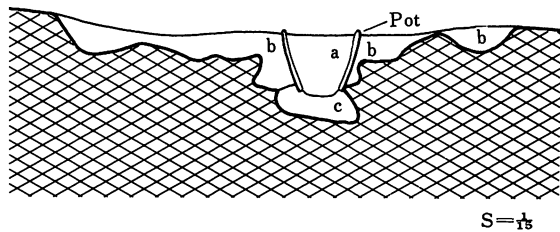
22は複合口縁の深鉢の破片である。この土器片は縄文時代後期に属するものであろうと思われる。

この住居址は、他遺構との重複関係・出土遺物・炉の形態などの状況からみて、縄文時代後期中葉~末葉に位置づけられるものと考えられる。

DII-1 住居址

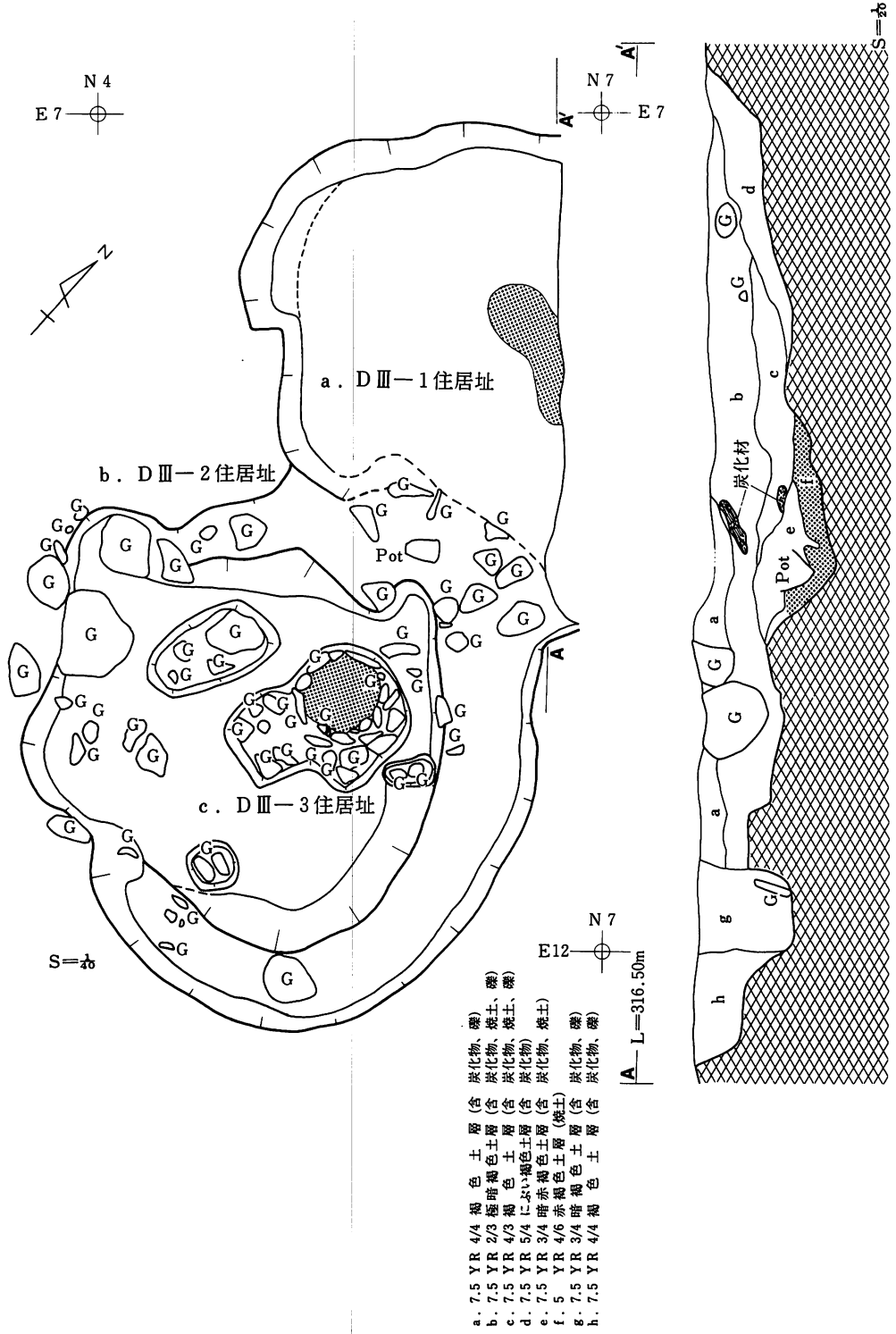


|A—L=315.80m—A'|

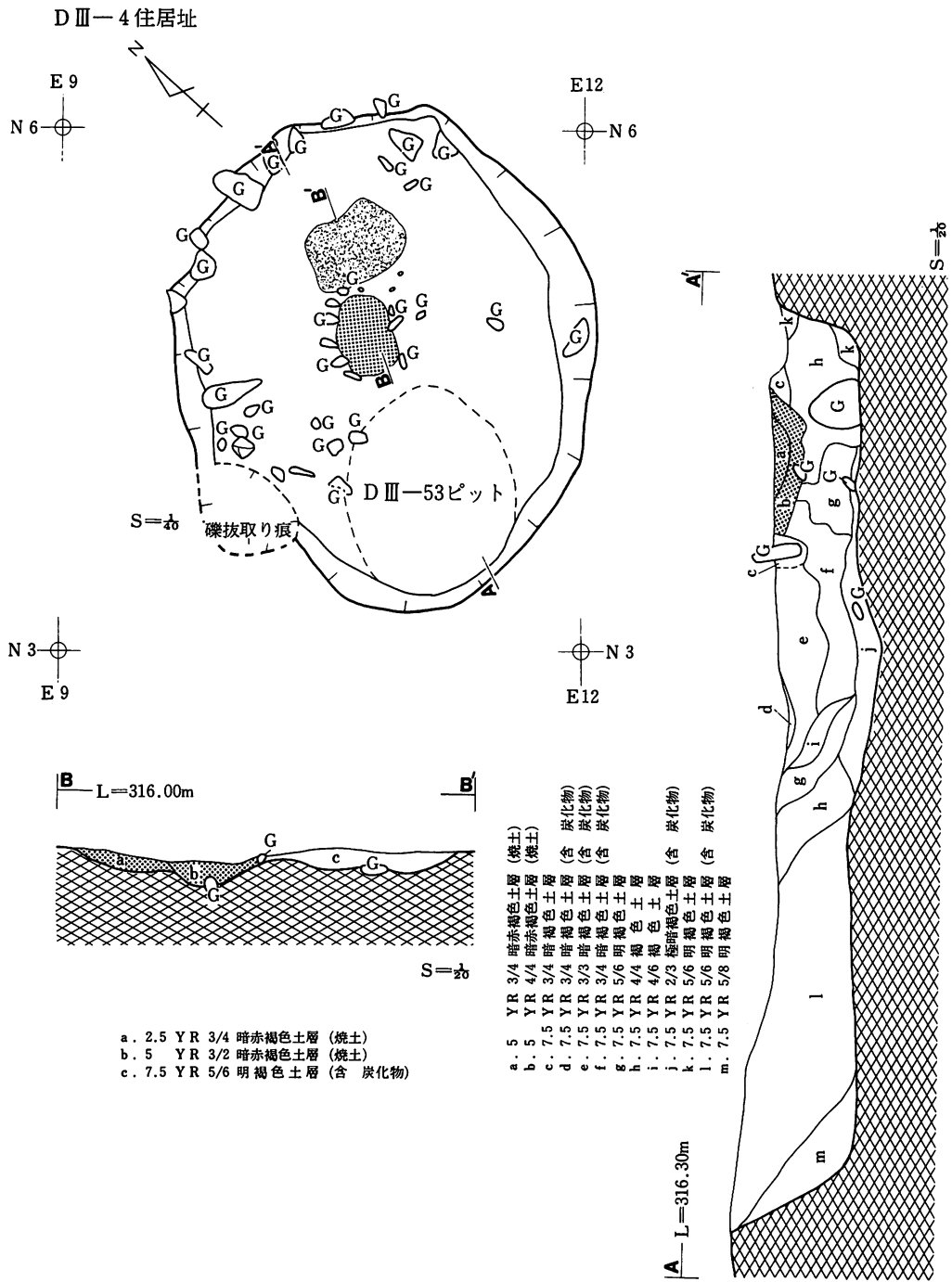


- a. 7.5 Y R 3/1 黑褐色土層 (含 炭化物)
- b. 7.5 Y R 4/4 褐色土層
- c. 7.5 Y R 3/1 黑褐色土層

图版 3



図版 4



図版 5

(2) ピット

D II区

D II-51ピット

遺構 (図版6-a・写真図版5-c・d)

調査区域の中央部に検出されたピットである。D II-52ピットとは近接した位置関係にある。規模は、開口部径100cm±・底部径70cm±・深さ33cm±を計り、平面形は円形を呈する。断面形は浅鉢状を示す。

埋土は、炭化物や粒径10cm±の安山岩類亜角礫を含む暗褐色土層・明褐色土層によって構成されている。炭化物は上位を占める暗褐色土層に集中しており、明褐色土層中には極めて微量に包含されているに過ぎない。

底面はほぼ平坦で堅くしまっている。

出土遺物 (図版10-23~25・写真図版10-20・21)

出土遺物は、埋土上位から得られた土器片(23・24)と石器(25)である。

23は小型鉢の底部であり、入念なミガキが施されている。地文は燃糸文である。24はキャリパー形深鉢の破片である。これらの土器片は縄文時代中期末葉に属するものと考えられる。

25は石器の長軸と平行する縁辺に刃部が形成されているスクレイパーである。石器の頭部には折断面がみられる。

D II-52ピット

遺構 (図版6-b・写真図版6-a・b)

調査区域の中央部に検出されたピットである。D II-51ピットの南東1mほどに位置する。規模は開口部径80cm±×65cm±・底部径65cm±×55cm±・深さ29cm±を計り、平面形は楕円形状を呈する。断面形は浅鉢状を示す。

埋土は炭化物を微量に含む暗褐色土層・明褐色土層によって構成されている。暗褐色土層中には粒径10cm±の安山岩類亜角礫が数個包含されている。

底面は南側部分に多少凹凸はみられるが、全体的にはほぼ平坦で堅くしまっている。

出土遺物 (図版10-26~28・写真図版10-22~24)

出土遺物は、埋土上位から得られた土器片3点(26~28)である。

いずれの土器片も深鉢の体部片であり、器表裏面ともかなり磨滅している。したがって、これらの土器片の所属時期の識別はできない。

D II-53ピット

遺 構 (図版 6 - c ・ 写真図版 6 - c)

調査区域の中央部に検出されたピットである。D III-51ピットの西方 4 m ほどに位置する。規模は開口部径 180 cm 土×80cm 土・底部径 120 cm 土×55cm 土・深さ 40cm 土を計り、平面形は長軸が南北方向にある長楕円形を呈する。断面形は浅鉢状を示す。

埋土は炭化物を少量含む暗褐色土層である。単層であるため Field Card にその性状を記載しただけで土層断面図は作成しなかった。

底面はほぼ平坦で、少しやわらかい。

出土遺物 (図版 10-29~32 ・ 写真図版 10-25~27)

出土遺物は、埋土の上位および中位から得られた土器片 4 点 (29~32) である。

29は波状口縁の深鉢の破片である。口縁部の突起先端部の内面には、沈線が 3 条施されている。30・31は深鉢の破片である。30には単節の縄文が横位に施されている。32は小型鉢の破片であり、無節の斜縄文を地文としている。これらの土器片のうち29は縄文時代後期中葉に属するものであるが、他の土器片は小破片で詳細不明のためその所属時期の確定は困難である。

D II - 54ピット

遺 構 (図版 6 - d ・ 写真図版 6 - d)

調査区域南西端の段丘崖寄りに検出されたピットである。規模は開口部径 160 cm 土×100 cm 土・底部径 130 cm 土×55cm 土・深さ 68cm 土を計り、平面形は長軸が東西方向にある長楕円形を呈する。断面形は浅鉢状を示す。

埋土は炭化物を少量含む暗褐色土層によって構成されている。単層であるため Field Card にその性状を記載しただけで土層断面図は作成しなかった。

底面は平坦で少しやわらかい。出土遺物はない。

D III区

D III-51ピット

遺 構 (図版 7 - a ・ 写真図版 7 - a ・ b)

調査区域の中央部に検出されたピットである。規模は開口部径 290 cm 土×135 cm 土・底部径 200 cm 土×60cm 土・深さ 85cm 土を計り、平面形は長軸が南北方向にある不整な長楕円形を呈する。断面形は浅鉢状を示す。

埋土は炭化物・礫を少量含む暗褐色土層によって構成されている。土層中に包含されている礫は粒径 2 cm 土~10cm 土の安山岩類亜角礫である。単層であるためその性状を Field Card に記載しただけで土層断面図は作成しなかった。

底面はゆるやかな凹状を呈しやわらかい。

出土遺物 (図版11-33~35・写真図版11-28~30)

出土遺物は、埋土の上位から得られた土器(33)と34・35などの土器片数点である。

33は注口土器であるが、個体の2分の1以上が欠損している。口縁部は、破損部の状況から推定すると、内弯気味に立ちあがるようである。文様帯は主にC字文・連続刻目文で構成されているが、これらのほかにX字文状の文様もみられる。34は内弯気味に立ちあがる深鉢の破片である。35は深鉢の破片であり、口縁部に沿って幅の広い帯縄文が巡らされている。この帯縄文の下は無文となっている。以上の土器のうち33は縄文時代晩期前葉に、35は後期中葉に属するものである。34の所属時期を確定することは難しいが、33・35の土器との関連から判断して、縄文時代後期~晩期に位置づけられる土器と考えられる。

D III-52ピット

遺構 (図版7-b・写真図版7-c)

調査区域南端の段丘崖寄りに検出されたピットである。深掘りの際に重機で北東部分が破壊されてしまったが、残存部から推定して、開口部径110cm±・頸部径100cm±・底部径115cm±・深さ57cm±の規模をもち、隅丸方形の平面形を呈するピットと考えられる。断面形はフラスコ状を示す。

埋土にはふい褐色土を微量に含む暗褐色土層などによって構成されている。この暗褐色土層の中には、炭化物が少量包含されていた。なお埋土の状況をField Cardに記載しただけで土層断面図は作成しなかった。

底面は砂礫層を削削して形成されているためかなりの凹凸がある。このピットは、D III-1住居址に切られている。

出土遺物 (図版11-36~38・写真図版11-31~33)

出土遺物は、埋土の上位から得られた36~38などの土器片数点である。

いずれも深鉢の体部の小破片であり、これらの土器片の所属時期の確定は困難である。

D III-53ピット

遺構 (図版7-c・写真図版7-d)

調査区域南端の段丘崖寄りに検出されたピットである。D III-4住居址に切られて北側上半部が消失しているが、残存部から推定すると、開口部径100cm±・底部径110cm±・深さ48cm±の規模をもち、円形の平面形を呈するピットと考えられる。断面形はフラスコ状を示す。

埋土は炭化物を少量含むにふい褐色土層で構成されている。単層であるためその性状をField Cardに記載しただけで土層断面図は作成しなかった。

底面はほぼ平坦で堅くしまっている。

出土遺物（図版11-39~45・写真図版11-34~39）

出土遺物は、底面上から得られた土器（39）と埋土の下位から得られた土器片6点（40~45）である。

39は口縁部が外反する深鉢であり、体部下半部~底部が欠損している。口縁部には外面から穿たれた2個の補修孔がみられる。地文として単節の斜縄文が施されているが、施文後に行なわれた外面のナデ調整によって、地文部のところどころが磨消されている。内面は入念なナデ調整が加えられて緻密な器面となっている。この土器の胎土には、砂や細礫が多く含まれている。40~42は深鉢の口縁部片である。40は単節の縄文が横位方向に、また42は撚糸文が斜位方向に施されている。44・45は縄文区画文の文様をもつ深鉢の体部片である。以上の土器は縄文時代中期末葉~後期前葉の時期に位置づけられるものと考えられる。

(3) 焼土遺構

D II区

D II-151焼土遺構

遺 構（図版8-a・写真図版8-a）

調査区域の西側に検出された現地性の焼土である。45cm±×35cm±の不整な楕円形状の広がりを持ち、層厚5cm±を計る。色調は暗赤褐色を呈する。この焼土の周辺には炭化物が少量分布している。出土遺物はない。

D III区

D III-151焼土遺構

遺 構（図版8-b・写真図版8-b）

調査区域中央部でゆるやかな起伏がみられるところに検出された現地性の焼土である。焼土はこの起伏の傾斜面に沿って形成されている。70cm±×45cm±の不整な楕円形状の広がりを持ち、層厚5cm±を計る。色調は暗褐色を呈する。出土遺物はない。

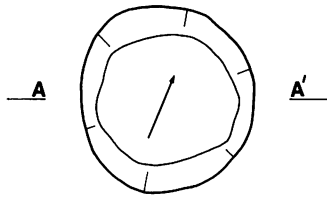
D III-152焼土遺構

遺 構（図版8-c・写真図版8-c）

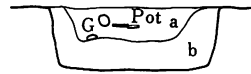
調査区域南端の段丘崖寄りに検出された現地性の焼土であり、D III-1住居址と近接した位

置にある。深掘りの際に重機で2分の1ほどが破壊されてしまったが、残存部から推定すると、この焼土は55cm±×45cm±の楕円形状の広がりを持ち、層厚15cm±を計るものと考えられる。色調は暗赤褐色を呈する。この焼土の下に断面形が摺鉢状を呈する掘り方が確認された。この掘り方の部分は、炭化物や焼土粒を含むにぶい褐色土によって充填されていた。出土遺物はない。

a. D II-51ピット

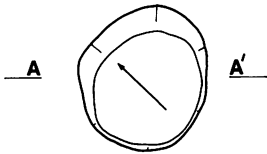


|A—L=315.80m—A'|

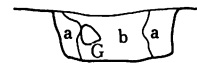


a. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層 (含 炭化物)
b. 7.5 YR 5/6 明褐色土層 (含 炭化物)

b. D II-52ピット

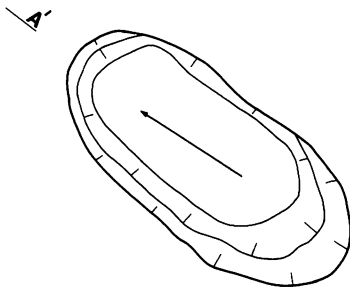


|A—L=315.80m—A'|

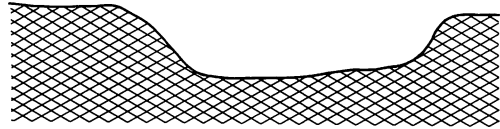


a. 7.5 YR 5/4 明褐色土層
b. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層 (含 炭化物)

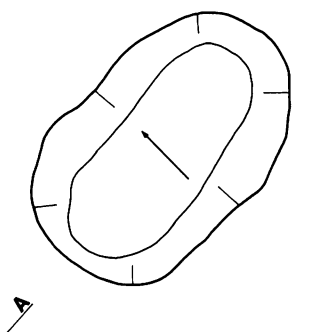
c. D II-53ピット



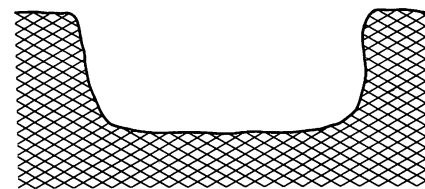
|A—L=316.10m—A'|



d. D II-54ピット

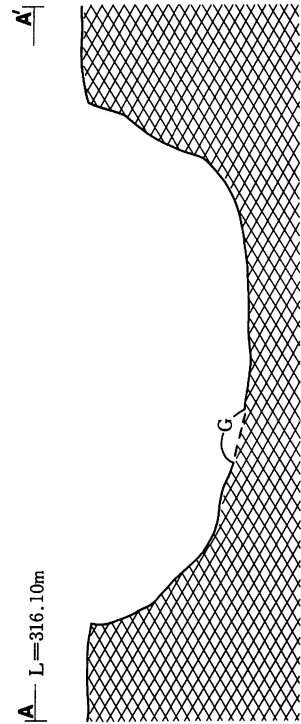
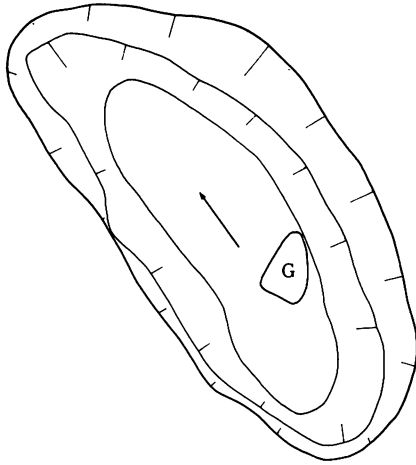


|A—L=315.90m—A'|

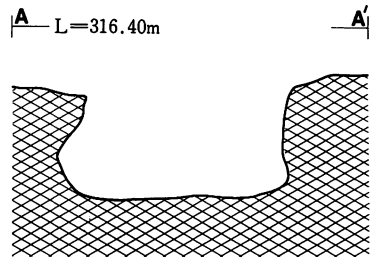
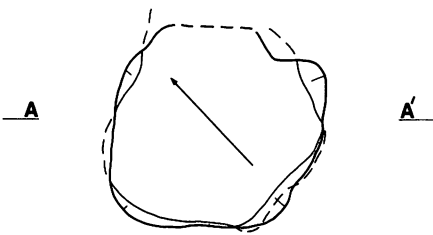


S=46

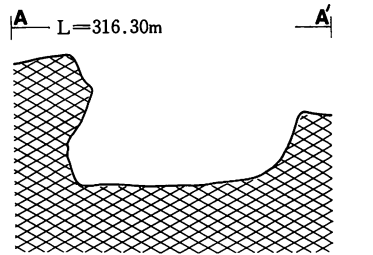
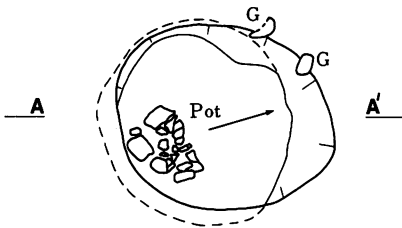
a. D III-51ピット



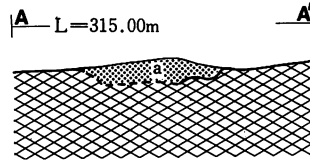
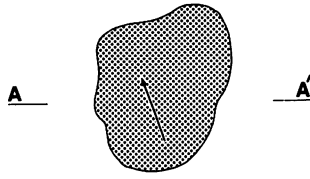
b. D III-52ピット



c. D III-53ピット

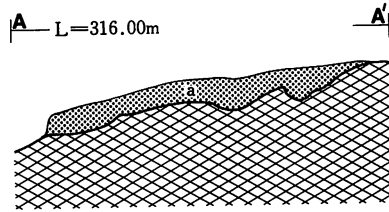
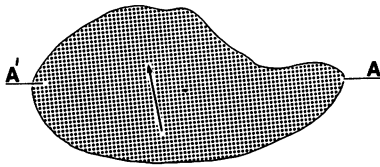


a. D II—151焼土遺構



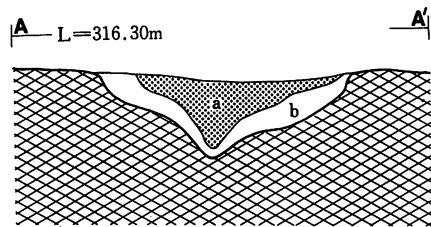
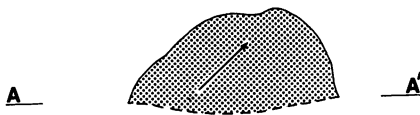
a. 5 YR 3/4 暗赤褐色土層 (焼土)

b. D III—151焼土遺構



a. 5 YR 4/8 赤褐色土層 (焼土)

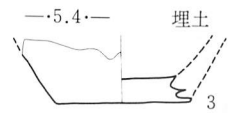
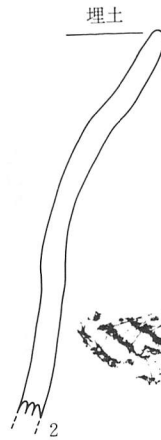
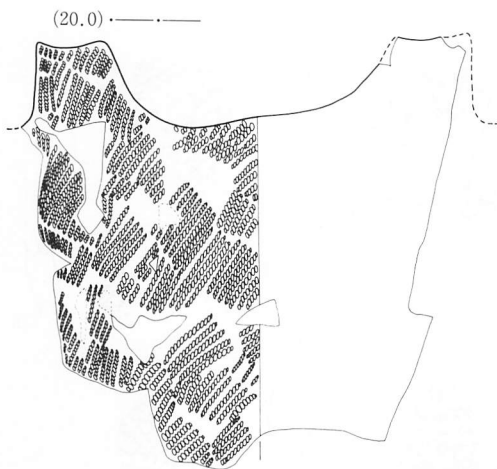
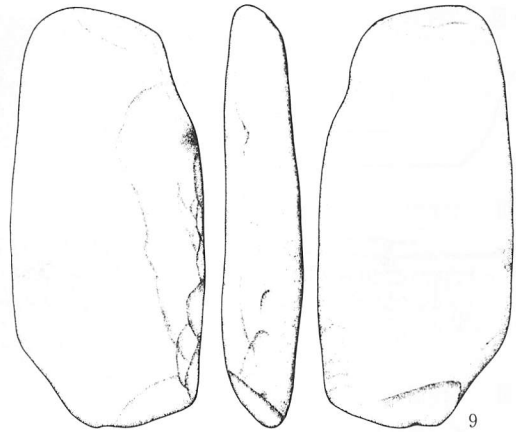
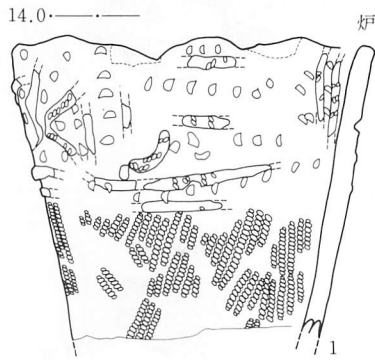
c. D III—152焼土遺構



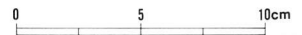
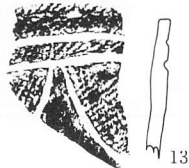
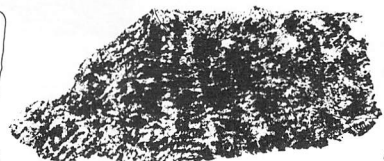
a. 5 YR 3/4 暗赤褐色土層 (焼土)
b. 7.5 YR 5/4 にぶい褐色土層 (含炭化物、焼土粒)

S=20

D II-1 住居址 (1~9)

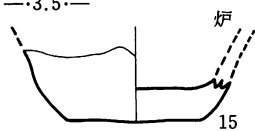


D III-1 住居址 (10~14)



図版9 遺構内の出土遺物(1)

D III-2 住居址 (15~18)
—3.5—



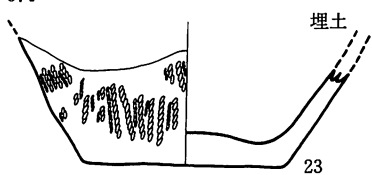
D III-3 住居址 (19~21)



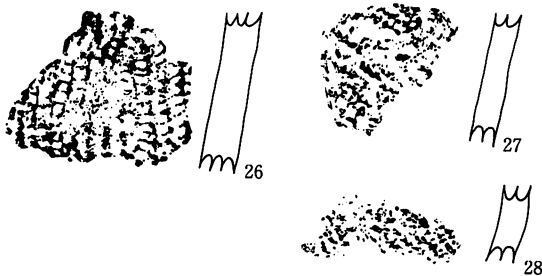
D III-4 住居址 (22)



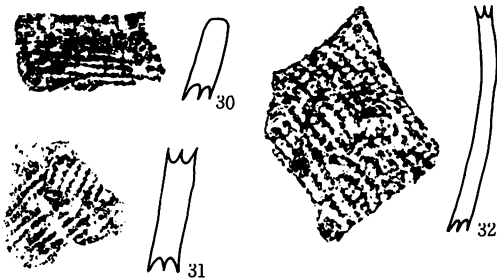
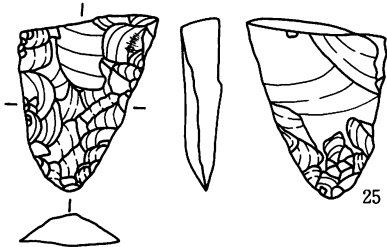
D II-51ピット (23~25)
—5.4—



D II-52ピット (26~28)

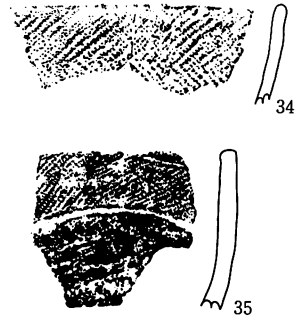
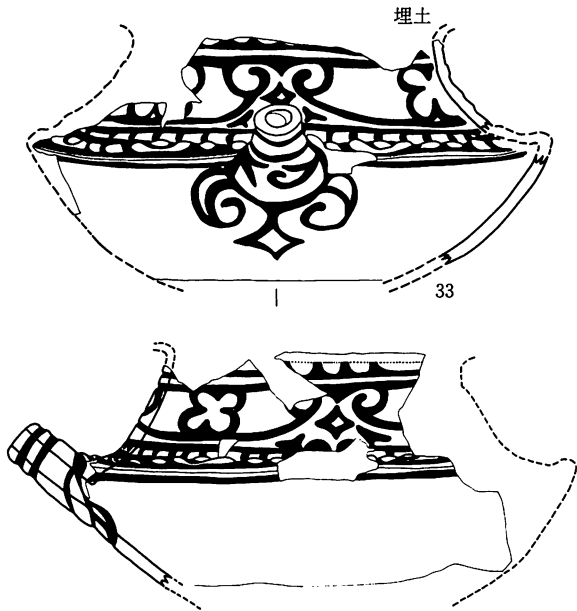


D II-53ピット (29~32)

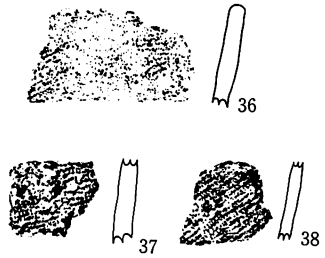


図版10 遺構内の出土遺物 (2)

D III—51ピット (33~35)

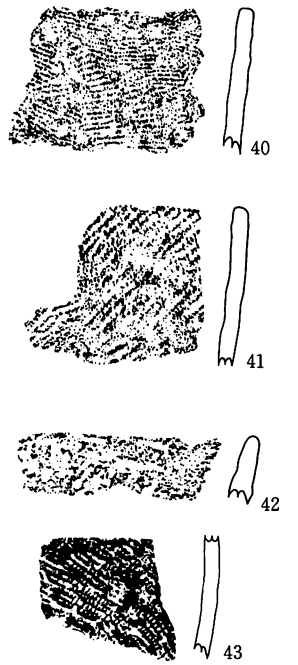
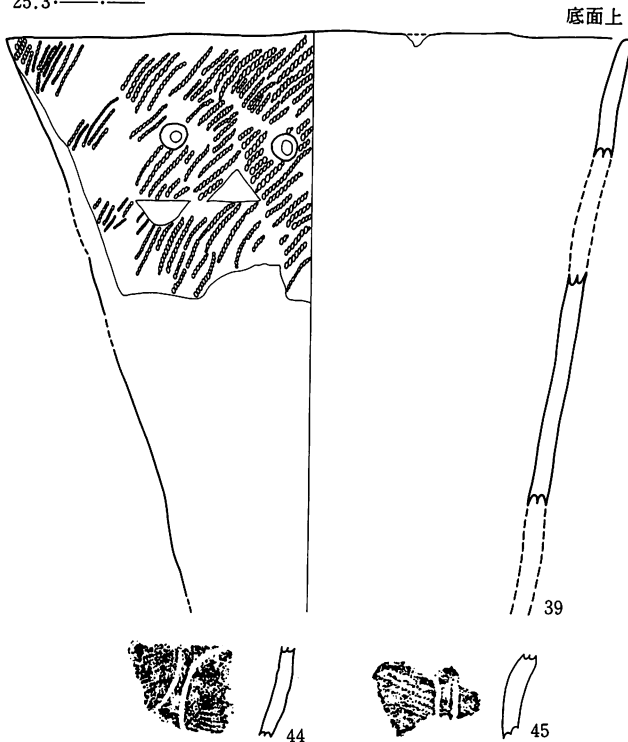


D III—52ピット (36~38)



D III—53ピット (39~45)

25.3. ———



0 5 10cm

図版11 遺構内の出土遺物 (3)

2. 遺構外の出土遺物

荒屋 I 遺跡の遺構外の出土遺物は、土器・石器・土製品からなる。土器は縄文時代のものだけであり、このほかの時代のものは出土していない。石器としては、石槍・石匙・篋状石器・スクレイパー・不定形石器・凹石・磨石が出土している。土製品としては、滑車形耳飾り・剣状土製品・石冠状土製品が出土している。以上の遺物は I 層および III 層から出土しているが、これらの中で I 層から出土したものは時期の識別ができない縄文土器の細片数点だけである。したがって、ここでは III 層の暗褐色土層中から出土した遺物についてのみ記述したいと思う。

(1) 土 器

縄文土器 縄文時代早期から晩期に至る各時期の土器が出土している。これらの土器を時期別に分類し、それぞれに第 I 群土器～第 V 群土器の名称を付した。すなわち、早期の土器を第 I 群土器、前期の土器を第 II 群土器、中期の土器を第 III 群土器、後期の土器を第 IV 群土器、晩期の土器を第 V 群土器とした。以下に各群の土器について記述する。なお荒屋 II 遺跡および越戸 II 遺跡の遺構外出土の縄文土器についても、これらの名称を用いて記述することとする。

① 第 I 群土器 (図版12-1・写真図版12-1)

この群に属する土器としては、尖底深鉢の破片(1)が出土している。尖底部は砲弾形を呈する。地文は単節の斜縄文である。胎土には繊維が含まれている。この土器片は早期末葉に位置づけられるものと考えられる。

② 第 II 群土器 (図版13-8～13・写真図版13-5～10)

この群に属する土器は、文様上の特徴により次のように分けられる。

A. 綾絡文が施文されているもの(8～10)

8は波状口縁の深鉢の破片であり、口縁部が外反気味にたちあがっている。9は波状口縁の深鉢の破片であり、地文は単節の斜縄文である。10は平縁口縁の深鉢の破片であり、地文は単節の斜縄文である。いずれの土器片も胎土に繊維が含まれている。

B. 口縁部に数条の沈線が施されているもの(11・12)

11は平縁口縁の深鉢の破片であり、内面には入念なナデ調整が加えられている。12は口唇部分が欠如しており、口縁の形態は不明である。これらの土器片の胎土にも繊維が含まれている。

C. 燃糸文が施文されているもの(13)

13は口唇部がオーバー・ハング状に作り出されている深鉢の破片である。この土器片の胎土

にも繊維が含まれている。

以上の土器片はいずれも前期前葉に位置づけられるものと考えられる。

③ 第三群土器 (図版13、14・写真図版13～15)

この群に属する土器は、文様上の特徴により次のように分けられる。

A. 撚糸文が施文されているもの (図版13-14～19・写真図版13-11～16)

14・15は波状口縁の深鉢の破片で、隆起線文によって加飾されている土器である。この隆起線文の上に撚糸圧痕が刻目状に施されている。どちらの土器片の胎土にも金雲母が少量含まれている。16も隆起線文によって加飾されているが、14などとは異なり隆起線文上には撚糸圧痕が施されていない。17はキャリパー形を呈する深鉢の破片である。地文は単節の斜縄文である。18は平縁口縁の深鉢の破片であり、口縁部が内弯気味に立ちあがっている。口唇部には波状を呈する隆起線文がみられる。この隆起線文上にも撚糸圧痕が施されている。19は波状口縁の深鉢の破片であり、口縁部の下位に径1cmほどの孔が設けられている。

B. 刺突文が隆起線文に沿って施文されているもの (図版13-20～28・写真図版14-17～25)

刺突文には、棒状工具によって施文されたもの(20～25)と割りばし状工具によって施文されたもの(26～28)とがある。いずれの土器片も深鉢の破片である。

C. 隆起線文が横位・斜位に施文されているもの (図版14-29～33・写真図版14-26～30)

隆起線文上に縄文圧痕があるもの(29～31)と縄文圧痕がなく素文のもの(32・33)とがある。29・30は口縁部の突起部分に橋状把手をもっている。32・33の口縁部の突起部分には径1cm土の孔がみられる。いずれの土器片も深鉢の破片である。

D. 連弧状の沈線が施されているもの (図版14-34・写真図版15-31)

34は波状口縁の深鉢の破片である。連弧状の沈線の上には3条の平行沈線が施文されている。

E. 楕円縄文区画文が施されているもの (図版14-35～38・写真図版15-32～35)

35はキャリパー形深鉢の破片であり、楕円縄文区画文が横位に展開されている。地文は単節の斜縄文である。36～38は楕円縄文区画文が縦位に展開されているキャリパー形深鉢の破片である。これらのうち、37・38は区画文の一部が磨消されその中に刺突文が施されている。

F. 鱗状の隆起線に沿って刺突文が施文されているもの (図版14-39・写真図版15-36)

39は波状口縁の深鉢の破片であり、口縁部が外反ぎみに立ちあがっている。口縁部は無文帯となっている。

以上の土器片の中で、Aに含まれるものは中期前葉に、B～Eに含まれるものは中期中葉に、Fのものは中期末葉にそれぞれ位置づけられるものと考えられる。

④ 第四群土器 (図版12、14、15・写真図版12、15、16)

この群に属する土器は、文様上の特徴により次のように分けられる。

A. 帯縄文が施文されているもの（図版14-40-47、15-48-51・写真図版15-37-44、16-45-48）

40-42は幅の広い帯縄文が施文されている。43・44は幅の狭い帯縄文が施文されている。45は帯縄文の上に弧状の沈線と円形の刺突が施されている。46は帯縄文の上にS字状の沈線が施されている。47は40などよりさらに幅の広い帯縄文が施文されているものである。48-51は幾何学的な帯縄文が施文されているものである。51は台付鉢の破片であるが、他の土器片はいずれも深鉢のものである。

B. 刺突文が施文されているもの（図版15-52・53・写真図版16-49）

52は隆起線の上に沿って1列の刺突文が施されているが、53には隆起線はなく地に直接加えられた刺突文は2列をなす。これらの土器片は浅鉢の破片であろうと思われる。

C. その他の文様が施されているもの（図版12-2・3、15-54-58・写真図版12-2・3、16-50-54）

口縁部に沿って沈線が巡らされているもの（2・55・56）、櫛歯状の沈線が施されているもの（57）、地文の上に綾絡文が施されているもの（3）、地文だけのもの（54・58）がある。2は台付鉢で台の上部にも一条の沈線が巡らされている。地文は単節の斜縄文である。内面は入念なミガキ調整がなされている。55は指頭圧痕によって波状を呈する口縁が作られている。57は口唇部が粘土の貼付によって肥厚している。3は複合口縁の深鉢で、体部下半部～底部が欠如している。複合口縁上には撚糸圧痕が刻目状に施されている。地文は単節の斜縄文である。54は口縁部が外反ぎみに立ちあがる深鉢の破片である。地文は単節の斜縄文である。58は体部上半部が張り出す深鉢の破片である。地文は無節の縄文であり、向きをいろいろと変えられながら施文されている。

以上の土器片はいずれも後期中葉に位置づけられるものと考えられる。

⑤第V群土器（図版12、15、16・写真図版12、17）

この群に属する土器は、C II区の遺物包含層から出土したものである。この群の土器は、器形により次のように分けられる。

A. 器形が深鉢のもの（図版12-4、15-59-63・写真図版12-4、17-55-59）

4は口縁部が大きく内弯して立ちあがるもので、口縁部には2条の沈線が巡らされている。また口唇部上面には刻目が施されている。器表面のところどころにススが付着している。59-63は口縁部と体部上半部との間にくびれをもち、口縁部が外反して立ちあがるものである。口縁部には数条の沈線が巡らされている。口唇部の形状には指頭圧痕が連続的に施されて小波状を呈するもの（59-61）と一部に山形の小突起をもつもの（62・63）とがある。

B. 器形が鉢のもの（図版15-64-67・写真図版17-60-63）

64～66は口縁部に2条の沈線が巡らされているものである。これらの口唇部上面には刻目が施されている。また66の口唇部には山形の小突起がみられる。67は小型の鉢と思われる破片で、口縁部に羊歯状文が施文されている。

C. 器形が台付鉢のもの（図版12-5～7、15-68・69・写真図版17-64・65）

5～7はいずれも底部の破片である。6の台最下部外面には体部の地文と同じ単節の斜縄文が施されている。68・69は口縁部の破片である。口唇部は内側に向かって屈曲しており、オーバー・ハング状の断面形を呈する。68には口縁部に雲形文が施文されている。

D. 器形が皿のもの（図版16-70・71・写真図版17-66・67）

70・71ともX字文が施文されている皿である。70の口唇部には山形の突起がみられる。71の器表面には赤色顔料状の付着物が認められる。

以上の土器片は、いずれも晩期中葉に位置づけられるものと考えられる。

⑥土器底部（図版16-72～78・写真図版18-68～74）

ここでは、出土した縄文土器底部の中で圧痕文が施されているものについてだけ述べる。底部に施されている圧痕文はいずれも網代痕であるが、網代の編み方には次のような種類のものが見られる。経の条に対して緯の条が1本越え1本潜り1本送りであるもの（72～75・78）、2本越え1本潜り右1本送りであるもの（76）、3本越え3本潜り1本送りであるもの（77）の3種類である。なお78の網代は、経・緯に幅の異なる材が使用されている点で72などのものとは相違する。

(2) 石器

①石槍（図版17-1・2・写真図版19-1・2）

出土した石槍は2点（1・2）である。1は2の約2倍の長さをもつもので、尖頭部に細かい剝離調整が加えられている。2は1の3分の1以下の重量のもので、扁平な断面形を示す。尖頭部の剝離調整はやや粗い。

②石匙（図版17-3・4・写真図版19-3・4）

出土した石匙は2点（3・4）である。3は石器の長軸方向につまみ部が作り出されているもので、刃部の剝離調整は入念である。また凹状を呈する左側縁部にも使用痕がみられる。4は石器の長軸方向に対して右側につまみ部が作り出されているものである。刃部の剝離調整は入念である。腹面はつまみ部以外二次加工されていない。

③篋状石器（図版17-5・6・写真図版19-5・6）

出土した篋状石器は2点（5・6）である。5は刃部の縦断面形がほぼ平坦なもので、腹面

に第1次剝離面が残されている。6は刃部の縦断面形が凸状を呈するものである。平面形は二等辺三角形状を呈する。

④スクレイパー（図版17-7～9、18-10・11・写真図版19-7～11）

出土したスクレイパーは5点（7～11）である。石器の長軸と直交する縁辺に刃部が形成されているもの（7）と石器の長軸と平行する縁辺に刃部が形成されているもの（8～11）とがある。7は背面に自然面がみられる。また11は石器の頭部に打面が残されている。

⑤不定形石器（図版18-12～18・写真図版19-12～18）

出土した不定形石器は7点（12～18）である。これらの石器はその縁辺の一部が刃部加工されているものであるが、刃部の形状から次のように分けられる。刃部の形状が平坦なもの（12）、凸状のもの（13・14）、凹状のもの（15～18）がある。12・18の石器の頭部には打面が残されている。いずれの打面も非調整打面である。

⑥凹石（図版18-19・写真図版20-19）

出土した凹石は1点（19）である。平面形が楕円形の自然礫を素材にしているもので、その両面に2個以上の凹みが認められる。なお側面にみられる凹みは人為的に形成されたものではない。

⑦磨石（図版19-20・写真図版20-20）

出土した磨石は1点（20）である。棒状の自然礫を素材にしているもので、その両側面に研磨痕が認められる。また側面の一部には小さな敲打痕がみられる。

(3) 土製品

①滑車形耳飾り（図版19-21・写真図版20-21）

出土した滑車形耳飾りは1点（21）であるが、2分の1以上が欠損している。このため正確な大きさは明らかではないが、残存部から推定すると、径6.4cm±・高さ3.8cm±の円形を呈する耳飾りと思われる。両面の周縁部に竹管状の工具によって刺突文が施されている。刺突文は両面とも三重の環状をなす。

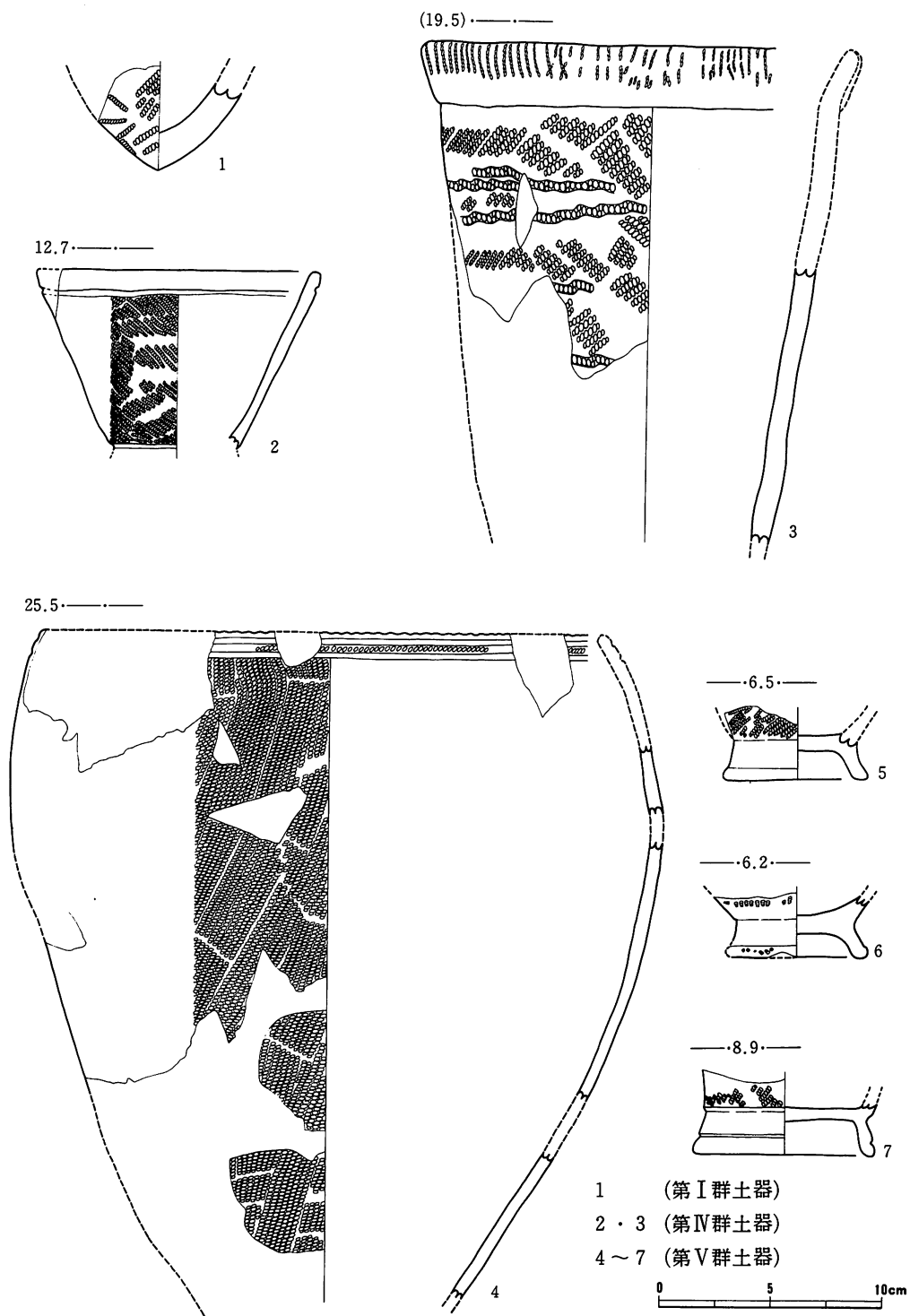
②剣状土製品（図版19-22・写真図版20-22）

出土した剣状土製品は1点（22）であるが、ごく一部分の破片であるため詳細は不明である。残存部分で、最大幅3.5cm±・最大厚1.8cm±を計る。全面に地文として単節の斜縄文が施されている。しかし施文後に加えられたナデ調整によって地文がところどころ磨消されている。

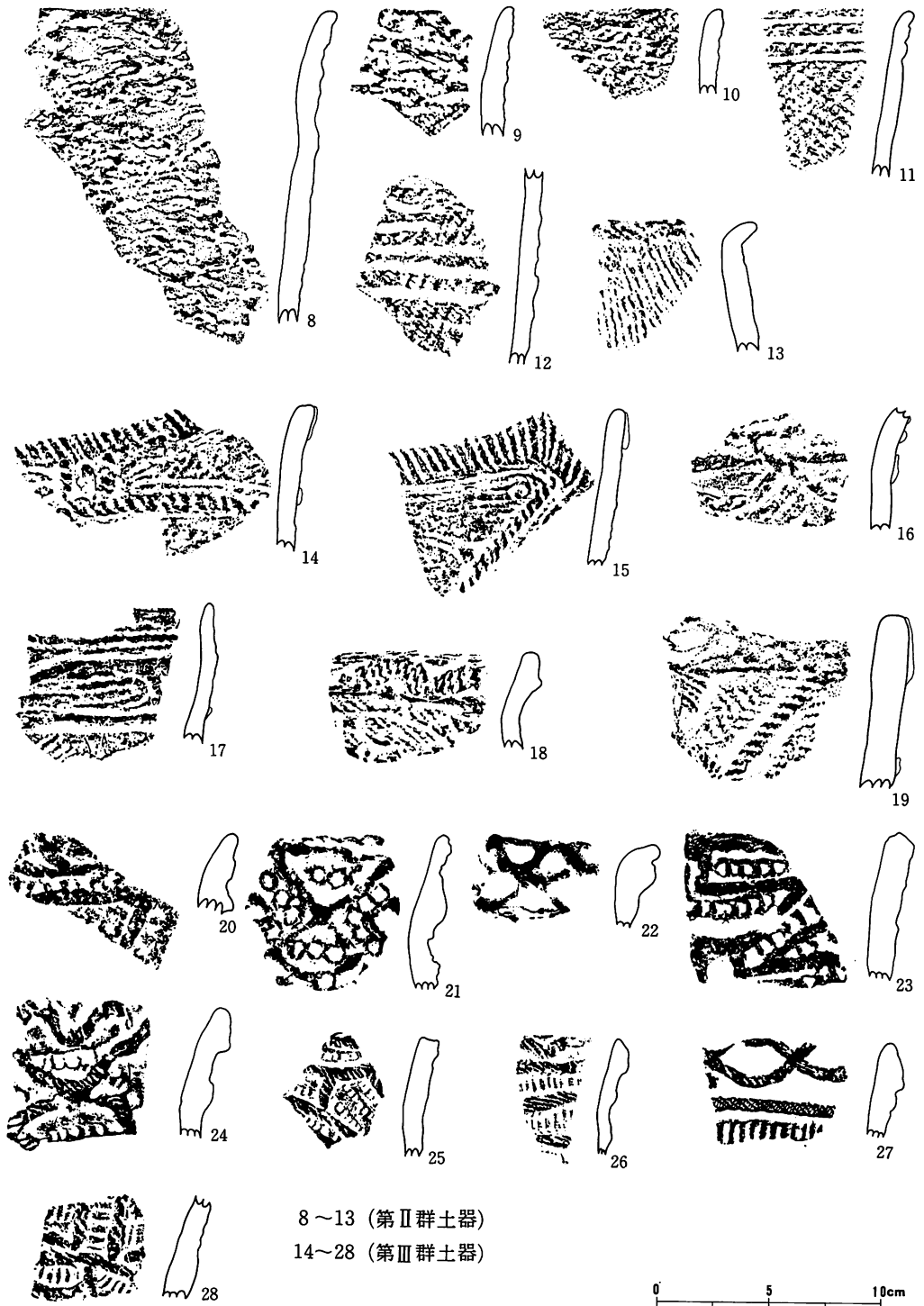
③石冠状土製品（図版19-23・写真図版20-23）

出土した石冠状土製品は1点（23）である。この土製品は横転位の三角柱状の形態を示すも

のである。底面に対応する稜線は弓状に弯曲している。底面で最大長11.0cm±・最大幅 5.5 cm ±を計る。底面から弓状を呈する稜線までの高さは 5.2 cm±～7.8 cm±を計る。底面に直交する両側面には二等辺三角形形状の凹みがみられる。この土製品の表面は、入念なミガキ調整が施されて全体的に光沢をもっている。また表面の各面には大きな黒斑が認められる。



図版12 遺構外の出土遺物 (1)



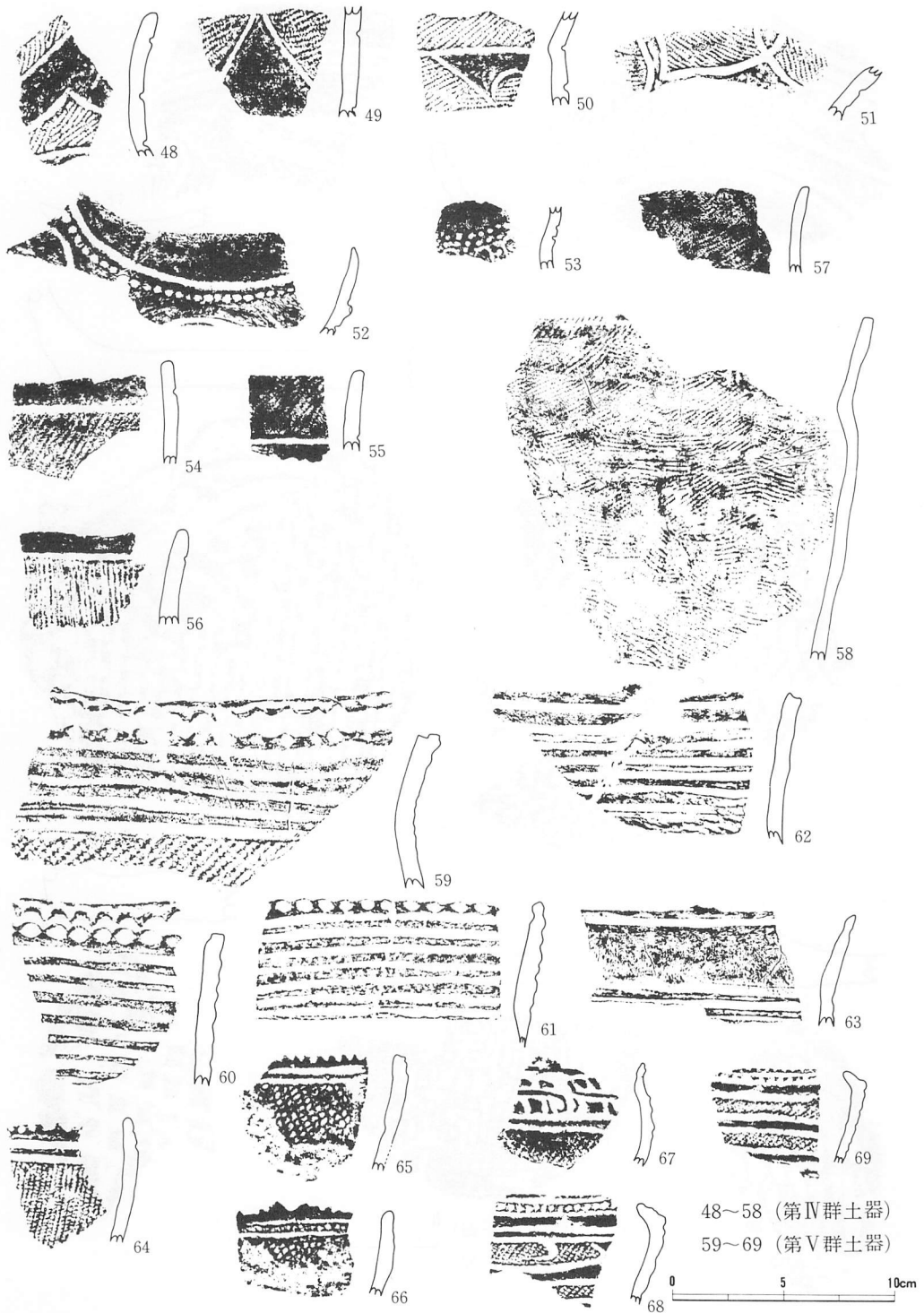
図版13 遺構外の出土遺物 (2)



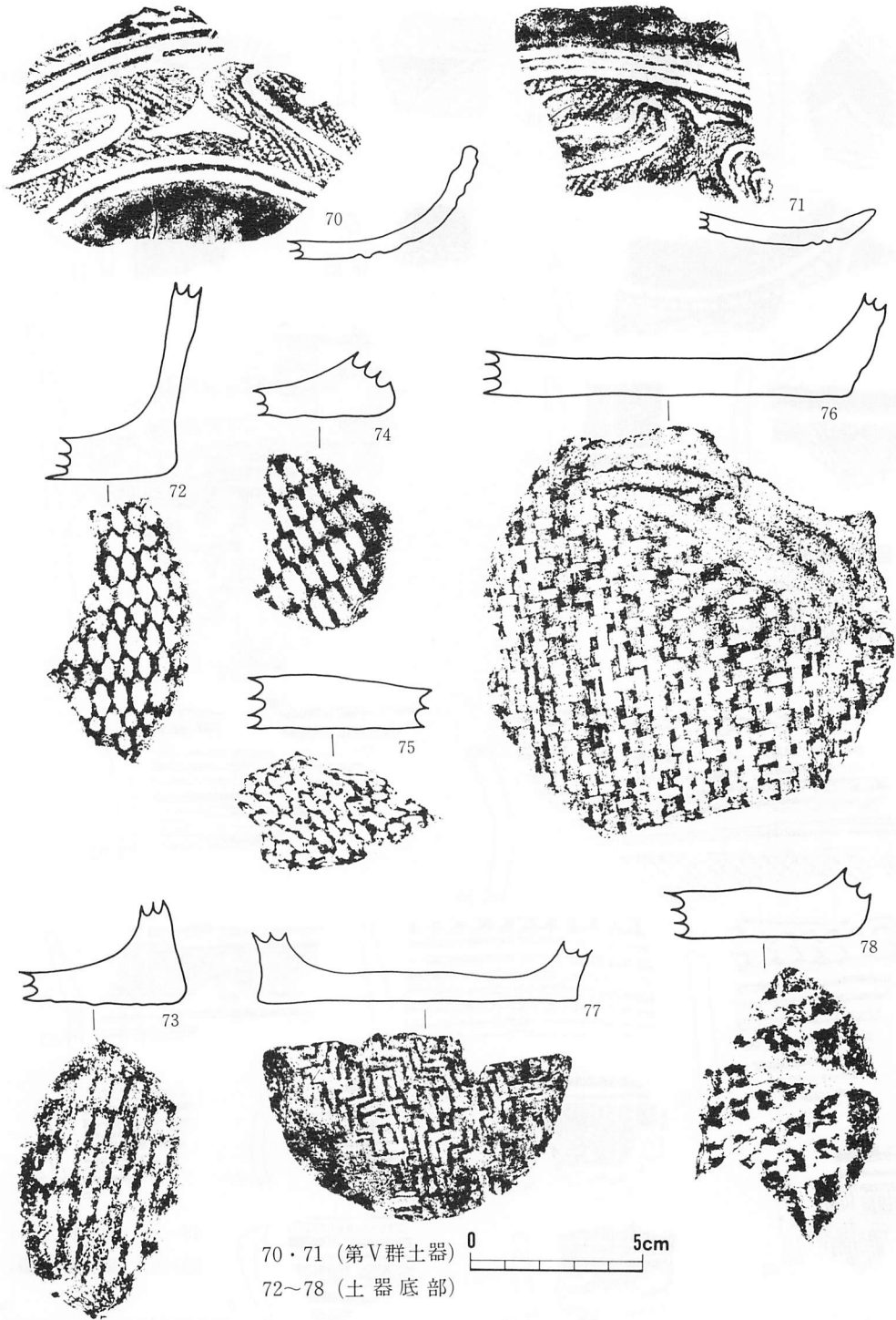
29~39 (第Ⅲ群土器)

40~47 (第Ⅳ群土器)

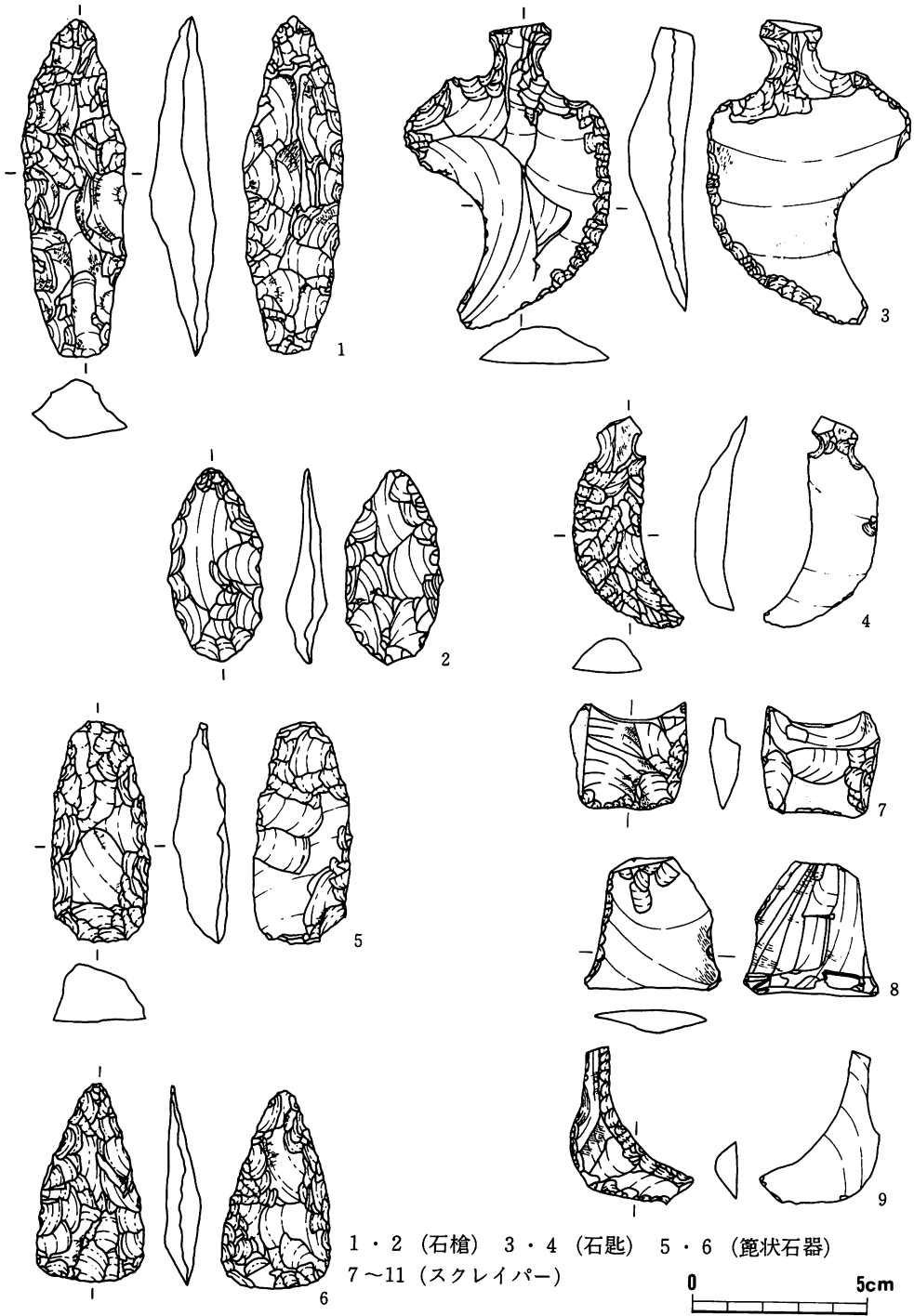
図版14 遺構外の出土遺物 (3)



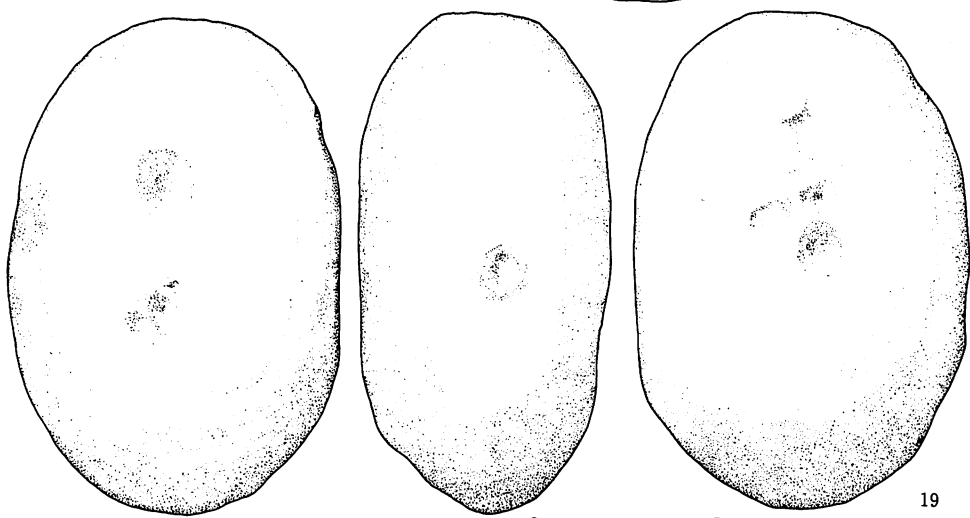
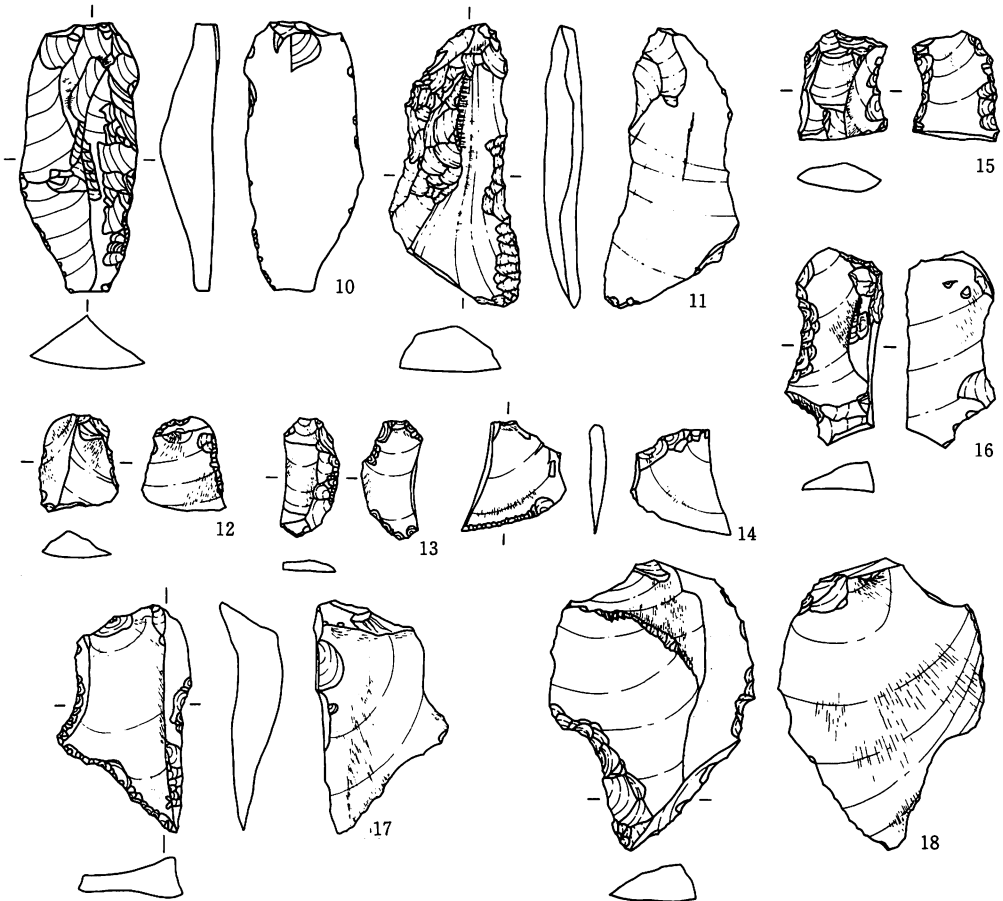
図版15 遺構外の出土遺物(4)



図版16 遺構外の出土遺物 (5)

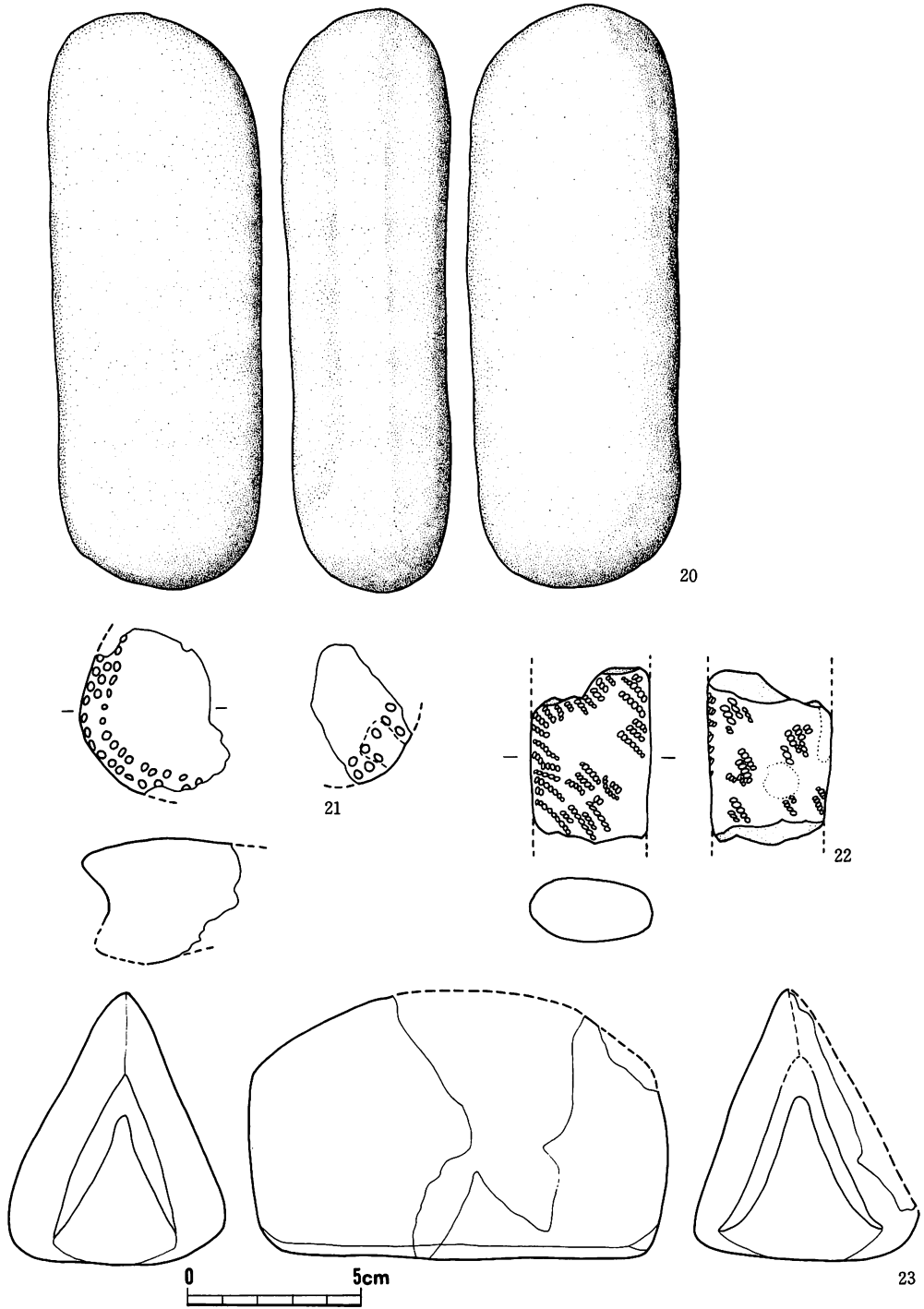


図版17 遺構外の出土遺物 (6)



12~18 (不定形石器) 19 (凹石) 0 5cm

図版18 遺構外の出土遺物 (7)



20 (磨石) 21 (滑車形耳飾り) 22 (剣状土製品) 23 (石冠状土製品)

図版19 遺構外の出土遺物 (8)

3. ま と め

荒屋 I 遺跡の発掘調査の結果、検出された遺構および出土した遺物はこれまでに述べたとおりである。これらについて要約すると以下ようになる。なお、当遺跡の遺構・遺物に関する分析および考察は、後日発行されることになっている『安代町有矢野遺跡・上の山 X 遺跡発掘調査報告書』の考察編の中で詳述する予定である。

(1) 遺 構

① 竪穴住居址

当遺跡で検出された住居址は、すべて縄文時代のものであり合計 5 棟である。

● 時期

5 棟の住居址は、出土遺物・遺構の形状・炉の形態からみて、次のように時期別に分けられる。縄文時代中期中葉のもの（D II-1 住居址）、後期前葉のもの（D III-1 住居址）、後期前葉～中葉のもの（D III-2 住居址）、後期中葉～末葉のもの（D III-4 住居址）、晩期のもの（D III-3 住居址）となる。これらの住居址は、時期によってややその占地在異なるようである。中期中葉の D II-1 住居址は、段丘崖から 23m 離れたところに立地している。後期前葉～末葉および晩期の時期に当たる他の 4 棟は、段丘崖寄りのほぼ同一位置に重複する形で立地している。この中で D III-3 住居址と D III-4 住居址の重複状態（壁を共有し、それぞれの炉が上下に重なりあう状態）は、松尾村野駄遺跡（四井ほか、1980）の後・晩期の住居址の重複状態と同じ形態を示す。5 棟の住居址は、「地形・地質」の項でもふれているように段丘礫層が比較的深く土層の削剝が容易な部分に構築されている。

● 規模および形状

規模・形状が把握できる住居址は、残存部からの推定が可能なものを含めて 3 棟である。他の 2 棟は、掘りすぎや遺構の重複などによって壁が消失しているため、その詳細は不明である。3 棟の住居址の規模は、長軸の長さが 3m 前後のものである。形状は、不整な隅丸方形（D II-1 住居址）、不整な楕円形（D III-4 住居址）、円形（D III-3 住居址）とそれぞれ異なる。

● 柱穴配置

5 棟の住居址とも柱穴が全く検出されなかった。したがって各住居址の柱穴配置は不明である。

● 炉の形態

各住居址に伴う炉の形態は、土器埋設炉と石囲炉の 2 種類である。土器埋設炉をもつ住居址

は、D II-1 住居址・D III-1 住居址の2棟である。また石囲炉をもつ住居址は、D III-2 住居址・D III-3 住居址・D III-4 住居址の3棟である。当遺跡では後期前葉の時期を境にして炉の形態が変化するようである。

②ピット

当遺跡で検出されたピットは合計7基である。これらのピットは、規模・形態から次のように大別できる。

A. 開口部の最大径が90cm～110cmの長さを計り、平面形が円形状を呈するもの

この中に含まれるピットは、D II-51ピット・D II-52ピット・D III-52ピット・D III-53ピットの4基である。この4基は断面形によってさらに2分できる。断面形が浅鉢状を呈するもの（D II-51ピット・D II-53ピット）とフラスコ状を呈するもの（D III-52ピット・D III-53ピット）との2種類である。

B. 開口部の最大径が180cm～280cmの長さを計り、平面形が長楕円形状を呈するもの

この中に含まれるピットは、D II-53ピット・D II-54ピット・D III-51ピットの3基である。

以上のピットは、出土遺物や遺構の形態などからみて、Aのものは縄文時代中期末葉、Bのものは後期中葉～晩期前葉の時期に位置づけられるものであろうと考えられる。

③焼土遺構

当遺跡で検出された焼土遺構は3基である。いずれも現地性の焼土であり、地床炉状の形態を示すものである。これらの焼土遺構の周囲には、壁・柱穴・床面と思われる一定の堅さと広がりをもつ面は確認されなかった。この焼土遺構の時期は、伴出遺物がないため断定し得ないが、検出面の層位的位置づけからみて、縄文時代中期～晩期間に属するのではないかと考えられる。

④遺物包含層

ここでは、廃棄された遺物が集中的に出土したC II区の遺物包含層について述べる。遺物はC II f 3～C II f 4 グリッド特にC II f 4 グリッドに集中していた。遺物の出土層位はIII層の暗褐色土層の上位である。出土した遺物は凹石1点（図版18-19）以外は全て土器片である。土器片の産状は面状の分布を示すというよりは層中の分布を示すものである。土器片は縄文時代晩期中葉の限定された時期のものである。また土器片は粗製の深鉢の破片が多く、精製土器のものは極めて少ない。遺物の出土レベルが一様でないことからみると、2～3回程度の廃棄行為が想定される。さらにこの包含層中に他の地点より炭化物が多量に分布していることから考えると、遺物ばかりでなく炭化物・土砂等の廃棄も行なわれたものと思われる。

(2) 遺物

①土器

出土した縄文土器群の中で、前期・中期に属するものについて従来の型式名との関連で比較すると次のような状況がみられる。前期は円筒下層 a・b 式、中期は円筒上層 a・c・d 式および大木 8・9・10 式に比定される土器群で構成されている。中期中葉段階までは殆ど円筒系土器によって占められているが、この時期を境にして次第に大木系土器が支配的になっていくようである。このような状況は先にあげた野駄遺跡においてもみられたことである。

②石器

出土した石器は全部で 22 点である。この中で出土点数の多い器種はスクレイパー・不定形石器である。当遺跡の出土石器の組成と荒屋 II 遺跡のそれとを比較した場合、半円状扁平打製石器の出土点数に大きな違いがみられる点が注目される。

③土製品

出土した土製品は 3 点であるが、ここでは石冠状土製品についてのみふれる。この土製品と形態的に類似しているものとしては、貝島貝塚出土の「立体土製品」がある（草間ほか、1971）。

表 1 荒屋 I 遺跡遺構名訂正表

番 号	種 別	旧 遺 跡 名	新 遺 跡 名
1	住 居 址	D II - 1	D II - 1
2	住 居 址	D III - 1	D III - 1
3	住 居 址	D III - 7	D III - 2
4	住 居 址	D III - 8	D III - 3
5	住 居 址	D III - 10	D III - 4
6	ピ ッ ト	D II - 8	D II - 51
7	ピ ッ ト	D II - 7	D II - 52
8	ピ ッ ト	D II - 10	D II - 53
9	ピ ッ ト	D II - 11	D II - 54
10	ピ ッ ト	D III - 11	D III - 51
11	ピ ッ ト	D III - 9	D III - 52
12	ピ ッ ト	D III - 12	D III - 53
13	焼 土 遺 構	D II - 5	D II - 151
14	焼 土 遺 構	D III - 3	D III - 151
15	焼 土 遺 構	D III - 5	D III - 152

表2 荒屋I遺跡出土石器計測表

番号	出土地区	器種	図版番号	法 量				石 質
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	
1	DII-1住居址	半円状扁平打製石器	9-9	16.9	7.8	3.1	640.0	安山岩
2	DII-51ピット	スクレイパー	10-25	4.6	3.6	1.0	15.3	赤色チャート
3	DII f 6	石 槍	17-1	9.7	3.0	1.8	51.2	玻璃質安山岩
4	DII f 2	石 槍	17-2	5.5	2.7	1.1	14.2	玻璃質流紋岩
5	CH f 4	石 匙	17-3	8.3	5.8	1.6	51.1	玻璃質安山岩
6	DII e 7	石 匙	17-4	5.6	1.9	0.9	11.5	玻璃質流紋岩
7	DII区	篋状石器	17-5	6.2	2.6	1.5	30.4	玻璃質流紋岩
8	DII f 5	篋状石器	17-6	5.7	3.0	1.0	14.8	珪質頁岩
9	DII区	スクレイパー	17-7	2.9	3.3	0.8	10.7	玻璃質流紋岩
10	DII区	スクレイパー	17-8	3.7	3.8	0.6	8.4	玻璃質流紋岩
11	DIII i 1	スクレイパー	17-9	4.1	3.2	0.6	4.7	安山岩
12	DII区	スクレイパー	18-10	7.1	3.0	1.3	25.0	玻璃質流紋岩
13	DII h 5	スクレイパー	18-11	7.0	3.2	1.0	27.9	玻璃質流紋岩
14	DIII j 2	不定形石器	18-12	2.4	2.1	0.9	4.3	安山岩質ガラス
15	DII区	不定形石器	18-13	3.1	1.4	0.3	1.9	玻璃質流紋岩
16	DII e 3区	不定形石器	18-14	2.8	2.2	0.4	3.3	玻璃質流紋岩
17	DII j 8	不定形石器	18-15	2.9	2.3	0.7	6.1	流紋岩
18	DII f 8	不定形石器	18-16	5.2	2.3	1.2	13.8	玻璃質流紋岩
19	DII区	不定形石器	18-17	5.8	3.3	1.4	17.4	珪質頁岩
20	DII f 0	不定形石器	18-18	7.5	5.4	1.2	53.9	玻璃質流紋岩
21	DII f 6	凹 石	18-19	13.2	8.9	6.6	1,000.0	安山岩
22	DII f 0	磨 石	19-20	16.7	6.0	4.8	738.0	安山岩

表3 荒屋I遺跡¹⁴C試料測定結果表

番号	試料採取遺構名	日本アイソトープ協会コード	岩手県埋文センターコード	¹⁴ C 年 代
1	DIII-1住居址(床面)	N-3621	IM No. 5	3490±85 y B. P. (3390±80 y B. P.)

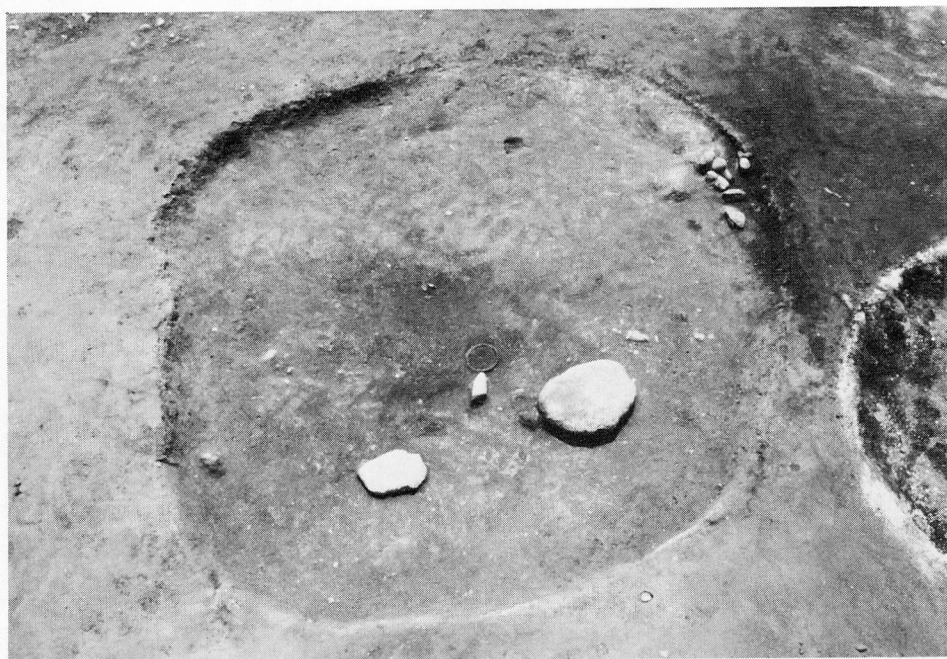
(カッコ内はLibbyの値5568年にもとづいて計算されたもの)



遺跡航空写真
写真図版 1

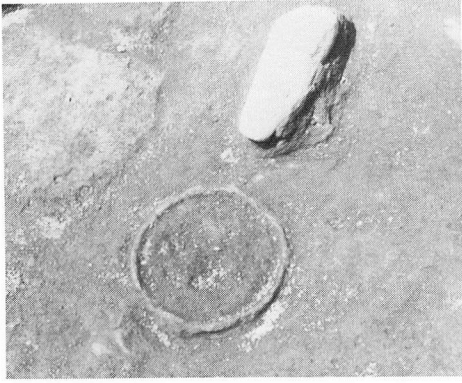


a. 遺跡遠景

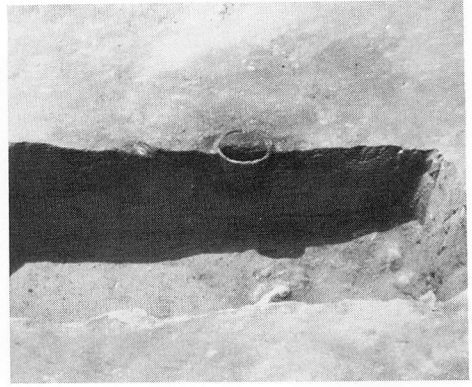


b. D II-1 住居址

写真図版 2



a. D II-1住居址炉



b. D II-1住居址炉 (断面)



d. D III-1・2・3住居址



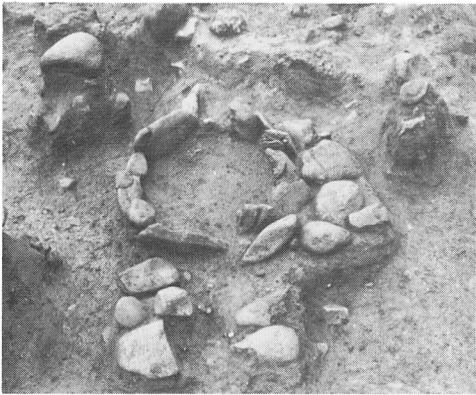
c. D II-1住居址遺物出土狀況



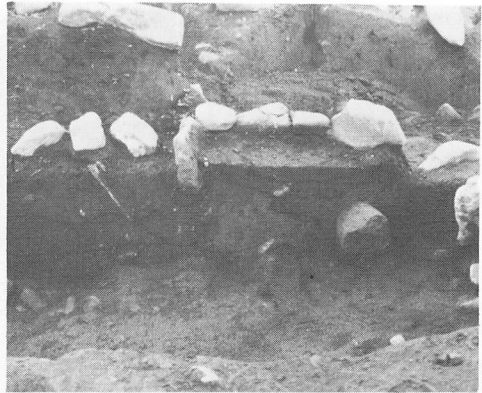
a. D III-1住居址炉 (断面)



b. D III-2住居址炉



c. D III-3住居址炉



d. D III-3住居址炉 (断面)



e. D III-4住居址 (土层断面)

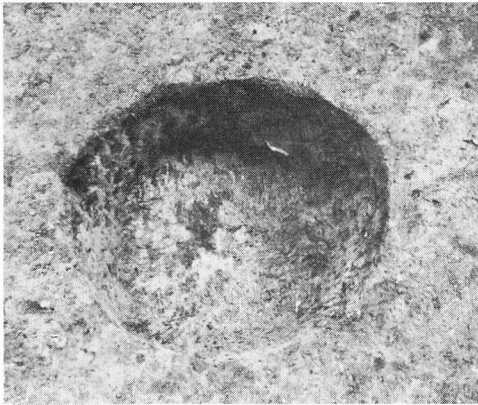
写真図版 4



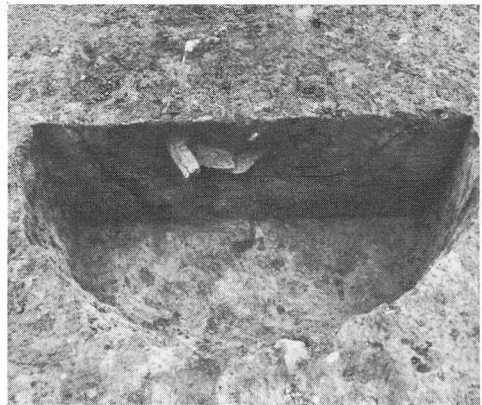
a. D III-4住居址



b. D III-4住居址炉(断面)

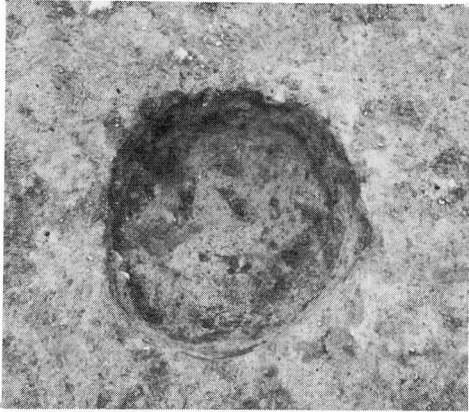


c. D II-51ピット

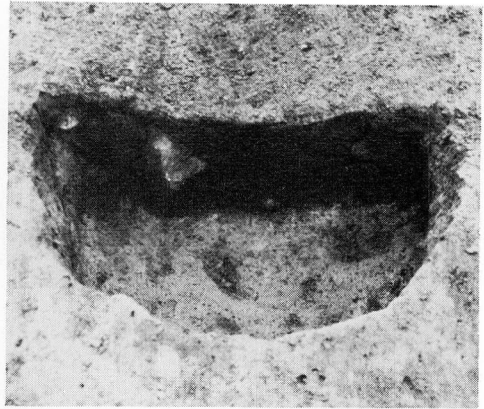


d. D II-51ピット(土層断面)

写真図版 5



a. D II-52ピット



b. D II-52ピット(土層断面)



c. D II-53ピット



d. D II-54ピット

写真図版 6



a. D III-51ピット



b. D III-51ピット(土器出土状況)

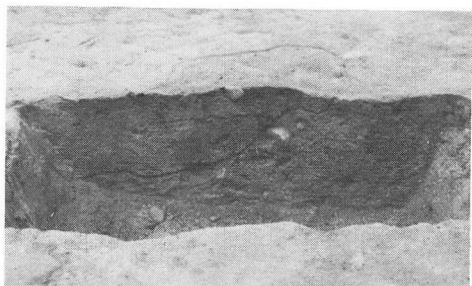


c. D III-52ピット



d. D III-53ピット

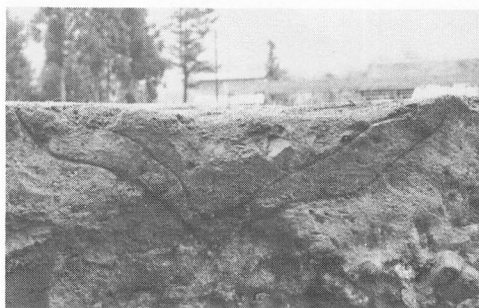
写真図版 7



a. D II-151焼土遺構 (断面)



b. D III-151焼土遺構 (断面)

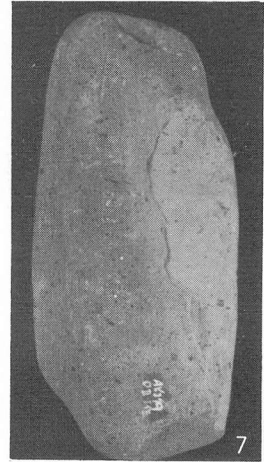
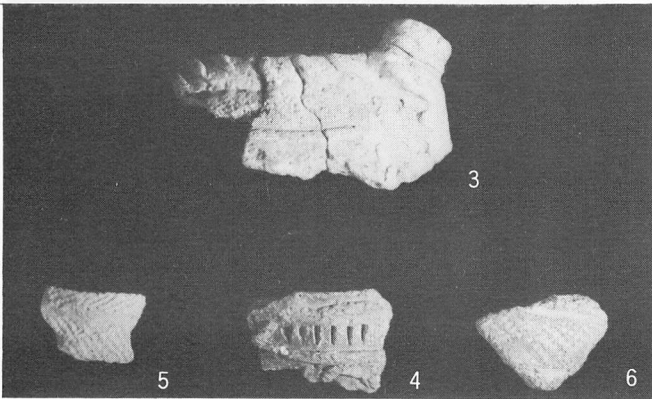
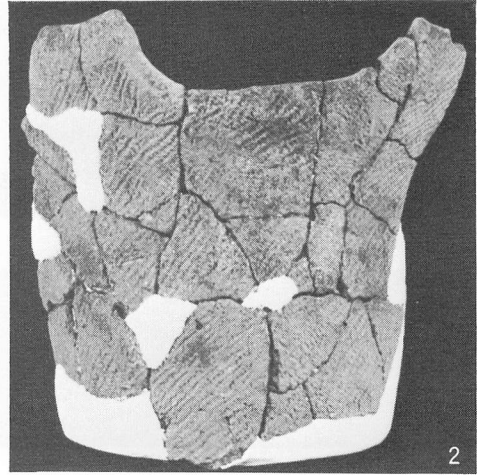
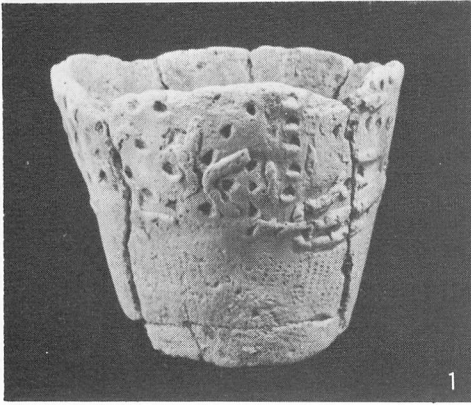


c. D III-152焼土遺構 (断面)

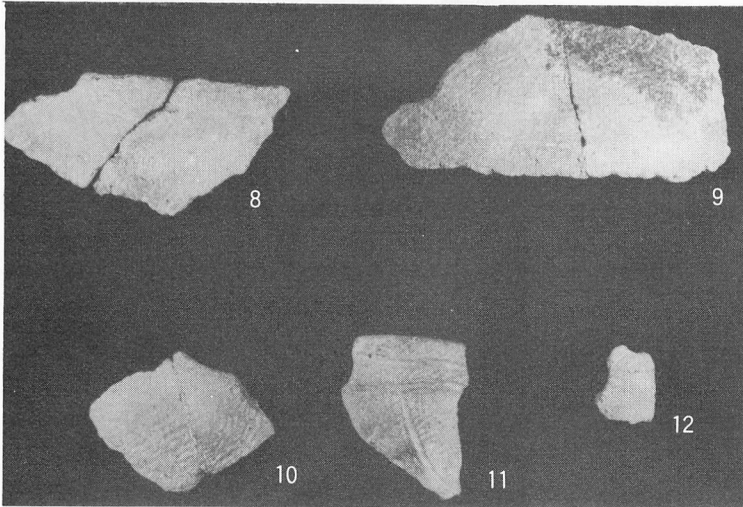


d. C II区土器出土状況
写真図版 8

D II-1住居址 (1~7)

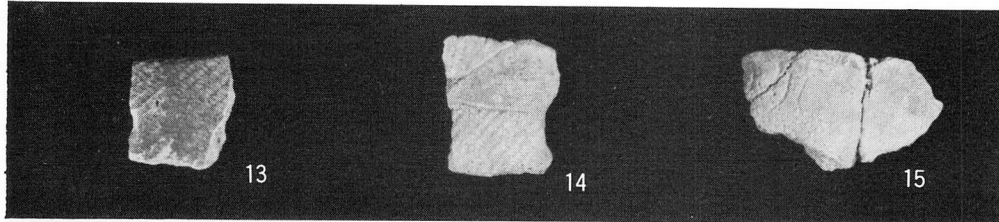


D III-1住居址 (8~12)

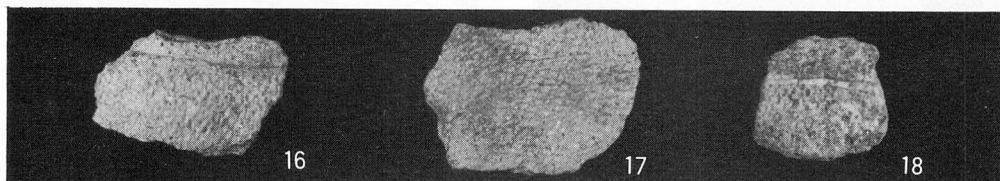


写真図版 9 遺構内の出土遺物 (1)

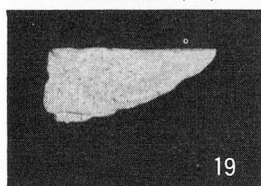
D III-2住居址 (13~15)



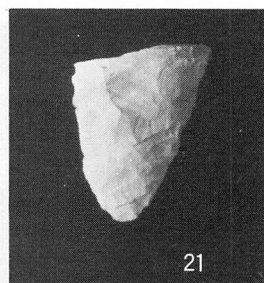
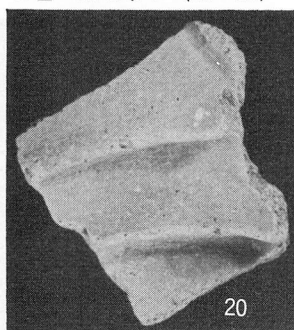
D III-3住居址 (16~18)



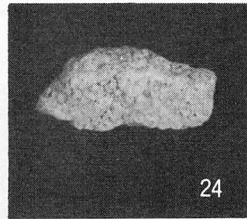
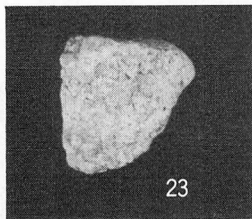
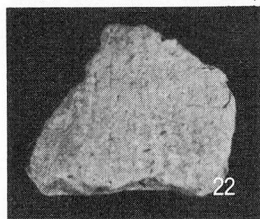
D III-4住居址 (19)



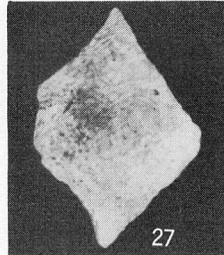
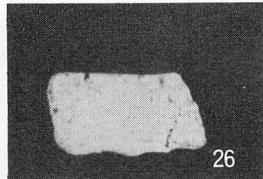
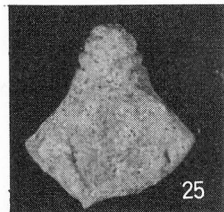
D II-51ピット (20・21)



D II-52ピット (22~24)

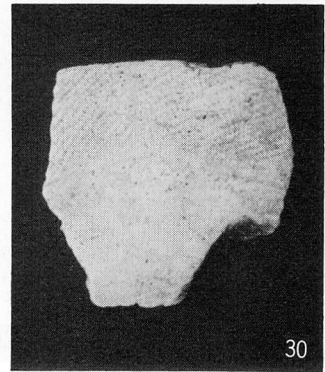
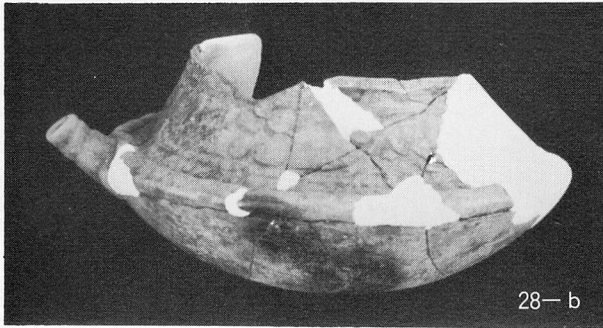
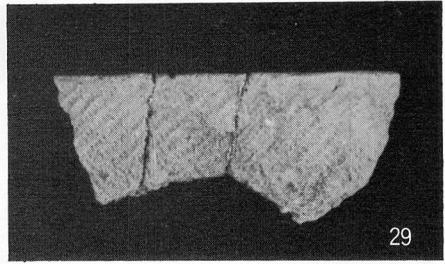


D II-53ピット (25~27)

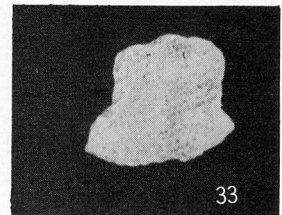
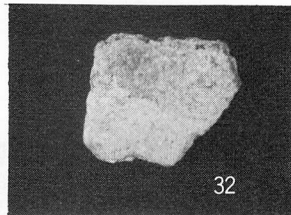
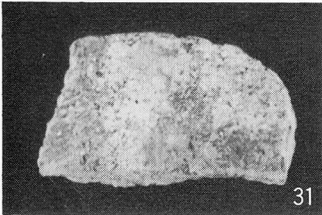


写真図版10 遺構内の出土遺物(2)

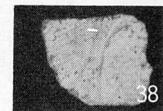
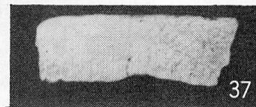
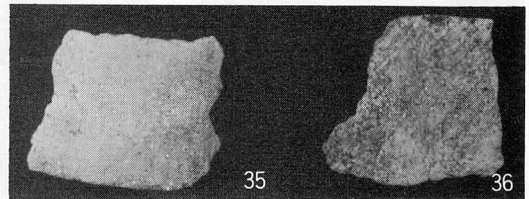
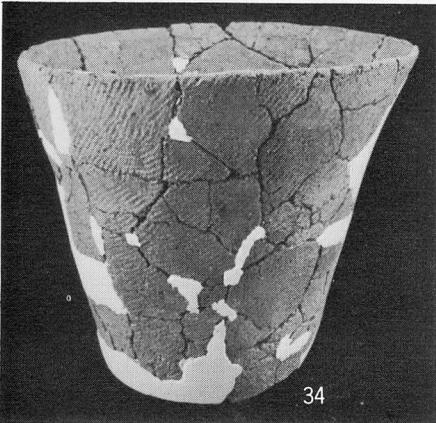
D III-51ピット (28~30)



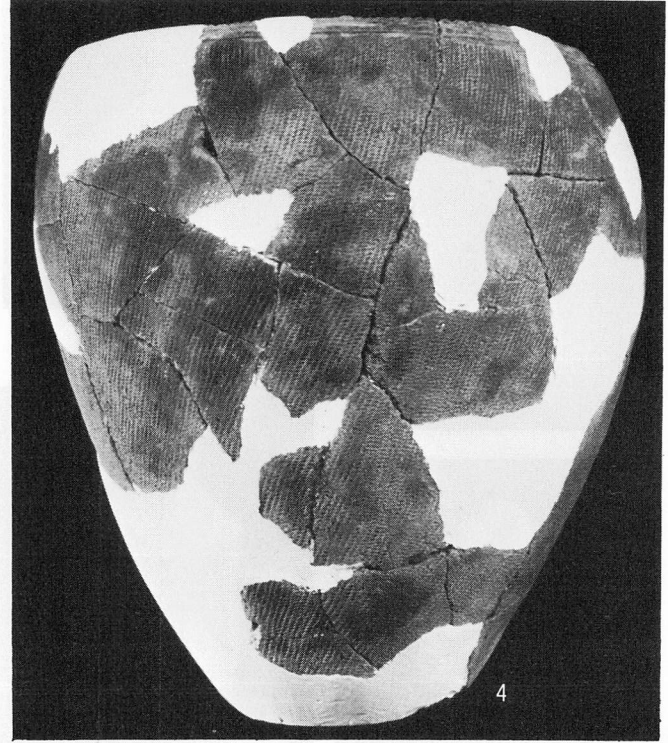
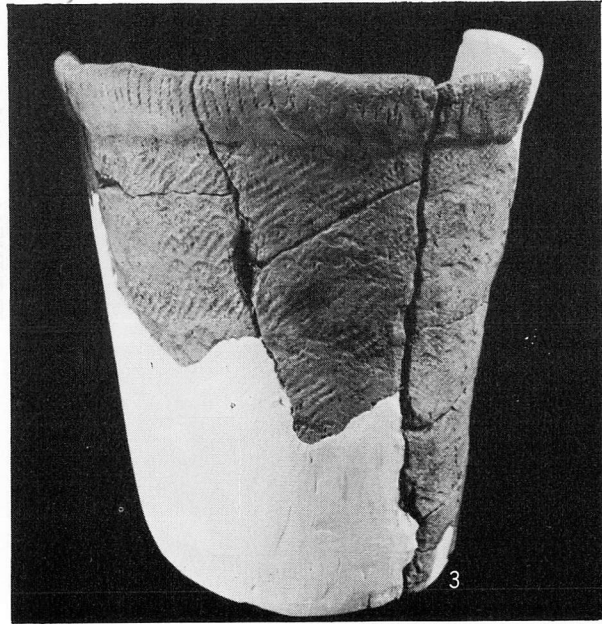
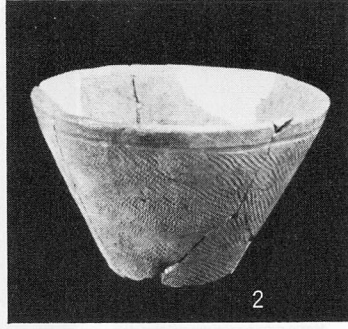
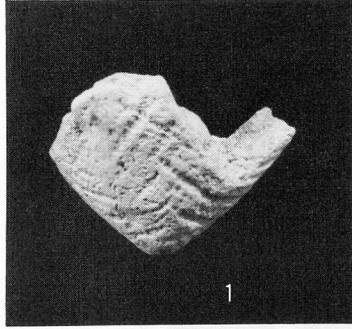
D III-52ピット (31~33)



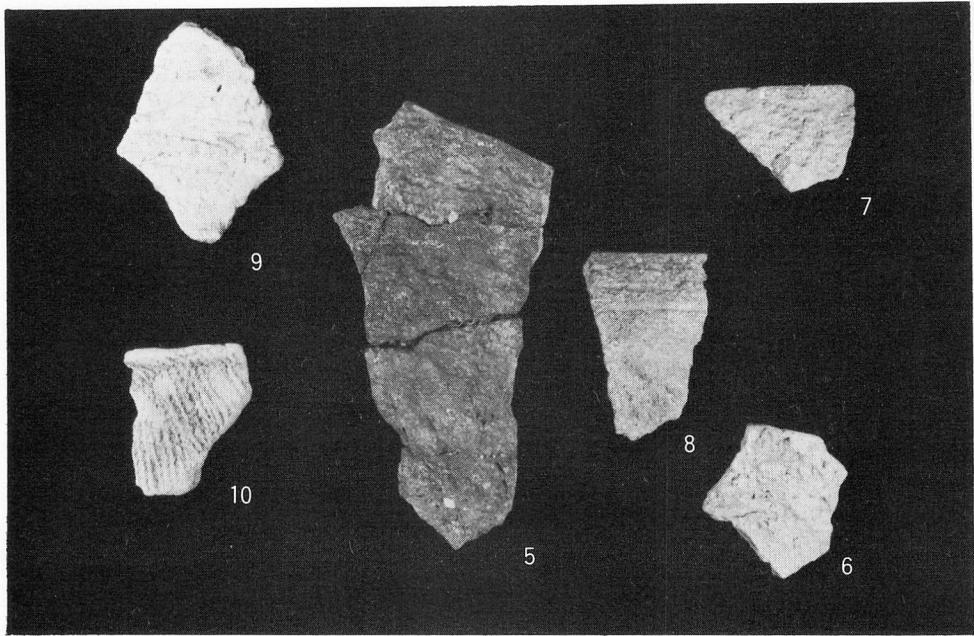
D III-53ピット (34~39)



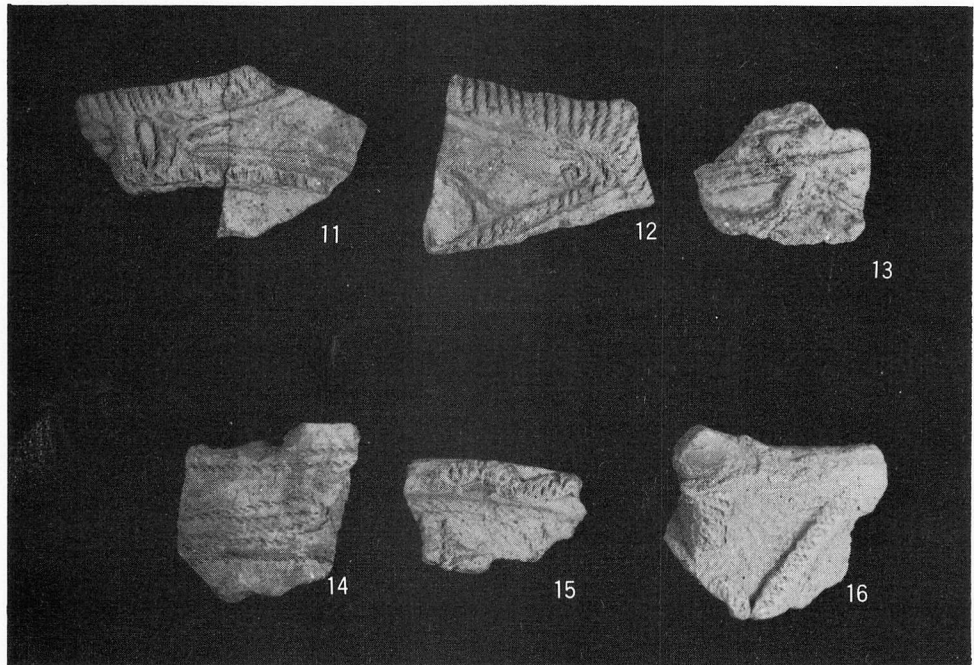
写真図版11 遺構内の出土遺物 (3)



写真図版12 遺構外の出土遺物 (1)

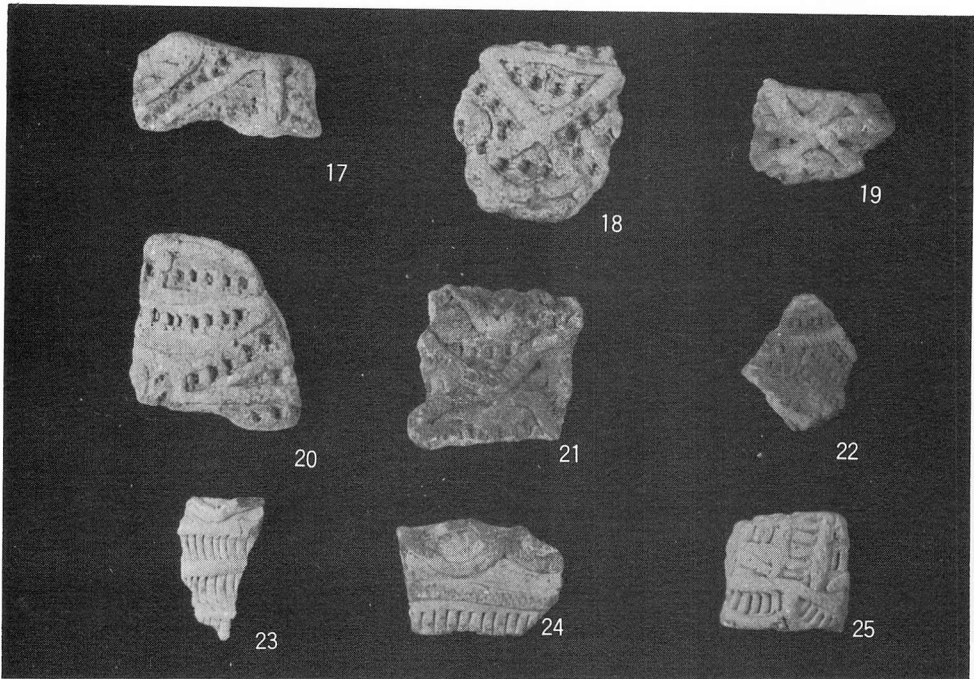


a. 第Ⅱ群土器

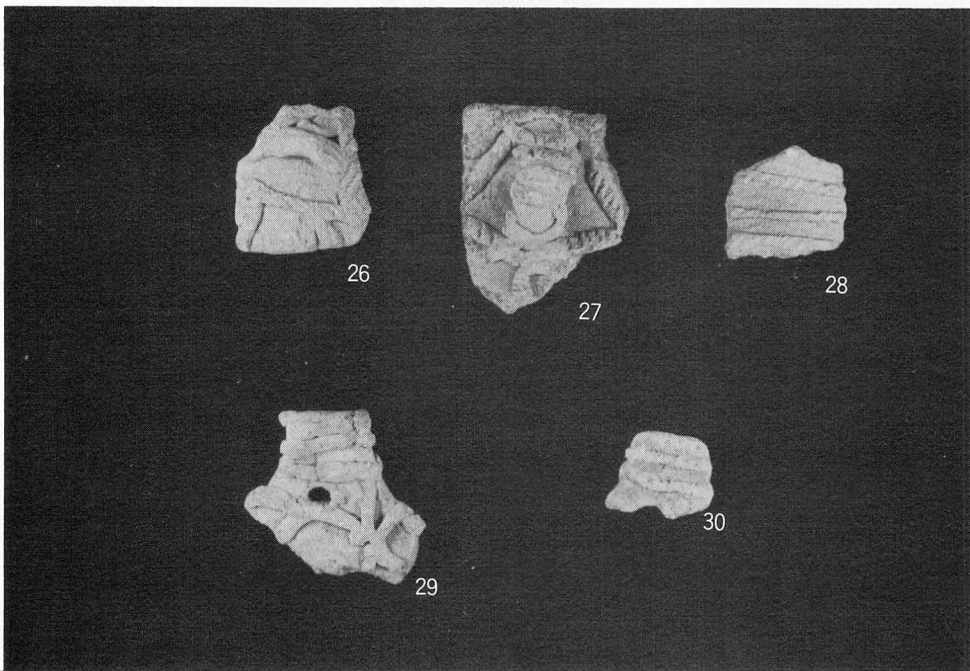


b. 第Ⅲ群土器

写真図版 13 遺構外の出土遺物 (2)

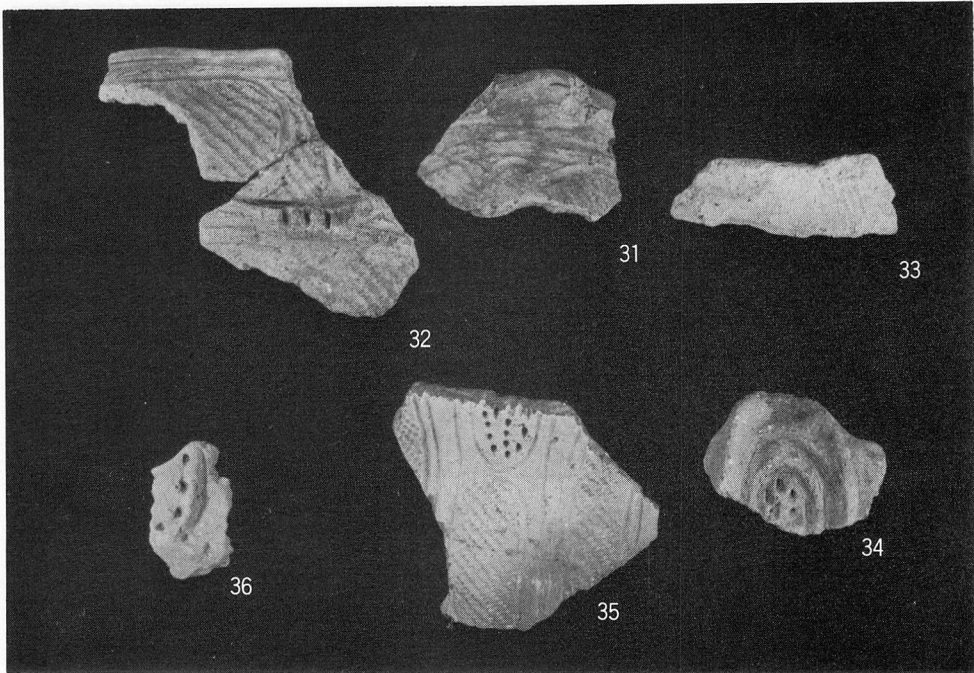


a. 第Ⅲ群土器

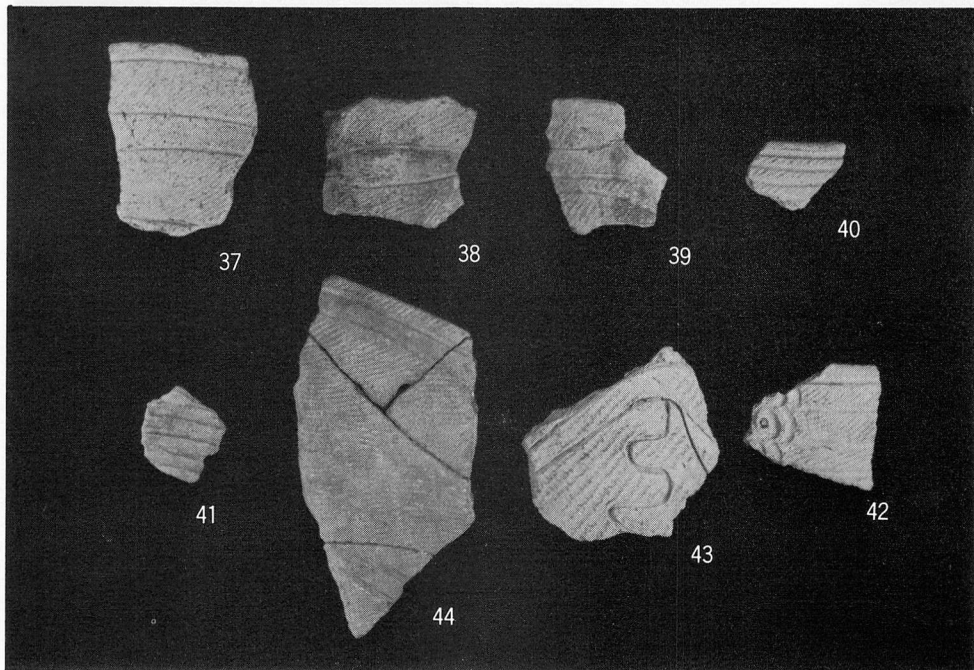


b. 第Ⅲ群土器

写真図版 14 遺構外の出土遺物 (3)

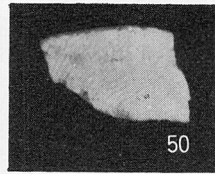
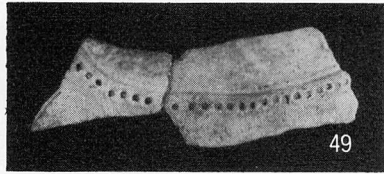
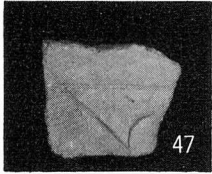
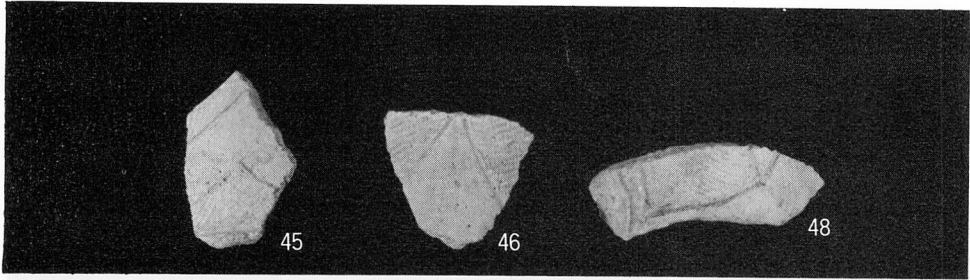


a. 第Ⅲ群土器

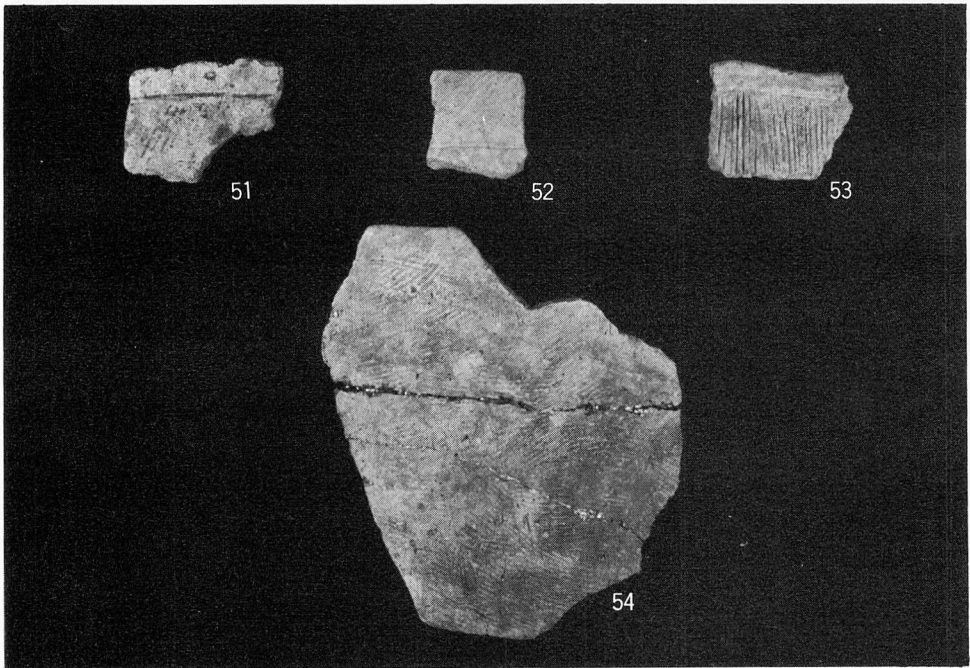


b. 第Ⅳ群土器

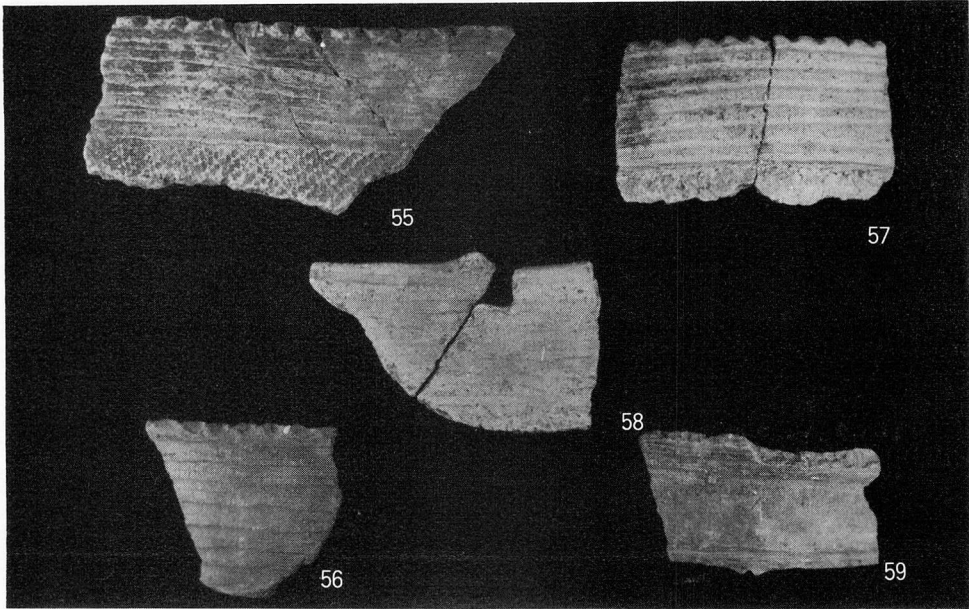
写真図版 15 遺構外の出土遺物 (4)



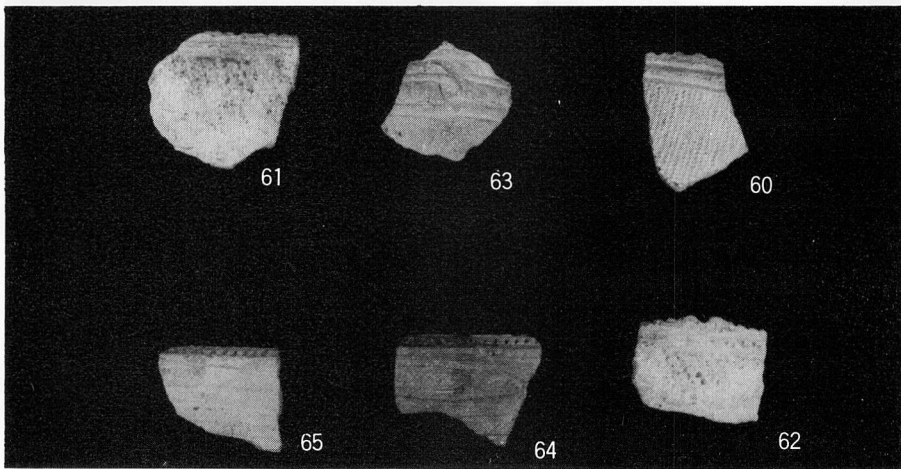
a. 第Ⅳ群土器



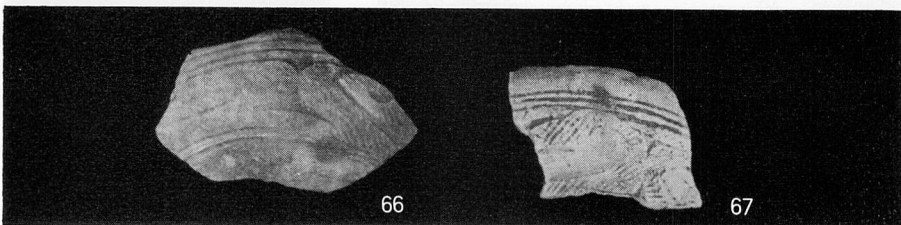
b. 第Ⅳ群土器



a. 第V群土器

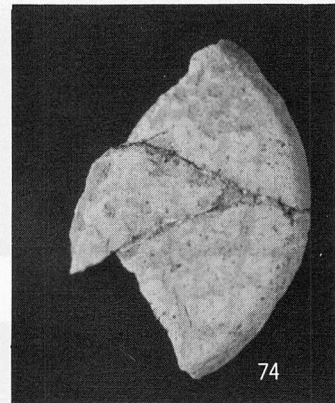
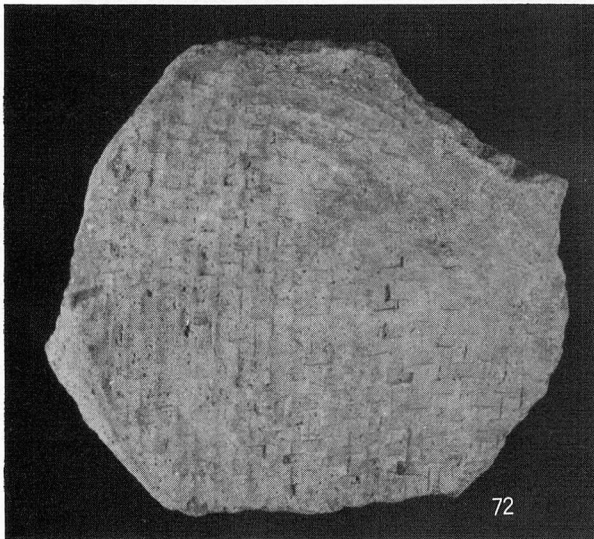
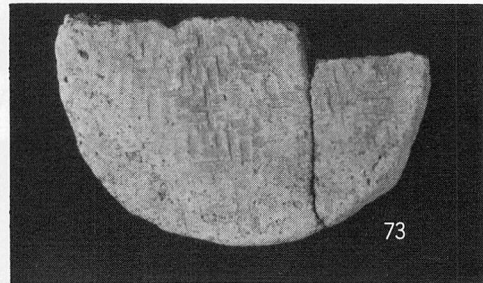
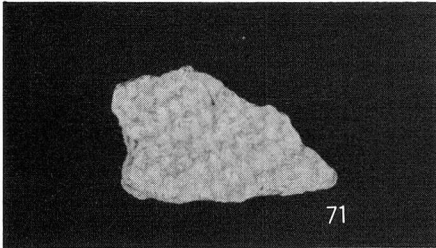
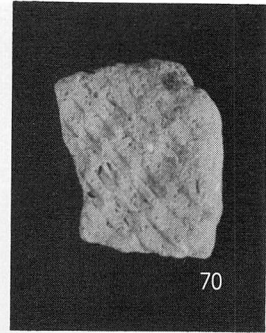
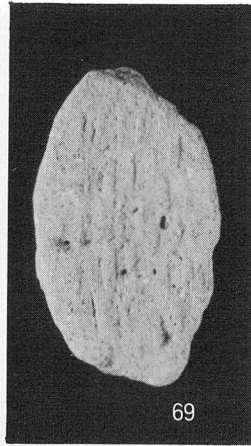
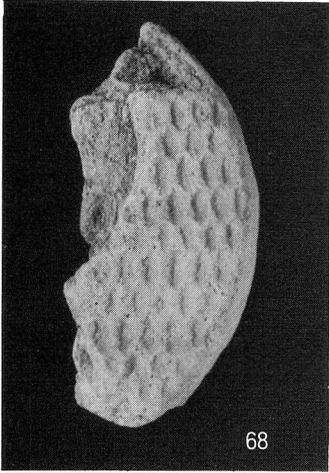


b. 第V群土器



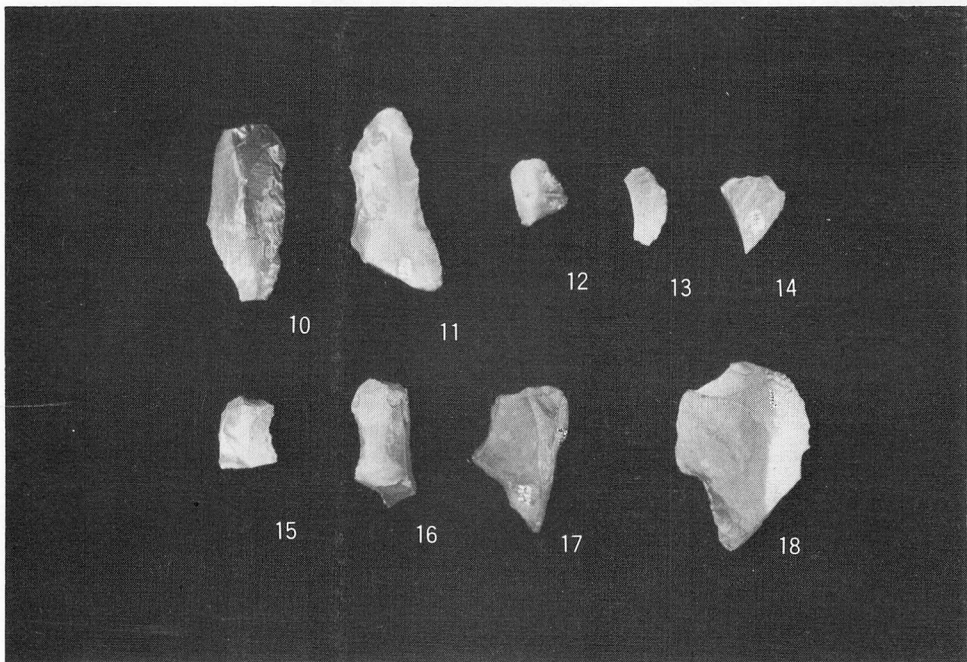
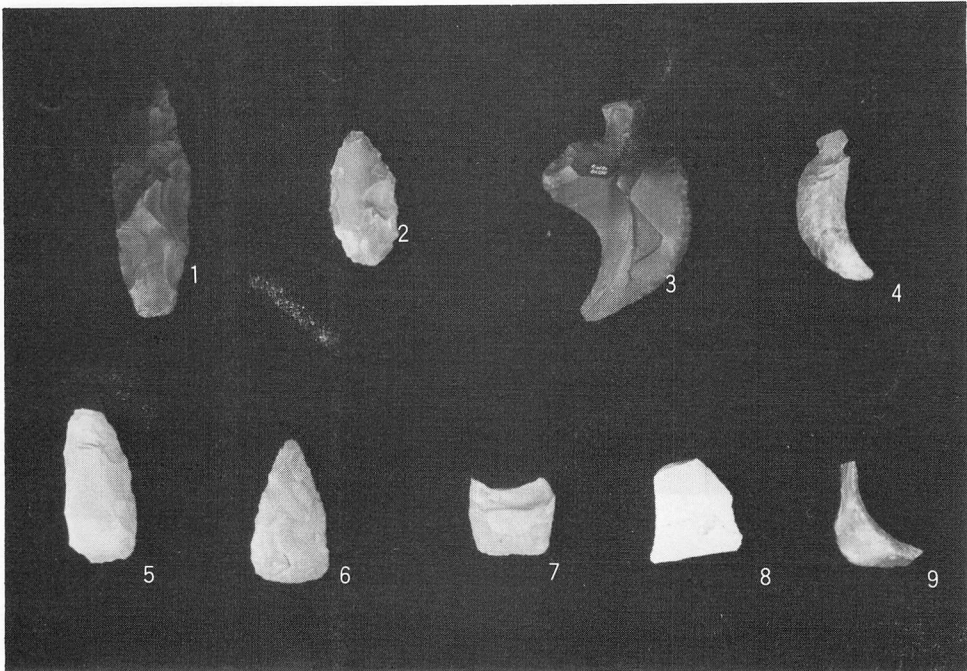
c. 第V群土器

写真図版17 遺構外の出土遺物 (6)



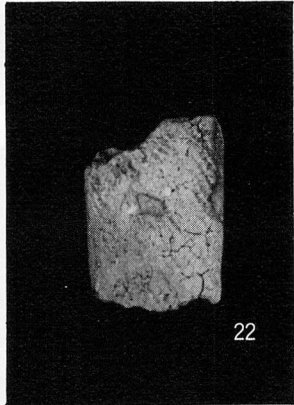
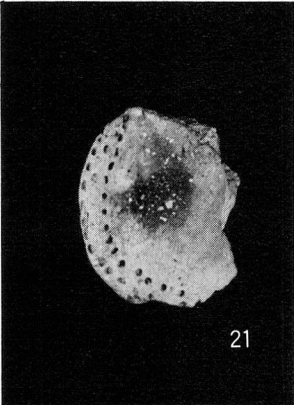
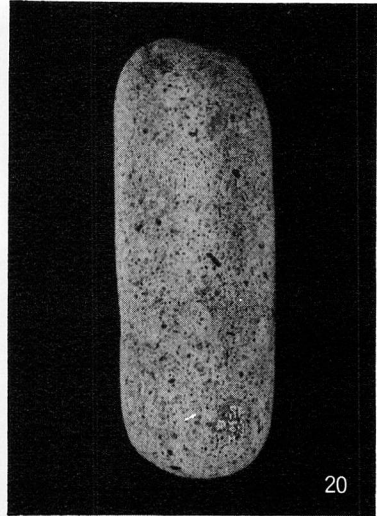
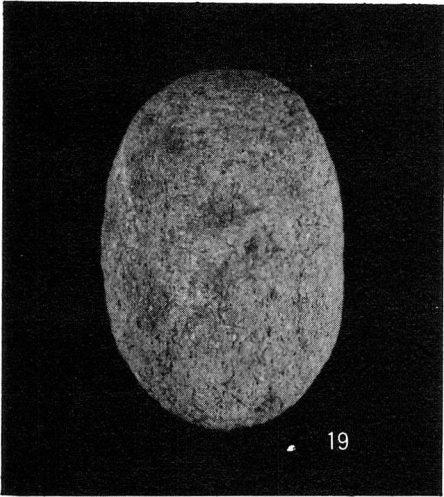
土器底部

写真図版 18 遺構外の出土遺物 (7)

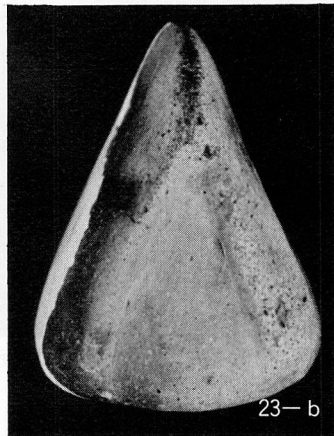
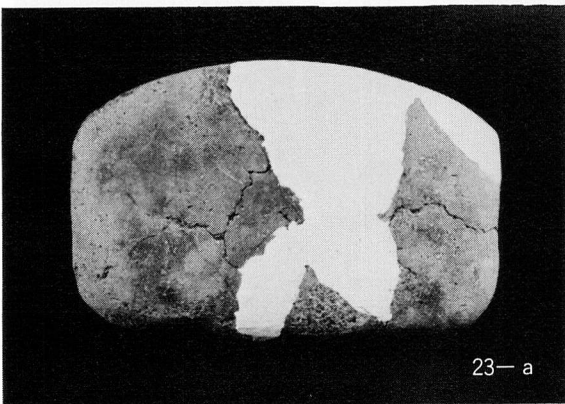


1・2 (石槍) 3・4 (石匙) 5・6 (筥状石器) 7～11(スクレイパー)
12～18(不定形石器)

写真図版19 遺構外の出土遺物 (8)



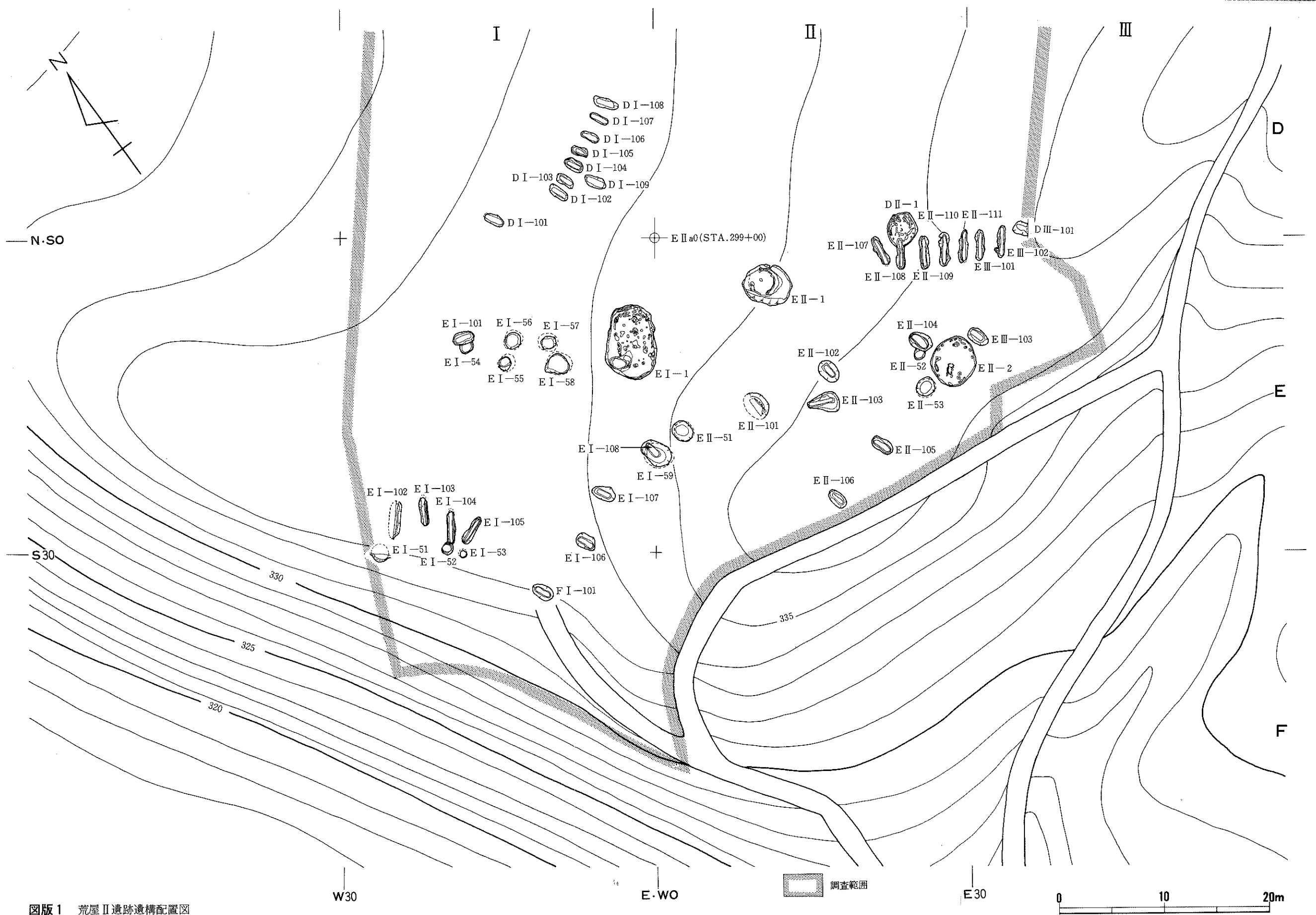
- 19 (凹石)
- 20 (磨石)
- 21 (滑車形耳飾り)
- 22 (剣状土製品)
- 23 (石冠状土製品)



写真図版20 遺構外の出土遺物 (9)

III. ^あら^や 荒屋 II 遺跡

1. 遺跡所在地 二戸郡安代町字高畑
2. 調査期間 昭和53年9月25日～11月4日 (第1次)
昭和54年4月9日～5月31日 (第2次)
3. 調査対象面積 6,800㎡
4. 発掘面積 2,800㎡ (第1次)、4,420㎡ (第2次)
5. 遺跡記号 AY-II78・79



図版1 荒屋Ⅱ遺跡遺構配置図

1. 検出遺構

(1) 竪穴住居址

D II 区

D II - 1 住居址

遺構 (図版 2・写真図版 2-b、3-a~c)

この住居址の内部にみられる小ピット群の配置や相互関係を検討した結果、床面・壁・炉を何らかの形で共有して異なる柱穴配置を示す 2 棟の住居址が存在していることが判明した。これらの住居址をここで、D II - 1 a 住居址・D II - 1 b 住居址と呼称する。この両住居址の新旧関係は不明である。両住居址について述べる前に、まず D II - 1 住居址全体について記載する。

規模は径 3.1 m 土 × 2.7 m を計り、形状は楕円形を呈する。

埋土は炭化物を少量含む暗褐色土層によって構成されている。単層であるためその性状を Field Card に記載しただけで土層断面図は作成しなかった。

床面はほぼ平坦で堅くしまっている。床面上に不整な溝が 6 本みられるが、いずれも木根による攪乱である。

壁高は、北壁 24cm 土・東壁 23cm 土・南壁 19cm 土・西壁 10cm 土を計る。

炉は住居址の中央部に位置する土器埋設炉である。炉の周囲は皿状に凹んでいる。この凹みは径 50cm 土の不整な円形を呈し、床面からの深さは 10cm 土を計る。炉の掘り方部分は黒褐色土によって充填されている。炉はよく焼成を受けている。

この住居址は、E II - 108 陥し穴状遺構に切られている。

D II - 1 a 住居址

この住居址は、D II - 1 住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。P₂ (径 10cm 土・深さ 12cm 土)・P₃ (径 12cm 土・深さ 27cm 土)・P₆ (径 12cm 土・深さ 24cm 土)・P₉ (径 15cm 土・深さ 45cm 土)・P₁₃ (径 14cm 土・深さ 10cm 土) の 5 個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P₃-P₁₃・P₆-P₉ がそれぞれ対をなしている。

D II - 1 b 住居址

この住居址は、D II - 1 住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。P₁ (径 10cm 土・深さ 15cm 土)・P₄ (径 12cm 土・深さ 31cm 土)・P₈ (径 14cm 土・深さ 38cm 土)・P₁₂ (径 16cm 土・深さ 60cm 土) の 4 個で構成され、菱形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P₁-P₈・P₄-P₁₂ をそれぞれ結ぶ線が直交する。

以上の柱穴のほかには床面には、P₆（径14cm±・深さ40cm±）・P₇（径10cm±・深さ20cm±）・P₁₀（径14cm±・深さ67cm±）・P₁₁（径16cm±・深さ66cm±）の柱穴状のピット群が検出されているが、その配置状況からみてこれらの性格は不明である。

出土遺物（図版25-1～4・写真図版29-1～3）

出土遺物は、炉に使用された埋設土器（1・4）と床面上や床面直上から得られた土器片（2・3）である。

埋設土器は、口縁部～体部上半部の部分が欠損している深鉢である。火熱を受けて土器全体が非常に脆くなっていたために、接合・復元できなかった。1はこの土器の底部であり、外面に入念ミガキ調整が施されている。また4は体部下半部の破片であり、地文として単節の斜縄文が施文されている。2は南壁寄りの床面上から出土した平縁口縁の深鉢の破片であり、口縁部が内弯気味に立ちあがっている。口縁部文様帯は、縦位の隆帯と半截竹管状工具によって施文された小波状沈線とで構成されている。地文は単節の斜縄文である。3は床面直上から出土した深鉢の破片である。口縁の形態は不明である。口縁部文様帯は刻目を伴う縦位・横位の隆帯によって区画されている。区画された中には平行沈線状に横位の縄圧痕が施されている。体部が地文は羽状縄文である。これらの土器のうち、2・3は縄文時代中期前葉に属するものである。1・4の埋設土器についてはその所属時期を断定し得ないが、地文の原体や器面調整の状況などから推測して前述の土器と同じ時期のものと思われる。

この住居址は、以上の出土遺物や遺構の形態からみて、縄文時代中期前葉に位置づけられるものと考えられる。

E I 区

E I-1 住居址

遺 構（図版3、4・写真図版3-d・e、4、5-a～d）

この住居址の内部にみられる小ピット群の配置や相互関係を検討した結果、床面・柱穴・周溝・壁・炉を何らかの形で共有して異なる柱穴配置を示す5棟の住居址が存在していることが判明した。これらの住居址をここで、E I-1 a住居址・E I-1 b住居址・E I-1 c住居址・E I-1 d住居址・E I-1 e住居址と呼称する。これらの住居址の新旧関係は不明である。個々の住居址について述べる前に、まずE I-1 住居址全体について記載する。

西壁の半分以上が掘りすぎや風倒木痕によって破壊されているため、この住居址の正確な規模・形状を把握することはできないが、残存部から推定すると、径6.9m±×4.0m±の規模を計り、北東一南西方向に長軸をもつ楕円形の形状を示すものと考えられる。

埋土は大別して、炭化物を少量含む黒褐色土層・褐色土層・暗褐色土層で構成されている。

床面はほぼ平坦で堅くしまっている。周溝は、幅6cm±～18cm±・深さ3cm±～20cm±の規模をもち、不連続ながらもほぼ一周する形で設けられている。この周溝は北東壁側では3条となっているが、そのほかの部分は1条である。以上のような周溝の状況から判断すると、この住居址の北東部分が拡張または縮小されたものと考えられるが、得られた情報の範囲内では前者・後者のいずれとも断定できない。

壁高は、北東壁20cm±・南東壁25cm±・南西壁28cm±・北西壁12cm±を計る。

炉は住居址の中軸線上に2基（1号炉・2号炉）設けられている。1号炉は北東側に位置する土器埋設炉である。土器は、体部下半部～底部が欠損している深鉢で、床面から14cm±の深さに直立に埋設されている。土器内は炭化物を少量含む暗褐色土で充填されており、この下底部には粒径10cm±の安山岩類亜角礫が2個埋置されていた。1号炉の西側の床面上に径50cm±の範囲にわたって現地性の焼土が形成されている。この焼土は、1号炉の埋設土器から連続する在り方を示していることから、この炉と一連のものとみられる。2号炉は、1号炉より170cm±南西に位置し、土器埋設石囲炉の形態を示すものである。石囲部は東側炉縁の構成礫を欠き半円状の平面形を呈する。なお構成礫を欠く部分には礫の抜取り痕は認められなかった。構成礫は、粒径10cm±の安山岩類亜角礫であり、床面から5cm±の深さに埋置されている。石囲部内の土器は体部下半部～底部が欠損している深鉢で、床面下20cm±の深さに直立状態で埋設されている。この埋設土器内は炭化物や異地性の焼土をやや多く含む暗褐色土で充填されている。2号炉の東側の床面上には径70cm±×40cm±の範囲にわたって現地性の焼土が形成されている。この焼土は炉内の埋設土器から連続する在り方からみて、2号炉と一連のものと考えられる。

1号炉と一連のものと思われる現地性焼土の南側に埋設土器が検出された。土器は体部上半部以上が欠損している深鉢で、床面下15cm±の深さに直立状態で埋設されている。

E I - 1 a住居址

この住居址は、E I - 1住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。 P_1 （径25cm±・深さ71cm±）・ P_3 （径20cm±・深さ77cm±）・ P_8 （径25cm±・深さ25cm±）・風倒木痕によって破壊されたと考えられる仮想柱穴 P_x ・ P_{14} （径25cm±・深さ68cm±）・ P_{17} （径25cm±・深さ29cm±）の6個で構成され、六角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、 $P_1 - P_3$ ・ $P_8 - P_{17}$ ・ $P_{14} - P_x$ がそれぞれ対をなしている。

E I - 1 b住居址

この住居址は、E I - 1住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。 P_1 （径25cm±・深さ71cm±）・ P_3 （径20cm±・深さ77cm±）・ P_8 （径25cm±・深さ25cm±）・ P_{11} （径30cm±・深さ51cm±）・ P_{13} （径30cm±・深さ46cm±）・ P_{16} （径20cm±・深さ59cm±）・ P_{17} （径25cm±・

深さ29cm±)の7個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、 P_1-P_3 ・ P_8-P_7 ・ $P_{11}-P_{15}$ がそれぞれ対をなしている。

E I - 1 c 住居址

この住居址は、E I - 1 住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。 P_1 (径25cm±・深さ71cm±)・ P_3 (径20cm±・深さ77cm±)・ P_6 (径15cm±・深さ64cm±)・ P_{11} (径30cm±・深さ51cm±)・ P_{13} (径30cm±・深さ46cm±)・ P_{14} (径25cm±・深さ68cm±)・ P_{15} (径20cm±・深さ59cm±)・ P_{18} (径18cm±・深さ28cm±)の8個で構成され、長方形の配置を示す。これらの柱穴の中で、 P_1-P_3 ・ P_6-P_{18} ・ $P_{11}-P_{15}$ ・ $P_{13}-P_{14}$ がそれぞれ対をなしている。

E I - 1 d 住居址

この住居址は、E I - 1 住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。 P_1 (径25cm±・深さ71cm±)・ P_3 (径20cm±・深さ77cm±)・ P_6 (径15cm±・深さ64cm±)・ P_{11} (径30cm±・深さ51cm±)・ P_{13} (径30cm±・深さ46cm±)・ P_{15} (径20cm±・深さ59cm±)・ P_{18} (径18cm±・深さ28cm±)の7個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、 P_1-P_3 ・ P_6-P_{18} ・ $P_{11}-P_{15}$ がそれぞれ対をなしている。

E I - 1 e 住居址

この住居址は、E I - 1 住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。 P_2 (径20cm±・深さ36cm±)・ P_8 (径25cm±・深さ25cm±)・ P_{11} (径30cm±・深さ51cm±)・ P_{13} (径30cm±・深さ46cm±)・ P_{15} (径20cm±・深さ59cm±)・ P_{17} (径25cm±・深さ29cm±)の6個で構成され、菱形の配置を示す。これらの柱穴の中で、 P_2-P_{13} ・ P_8-P_{17} ・ $P_{11}-P_{15}$ がそれぞれ対をなしている。

以上の柱穴のほかに床面には、 P_4 (径20cm±・深さ52cm±)・ P_6 (径20cm±・深さ37cm±)・ P_7 (径20cm±・深さ13cm±)・ P_9 (径20cm±・深さ79cm±)・ P_{10} (径20cm±・深さ60cm±)・ P_{12} (径22cm±・深さ58cm±)・ P_{16} (径25cm±・深さ59cm±)・ P_{19} (径25cm±・深さ40cm±)・ P_{20} (径20cm±・深さ50cm±)・ P_{21} (径23cm±・深さ30cm±)・ P_{22} (径15cm±・深さ53cm±)の柱穴状のピット群が検出されているが、その配置状況からみてこれらの性格は不明である。

出土遺物 (図版26-5~17、27-18~23・写真図版29-4~7、30-8~16、31-17~22)

出土遺物としては、炉の土器や埋設土器のほかに、床面直上および埋土下位から得られた土器・石器がある。

炉に使用された土器は2点(5・6)である。5は2号炉の石囲の中央部に埋設されていた土器で、波状口縁の深鉢である。この土器は口縁部が外反し、体部の中央部にややふくらみをもつものである。口縁部文様帯は横位・斜位の燃糸文によって構成されている。粘土紐の貼付によって肥厚している口唇部にも燃糸文の圧痕が刻目状に施されている。体部の地文は単

節の斜縄文であり、この上には縦位の綾絡文が2条ずつ施文されている。体部下半部の内外面に多くのススが付着している。6は1号炉に使用された土器で、平縁口縁の深鉢である。この土器は口縁部が外反気味に立ちあがり、体部上半部にふくらみをもつものである。口縁部～体部には地文として単節の斜縄文が施されている。外面の体部に多量のススが付着している。また内面の体部上半部には黒斑が帯状に形成されている。口縁部の内面には入念なミガキ調整が施されている。

埋設土器(7)は、口縁部～体部上半部の部位が欠損している深鉢である。体部の地文は単節の斜縄文であり、この上には5と同じように縦位の綾絡文が2条ずつ施文されている。胎土に砂がやや多く含まれているため、内外面ともザラザラした感じの器面となっている。器表面の磨滅によってところどころの地文が消えている。

床面直上から出土した遺物としては、8の土器がある。平縁口縁の深鉢の破片であり、口縁部が外反しながら立ちあがるものである。体部上半部にふくらみをもつ。地文は単節の斜縄文であるが、口縁部と体部とでは地文の方向が異なる。口唇部の施文にも同じ原体を使用している。内面には入念なナデ調整が施されている。

埋土下位から出土した遺物は、土器片(9～17)と石器(18～23)である。土器片はいずれも深鉢の破片であり、次のようなものが出土している。9は波状口縁を呈するもので、縦位・横位・斜位に施文された撚糸文によって口縁部文様帯が構成されている。口唇部上面には節が非常に細かい縄文圧痕が施されている。体部の地文は羽状縄文である。10～12は撚糸文が横位に施文されているものである。12の口唇部上面には9と同じような原体の圧痕がみられる。13は波状口縁を呈するもので、口縁部に沿って2条の縄文圧痕が施されている。この口縁部には外面から穿たれた補修孔がみられる。14は地文が羽状縄文のものである。15は波状口縁を呈し、口縁部に綾絡文が施文されている。地文は無節の斜縄文である。16は山形の突起部をもつ波状口縁のものである。この突起部の内面には粘土紐が指輪形に貼り付けられている。地文は単節の斜縄文である。17は粘土紐が地文の上に「S」字状に貼り付けられているものである。地文は単節の斜縄文である。石器としては、石槍(18)・石鏃(19)・石匙(20)・スクレイパー(21)・不定形石器(22・23)が出土している。石槍の剝離調整は全体に粗いが、尖頭部分には細かい調整が施されている。石鏃は基部が凸状を呈するものである。石匙は石器の長軸方向に対して右側につまみ部が形成されているものである。このつまみ部の上端には打面が残されている。スクレイパーの刃部は石器の長軸と平行する縁辺に形成されている。この石器の頭部には折断面がみられる。不定形石器は2点ともその縁辺の一部に平坦な刃部加工がなされているものである。

以上の出土遺物の中で、土器はいずれも縄文時代中期前葉に属するものである。

この住居址は、上述の出土遺物や遺構の形態からみて、縄文時代中期前葉に位置づけられるものと考えられる。

E II 区

E II - 1 住居址状遺構

遺 構 (図版 5・写真図版 5-e、6-a)

この遺構を検出の段階では住居址として登録したが、精査の結果炉が確認されなかったため、住居址状遺構として分類した。但しこの遺構の記述にあたっては、「住居址」の項に含めて行なうこととした。

この住居址状遺構は、位置的に D II - 1 住居址と E I - 1 住居址のほぼ中間に存在する。この遺構の主体部の外縁部を囲むような形で、いわゆる「ベッド」状施設がみられる。「ベッド」状施設は径 4.4 m 土×3.7 m 土の規模をもち、北西-南東方向に長い不整な楕円形の形状を示すものである。当遺構の主体部は、径 2.8 m 土の規模を計り、円形の形状を呈する。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などによって構成されている。

床面は平坦でかたくしまっている。主体部の壁は北壁～西壁にかけての範囲が消滅しており、この部分では主体部と「ベッド」状施設間の床面は連続したものとなっている。

柱穴は、P₁ (径 35cm 土・深さ 20cm 土)・P₂ (径 37cm 土・深さ 68cm 土)・P₃ (径 25cm 土・深さ 20cm 土)・P₄ (径 25cm 土・深さ 22cm 土) の 4 個で構成されている。これらの柱穴の中で、P₁・P₂・P₃ は三角形になる形に配置されている。

周溝は、不連続の部分もあるが P₁-P₃-P₂ を結ぶような状態で設けられている。規模は幅 5 cm 土～10 cm 土・深さ 5 cm 土～12 cm 土を計る。P₁-P₃ 間の周溝は主体部の壁より 8 cm 土～38 cm 土内側の位置にある。このことから、主体部の東壁～南壁の部分が拡張あるいは縮小されたのではないかと考えられるが、収集された情報の範囲内ではいずれとも断定し得ない。

「ベッド」状施設の壁高は、北壁 19cm 土・東壁 16cm 土・南壁 21cm 土・西壁 26cm 土を計る。「ベッド」状施設の床面はやや凹凸をもちやわらかい。この床面と主体部の床面の高低差は、東側 20cm 土・南側 32cm 土・西側 27cm 土を計る。なお、これらの床面上には炉や焼土の痕跡は確認されなかった。

出土遺物 (図版 27-24~30・写真図版 31-23~27)

出土遺物は、埋土下位から得られた土器片 (24~29) や石器 (30) である。

土器片はいずれも深鉢の破片である。24 は波状口縁を呈し、口縁部が外反して立ちあがるものである。口縁部文様帯は斜位の撚糸文と横位の綾絡文によって構成されている。体部の地文

は単節の斜縄文である。内面には入念なミガキ調整が施されている。25は平縁口縁を呈する。口縁部文様帯は、横位・斜位の撚糸文と横位の綾絡文によって構成されている。26は波状口縁を呈し、口縁部文様帯にボタン状の貼付が施されているものである。27には横位の綾絡文が数条施文されている。地文は単節の斜縄文である。28は横位の撚糸文と綾絡文が施文されている口縁部の破片である。29は地文の単節斜縄文の上に横位の綾絡文が1条ずつ施文されている体部片である。これらの土器片は、24～26の文様からみて縄文時代中期前葉に属するものと考えられる。

出土した石器は、半円状扁平打製石器1点(30)だけである。この石器の周縁には、敲打痕とともに研磨痕がみられる。

この住居址状遺構は、以上の出土遺物や遺構の形態、さらにD II-1住居址・E II-1住居址との位置関係などから判断して、縄文時代中期前葉に位置づけられるものと考えられる。

E II-2住居址

遺 構 (図版6・写真図版6-b、7-a~e)

この住居址は、調査区域南東の段丘崖寄りに検出されたものである。住居址内部にみられる小ピット群の配置や相互関係を検討した結果、床面・柱穴・壁・炉を何らかの形で共有して異なる柱穴配置を示す2棟の住居址が存在していることが判明した。これらの住居址をここで、E II-2a住居址・E II-2b住居址と呼称する。この両住居址の新旧関係は不明である。両住居址について述べる前に、まずE II-2住居址全体について記載する。

規模は径4.7m±×4.1m±を計り、形状は楕円形を呈する。

埋土は炭化物を少量含む暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

床面はほぼ平坦で堅くしまっている。炉の周辺は特に堅くしまっている。

壁高は、北壁10cm±・東壁18cm±・南壁10cm±・西壁10cm±を計る。

炉は、南西壁寄りに位置する複式炉である。この複式炉は、第1石囲部・第2石囲部・前庭部の3つの部位から構成されているもので、全長130cm±を計る。第1石囲部は、粒径15cm±～30cm±の安山岩類亜角礫を使用して長方形に構築されており、その外縁の規模は55cm±×40cm±を計る。第1石囲部の使用面は床面より2cm±低いレベルにある。この使用面下には火熱により層厚2cm±の現地性の焼土が形成されている。第2石囲部は、粒径10cm±～30cm±の安山岩類亜角礫を使用して長方形に構築されており、その外縁の規模は70cm±×60cm±を計る。この部位の構成礫のうち北東側のものは第1石囲部と共有関係にあり、また北西側のものは二重になっている。第2石囲部の使用面は、第1石囲部のそれより14cm±低いレベルにある。この使用面下には火熱により層厚3cm±の現地性の焼土が形成されている。前庭部は、径60cm±

×25cm±・床面からの深さ10cm±の規模をもつ隅丸長方形のピットである。この前庭部には2個の対峙する構成礫がみられる。これらの礫は、粒径30cm±の安山岩類亜角礫であり、床面から12cm±の深さに埋置されている。底面は平坦で非常に堅くしまっている。前庭部内には火熱を受けた痕跡はみられない。

E II-2a住居址

この住居址は、E II-2住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。P₁（径22cm±・深さ20cm±）・P₄（径30cm±・深さ22cm±）・P₆（径30cm±・深さ19cm±）の3個で構成され、三角形の配置を示す。

E II-2b住居址

この住居址は、E II-2住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。P₂（径35cm±・深さ19cm±）・P₄（径30cm±・深さ22cm±）・P₆（径28cm±・深さ19cm±）の3個で構成され、三角形の配置を示す。

以上の柱穴のほかに床面には、柱穴状のピットP₃（径25cm±・深さ49cm±）が検出されているが、このピットの性格は不明である。さらにまた径30cm±×10cm±・深さ5cm±～10cm±を計り長楕円形を呈するピットが壁に沿って周溝状に巡っているが、このピット群の性格についても不明である。

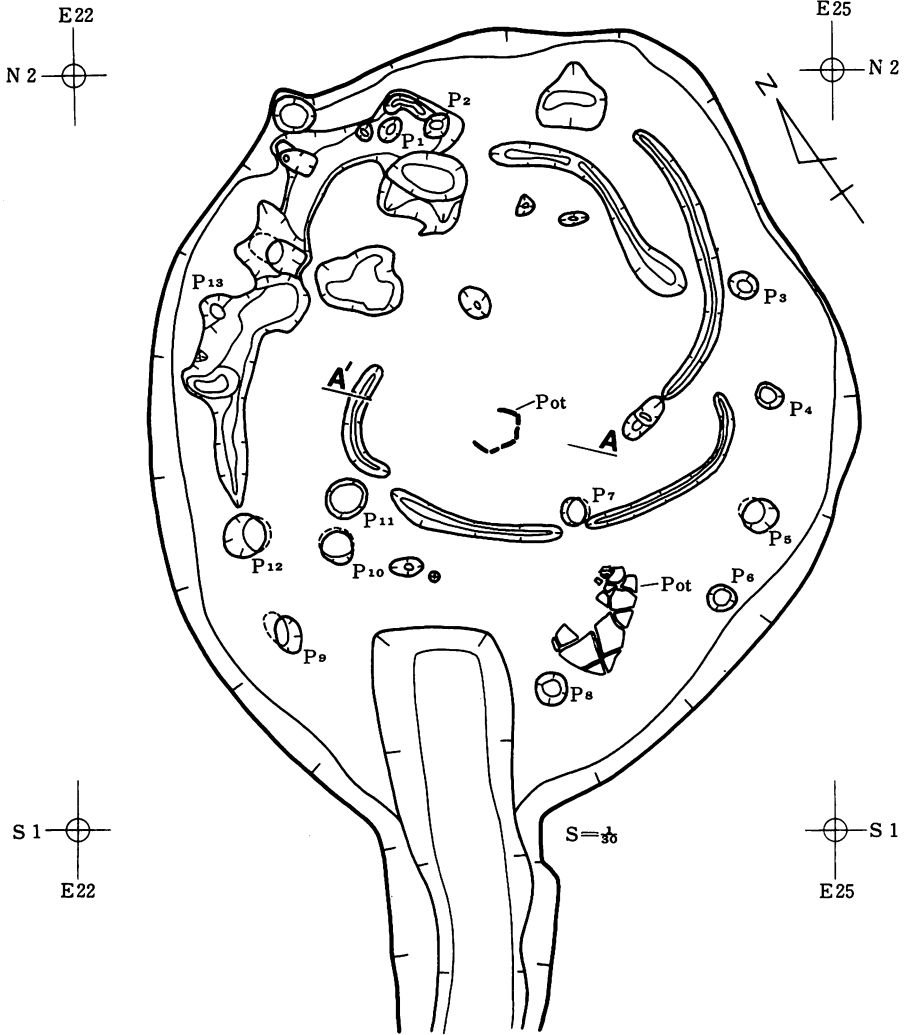
出土遺物（図版28-31～35・写真図版32-28～32）

出土遺物は、床面直上から得られた土器（31）や土器片（32～35）である。

31は平縁口縁の大型深鉢であり、口径27.0cm・底径11.4cm・器高51.7cmを計る。この深鉢の体部中央部～口縁部は直線的な立ちあがりを示す。地文として単節の斜縄文が施されているが、口唇部の部分は横ナデ調整の際に磨消されて無文となっている。網代痕が施された底部にもナデ調整が加えられているため、網代痕の大半が消失している。外面の口縁部～体部のところどころにススの付着がみられる。土器片はいずれも縄文区画文が施文されている深鉢の破片である。32は直線的な沈線によって区画されている口縁部片である。33～35は曲線的な沈線によって区画されている体部片である。これらの土器は、32などの文様からみて縄文時代中期末葉に属するものと思われる。

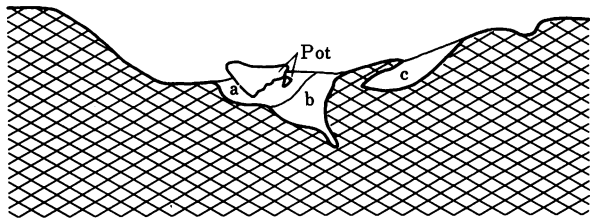
この住居址は、以上の出土遺物や遺構の形態から判断して、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

D II-1 住居址



A — L=335.40m

A'

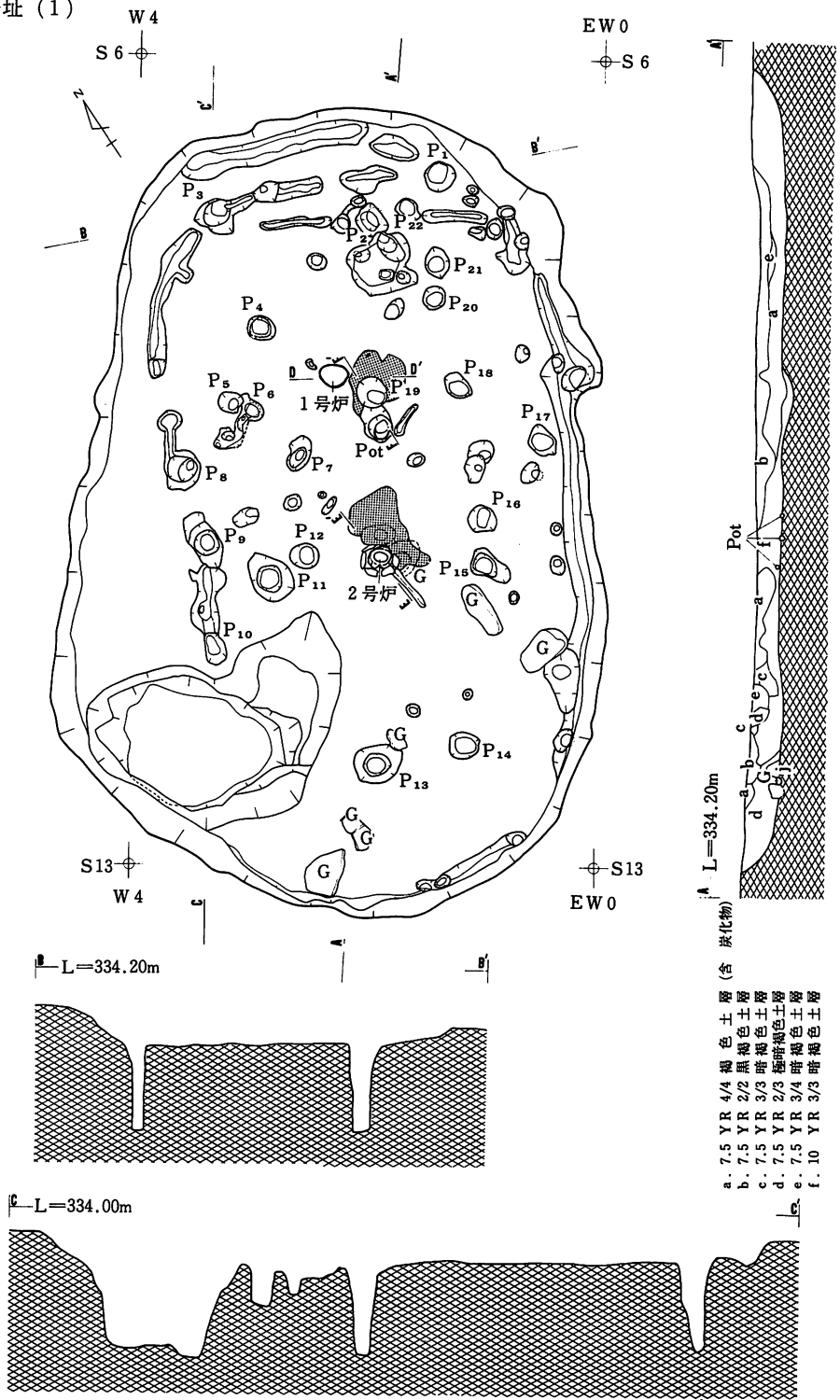


- a. 10 YR 2/3 黑褐色土层
- b. 10 YR 4/6 褐色土层
- c. 10 YR 4/6 褐色土层

S=10

图版 2

E I-1 住居址 (1)



L=334.20m

L=334.20m

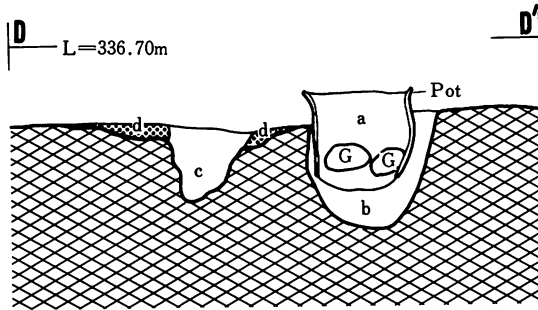
L=334.00m

- a. 7.5 YR 4/4 褐色土層 (含炭化物)
- b. 7.5 YR 2/2 黑褐色土層
- c. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層
- d. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層
- e. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層
- f. 10 YR 3/3 暗褐色土層

图版 3

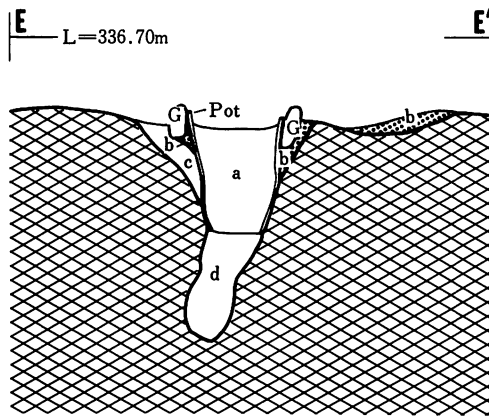
S=

E I-1 住居址 (2)



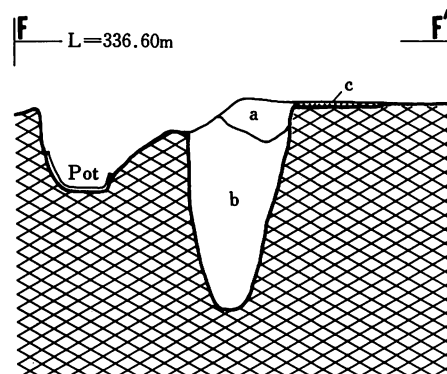
1号炉

- a. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層 (含 炭化物、焼土)
- b. 2.5 YR 5/4 に近い赤褐色土層 (焼土)
- c. 7.5 YR 4/4 褐色土層 (含 焼土)
- d. 7.5 YR 4/6 褐色土層 (含 炭化物)
- e. 2.5 YR 4/8 赤褐色土層 (含 焼土)



2号炉

- a. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層 (含 炭化物)
- b. 7.5 YR 5/8 明褐色土層
- c. 7.5 YR 3/2 黒褐色土層 (含 炭化物、焼土)
- d. 2.5 YR 4/8 赤褐色土層 (焼土)

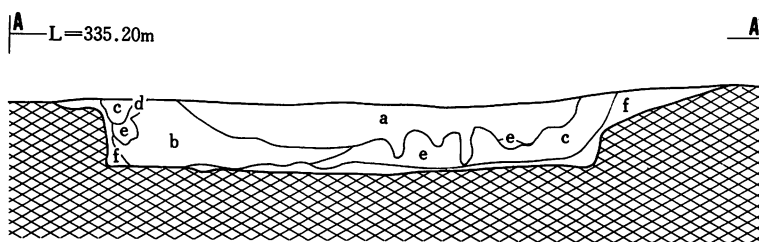
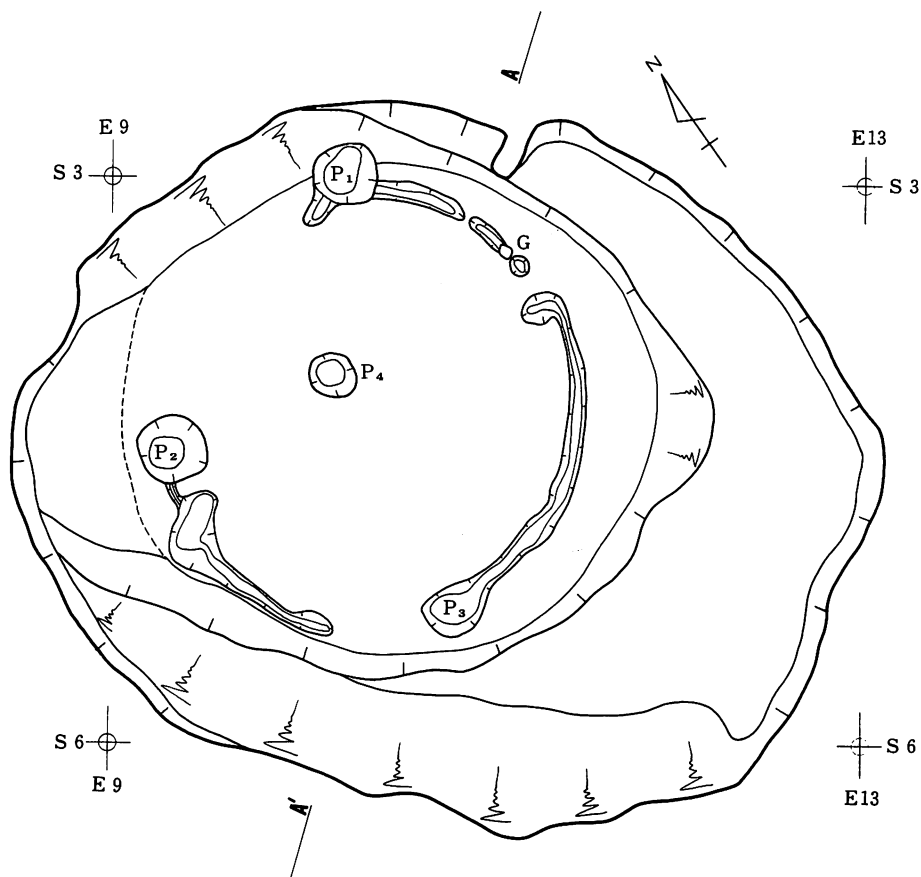


埋設土器

- a. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層 (含 炭化物)
- b. 7.5 YR 4/6 褐色土層 (含 炭化物)
- c. 2.5 YR 4/8 赤褐色土層 (焼土)

S=土

E II-1 住居址状遺構

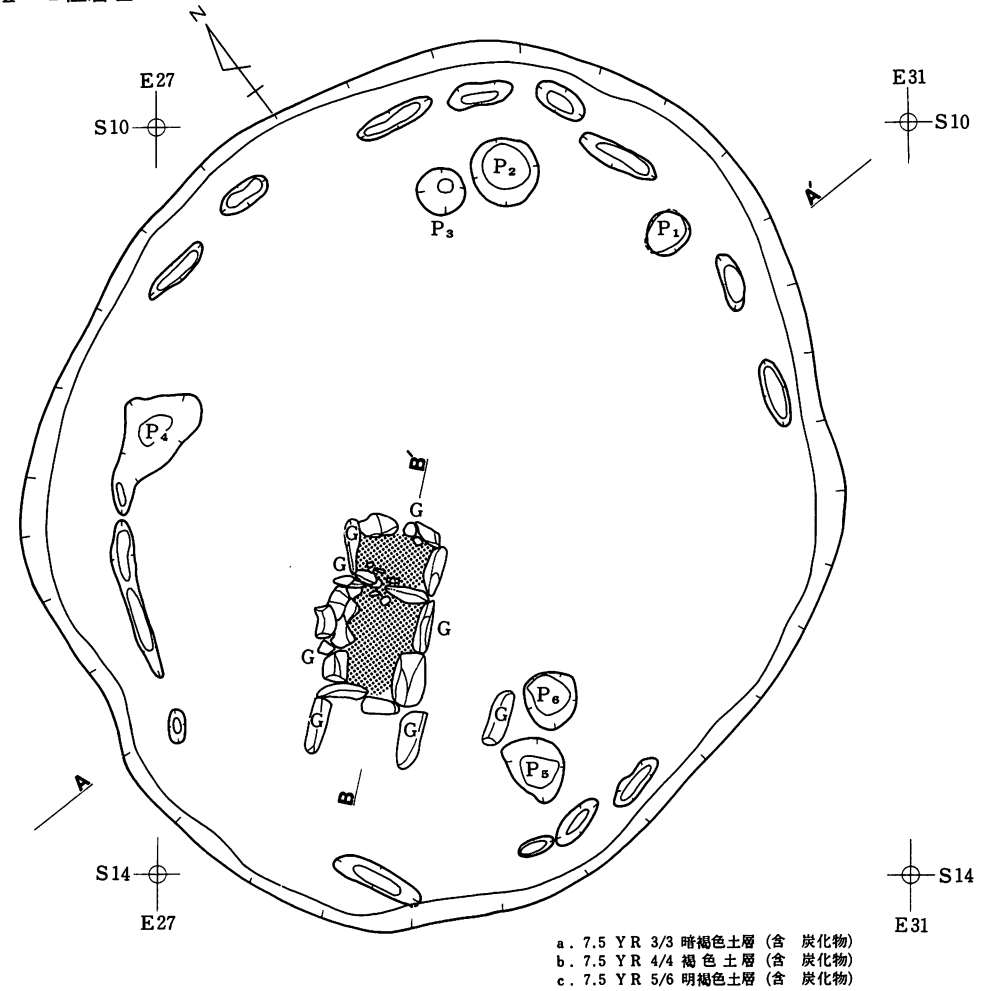


- a. 7.5 YR 2/2 黑褐色土層
- b. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層
- c. 7.5 YR 4/6 褐色土層
- d. 7.5 YR 5/6 明褐色土層
- e. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- f. 7.5 YR 5/8 明褐色土層

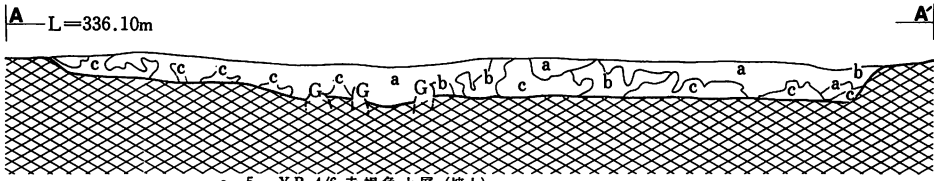
S=

圖版 5

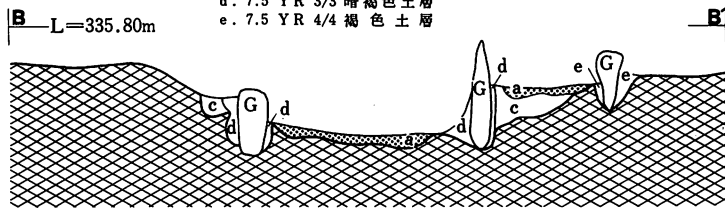
E II-2 住居址



- a. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層 (含 炭化物)
- b. 7.5 YR 4/4 褐色土層 (含 炭化物)
- c. 7.5 YR 5/6 明褐色土層 (含 炭化物)



- a. 5 YR 4/6 赤褐色土層 (燒土)
- b. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層 (含 炭化物、燒土)
- c. 7.5 YR 4/4 褐色土層 (含 炭化物)
- d. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層
- e. 7.5 YR 4/4 褐色土層



图版 6

(2) ピット

E I 区

E I-51ピット

遺構 (図版7-a・写真図版8-a・b)

このピットは、調査区域南西端の段丘崖寄りに検出されたものである。深掘りの際に約2分の1ほどを破壊したため規模・形状の詳細は不明であるが、残存部から推定すると、開口部径155 cm±・頸部径110 cm±・底部径165 cm±・深さ115 cm±の規模をもち、円形の平面形を呈するものと考えられる。断面形はフラスコ状を示す。

埋土は、炭化物や小礫を含む褐色土層・黄褐色土層などで構成されている。

底面は平坦で堅くしまっている。出土遺物はない。

E I-52ピット

遺構 (図版7-b・写真図版8-c)

このピットは、調査区域南西端の段丘崖寄りに検出されたものであり、E I-53ピットとは近接した位置関係にある。またこのピットは一部においてE I-104 陥し穴状遺構との重複関係が認められるが、精査上のミスでその先後関係を確認することができなかった。規模は開口部径110 cm±・底部径80 cm±・深さ82 cm±を計り、平面形は円形を呈する。断面形はピーカー状を示す。

埋土は、黒褐色土層・極暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面はほぼ平坦でやや堅くしまっている。出土遺物はない。

E I-53ピット

遺構 (図版7-c・写真図版8-d)

このピットは、調査区域南西端の段丘崖寄りに検出されたもので、E I-52ピットより80 cm±南方に位置する。規模は開口部径60 cm±・底部径70 cm±・深さ60 cm±を計り、平面形はやや不整な円形を呈する。断面形はフラスコ状を示す。

埋土は、黒褐色土層・褐色土層・暗褐色土層などで構成されている。埋土下部の暗褐色土層中には粒径20 cm±の安山岩類亜角礫が1個包含されていた。

底面は平坦でやや堅くしまっている。

出土遺物 (図版28-36・写真図版32-33)

出土遺物は、埋土上位から得られた土器片1点(36)だけである。

36は深鉢の口縁部片である。口縁部文様帯は、横位・斜位の捺糸文によって構成されている。

口唇部上面にも撚糸文が刻目状に施されている。この土器片は縄文時代中期前葉に属するものと思われる。

E I-54ピット

遺構 (図版13-b・写真図版8-e・f)

このピットは、E I-101陥し穴状遺構によって北側部分が破壊されているため正確な規模・形状を把握できないが、残存部から推定すると、開口部径 112 cm 土・底部径 90 cm 土・深さ 14 cm 土の規模をもち、円形の平面形を呈するものと考えられる。断面形は皿状を示す。

ピット内は炭化物を少量含む異地性の焼土によって充填されている。

底面はほぼ平坦であり少しやわらかい。出土遺物はない。

E I-55ピット

遺構 (図版7-d・写真図版9-a~c)

このピットはE I-56ピットとは近接した位置にある。規模は開口部径 110 cm 土×80 cm 土・頸部径 90 cm 土×73 cm 土・底部径 178 cm 土×140 cm 土・深さ 110 cm 土を計り、平面形は楕円形を呈する。断面形はフラスコ状を示す。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面は平坦で堅くしまっている。

出土遺物 (図版28-37~40、29-41~45・写真図版32-34・35、33-36~41)

出土遺物は底面と埋土上部から得られている。底面から出土した遺物は、ほぼ完形の土器 1 点 (37) である。埋土上部から出土した遺物は、土器片 3 点 (38~40) と石器 5 点 (41~45) である。

37は平縁口縁の深鉢であり、口縁部が外反しながら立ちあがっている。体部の中央部にふくらみをもっている。口縁部文様帯は、平行沈線状に施文された撚糸文とその間に施されている刺突文によって構成されている。またこの文様帯には、ジグザグの配置を示す小リボン状の貼付がみられる。この貼付の上にも撚糸文が施文されている。体部の文様は、単節斜縄文の地文の上に横位の綾絡文が一定の間隔を置いて施文されているものである。外面の口縁部にスガが付着している。

土器片はいずれも深鉢の口縁部片である。38には隆起線が付加されている。39・40は地文だけのものである。地文は羽状縄文である。石器としては、石鏃 (41~43)・石斧 (44)・磨石 (45) が出土している。石鏃は基部が平坦なもの (41) と凸状のもの (42・43) とに分けられる。石斧は頭部が欠損している磨製石斧である。磨石は形状が楕円形を呈するもので、側面部分には殆ど研磨痕が認められない。

以上の出土遺物の中で、底面から出土した37の土器は縄文時代中期前葉に属するものである。

埋土中から出土した土器片もほぼこの時期のものと思われる。

E I-56ピット

遺構 (図版8-a・写真図版9-d・e)

このピットはE I-55ピットとは近接した位置にある。規模は開口部径150cm±×140cm±・頸部径125cm±×105cm±・底部径180cm±×150cm±・深さ90cm±を計り、平面形は楕円形を呈する。断面形はフラスコ状を示す。

埋土は、炭化物を少量含む黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面は平坦でやや堅くしまっている。

出土遺物 (図版29-46~49、30-50・写真図版33-42~46)

出土遺物は、埋土上部から得られた深鉢の土器片5点(46~50)である。

46は口唇部に2条の縄文圧痕が施されている平縁口縁の破片である。地文は羽状縄文である。47は波状口縁を呈する破片で、口縁部文様帯には縦位・斜位の撚糸文が施文されている。48も波状口縁を呈するもので、口縁部文様帯が縦位・横位の隆帯によって区画されている。文様は撚糸文によって展開されている。49・50は口縁部文様帯が横位・斜位の撚糸文によって構成されている。斜位の撚糸文は刻目状を呈す。50には斜位の隆帯が施されている。これらの土器片はいずれも縄文時代中期前葉に属するものである。

E I-57ピット

遺構 (図版8-b・写真図版10-a・b)

このピットはE I-58ピットと近接した位置にある。規模は開口部径140cm±×115cm±・頸部径110cm±×95cm±・底部径185cm±×160cm±・深さ80cm±を計り、平面形は楕円形を呈する。断面形はフラスコ状を示す。

埋土は、炭化物を少量含む暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面は平坦でやや堅くしまっている。

出土遺物 (図版30-51・52・写真図版34-47・48)

出土遺物は、埋土上部から得られた土器片2点(51・52)である。

51は横位の撚糸文が施文されている波状口縁の深鉢の破片である。52は隆帯が施されているもので、隆帯で区画された中には横位の縄文圧痕が施文されている。これらの土器片は縄文時代中期前葉に属するものと思われる。

E I-58ピット

遺構 (図版8-c・写真図版10-c・d)

このピットはE I-57ピットと近接した位置にある。規模は開口部径208cm±×150cm±・頸部径180cm±×140cm±・底部径230cm±×220cm±・深さ103cm±を計り、平面形は不整

な楕円形を呈する。断面形はフラスコ状を示す。

埋土は、炭化物や小礫を含む黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面は平坦でやや堅くしまっている。

出土遺物 (図版30-53・54、31-55-59・写真図版34-49-54)

出土遺物は、埋土中位から得られた土器(53)・土器片(54-58)および石器(59)などである。

53・54は底面の上方26cm土のレベルから出土した一括土器である。53は波状口縁を呈する深鉢である。口縁部文様帯は波状に施文された撚糸文と刺突状に施文された撚糸文によって構成されている。口唇部および頸部の隆帯上には、撚糸圧痕が刻目状に施されている。体部の地文は単節の斜縄文である。口縁部のところどころにススの付着がみられる。54は平縁口縁の深鉢の大破片である。口縁部は内弯気味に立ちあがっている。口縁部文様帯は縦位の隆帯と半截竹管状工具によって施文された小波状沈線とで構成されている。地文は単節の斜縄文である。この土器片は、器形・文様などの点からみてDII-1住居址の床面上から出土した深鉢の土器片(図版25-2)と同一個体のもと思われる。55-57は口縁部文様帯が縦位の隆帯によって加飾されているものである。口縁部文様帯には、縄文圧痕(55)や撚糸圧痕(56・57)が施されている。なお56・57は同一個体の破片と思われる。58は口縁部が外反する深鉢の破片である。地文は単節の斜縄文である。以上の土器・土器片は縄文時代中期前葉に属するものである。

出土した石器は石匙の破片1点(59)である。刃部の大半が欠如しておりこの石匙全体の形態の詳細は不明であるが、残存部から推定すると、長軸方向に対して右側につまみ部が形成されているものと考えられる。

E I-59ピット

遺構 (図版9-a・写真図版10-e)

このピットはE I-108陥し穴状遺構に切られている。したがって規模・形状を正確に把握できないが、残存部から推定すると、開口部径300cm土×185cm土・頸部径190cm土×140cm土・底部径280cm土×215cm土・深さ147cm土～165cm土の規模をもち、楕円形の平面形を呈するものと考えられる。断面形はフラスコ状を示す。

埋土の詳細は不明であるが、Field Cardの記載によれば主に黒褐色土層・暗褐色土層によって構成されていたようである。

底面は平坦で堅くしまっている。

出土遺物 (図版31-60・61、32-62・写真図版35-55-57)

出土遺物は、埋土上部から得られた土器(62)・土器片(60・61)である。

62は開口部の部分から出土した一括土器である。波状口縁を呈する深鉢であり、口縁部の突

起は山形をなす。口縁部文様帯は横位・斜位の撚糸文によって構成されており、幾何学的な文様が展開されている。頸部には小リボン状の貼付が施されており、貼付と貼付の間には1条の横位の綾絡文が施文されている。体部の地文は結束斜縄文である。外面の口縁部～体部上半部のところどころにススの付着がみられる。60・61は体部の小破片である。61は地文の上に横位の綾絡文が施文されている。以上の中で62の土器は縄文時代中期前葉に属するものであるが、他の土器片についてはその所属時期を断定し得ない。

E II区

E II-51ピット

遺構 (図版9-b・写真図版11-a・b)

このピットはE I-59ピットと近接した位置にある。規模は開口部径 205 cm±×117 cm±・横部径 115 cm±×102 cm±・底部径 188 cm±×175 cm±・深さ 142 cm±～150 cm±を計り、平面形は楕円形を呈する。断面形はフラスコ状を示す。

埋土は、炭化物を少量含む黒色土層・黒褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面は平坦でやや堅くしまっている。

出土遺物 (図版32-63・64・写真図版35-58・59)

出土遺物は、埋土上部から得られた土器片(63・64)である。

63は波状口縁を呈する深鉢の破片であり、口縁部が外反している。口縁部文様帯は2条の縦位の隆起線と横位の撚糸文で構成されている。体部は単節斜縄文の地文の上に横位の綾絡文が一定の間隔を置いて施文されている。胎土には金雲母が含まれている。64は平縁口縁を呈する深鉢の破片である。口縁部は単節斜縄文の上に横位の綾絡文が施文されている。内面には入念なミガキ調整が施されている。これらの土器片は縄文時代中期前葉に属するものである。

E II-52ピット

遺構 (図版19-a)

このピットはE II-104陥し穴状遺構によって西側の一部が切られている。したがって規模・形状を正確に把握できないが、残存部から推定すると、開口部径 110 cm±×95 cm±・底部径 95 cm±×67 cm±・深さ 12 cm±の規模をもち、不整な楕円形の平面形を呈するものと考えられる。断面形は皿状を示す。

埋土は炭化物を微量に含む暗褐色土層で構成されている。単層であるためその性状をField Card に記載しただけで、土層断面図の作成は省略した。

底面はほぼ平坦でやわらかい。出土遺物はない。

E II-53ピット

遺構 (図版9-c・写真図版11-c・d)

このピットはE II-2住居址と近接した位置にある。規模は開口部径 177 cm±× 163 cm±・底部径 187 cm±× 163 cm±・深さ 130 cm±を計り、平面形は楕円形を呈する。断面形はフラスコ状を示す。

埋土は、炭化物を多く含む黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面は平坦でやや堅くしまっている。

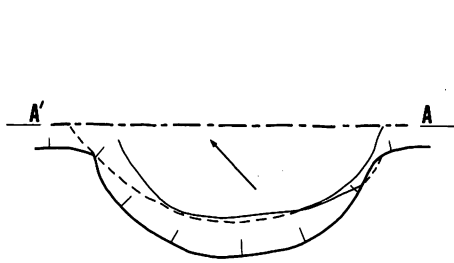
出土遺物 (図版32-65~68・写真図版35-60~63)

出土遺物は、埋土上部から得られた土器片(65~67)と石器(68)である。

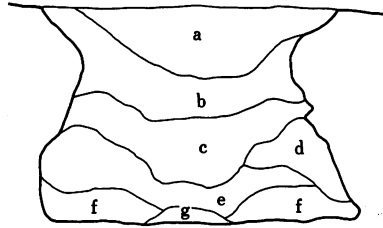
65~67は曲線的な沈線文が施文されている深鉢の体部片である。これらの破片は同一個体のものであると思われる。これらの土器片の所属時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

出土した石器は半円状扁平打製石器1点(68)である。この石器の周縁部には敲打痕と研磨痕がみられる。

a. EI-51ピット

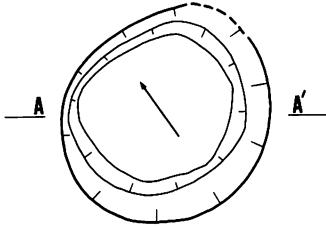


A—L=332.40m—A'

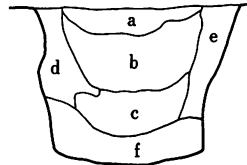


- a. 7.5 YR 4/4 褐色土層 (含炭化物)
- b. 7.5 YR 4/3 褐色土層 (含炭化物)
- c. 7.5 YR 4/6 褐色土層 (含炭化物)
- d. 7.5 YR 5/6 明褐色土層 (含炭化物)
- e. 7.5 YR 4/6 褐色土層 (含炭化物)
- f. 10 YR 6/6 黄褐色土層
- g. 10 YR 4/6 褐色土層

b. EI-52ピット



A—L=332.00m—A'

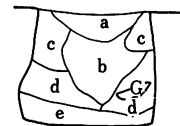


- a. 7.5 YR 2/1 黒色土層
- b. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層
- c. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- d. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- e. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- f. 7.5 YR 4/6 褐色土層

c. EI-53ピット

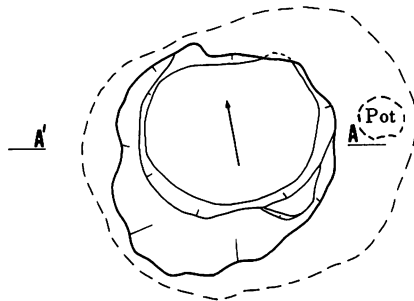


A—L=331.80m—A'

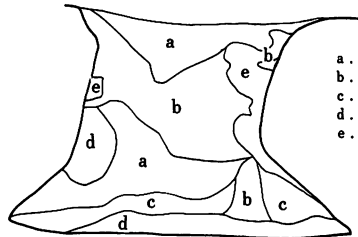


- a. 7.5 YR 2/1 黒色土層
- b. 7.5 YR 3/1 黒褐色土層
- c. 7.5 YR 3/4 褐色土層
- d. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層
- e. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層

d. EI-55ピット



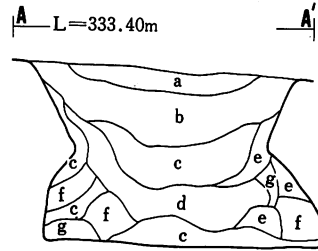
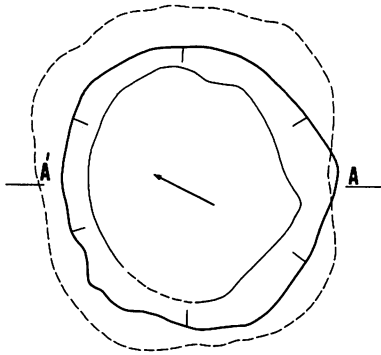
A—L=333.20m—A'



- a. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- b. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層
- c. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層
- d. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層
- e. 7.5 YR 4/4 褐色土層

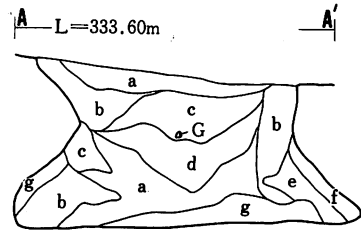
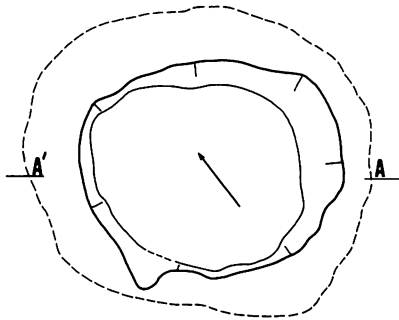
S=46

a. EI-56ピット



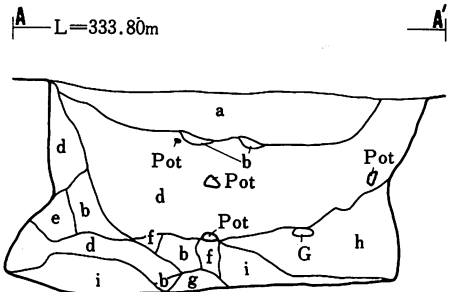
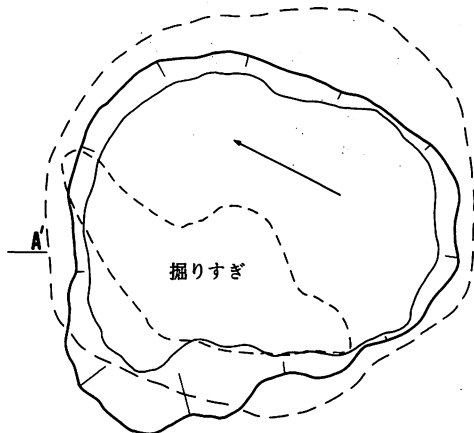
- a. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- b. 7.5 YR 3/2 黒褐色土層 (含炭化物)
- c. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層 (含炭化物)
- d. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層 (含炭化物)
- e. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- f. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層 (含炭化物)
- g. 7.5 YR 5/6 明褐色土層

b. EI-57ピット



- a. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層
- b. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- c. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層 (含炭化物)
- d. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層 (含炭化物)
- e. 7.5 YR 4/6 褐色土層
- f. 7.5 YR 4/3 褐色土層
- g. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層

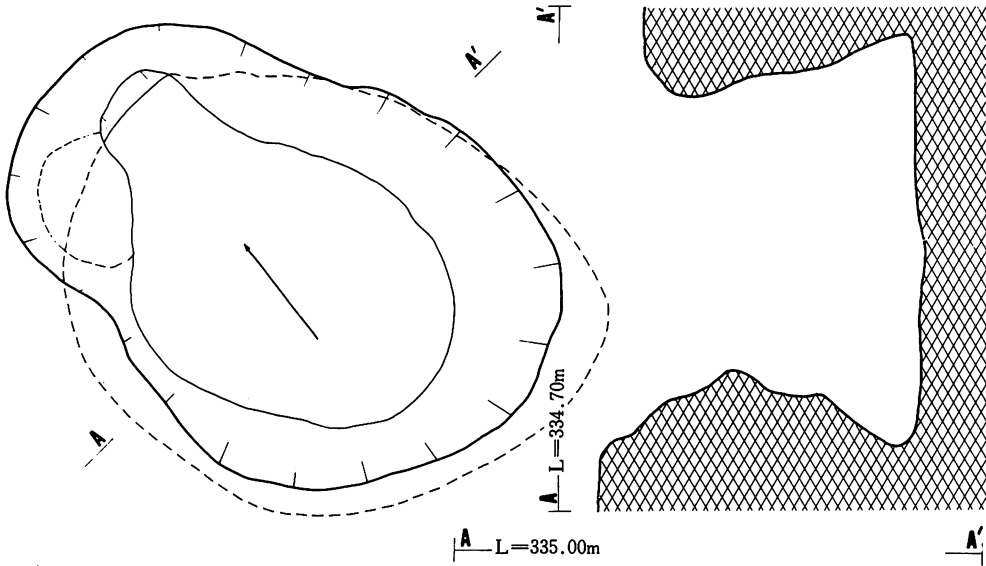
c. EI-58ピット



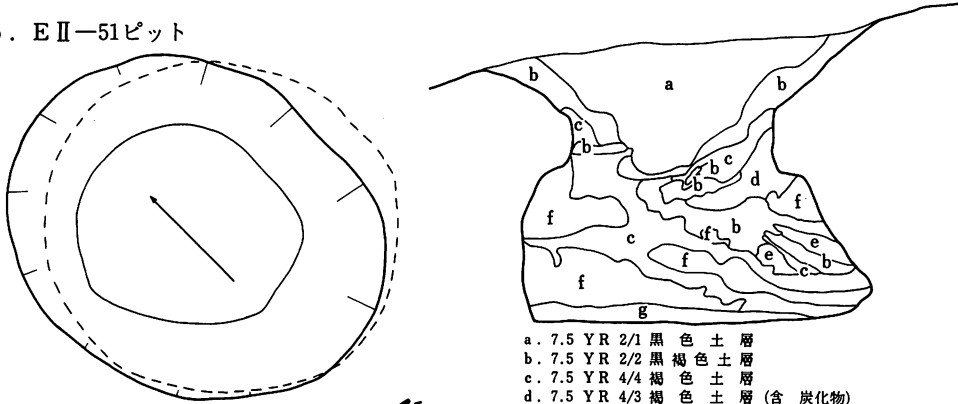
- a. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- b. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層
- c. 7.5 YR 4/6 褐色土層 (含炭化物)
- d. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層 (含炭化物)
- e. 7.5 YR 4/4 褐色土層 (含炭化物)
- f. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層
- g. 7.5 YR 5/6 明褐色土層
- h. 7.5 YR 5/4 によい褐色土層 (含炭化物)
- i. 7.5 YR 5/8 明褐色土層

S=㊦

a. E I—59ピット

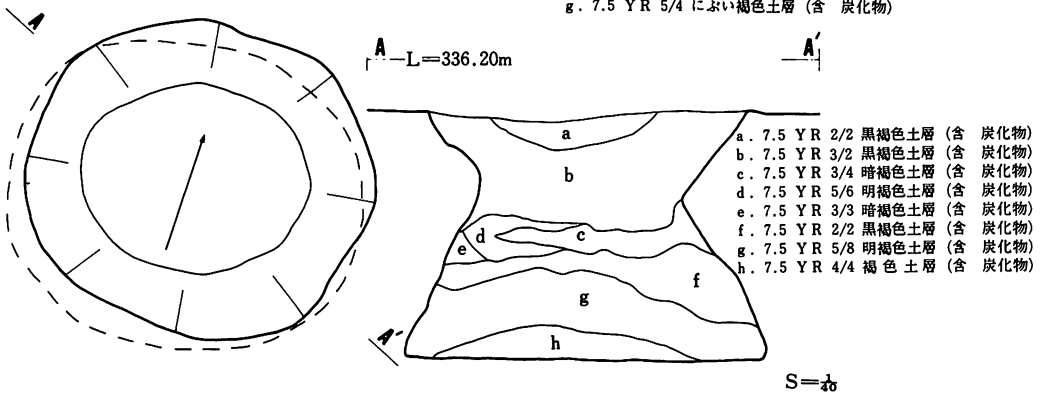


b. E II—51ピット



- a. 7.5 YR 2/1 黒色土層
- b. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- c. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- d. 7.5 YR 4/3 褐色土層 (含炭化物)
- e. 7.5 YR 8/8 黄橙色土層
- f. 7.5 YR 4/6 褐色土層 (含炭化物)
- g. 7.5 YR 5/4 におい褐色土層 (含炭化物)

c. E II—53ピット



- a. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層 (含炭化物)
- b. 7.5 YR 3/2 黒褐色土層 (含炭化物)
- c. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層 (含炭化物)
- d. 7.5 YR 5/6 明褐色土層 (含炭化物)
- e. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層 (含炭化物)
- f. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層 (含炭化物)
- g. 7.5 YR 5/8 明褐色土層 (含炭化物)
- h. 7.5 YR 4/4 褐色土層 (含炭化物)

(3) 陥し穴状遺構

D I 区

D I - 101 陥し穴状遺構

遺 構 (図版10-a・写真図版12-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-30°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径184cm±×75cm±・底部径170cm±×50cm±・深さ58cm±～115cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は円筒状を示す。底部における軸長比は0.29である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層で構成されている。埋土の上部に位置する暗褐色土層中には十和田a降下火山灰がブロック状に混入している。

底面は平坦でやや堅くしまっている。底面の中軸線上には、径6cm±～9cm±・深さ8cm±の副穴が3個みられる。北西の壁が奥に抉りこまれている。出土遺物はない。

D I - 102 陥し穴状遺構

遺 構 (図版10-b・写真図版12-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-20°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径200cm±×94cm±・底部径155cm±×40cm±・深さ95cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.26である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層で構成されている。埋土の上部に位置する暗褐色土層中には炭化物が少量包含されている。

底面はほぼ平坦でやや堅くしまっている。出土遺物はない。

D I - 103 陥し穴状遺構

遺 構 (図版10-c・写真図版13-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-21°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径176cm±×82cm±・底部径140cm±×37cm±・深さ70cm±を計り、平面形は不整な隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.26である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層などで構成されている。

底面はほぼ平坦でやや堅くしまっている。

出土遺物 (図版32-69・写真図版35-64)

出土遺物は埋土下部から得られた土器片1点(69)である。

69は口唇部にヘラ状工具によって刻目が施されているものである。胎土に砂粒が含まれているためザラザラした器面となっている。この土器片は小片で文様等の詳細が不明であり、その

所属時期については断定し得ない。

D I-104 陥し穴状遺構

遺 構 (図版11-a・写真図版13-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-23°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径188cm±×107cm±・底部径147cm±×35cm±・深さ97cm±を計り、平面形は不整な隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.24である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層で構成されている。

底面はほぼ平坦でやや堅くしまっている。出土遺物はない。

D I-105 陥し穴状遺構

遺 構 (図版11-b・写真図版14-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-22°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径168cm±×78cm±・底部径102cm±×30cm±・深さ97cm±を計り、平面形は不整な隅丸長方形を呈する。横断面形はピーカー状を示す。底部における軸長比は0.29である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層などで構成されている。なお土層断面図は精査上のミスで下部の部分については作成できなかった。

底面はやや平坦で堅くしまっている。底面の中軸線よりやや東側にずれた位置に、径2cm±～4cm±・深さ5cm±の副穴が3個確認された。出土遺物はない。

D I-106 陥し穴状遺構

遺 構 (図版11-c・写真図版14-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-30°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径175cm±×65cm±・底部径155cm±×45cm±・深さ92cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は円筒状を示す。底部における軸長比は0.29である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面はほぼ平坦で少しやわらかい。

出土遺物 (図版32-70・71・写真図版35-65・66)

出土遺物は、埋土上部から得られた土器片2点(70・71)である。

70は体部片であり、単節の斜縄文が施されている。71は体部下半部片であり無文となっている。これらの土器片の所属時期は判定し得ない。

D I-107 陥し穴状遺構

遺 構 (図版12-a・写真図版15-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-28°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径190cm±×67cm±・底部径190cm±×50cm±・深さ75cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断

面形は円筒状を示す。底部における軸長比は0.26である。

埋土は、黒褐色土層・極暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面は平坦でやや堅くしまっている。南東の壁が奥に抉りこまれている。出土遺物はない。

D I-108 陥し穴状遺構

遺 構 (図版12-b・写真図版15-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-32°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径240cm±×90cm±・底部径172cm±×43cm±・深さ88cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.25である。

埋土は、黒褐色土層・極暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面は平坦でやや堅くしまっている。南東の壁が奥に抉りこまれている。出土遺物はない。

D I-109 陥し穴状遺構

遺 構 (図版12-c・写真図版16-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-32°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径197cm±×97cm±・底部径176cm±×58cm±・深さ98cm±～118cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は円筒状を示す。底部における軸長比は0.33である。

埋土は、極暗褐色土層・黒褐色土層・褐色土層で構成されている。上部の埋土中には、十和田a降下火山灰がブロック状に混入している。

底面は平坦で堅くしまっている。底面の中軸線に沿って径5cm±～8cm±・深さ14cm±～20cm±の副穴が3個確認された。南東の壁が奥に抉りこまれている。出土遺物はない。

D III区

D III-101 陥し穴状遺構

遺 構 (図版13-a・写真図版17-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-34°-Wの方向を示すものである。遺構全体の半分以上が調査区域外にあるため、規模・形状の詳細は不明である。精査できた部分の状況を記すと次のようになる。深さは150cm±を計り、横断面形は円筒状を示す。平面形は検出部分から推定すると、隅丸長方形を呈するものと考えられる。

埋土は、黒褐色土層・褐色土層・にぶい黄橙色土層などで構成されている。埋土上部には、十和田a降下火山灰が「U」字状に堆積しており、最大層厚18cm±を計る。

底面は平坦でやや堅くしまっている。出土遺物はない。

E I 区

E I - 101 陥し穴状遺構

遺 構 (図版13-b・写真図版17-c~e)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-73°-Wの方向を示すもので、E I - 54ピットを切りこんでいる。規模は開口部径200cm±×115cm±・底部径 160 cm±×45cm±・深さ 120 cm±~ 139 cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.28である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面は平坦で堅くしまっている。底面の中軸線上に径 9 cm±・深さ12cm±の副穴が 3 個確認された。

出土遺物 (図版32-72・写真図版36-67)

出土遺物は、埋土上部から得られた土器片 1 点 (72) である。

72は波状口縁の深鉢の破片である。平行する縦位の隆帯が施されており、隆帯間には縦位の燃糸文が施文されている。内面には入念ミガキ調整が加えられている。この土器片は縄文時代中期前葉に属するものである。

E I - 102 陥し穴状遺構

遺 構 (図版14-a・写真図版18-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-43°-Eの方向を示すものである。埋土の土層を詳細に観察するために深掘りを行なった際に、遺構の西側半分を破壊した。したがって規模・形状は正確に把握できないが、残存部の状況は次のとおりである。長軸方向で開口部径 326 cm±・底部径 300cm±を計る。深さは90cm±~128cm±である。平面形は残存部から推定すると隅丸長方形を呈するものと考えられる。

埋土は、黒褐色土層・黒色土層・褐色土層・暗褐色土層などで構成されている。上部の埋土中には炭化物が多く含まれている。

底面は平坦でやや堅くしまっている。底面の中軸線上に径 5 cm±・深さ15cm±~25cm±の副穴が 4 個確認された。長軸方向の両壁は奥に挟りこまれている。

出土遺物 (図版32-73~76、33-77・写真図版36-68~72)

出土遺物は、埋土中位から得られた土器片 (73~76) と石器 (77) である。

73・74は平縁口縁の深鉢の口縁部片である。地文は羽状縄文である。胎土には多くの繊維が含まれている。75は燃糸文が施文されている体部である。76は74の体部片と思われるもので、胎土に繊維が含まれている。これらの土器片の中で、73・74・76は縄文時代前期、75は中期に

それぞれ位置づけられるものと思われる。

出土した石器は、不定形石器1点(77)である。石器の側縁の一部に微細な刃部加工がなされている。

E I-103陥し穴状遺構

遺 構 (図版14-b・写真図版18-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-31°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径270cm±×60cm±・底部径295cm±×37cm±・深さ96cm±~107cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は円筒状を示す。底部における軸長比は0.13である。

埋土は、黒褐色土層・褐色土層・暗褐色土層などで構成されている。上部の埋土中には炭化物が少量包含されている。

底面は段丘面の傾斜と平行するような状態で削剝して形成されているため、南西部分が高くなっている。底面の中軸線上に径4cm±・深さ18cm±~22cm±の副穴が2個確認された。出土遺物はない。

E I-104陥し穴状遺構

遺 構 (図版15-a・写真図版19-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-36°-Eの方向を示すものである。規模は開口部径295cm±×70cm±・底部径326cm±×33cm±・深さ95cm±~128cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.10である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面の北東部分が南西部分よりも高くなっている。底面の中軸線上に径4cm±~8cm±・深さ13cm±~25cm±の副穴が7個確認された。この中の1個がさしかえられている。長軸方向の壁が奥に挟りこまれている。

E I-52ピットと重複関係にあるが、その先後関係は不明である。

出土遺物 (図版33-78~81・写真図版36-73~76)

出土遺物は埋土上部から得られた土器片(78~81)である。

78は波状口縁を呈する深鉢の大破片である。口縁部文様帯は、縦位の隆帯と横位の綾絡文・撚糸文によって構成されている。頸部には小リボン状の貼付が施されている。体部には結束斜縄文が施文されている。外面の口縁部のところどころにススが付着している。79は78と同一個体の破片と思われるものである。80は横位の撚糸文が施文されている口縁部片である。81は斜位の撚糸文が施文されている口縁部片である。これらの土器片は、縄文時代中期前葉に属するものである。

E I-105 陥し穴状遺構

遺 構 (図版15-b・写真図版19-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-72°-Eの方向を示すものである。規模は開口部径280cm±×67cm±・底部径254cm±×21cm±・深さ120cm±~130cm±を計り、平面形は不整な隅丸長方形を呈する。横断面形は円筒状を示す。底部における軸長比0.08である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・黒色土層で構成されている。上部の埋土中には炭化物が少量包含されている。

底面の東側部分が西側部分よりも高くなっている。底面の中軸線上に径3cm±・深さ12cm±~20cm±の副穴が5個確認された。出土遺物はない。

E I-106 陥し穴状遺構

遺 構 (図版16-a・写真図版20-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-26°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径194cm±×124cm±・底部径156cm±×35cm±・深さ132cm±~154cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.22である。

埋土は、暗褐色土層・褐色土層・黄褐色土層などで構成されている。埋土上部には十和田a降下火山灰が皿状に堆積しており、層厚5cm±を計る。

底面の南東部分が北西部分よりも高くなっている。底面の北西の壁寄りに2個の副穴が確認された。径8cm±・深さ18cm±を計り、底面に対して斜位に設けられている。出土遺物はない。

E I-107 陥し穴状遺構

遺 構 (図版16-b・写真図版20-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-30°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径224cm±×122cm±・底部径123cm±×32cm±・深さ142cm±~156cm±を計り、平面形は不整な隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.26である。

埋土は、黒褐色土層・灰黄褐色土層・褐色土層・暗褐色土層などで構成されている。埋土上部には十和田a降下火山灰が摺鉢状に堆積しており、層厚10cm±を計る。

底面はやや平坦で少し堅くしまっている。出土遺物はない。

E I-108 陥し穴状遺構

遺 構 (図版17-a・写真図版21-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-10°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径270cm±×160cm±・底部径150cm±×42cm±・深さ155cm±~160cm±を計り、平面形は不整な隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.28である。

埋土は、灰黄褐色土層・褐色土層・暗褐色土層・黒褐色土層などで構成されている。埋土上

部に十和田a降下火山灰が「U」字状に堆積しており、層厚6cm土を計る。

底面の南側部分が北側部分より高くなっている。

この陥し穴状遺構は、E I-59ピットを切りこんで作られている。出土遺物はない。

E II区

E II-101陥し穴状遺構

遺 構 (図版17-b・写真図版21-c~e)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-60°-Wの方向を示すものである。埋土の土層を詳細に観察するために深掘りを行なった際に遺構の西側半分を破壊した。したがって規模・形状は正確に把握できないが、残存部の状況は次のとおりである。長軸方向で開口部径275cm土・底部径166cm土を計る。深さは185cm土である。平面形は残存部から推定すると隅丸長方形を呈するものと考えられる。

埋土は、黒色土層・灰黄褐色土層・褐色土層・暗褐色土層などで構成されている。埋土上部に十和田a降下火山灰が浅鉢状に堆積しており、層厚10cm土を計る。

底面は平坦で堅くしまっている。出土遺物はない。

E II-102陥し穴状遺構

遺 構 (図版18-a・写真図版22-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-70°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径223cm土×155cm土・底部径138cm土×40cm土・深さ155cm土~170cm土を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.29である。

埋土は、黒色土層・褐色土層・褐灰色土層などで構成されている。埋土上部に十和田a降下火山灰が「U」字状に堆積しており、層厚10cm土を計る。

底面は平坦でやや堅くしまっている。出土遺物はない。

E II-103陥し穴状遺構

遺 構 (図版18-b・写真図版22-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-67°-Wの方向を示すものである。抜根の際に開口部周辺が破壊された。規模は開口部径258cm土×50cm土・底部径237cm土×30cm土・深さ115cm土を計り、平面形が不整な隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.13である。

埋土は、炭化物を少量含む黒褐色土層・褐色土層・暗褐色土層などで構成されている。

底面は平坦でやや堅くしまっている。

出土遺物（図版34-82~84・写真図版36-77~79）

出土遺物は、埋土上部から得られた土器片3点（82~84）である。

82・83は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。口縁部の文様は隆起線文と撚糸文とによって展開されている。84は3条の平行沈線が施文されている口縁部片である。これらの土器片は縄文時代中期後半以降に属するものと思われる。

E II-104陥し穴状遺構

遺 構（図版19-a・写真図版23-a・b）

この陥し穴状遺構は、調査区域南東の段丘崖寄りに位置し、長軸がN-13°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径 218 cm土×155 cm土・底部径 190 cm土×70 cm土・深さ 168 cm土を計り、平面形は不整な隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.37である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・灰黄褐色土層・褐色土層などで構成されている。埋土上部に十和田a降下火山灰が「U」字状に堆積しており、層厚10cm土を計る。

底面は平坦でやや堅くしまっている。北側の壁が少し奥に挟りこまれている。

この陥し穴状遺構は、E II-52ピットを切っている。

出土遺物（図版34-85・86・写真図版36-80・81）

出土遺物は、埋土上部から得られた土器片2点（85・86）である。

85は口縁部が内弯している深鉢の破片である。文様は沈線文によって展開されている。86は体部の破片であり、無節の斜縄文が施されている。これらの土器片は縄文時代中期後半に属するものである。

E II-105陥し穴状遺構

遺 構（図版19-b・写真図版23-c・d）

この陥し穴状遺構は、調査区域南方の段丘崖寄りに位置し、長軸がN-20°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径 224 cm土×113 cm土・底部径 170 cm土×35 cm土・深さ 170 cm土を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.21である。

埋土は、黒褐色土層・灰黄褐色土層・褐色土層などで構成されている。埋土上部に十和田a降下火山灰が「U」字状に堆積しており、層厚13cm土を計る。

底面はほぼ平坦でやや堅くしまっている。出土遺物はない。

E II-106陥し穴状遺構

遺 構（図版20-a・写真図版24-a・b）

この陥し穴状遺構は、調査区域南方の段丘崖寄りに位置し、長軸がN-11°-Wの方向を示す

ものである。規模は開口部径 196 cm 土 × 105 cm 土 ・ 底部径 134 cm 土 × 30 cm 土 ・ 深さ 132 cm 土 を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.22である。

埋土は、炭化物を含む黒褐色土層・褐色土層・橙色土層などで構成されている。埋土上部に十和田a降下火山灰が「U」字状に堆積しており、層厚10cm土を計る。

底面は平坦でやや堅くしまっている。出土遺物はない。

E II-107 陥し穴状遺構

遺 構 (図版20-b・写真図版24-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-10°-Eの方向を示すものである。規模は開口部径287 cm 土 × 64 cm 土 ・ 底部径 275 cm 土 × 30 cm 土 ・ 深さ95 cm 土 ~ 110 cm 土 を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は円筒状を示す。底部における軸長比は0.11である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面の南側部分は北側部分より高くなっている。底面の中軸線上に径 7 cm 土 ・ 深さ14 cm 土 の副穴が6個確認された。南の壁が奥に抉りこまれている。出土遺物はない。

E II-108 陥し穴状遺構

遺 構 (図版21-a・写真図版25-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-36°-Eの方向を示すものである。規模は開口部径287 cm 土 × 60 cm 土 ・ 底部径 260 cm 土 × 25 cm 土 ・ 深さ 110 cm 土 を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.10である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・褐色土層などで構成されている。

底面はわずかに凹凸をもちやや堅くしまっている。底面の中軸線上に径 2 cm 土 ~ 5 cm 土 ・ 深さ 5 cm 土 ~ 10 cm 土 の副穴が5個確認された。

この陥し穴状遺構は、D II-1 住居址の一部を切っている。出土遺物はない。

E II-109 陥し穴状遺構

遺 構 (図版21-b・写真図版25-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-33°-Eの方向を示すものである。規模は開口部径310 cm 土 × 85 cm 土 ・ 底部径 260 cm 土 × 36 cm 土 ・ 深さ 100 cm 土 ~ 110 cm 土 を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は円筒状を示す。底部における軸長比は0.14である。

埋土は、褐色土層・暗褐色土層・黒褐色土層などで構成されている。

底面はほぼ平坦でやや堅くしまっている。底面の中軸線上に径 2 cm 土 ~ 6 cm 土 ・ 深さ 7 cm 土 ~ 15 cm 土 の副穴が14個確認された。出土遺物はない。

E II-110 陥し穴状遺構

遺 構 (図版22-a・写真図版26-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-37°-Eの方向を示すものである。規模は開口部径304cm±~73cm±・底部径 267 cm±×32cm±・深さ 105 cm±~114 cm±を計り、平面形は不整な隅丸長方形を呈する。横断面形は円筒状を示す。底部における軸長比0.12である。

埋土は、黒褐色土層・褐色土層・暗褐色土層などで構成されている。

底面は凹凸がありやや堅くしまっている。また底面の中央部が高くなっている。底面の中軸線上に径4cm±~8cm±・深さ8cm±~17cm±の副穴が6個確認された。出土遺物はない。

E II-111 陥し穴状遺構

遺 構 (図版22-b・写真図版26-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-39°-Eの方向を示すものである。規模は開口部径305cm±×75cm±・底部径 292 cm±×25cm±・深さ95cm±~105 cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.09である。

埋土は、暗褐色土層・黄褐色土層・黒褐色土層などで構成されている。

底面は凹凸をもち中央部が皿状に低く凹んでいる。底面の中軸線上に径2cm±~6cm±・深さ7cm±~16cm±の副穴が13個確認された。南西の壁が奥に挟りこまれている。出土遺物はない。

E III区

E III-101 陥し穴状遺構

遺 構 (図版23-a・写真図版27-a・b)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-37°-Eの方向を示すものである。規模は開口部径283cm±×68cm±・底部径 260 cm±×32cm±・深さ 100 cm±~110 cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.12である。

埋土は、黒褐色土層・褐色土層・黄褐色土層などで構成されている。

底面はやや平坦で少し堅くしまっている。底面の中軸線上に径4cm±~8cm±・深さ5cm±~15cm±の副穴が9個確認された。出土遺物はない。

E III-102 陥し穴状遺構

遺 構 (図版23-b・写真図版27-c・d)

この陥し穴状遺構は、長軸がN-39°-Eの方向を示すものである。規模は開口部径300cm±×74cm±・底部径 280 cm±×35cm±・深さ 100 cm±~107 cm±を計り、平面形は隅丸長方形を

呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.13である。

埋土は、黒褐色土層・褐色土層・暗褐色土層などで構成されている。最下層の暗褐色土層中に炭化物が多量に包含されていた。

底面は平坦で堅くしまっている。底面の中軸線上に径4cm±~12cm±・深さ5cm±~15cm±の副穴が7個確認された。出土遺物はない。

E III - 103 陥し穴状遺構

遺 構 (図版24-a・写真図版28-a・b)

この陥し穴状遺構は、調査区域南東の段丘崖寄りに位置し、長軸がN-17°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径210cm±×128cm±・底部径140cm±×43cm±・深さ150cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.31である。

埋土は、黒色土層・褐灰色土層・褐色土層・橙色土層などで構成されている。埋土上部には十和田a降下火山灰が「U」字状に堆積しており、層厚20cm±を計る。

底面は平坦でやや堅くしまっている。出土遺物はない。

F I 区

F I - 101 陥し穴状遺構

遺 構 (図版24-b・写真図版28-c・d)

この陥し穴状遺構は、調査区域南端の段丘崖寄りに位置し、長軸がN-27°-Wの方向を示すものである。規模は開口部径207cm±×123cm±・底部径150cm±×38cm±・深さ180cm±を計り、平面形は隅丸長方形を呈する。横断面形は漏斗状を示す。底部における軸長比は0.25である。

埋土は、黒褐色土層・暗褐色土層・灰黄褐色土層・褐色土層などで構成されている。埋土上部には十和田a降下火山灰が摺鉢状に堆積しており、層厚10cm±を計る。また同じ上部の黒褐色土層・暗褐色土層中には炭化物が少量包含されている。

底面はほぼ平坦で堅くしまっている。底面に径6cm±~8cm±・深さ13cm±~18cm±の副穴が2個確認された。これらの副穴は長軸方向の両端に1個ずつ底面に対して斜位方向に設けられている。

出土遺物 (図版34-87~89・写真図版36-82~84)

出土遺物は、埋土上部から得られた土器片3点(87~89)である。

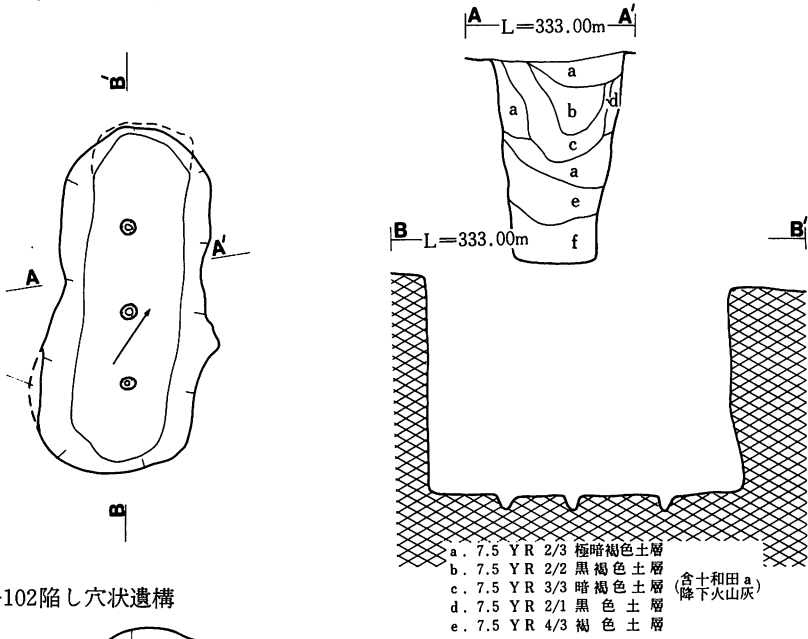
87は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。口縁部文様帯は、縦位の隆帯と横位の綾絡文

とで構成されている。88は口縁部に撚糸文が2条施文されている深鉢の破片である。地文は羽状縄文である。89は地文の上に横位の綾絡文が施文されている深鉢の口縁部片である。地文は単節の斜縄文である。これらの土器片は縄文時代中期前葉に属するものである。

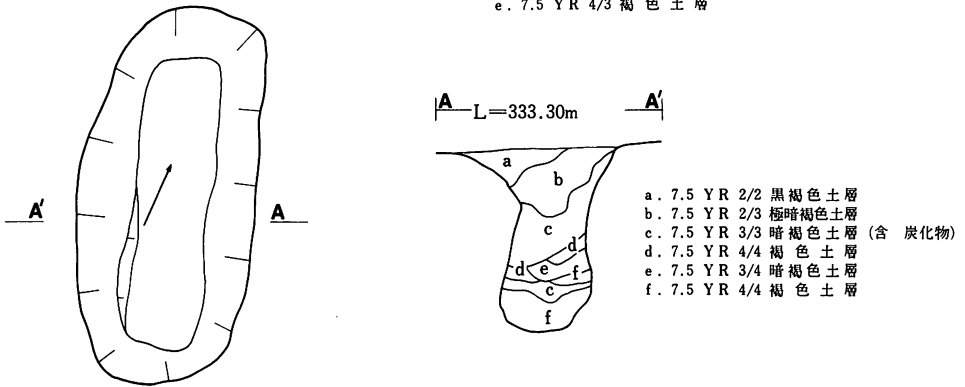
(註) 陥し穴状遺構の記載事項の中で、「底部における軸長比」として示した数値は、次のような計算によって求められた値の小数第3位を四捨五入して得られたものである。

$$\text{軸長比} = \frac{\text{底部の短軸の長さ}}{\text{底部の長軸の長さ}}$$

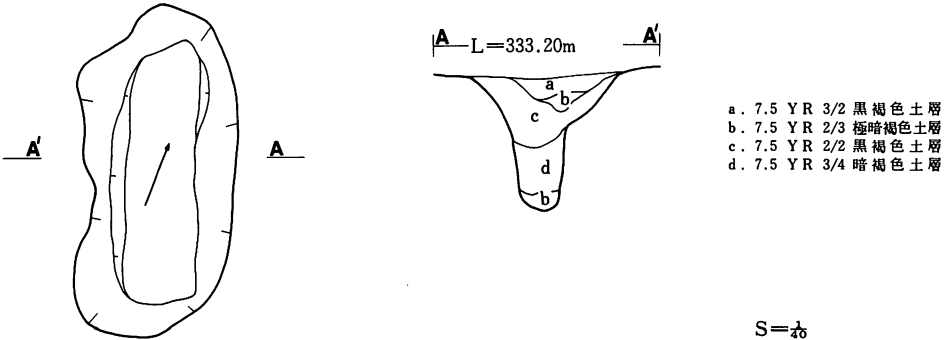
a. D I—101陥し穴状遺構



b. D I—102陥し穴状遺構

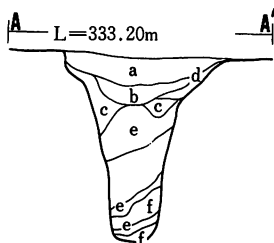
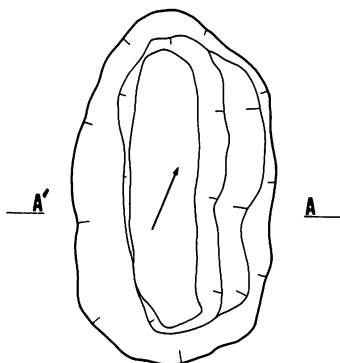


c. D I—103陥し穴状遺構



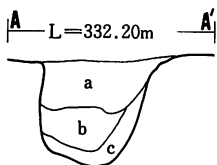
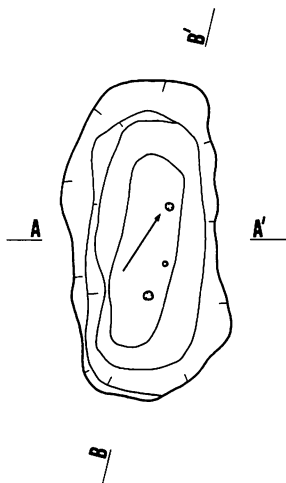
S=46

a. D I—104陥し穴状遺構

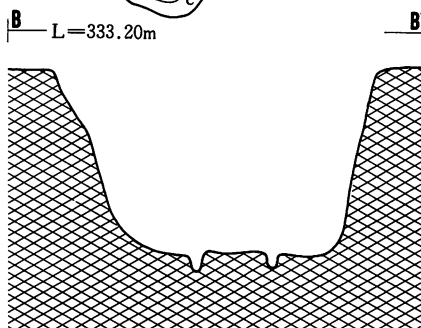


- a. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- b. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層
- c. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層
- d. 7.5 YR 5/6 明褐色土層
- e. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層
- f. 7.5 YR 4/3 褐色土層

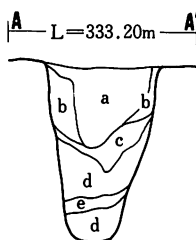
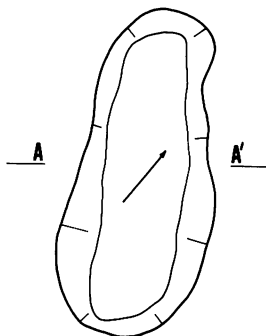
b. D I—105陥し穴状遺構



- a. 7.5 YR 3/2 黒褐色土層
- b. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- c. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層

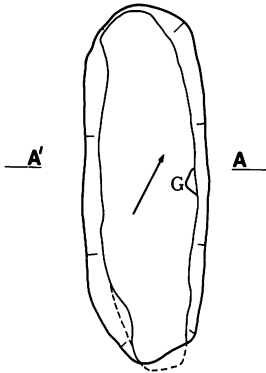


c. D I—106陥し穴状遺構

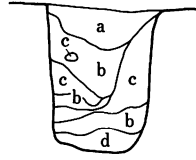


- a. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- b. 7.5 YR 3/2 黒褐色土層
- c. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層
- d. 7.5 YR 4/6 褐褐色土層
- e. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層

a. DI-107 陥し穴状遺構

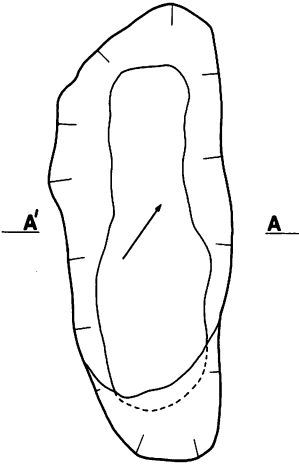


A—L=333.40m—A'

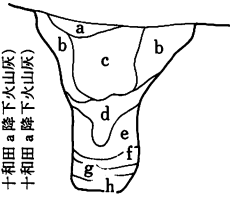


- a. 7.5 YR 3/2 黒褐色土層
- b. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層
- c. 2.5 YR 4/6 褐色土層
- d. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層

b. DI-108 陥し穴状遺構



A—L=333.40m—A'

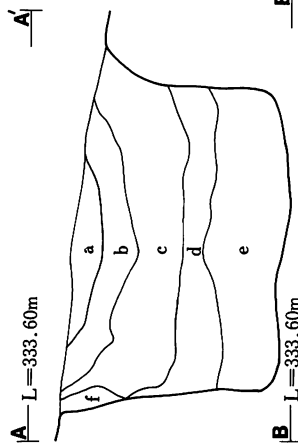
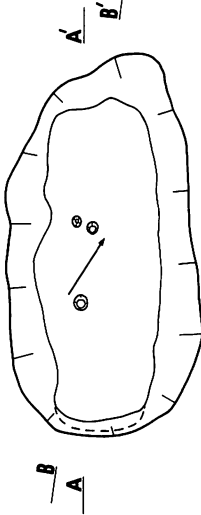


十和田 a 降下火山灰
十和田 a 降下火山灰
十和田 a 降下火山灰

- (含) 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層
- (含) 7.5 YR 3/2 黒褐色土層
- (含) 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層
- (含) 7.5 YR 2/1 黒色土層
- (含) 7.5 YR 4/3 におい黄褐色土層
- (含) 7.5 YR 6/4 におい黄褐色土層
- (含) 7.5 YR 3/2 黒褐色土層
- (含) 7.5 YR 4/4 褐色土層
- (含) 7.5 YR 5/4 におい褐色土層

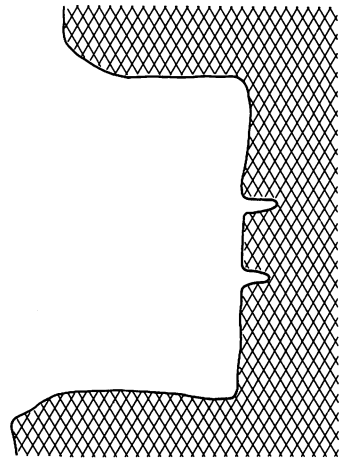
- a. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- b. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層
- c. 7.5 YR 2/1 黒色土層
- d. 7.5 YR 4/3 におい黄褐色土層
- e. 7.5 YR 6/4 におい黄褐色土層
- f. 7.5 YR 3/2 黒褐色土層
- g. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- h. 7.5 YR 5/4 におい褐色土層

c. DI-109 陥し穴状遺構



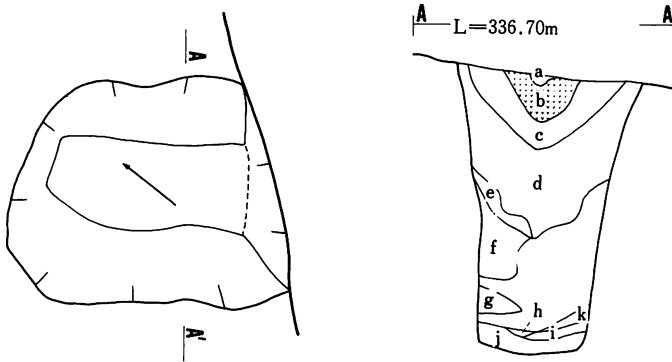
A—L=333.60m—A'

B—L=333.60m—B'



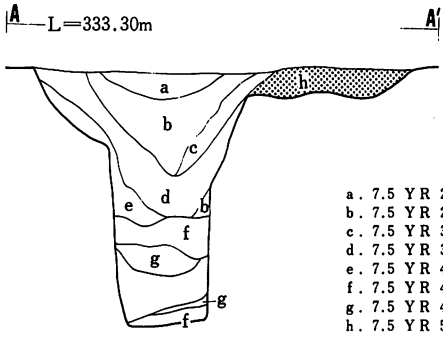
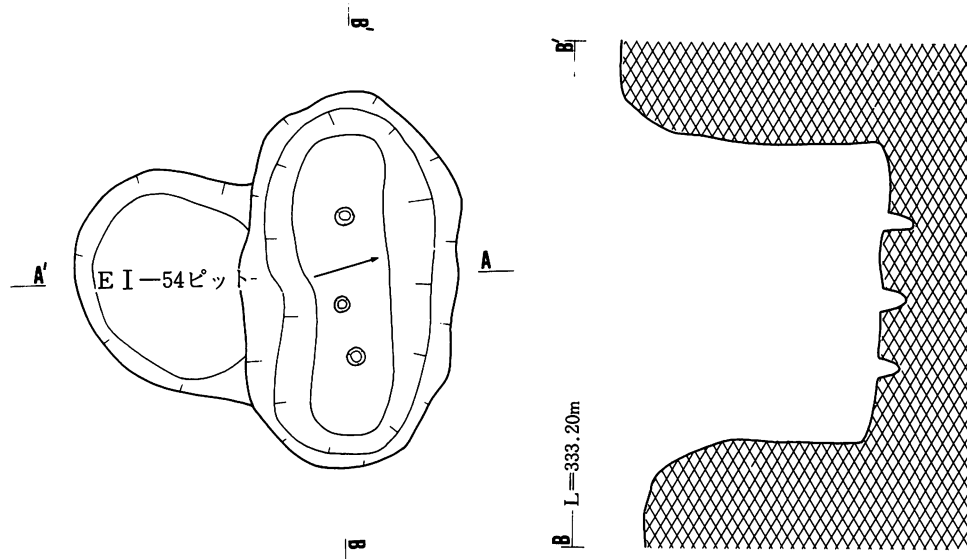
S=4

a. D III-101 陥し穴状遺構



- a. 7.5 YR 3/1 黒褐色土層 (含 炭化物)
- b. 7.5 YR 7/1 明褐色土層 (十和田 a 降下火山灰)
- c. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- d. 7.5 YR 5/6 明褐色土層
- e. 7.5 YR 5/3 にぶい褐色土層
- f. 10 YR 6/6 明黄褐色土層
- g. 10 YR 4/6 褐色土層
- i. 10 YR 6/3 にぶい黄褐色土層
- j. 10 YR 5/6 黄褐色土層

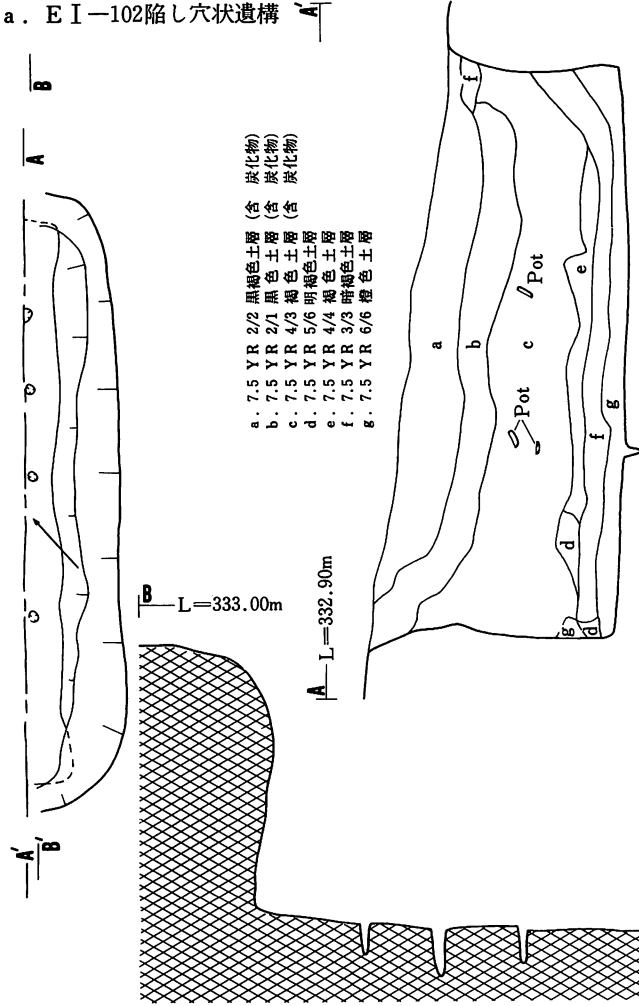
b. E I-54ピット・E I-101 陥し穴状遺構



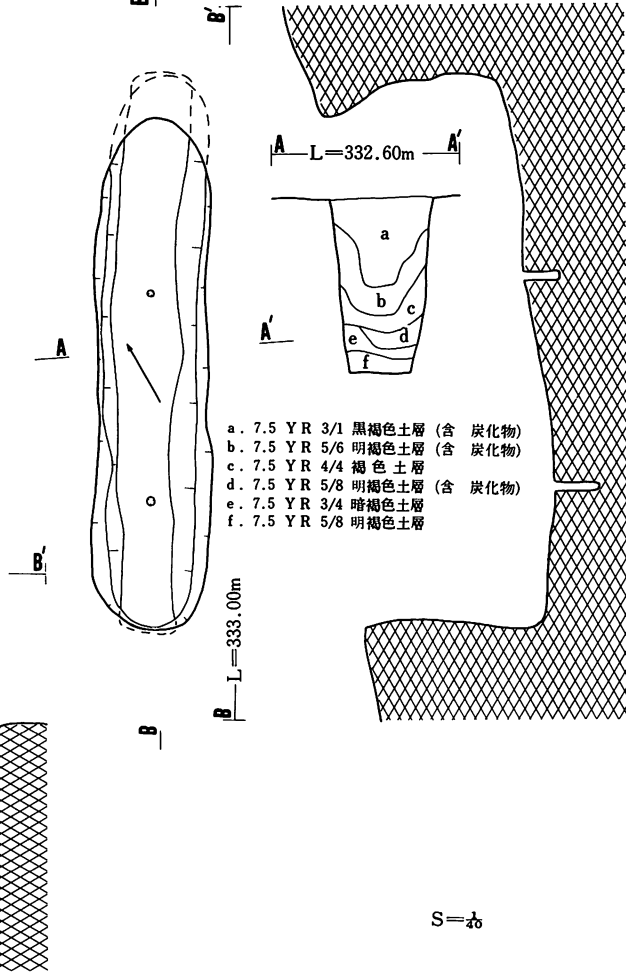
- a. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- b. 7.5 YR 2/3 極暗褐色土層 (含 十和田 a 降下火山灰)
- c. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層 (含 十和田 a 降下火山灰)
- d. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層
- e. 7.5 YR 4/6 褐色土層
- f. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- g. 7.5 YR 4/3 褐色土層
- h. 7.5 YR 5/8 明褐色土層 (焼土)

図版 13

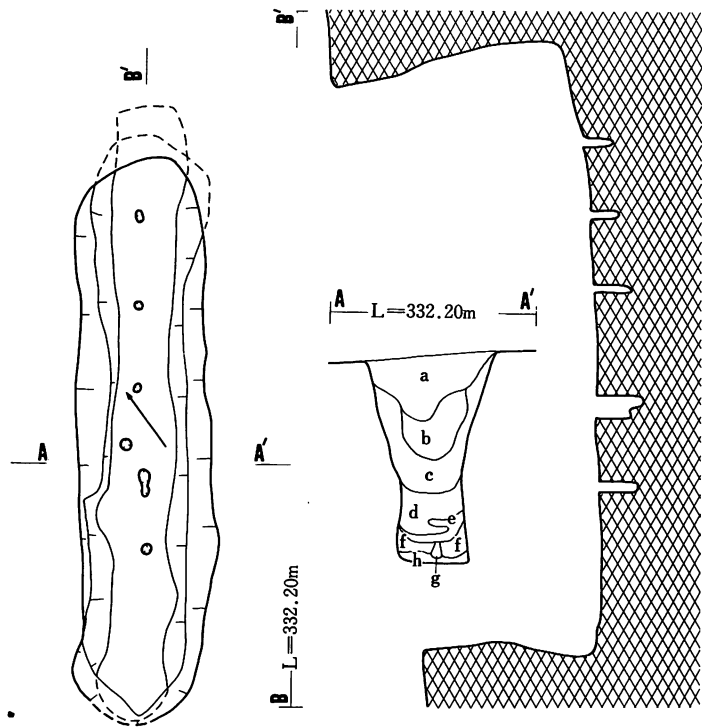
a. EI-102 陥し穴状遺構



b. EI-103 陥し穴状遺構

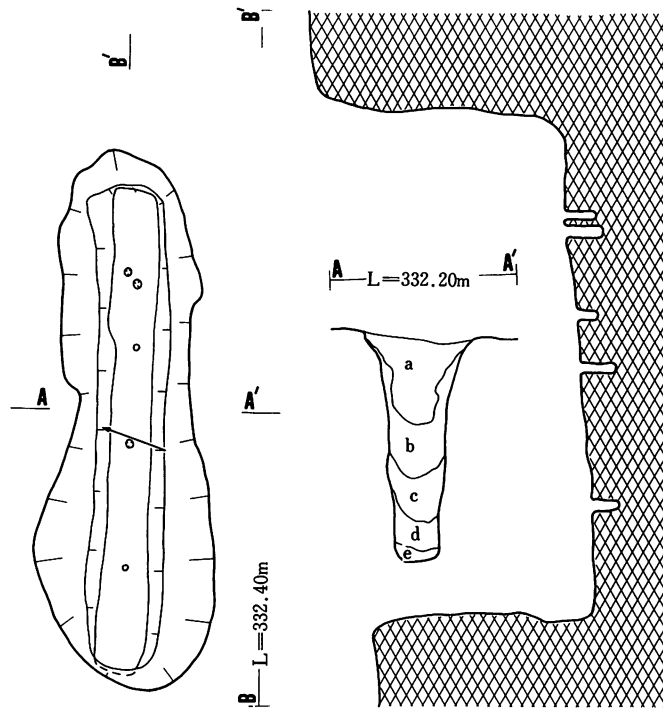


a. EI-104 陥し穴状遺構



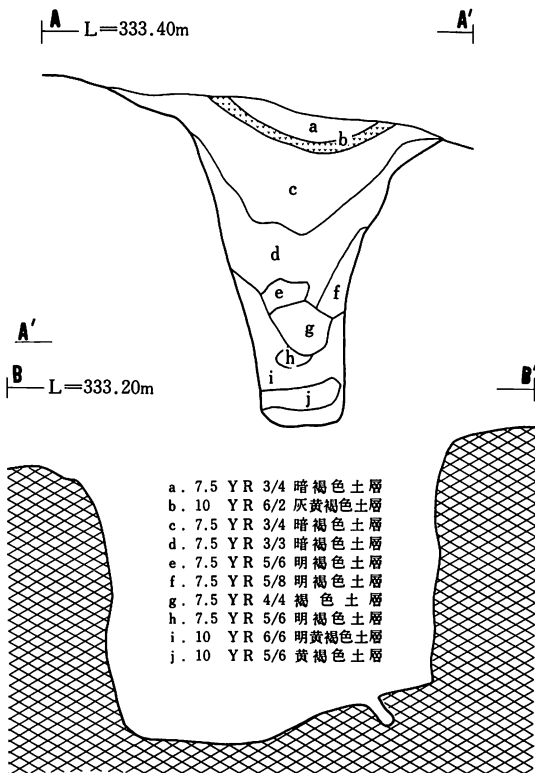
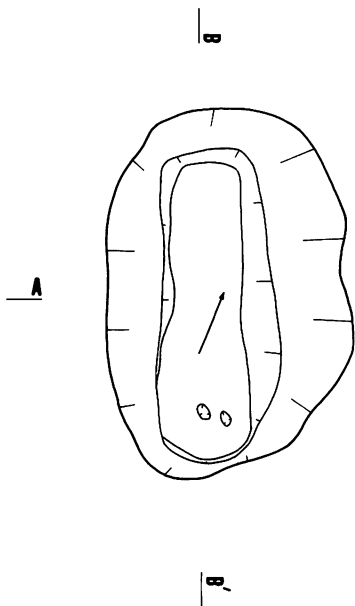
- a. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- b. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層
- c. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層
- d. 7.5 YR 4/6 褐色土層
- e. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層
- f. 7.5 YR 5/6 明褐色土層
- g. 7.5 YR 6/6 橙色土層
- h. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層

b. EI-105 陥し穴状遺構

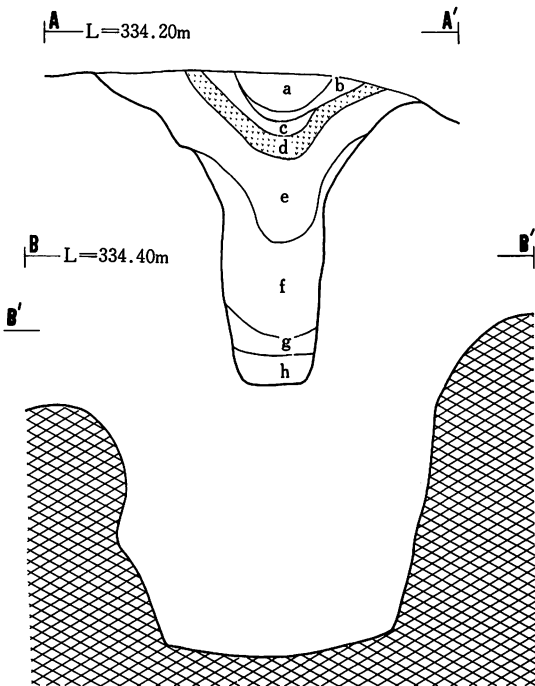
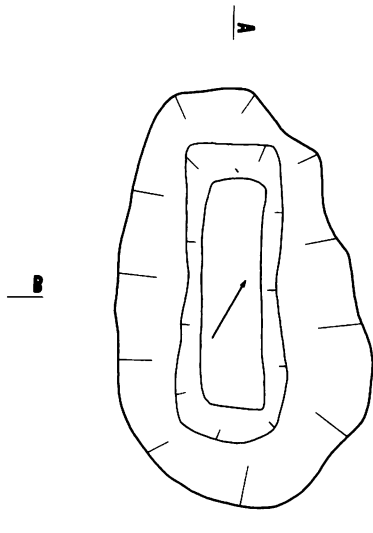


- a. 7.5 YR 3/1 黒褐色土層 (含炭化物)
- b. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層
- c. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層
- d. 7.5 YR 3/2 黒褐色土層
- e. 7.5 YR 2/1 黒色土層

a. EI-106 陥し穴状遺構



b. EI-107 陥し穴状遺構

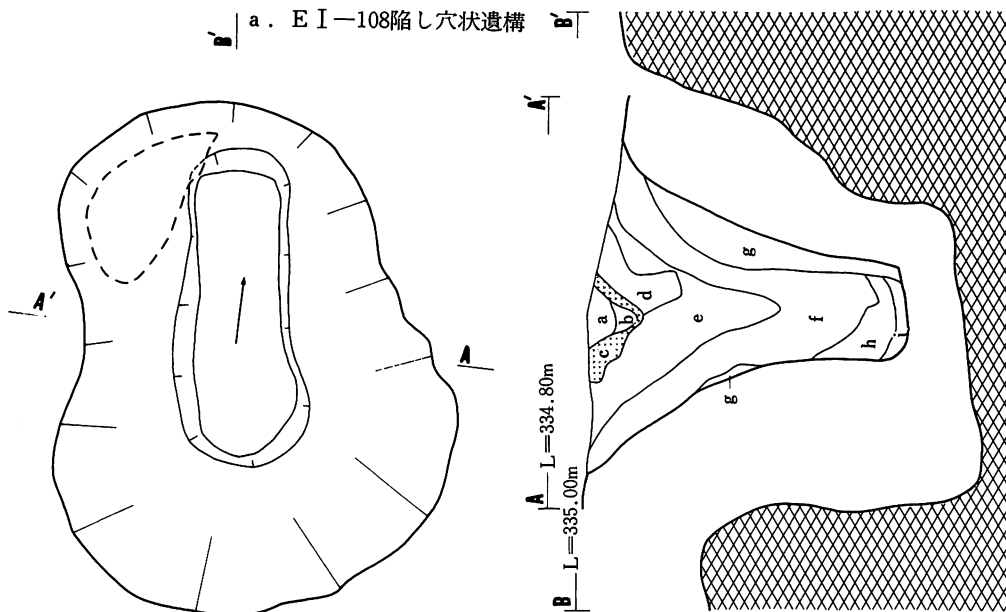


- a. 7.5 YR 2/2 黒褐色土層 (含炭化物)
 b. 7.5 YR 1.7/1 黒色土層
 c. 7.5 YR 4/2 灰褐色土層 (含炭化物)
 d. 10 YR 6/2 灰黄褐色土層 (十和田a降下火山灰)
 e. 7.5 YR 4/4 褐色土層 (含炭化物)
 f. 7.5 YR 4/4 褐色土層
 g. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層
 h. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層

図版16

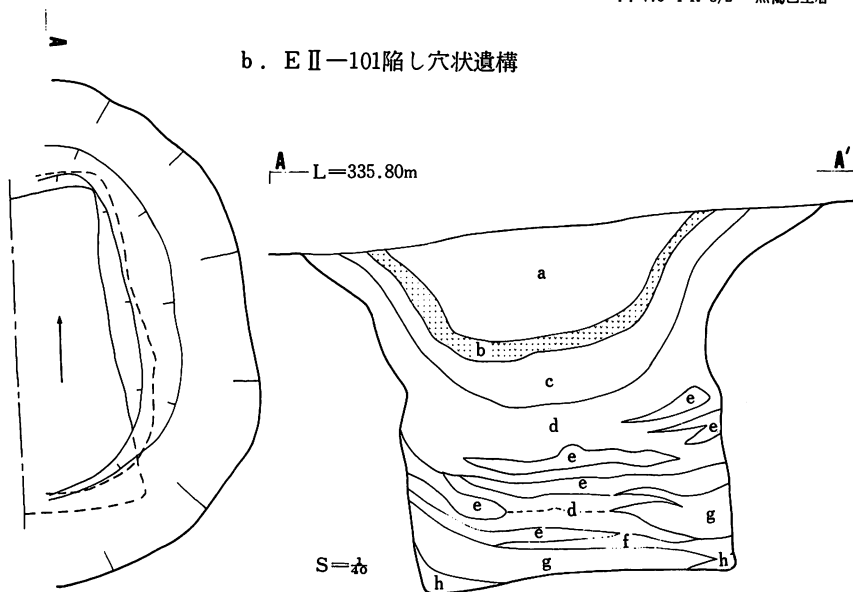
S=40

a. E I-108陥し穴状遺構



- a. 7.5 YR 1.7/1 黑色土層
- b. 7.5 YR 4/2 灰褐色土層
- c. 10 YR 6/2 灰黄褐色土層 (十和田 a 降下火山灰)
- d. 7.5 YR 4/6 褐色土層 (含炭化物)
- e. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層 (含炭化物)
- f. 7.5 YR 2/2 黑褐色土層
- g. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- h. 7.5 YR 2/2 黑褐色土層
- i. 7.5 YR 3/2 黑褐色土層

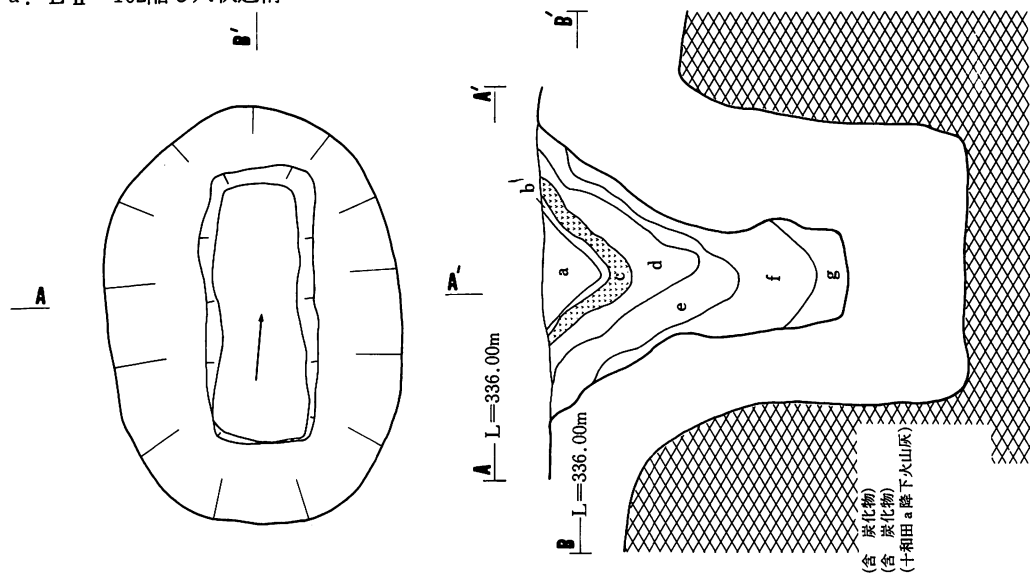
b. E II-101陥し穴状遺構



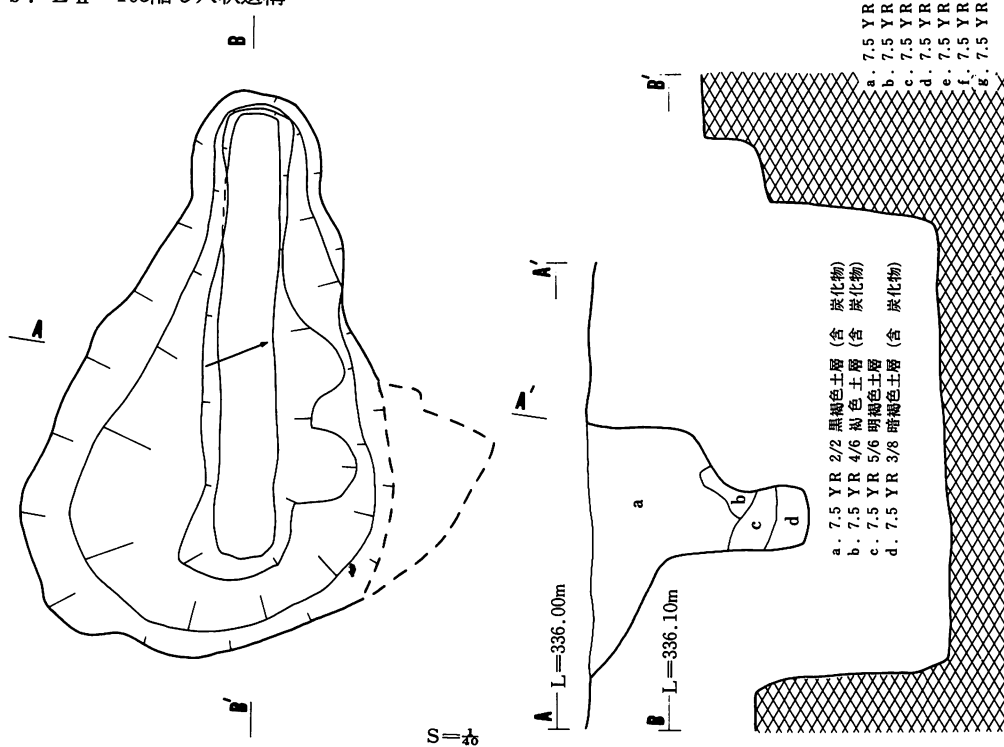
- a. 7.5 YR 2/1 黑色土層 (含炭化物)
- b. 10 YR 6/2 灰黄褐色土層 (十和田 a 降下火山灰)
- c. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- d. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層
- e. 7.5 YR 5/6 明褐色土層
- f. 7.5 YR 5/8 明褐色土層
- g. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- h. 7.5 YR 5/6 明褐色土層

図版17

a. E II-102 陥し穴状遺構

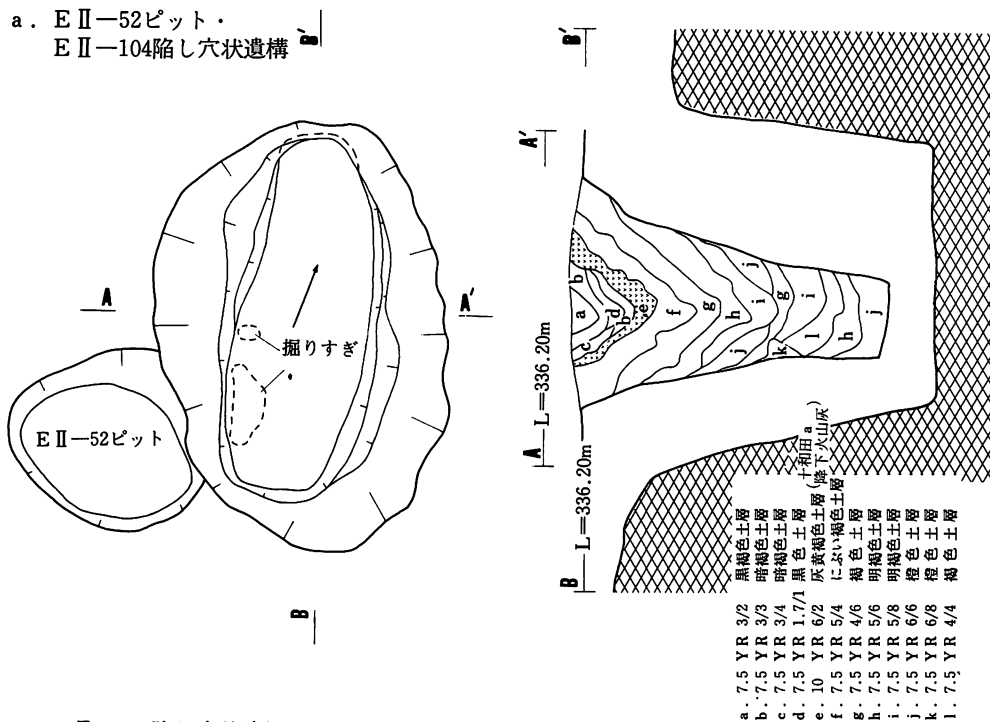


b. E II-103 陥し穴状遺構

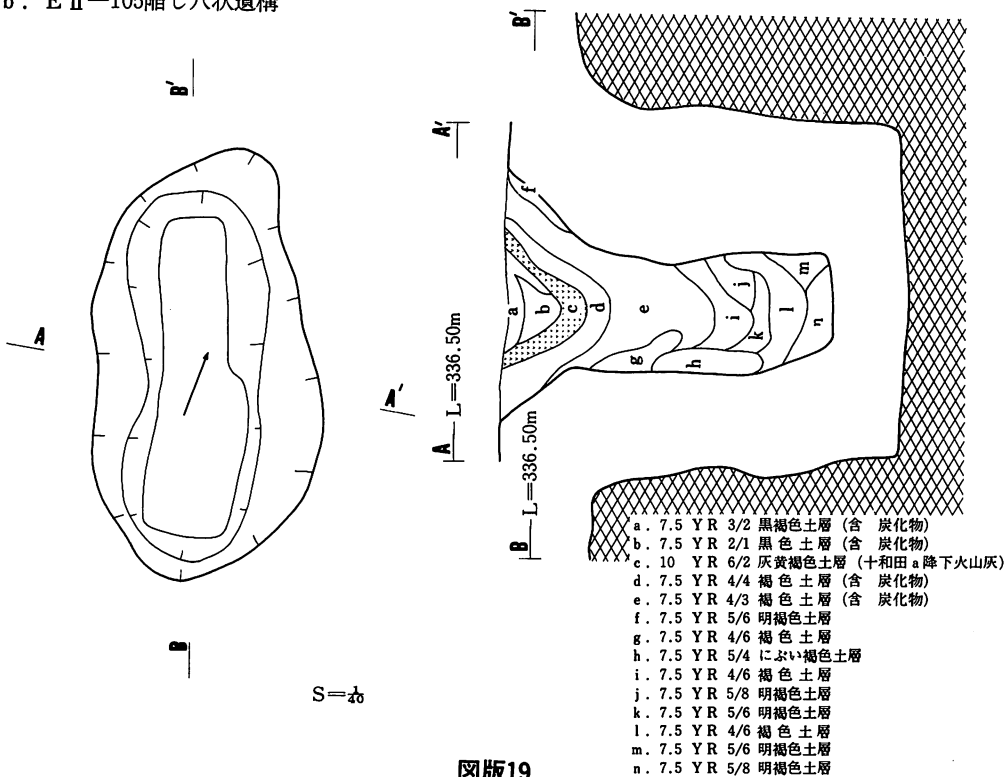


図版18

a. E II-52ピット・
E II-104陥し穴状遺構

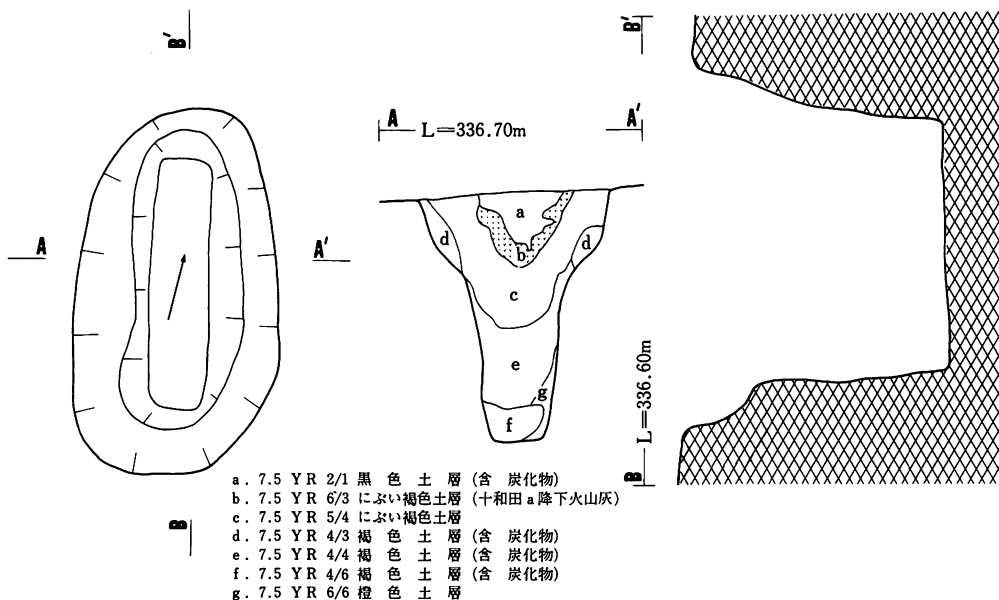


b. E II-105陥し穴状遺構

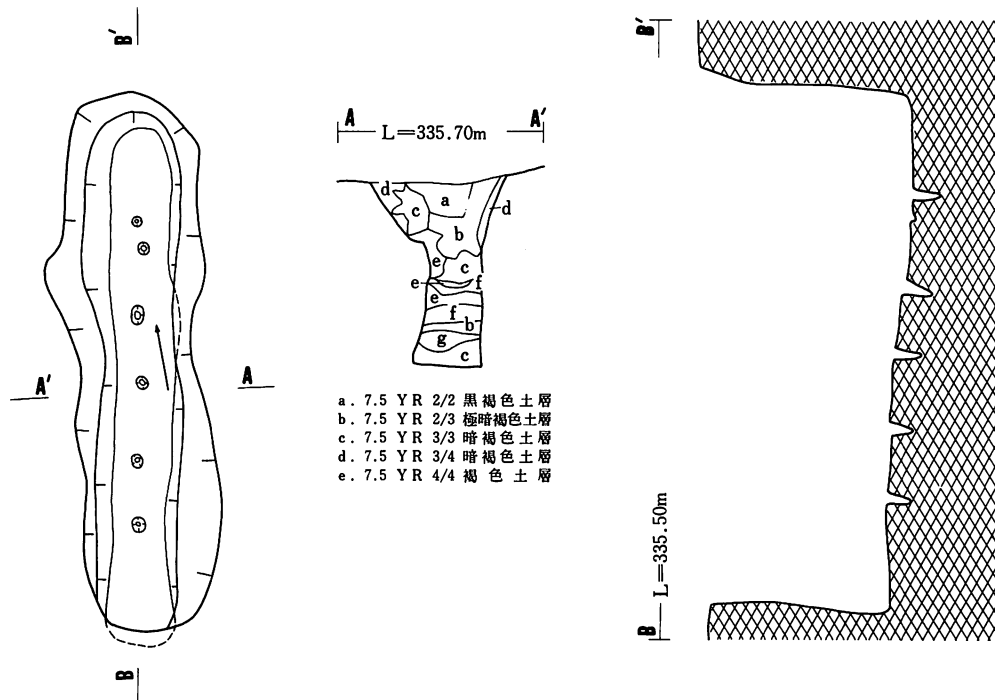


図版19

a. E II—106 陥し穴状遺構

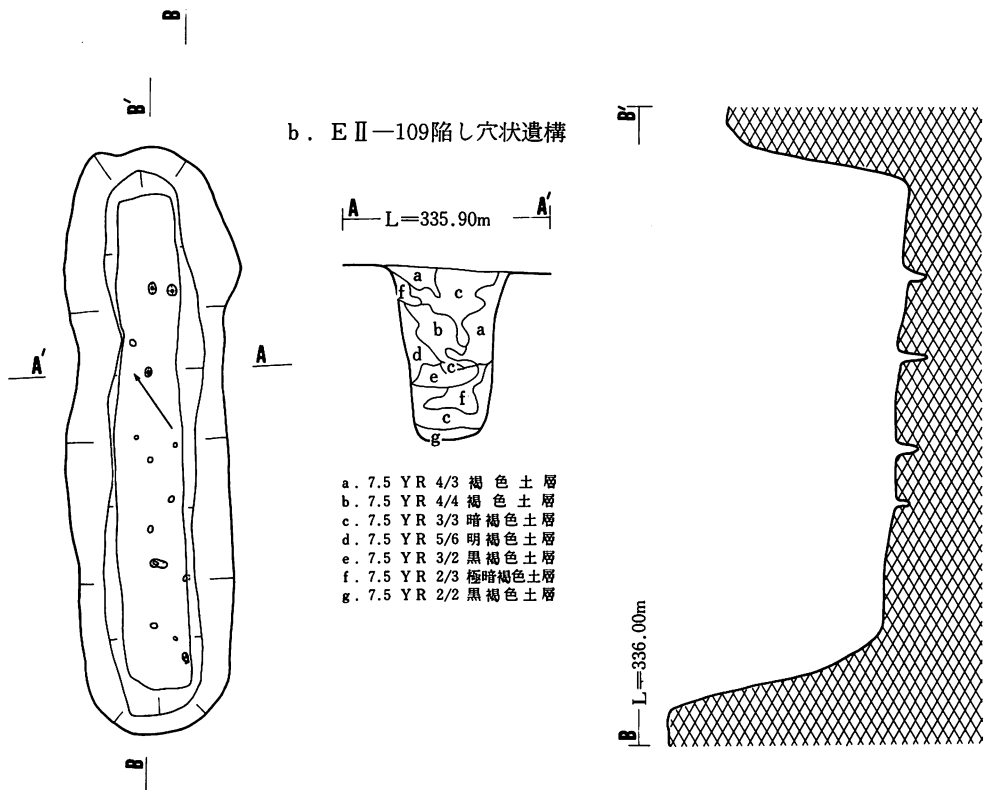
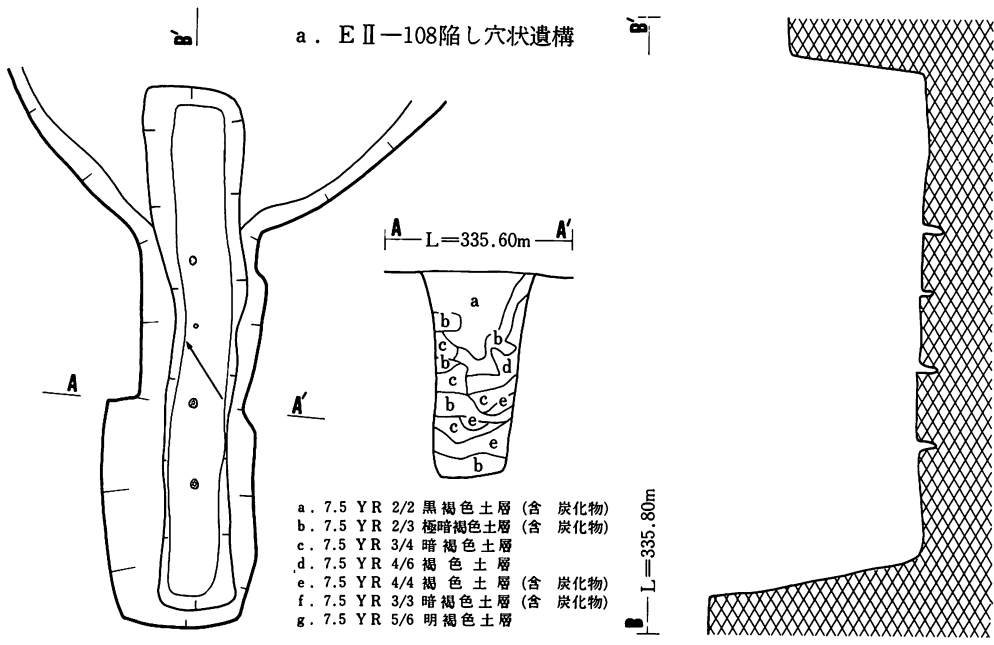


b. E II—107 陥し穴状遺構



S=あ

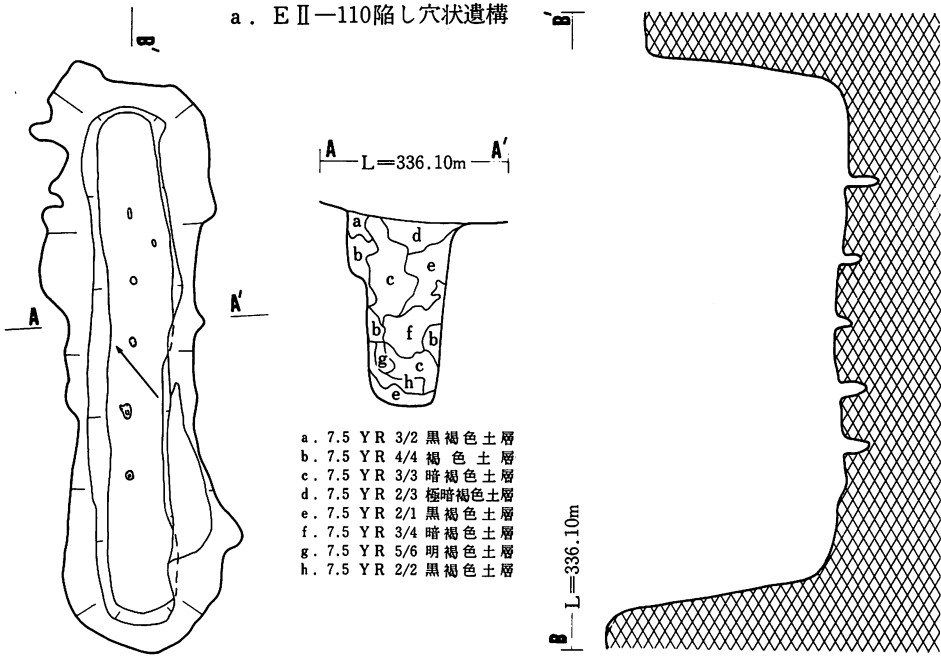
図版20



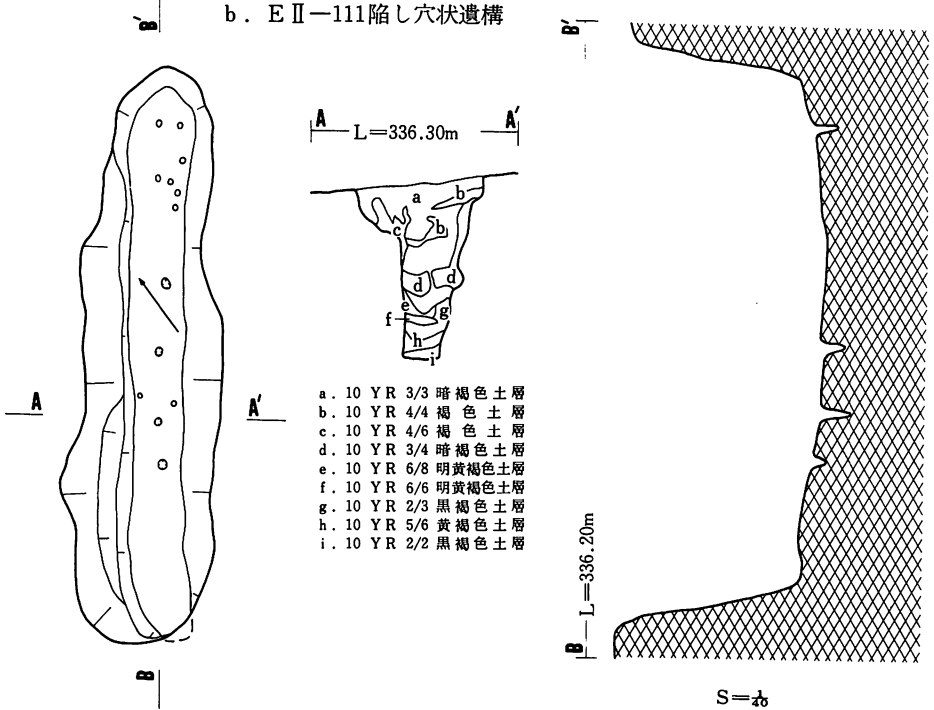
図版21

S=6

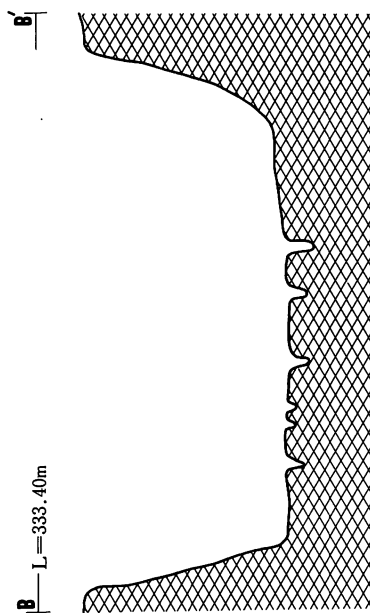
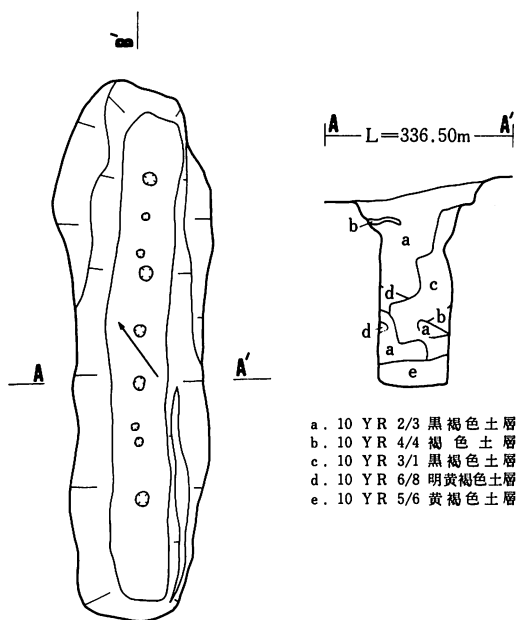
a. E II-110 陥し穴状遺構



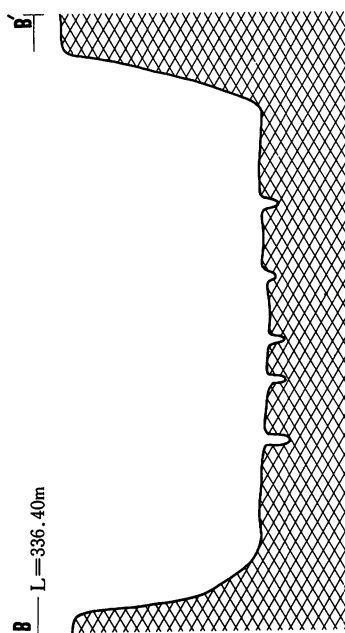
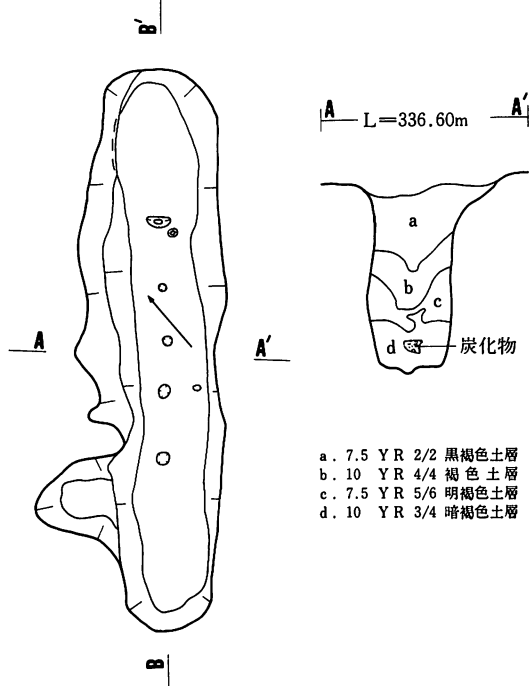
b. E II-111 陥し穴状遺構



a. E III—101 陷し穴状遺構

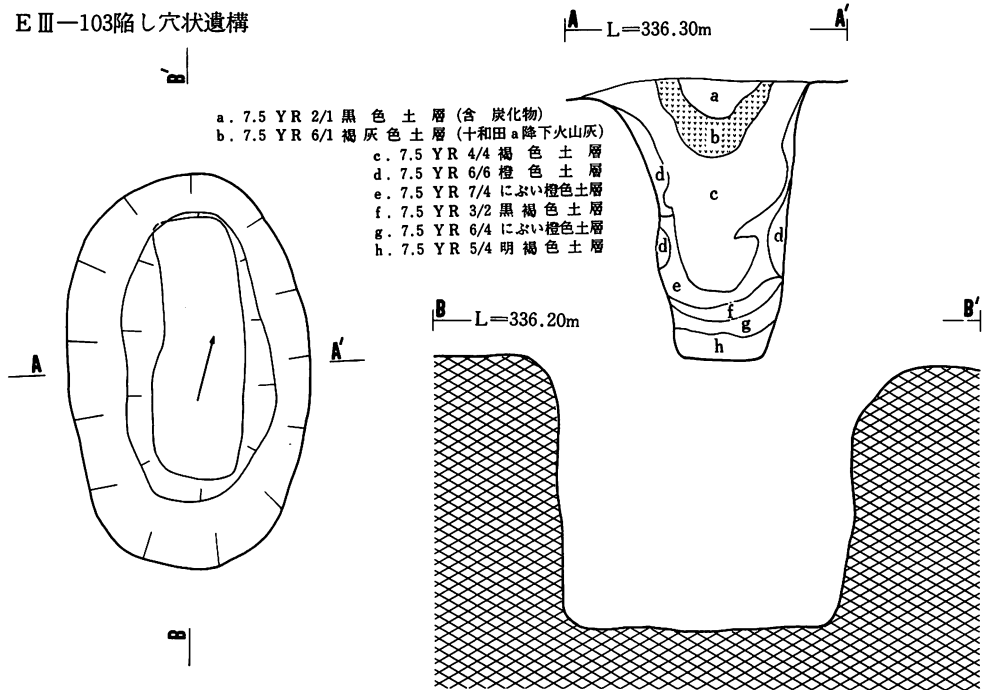


b. E III—102 陷し穴状遺構

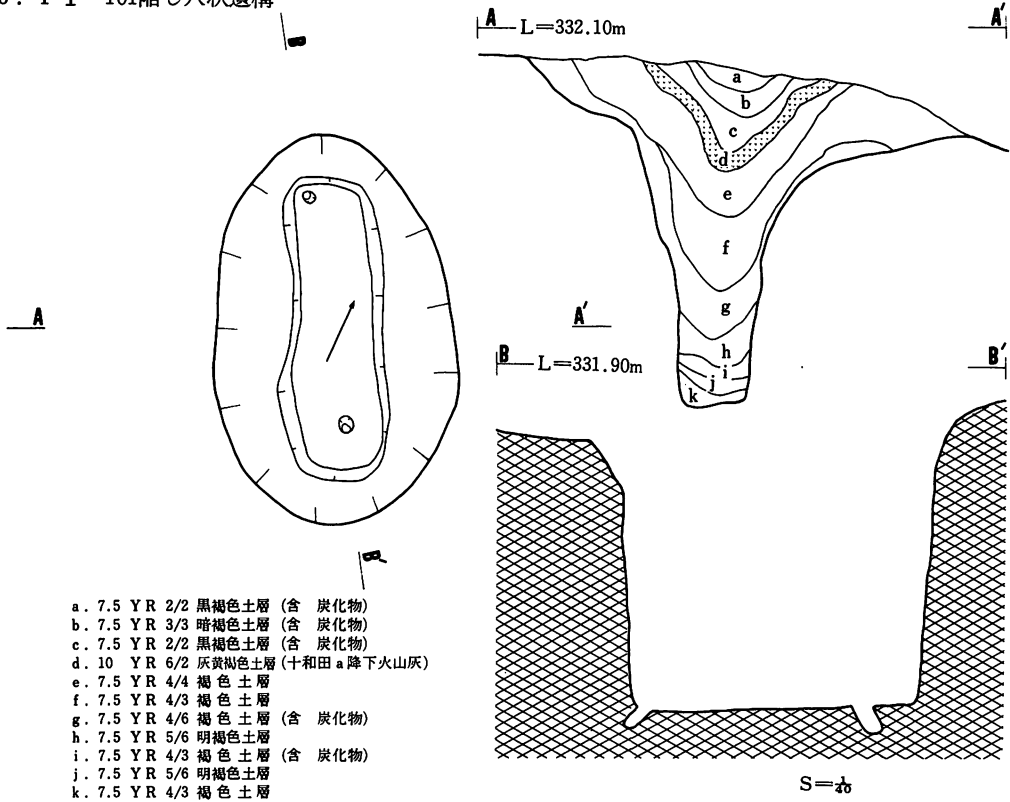


S=40

a. E III-103 陥し穴状遺構



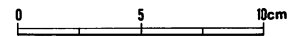
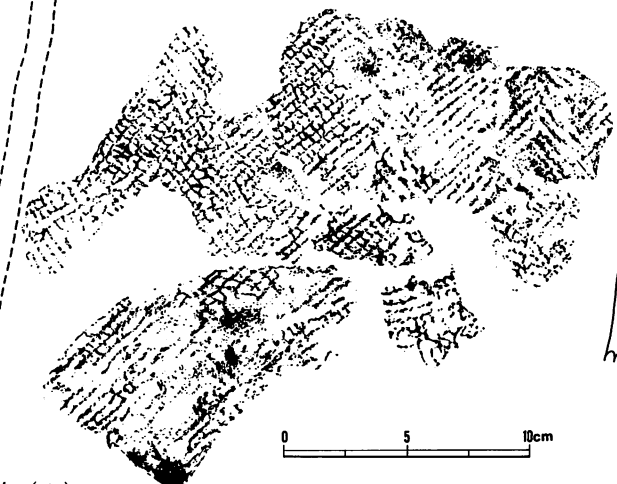
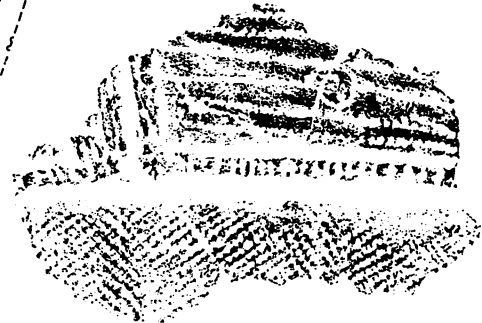
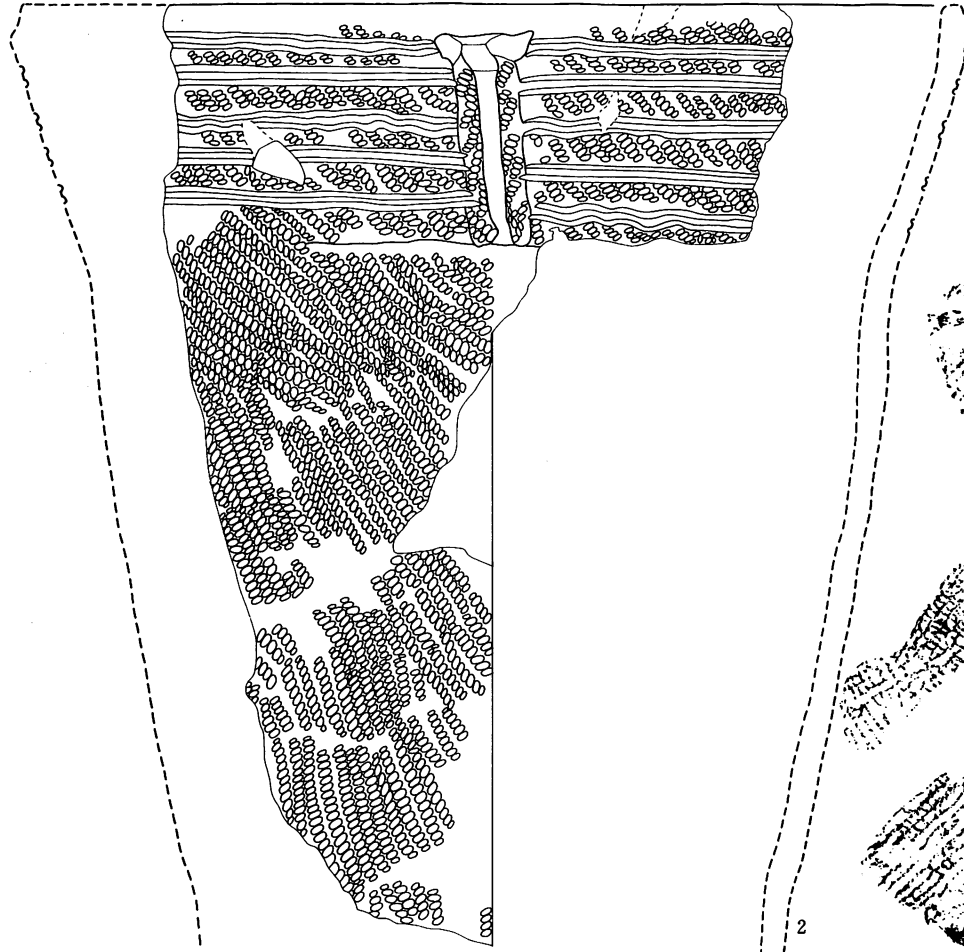
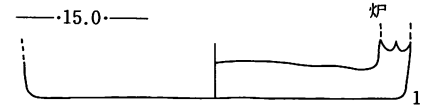
b. F I-101 陥し穴状遺構



図版24

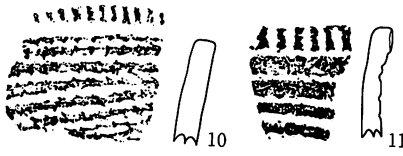
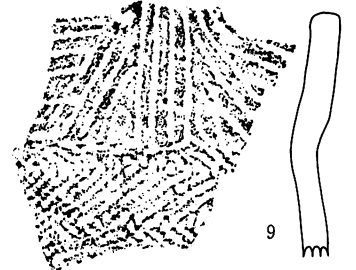
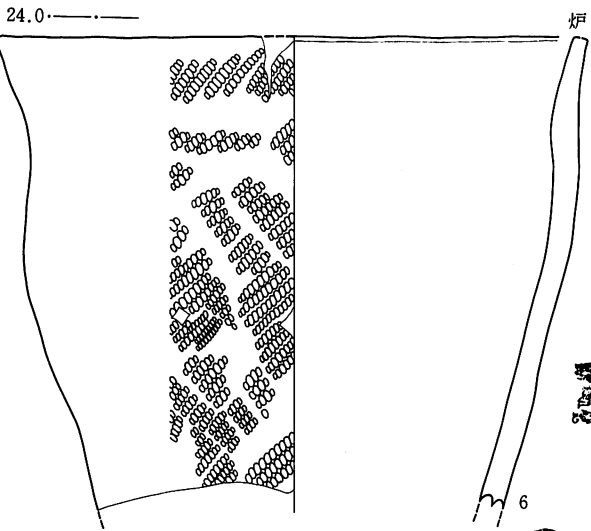
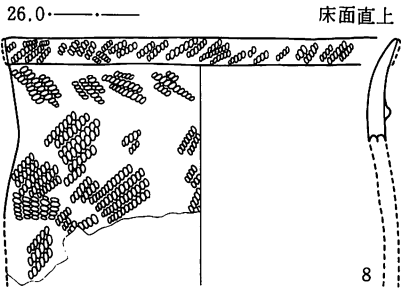
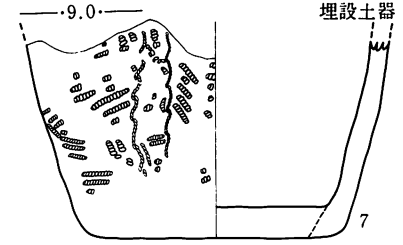
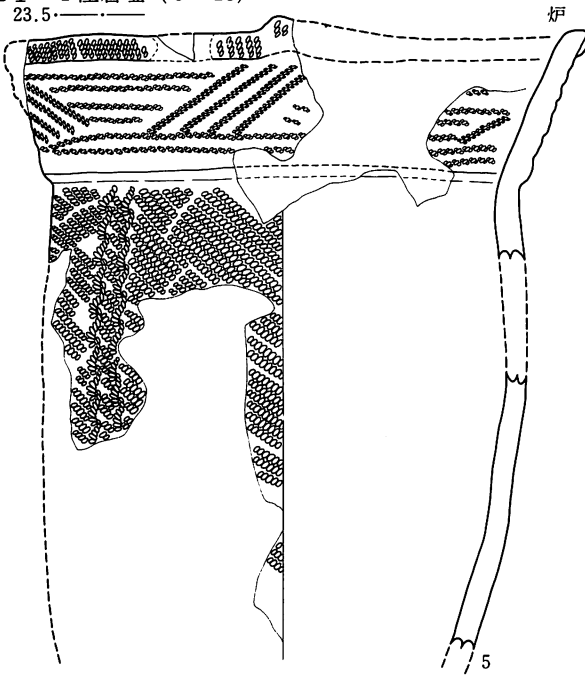
D II-1 住居址 (1~4)
(38.0)

床面上



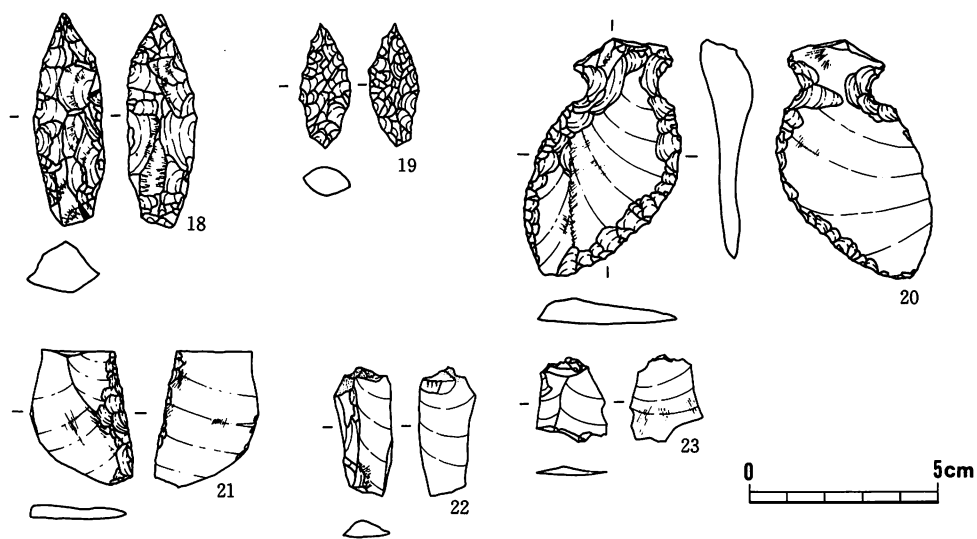
図版25 遺構内の出土遺物 (1)

E I-1 住居址 (5~23)
23.5

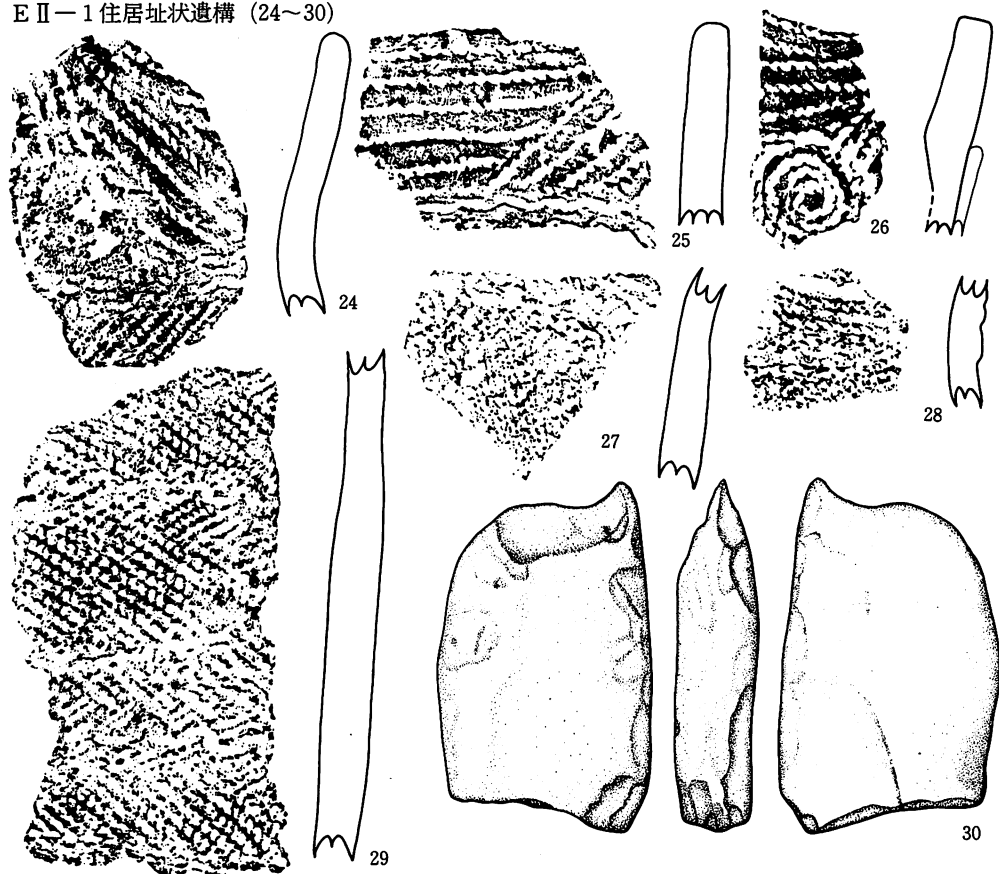


0 5 10cm

図版26 遺構内の出土遺物 (2)

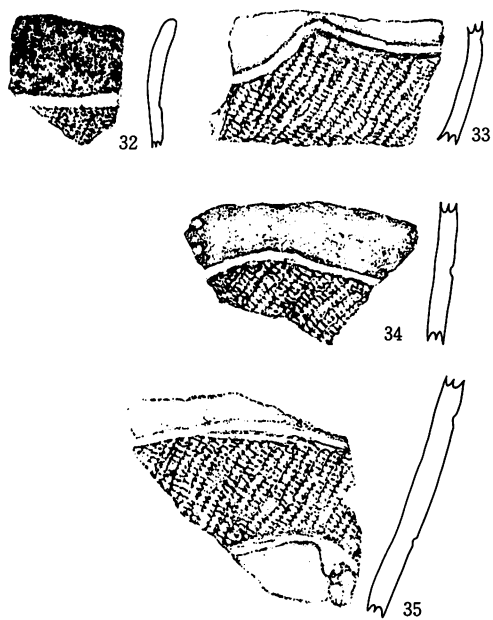
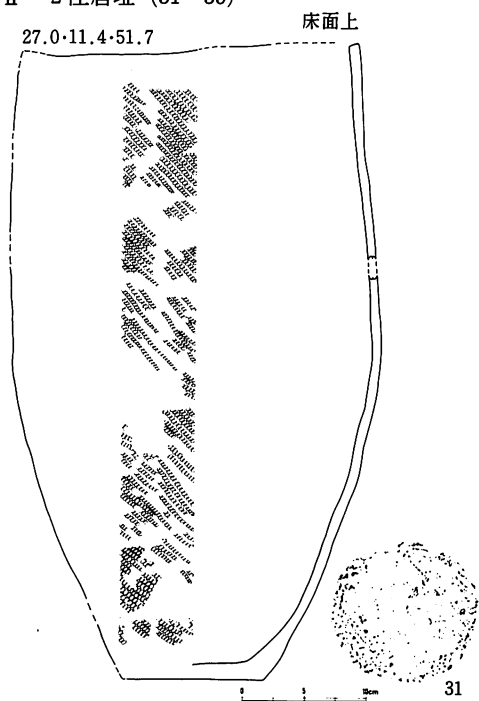


E II - 1 住居址状遺構 (24~30)

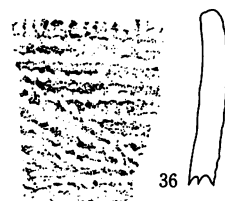


図版27 遺構内の出土遺物 (3)

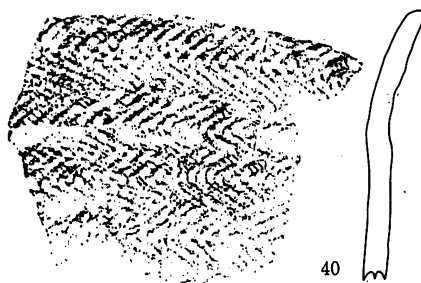
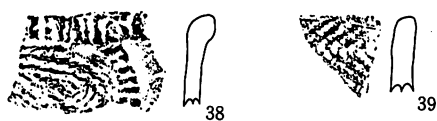
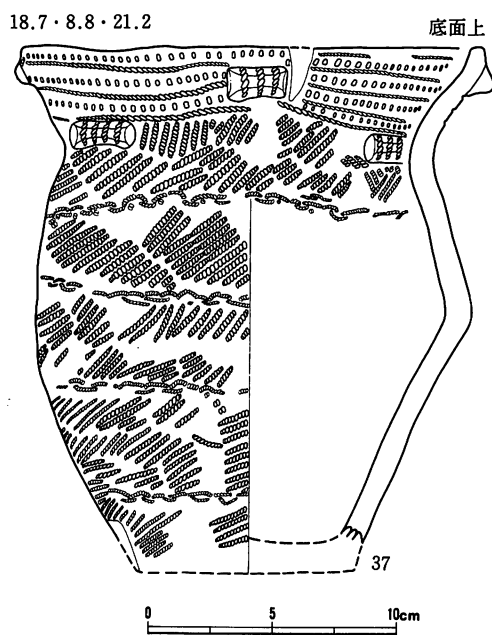
E II-2 住居址 (31~35)



E I-53ピット (36)

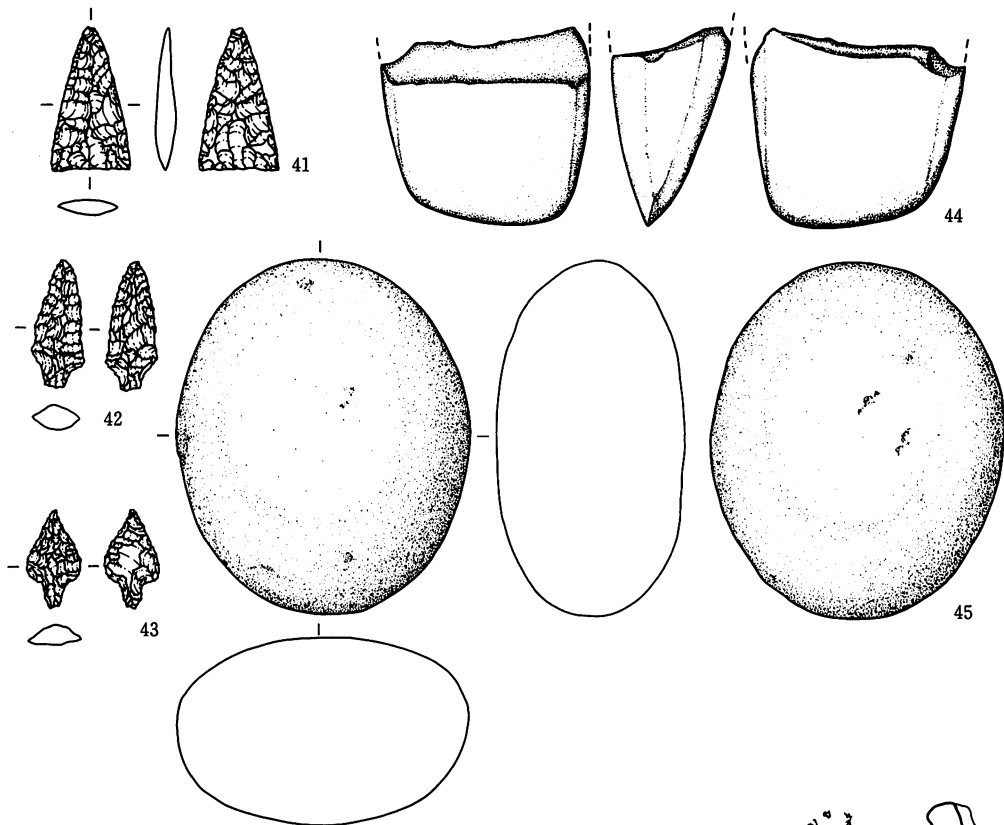


E I-55ピット (37~45)

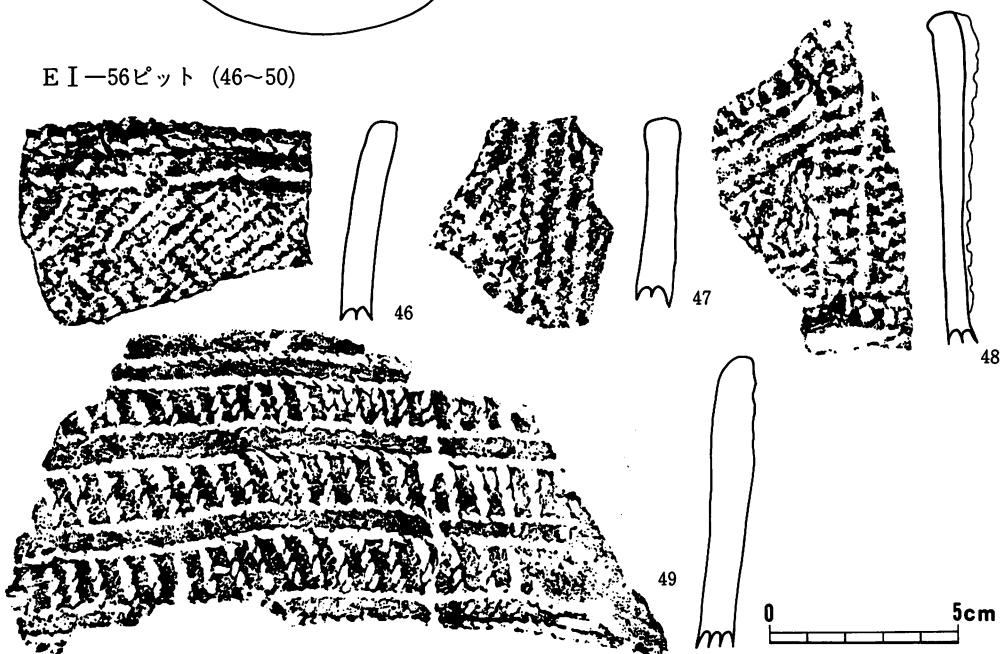


図版28 遺構内の出土遺物 (4)

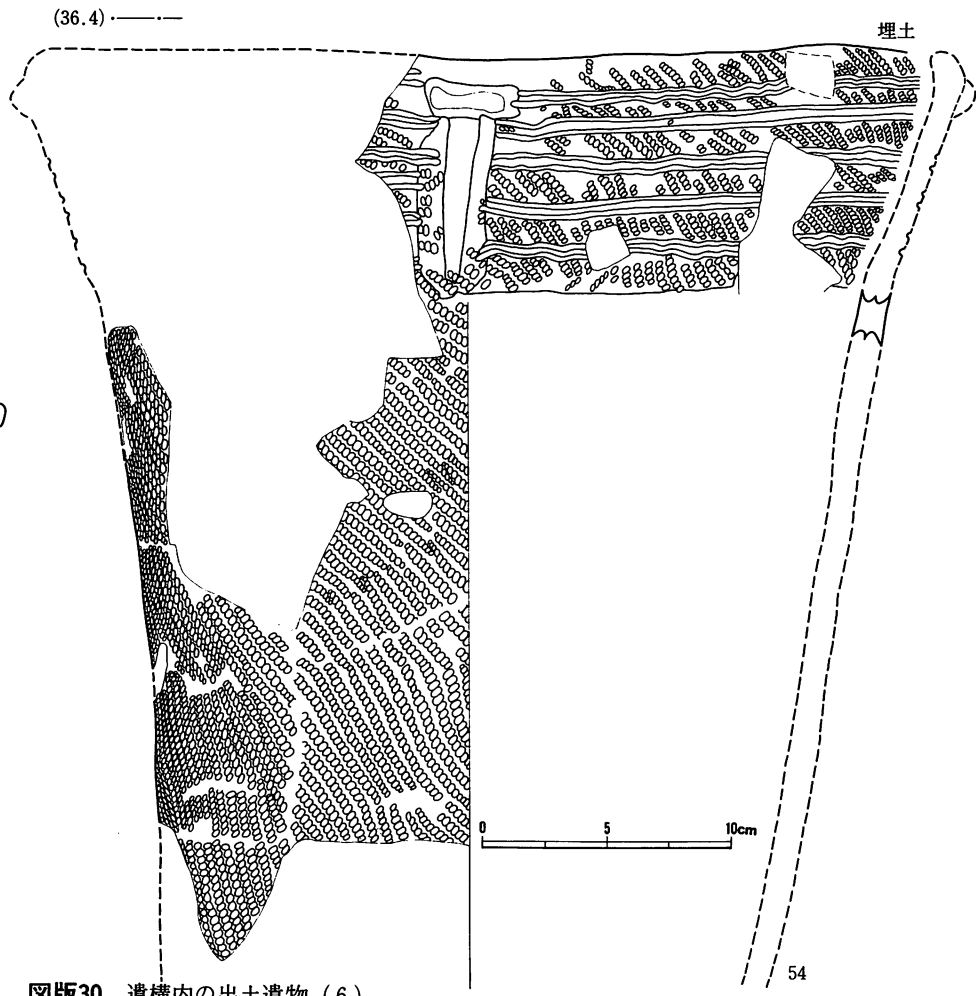
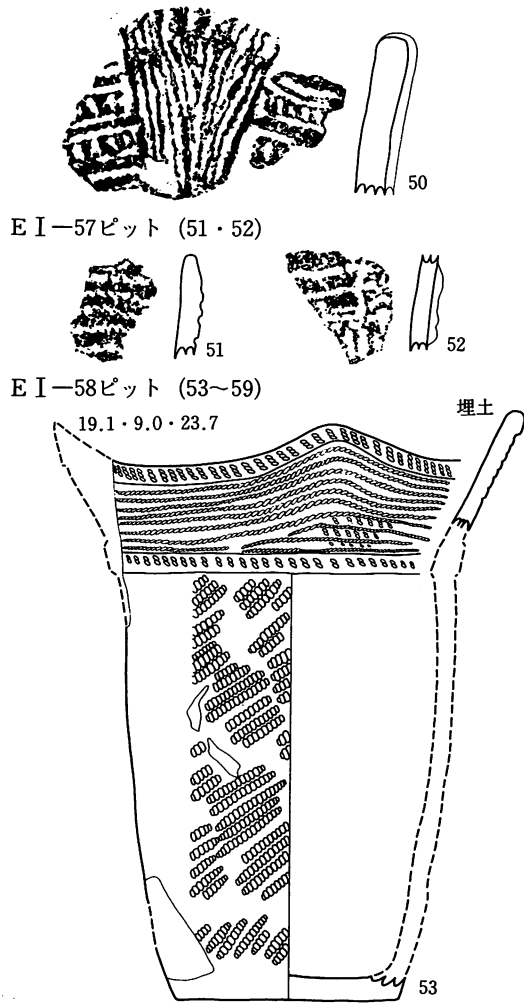
E I—55ピット (41~45)



E I—56ピット (46~50)



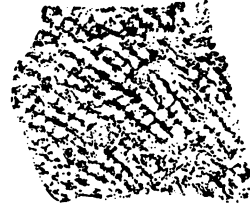
図版29 遺構内の出土遺物 (5)



図版30 遺構内の出土遺物 (6)



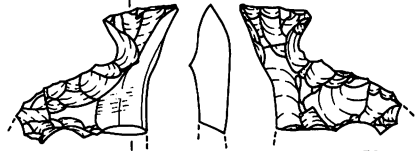
55



58

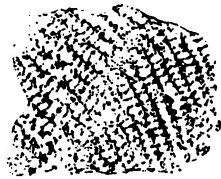


56



59

E I-59ピット (60~62)



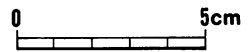
60



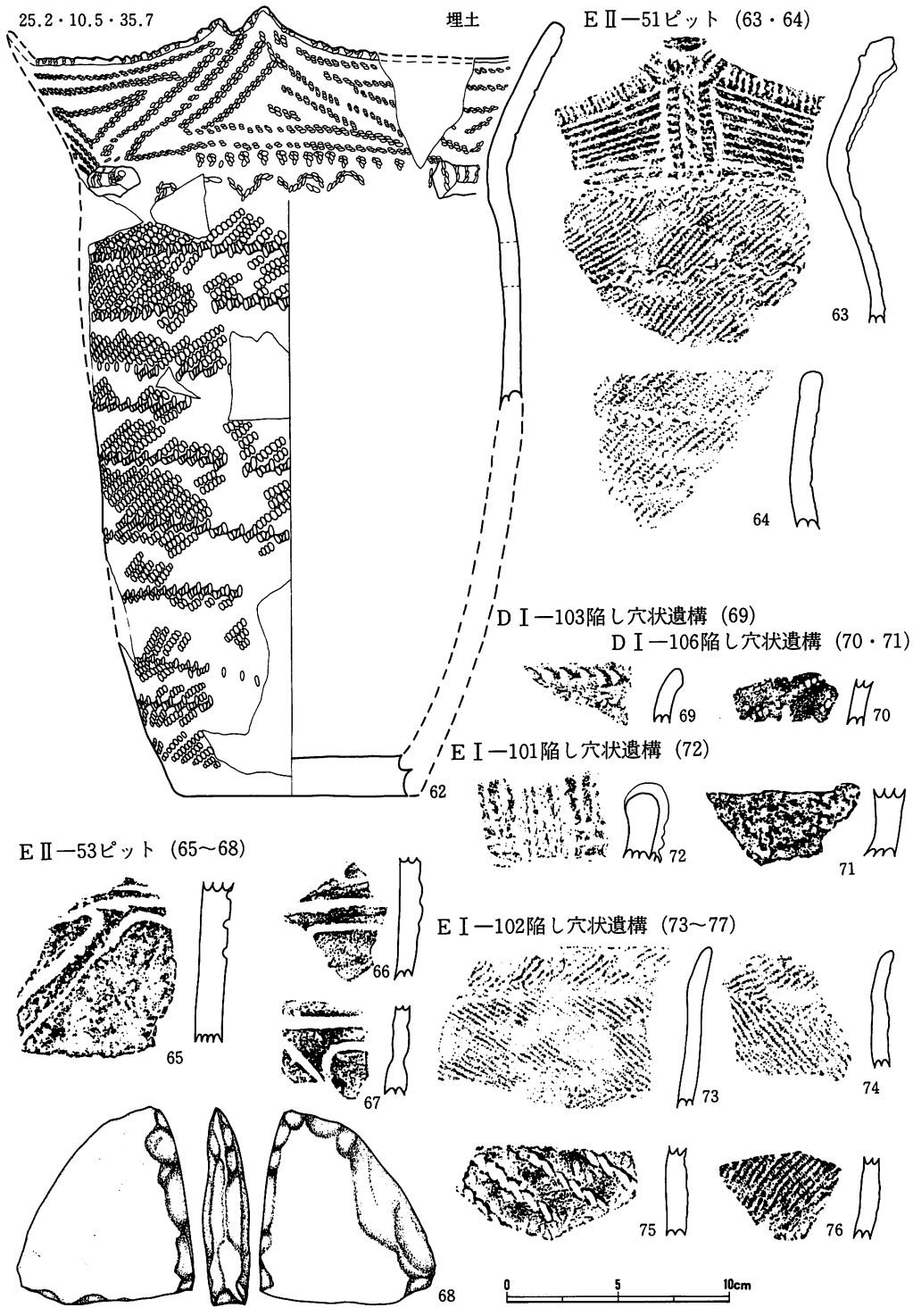
57



61

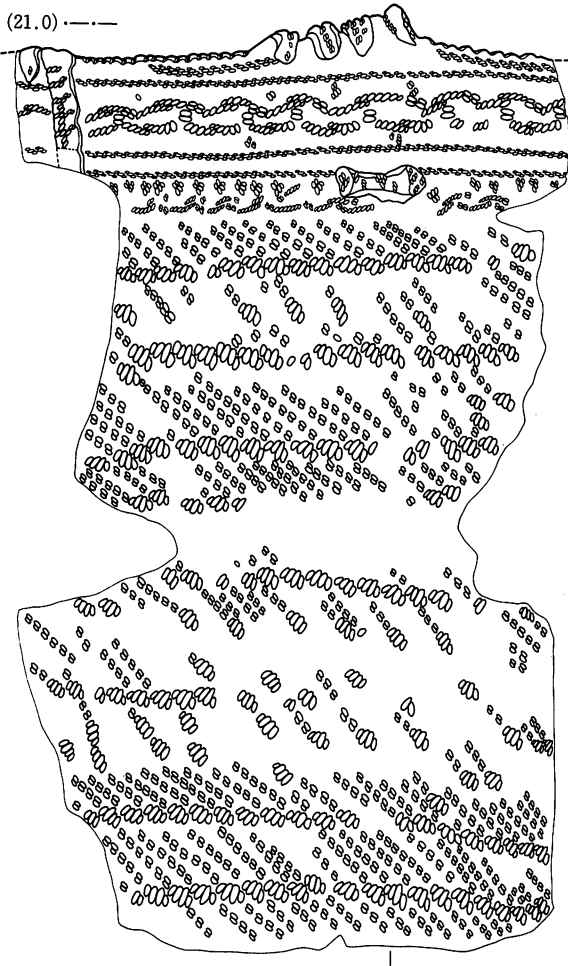
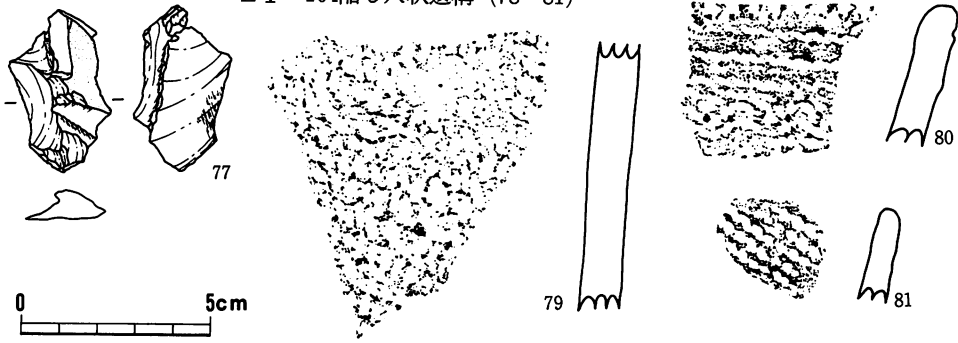


図版31 遺構内の出土遺物 (7)

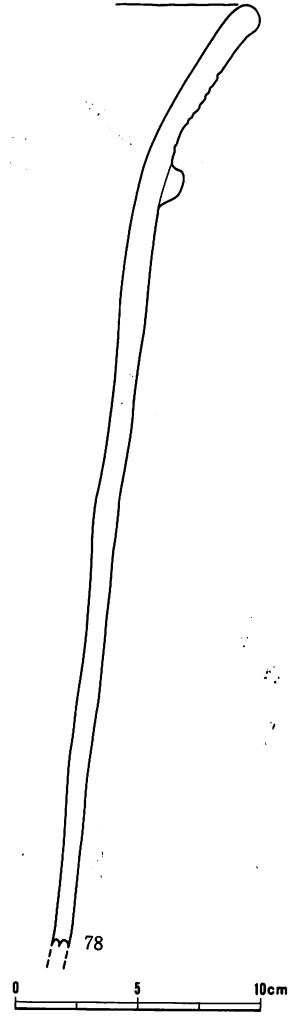


図版32 遺構内の出土遺物 (8)

E I-104陥し穴状遺構 (78~81)



埋土



図版33 遺構内の出土遺物 (9)

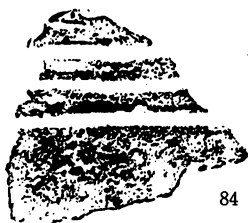
E II-103 陥し穴状遺構 (82~84)



82



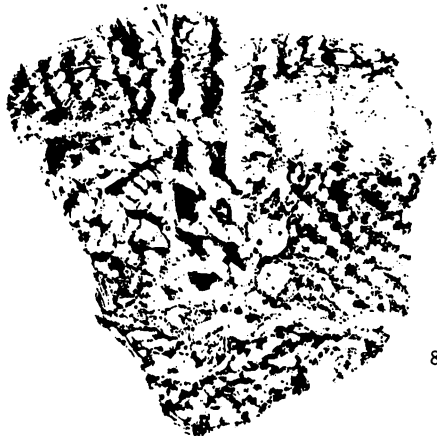
83



84



F I-101 陥し穴状遺構 (87~89)



87



E II-104 陥し穴状遺構 (85・86)



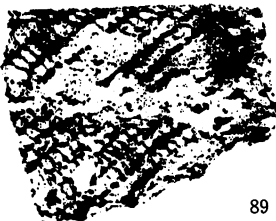
85



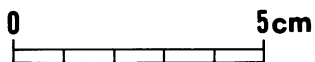
86



88



89



図版34 遺構内の出土遺物 (10)

2. 遺構外の出土遺物

荒屋Ⅱ遺跡の遺構外の出土遺物は、土器・石器からなる。土器は縄文時代・弥生時代に位置づけられるものである。石器としては、石匙・筥状石器・スクレイパー・不定形石器・石斧・半円状扁平打製石器・凹石・磨石が出土している。以上の遺物はⅠ層およびⅢ層から出土しているが、これらの中でⅠ層から出土したものは時期の識別ができないほど磨滅している縄文土器の破片数点だけである。したがって、ここではⅢ層の暗褐色土層中から出土した遺物についてのみ記述することにする。

(1) 土器

縄文土器 荒屋Ⅱ遺跡からは、第Ⅱ群土器・第Ⅲ群土器・第Ⅳ群土器が出土している。以下に各群の土器について記述する。

① 第Ⅱ群土器 (図版35-1~4・写真図版37-1~4)

この群に属する土器としては、深鉢の口縁部片が4点(1~4)出土している。いずれの胎土にも繊維が含まれている。1は地文の上に横位の綾絡文が施文されている深鉢の破片である。地文は単節の斜縄文である。2は係締燃糸文が施文されている深鉢の破片である。口縁部が外反しながら立ちあがっている。3は口縁部~体部に単節の斜縄文が施文されている深鉢の破片である。外反しながら立ちあがる口縁部にススの付着がみられる。4は口縁部~体部に羽状縄文が施文されている深鉢の破片である。これも口縁部が外反しながら立ちあがっている。

以上の土器は、縄文時代前期前半に位置づけられるものと考えられる。

② 第Ⅲ群土器 (図版35、36・写真図版37~39)

この群に属する土器は、文様上の特徴により次のように分けられる。

A. 燃糸文が施文されているもの

この類に含まれるものは、隆帯の有無によって次のように細分できる。

a. 口縁部文様帯に隆帯が施されていないもの(図版35-5~10・写真図版37-5~9、38-10)

5は横位の燃糸文が平行沈線状に施文されている深鉢の破片である。口唇部上面に節の細かい縄文圧痕が施されている。体部の地文は単節の斜縄文である。内面には入念なミガキ調整が加えられている。6は横位・斜位の燃糸文によって文様が展開されている深鉢の破片である。口唇部上面に刻目状に燃糸圧痕が施されている。内面には入念なミガキ調整が加えられている。7は波状口縁の深鉢の破片であり、口縁部文様帯は縦位・横位・斜位の燃糸文によって構成さ

れている。口唇部上面には5と同じような節の細かい縄文圧痕が施されている。体部の地文は羽状縄文である。内面に入念なミガキ調整が加えられている。8は波状口縁を呈する深鉢の破片である。口縁部に台状の突起がみられる。口縁部文様帯は撚糸文風に施文された縄文圧痕によって文様が展開されている。9は波状口縁の深鉢の破片で横位・斜位の撚糸文によって口縁部文様帯が構成されている。頸部に刺突文風に撚糸圧痕が施されている。10も波状口縁を呈する深鉢の破片である。口縁部に小突起をもつ。撚糸文がゆるやかな曲線を描くように口縁部に沿って施文されている。

b. 口縁部文様帯に隆帯が施されているもの(図版35-11~14・写真図版37-12、38-11・13・14)

いずれも波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。11は口縁部の突起部分に縦位の隆帯が施されている。口縁部文様帯は、横位・斜位の撚糸文で構成されている。12も口縁部の突起部分に縦位の隆帯が施されている。口縁部文様帯に横位の撚糸文が施文されている。13は口縁部に環状の隆帯が施されており、隆帯で区画された中に縦位・横位の撚糸文が施文されている。縦位の撚糸文は刻目状の様相を呈している。14は菱形の隆帯が施されているものである。隆帯の上にボタン状の貼付がみられる。隆帯で区画された中に撚糸文が菱形の形に施文されている。

B. 隆起線によって加飾されているもの(図版35-15・16、36-17~20・写真図版38-15・16、39-17~20)

いずれも波状口縁を呈する深鉢の破片である。15は斜位の隆起線の上にボタン状の貼付が施されている口縁部片である。口縁部文様帯には、鋸歯状の沈線文と撚糸文が施文されている。16は口縁部の突起部分に2条の平行する隆起線が縦位に施されている破片である。口縁部文様帯には、鋸歯状の沈線文と半截竹管状工具による刺突文が施されている。17も口縁部の突起部分に2条の平行する隆起線が縦位に施されている破片である。口縁部文様帯に鋸歯状の沈線文が施文されている。18は口縁部の突起部分に縦位・横位の隆起線が施されている破片である。上部の横位の隆起線は半円形に貼り付けられている。19は波状を呈する口縁に沿って隆起線が施されている破片である。口縁部文様帯には半截竹管状工具による沈線文が施文されている。20の破片は16と同一個体のもと思われる。

C. 沈線文と楕円形状の撚糸文が施文されているもの(図版36-21・22・写真図版39-21・22)
21・22はキャリパー形深鉢の同一個体の破片である。体部の地文は単節の斜縄文である。

D. 横位の楕円縄文区画文が施文されているもの(図版36-23・写真図版39-23)
23はキャリパー形の小型鉢の口縁部片である。内面にはナデ調整が施されている。

E. 磨消縄文手法による縄文区画文が施文されているもの(図版36-24~26・写真図版39-24~26)

24には渦巻状の無文帯が形成されており、器表面上に赤色顔料のような付着物がみられる。25には24に比べて幅の広い無文帯が形成されている。26は縄文区画文の中に棒状工具による刺突が施されているものである。

以上の土器の中で、A・Bに含まれるものは縄文時代中期前葉に、C・Dに含まれるものは中期中葉に、Eに含まれるものは中期末葉にそれぞれ位置づけられるものと考えられる。

③ 第Ⅳ群土器 (図版36-27~30・写真図版40-27~30)

この群に属する土器は次の4点(27~30)だけである。27は波状口縁の深鉢の口縁部片である。文様は幅の狭い帯縄文と竹管状工具で施文された刺突文によって展開されている。28は口縁部に幅の広い帯縄文が施文されている深鉢の口縁部片である。帯縄文の下には無文帯が形成されている。29・30は口縁部が内弯気味に立ちあがる粗製深鉢の破片である。29は口唇部が肥厚している。地文は単節の斜縄文である。30の地文は節のやや細かい単節の斜縄文である。

以上の土器は、縄文時代後期中葉に位置づけられるものと考えられる。

④ 土器底部 (図版36-31、37-32・写真図版40-31、41-32)

ここでは、出土した縄文土器底部の中で圧痕文が施されている2点(31・32)についてだけ述べる。底部に施されている圧痕文はいずれも網代痕である。土器に使用された網代は、両方も幅1cm±の材を紐で縫いあわせて作製されているものである。

弥生土器 E I区から破片が2点出土している(図版37-33・34・写真図版41-33・34)。

33は鉢形土器の口縁部片である。口縁部に2条の平行沈線を巡らし、口唇部上面に刻目を施している。地文は単節の斜縄文である。外面にススが付着している。34は高環形土器の台部の破片である。この台部には、平行沈線文と縄文区画文が施文されている。縄文区画文は蝶ネクタイ状の形をしている。器表面に赤色顔料を塗布している。胎土には金雲母が含まれている。

(2) 石器

① 石匙 (図版38-1~4・写真図版42-1~4)

出土した石匙は4点(1~4)である。いずれも石器の長軸方向につまみ部をもつ。1は背面全体に入念な剝離調整が施されている。2~4には両面に第1次剝離面が残されている。

② 篋状石器 (図版38-5・6・写真図版42-5・6)

出土した篋状石器は2点(5・6)である。5は刃部の縦断面形が平坦なもので、石器の頭部に打面が残されている。6は刃部の縦断面形が凹状を呈し、石器の長軸と平行する左側縁部に打面が残されている。

③ スクレイパー (図版38-7~11・写真図版42-7~11)

出土したスクレイパーは5点(7~11)である。7・8は石器の長軸と直交する縁辺に刃部が形成されている。8の頭部に折断面がみられる。9~11は石器の長軸と平行する縁辺に刃部が形成されている。9・10はその頭部に打面が残されている。11は刃部と平行する側縁部に折断面がみられる。

④不定形石器(図版39-12~16・写真図版42-12~16)

出土した不定形石器は5点(12~16)である。これらの石器は、その縁辺の一部が刃部加工されているものである。どの石器にも凹状を呈する刃部と凸状を呈する刃部とがみられる。12~14の石器の頭部に打面が残されている。いずれの打面も非調整打面である。

⑤石斧(図版39-17・18・写真図版43-17・18)

出土した石斧は2点(17・18)である。17は刃部が欠損している磨製石斧で、体部に研磨痕が認められる。18は断面形が角張る磨製石斧である。各面に線状の磨擦痕がみられる。

⑥半円状扁平打製石器(図版40-19~22、41-23~26、42-27~30・写真図版43-19~22、44-23~30)

出土した半円状扁平打製石器は12点(19~30)である。いずれも扁平な安山岩を素材として、その周縁が半円状・隅丸長方形状に打ち欠かれている石器である。石器の周縁部に認められる敲打痕の状況によって、次のように大別できる。

A. 一部の周縁に敲打痕がみられないもの(19~24)

21は石皿の破片を再利用したもので、周縁の一部に研磨痕が認められる。このほかに研磨痕が認められるのは23・25の2点である。

B. 全周縁に敲打痕がみられるもの(26~30)

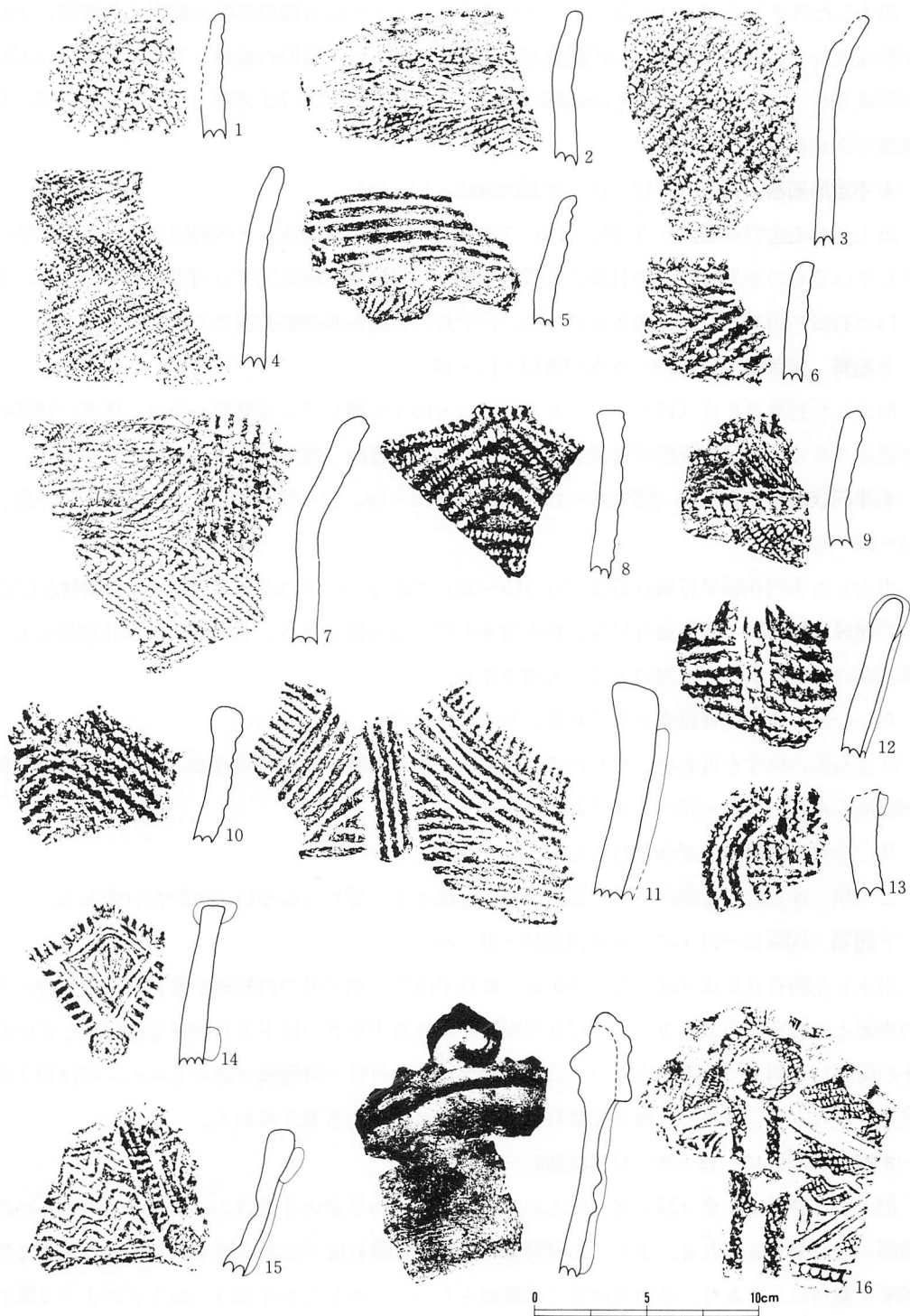
この類に含まれる石器の中で、周縁部に研磨痕が全く認められないのは29だけである。

⑦凹石(図版42-31・32・写真図版45-31・32)

出土した凹石は2点(31・32)である。31は平面形が楕円形の自然礫を素材にしており、その表面上に計5個の凹みをもつ。32は平面形が隅丸長方形状の扁平な自然礫を素材にしており、その両面に1個ずつの凹みをもつ。この側縁部には敲打痕や研磨痕が認められる。32は以上の点などからみて、破損した扁平な磨石が再利用されたものと考えられる。

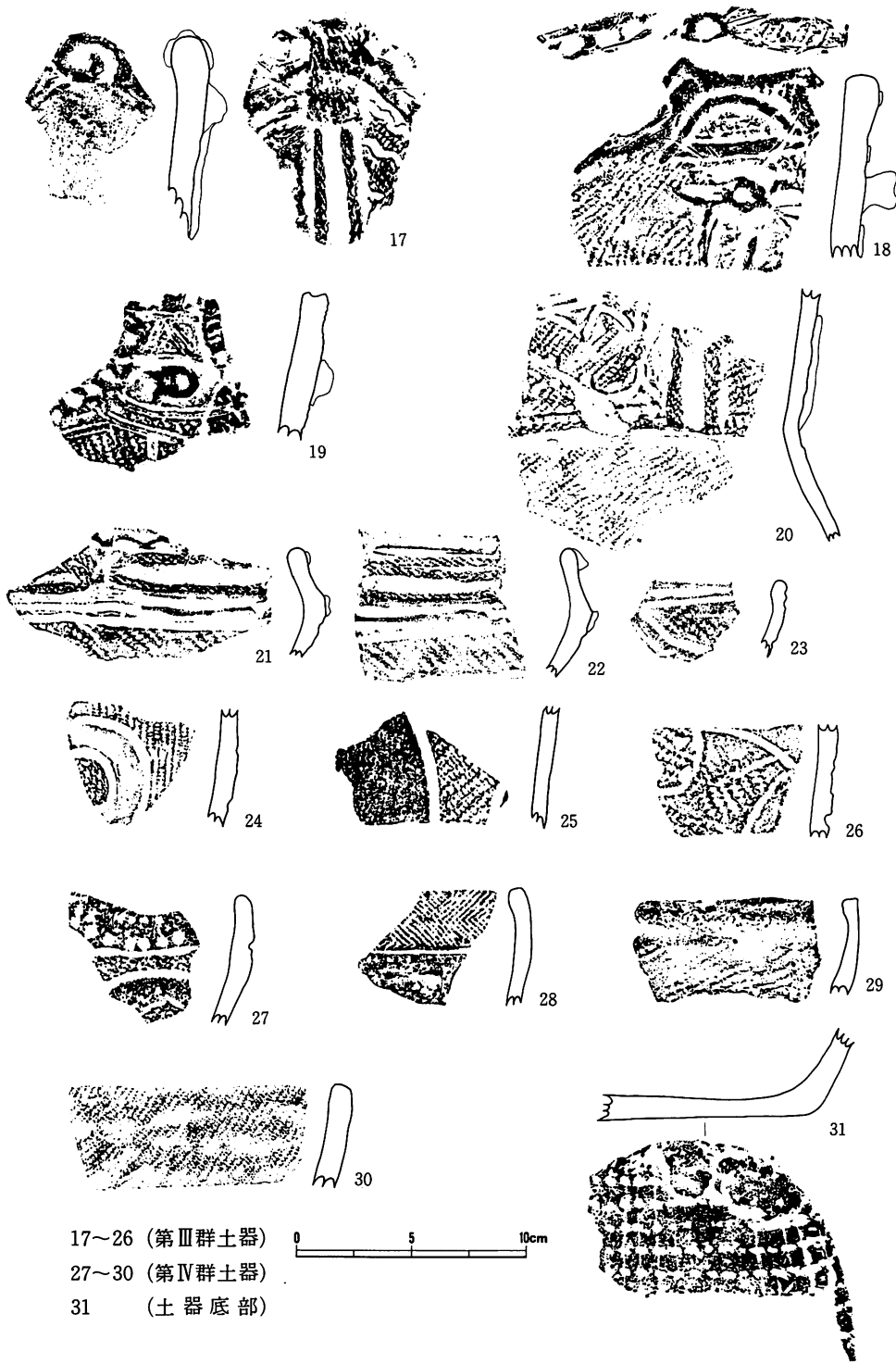
⑧磨石(図版43-33~36・写真図版45-33~36)

出土した磨石は4点(33~36)である。33・34は他の2点の2倍以上の重量をもち、その側縁部に研磨面がみられる。またこの研磨面の周縁には敲打痕が認められる。35・36は扁平な自然礫を素材にしており、その側縁部に研磨面をもつ。しかしこれらには、33などのような敲打痕は認められない。



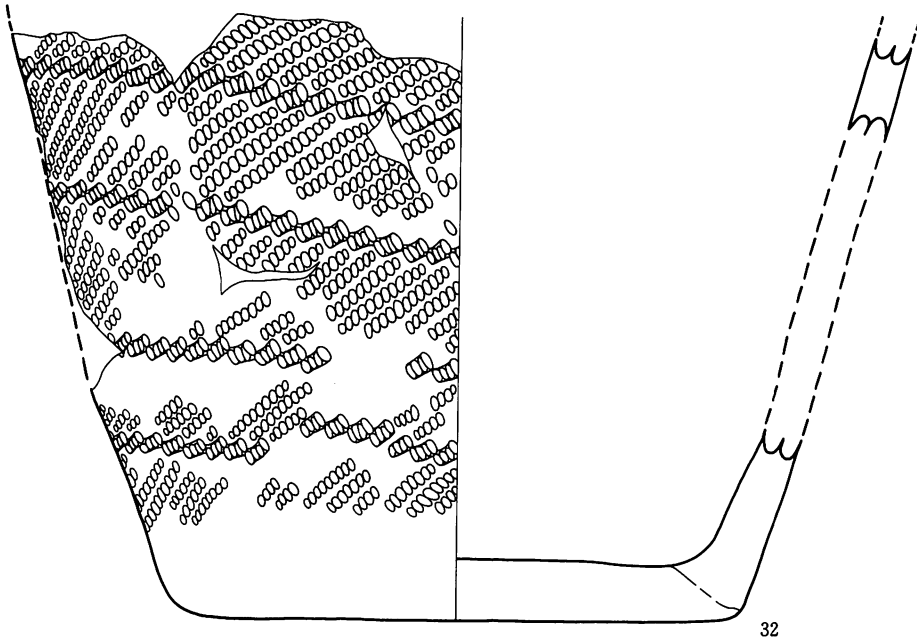
1～4 (第Ⅱ群土器) 5～16 (第Ⅲ群土器)

図版35 遺構外の出土遺物 (1)



17~26 (第Ⅲ群土器)
 27~30 (第Ⅳ群土器)
 31 (土器底部)

図版36 遺構外の出土遺物(2)



32



32 (土器底部)

33・34 (弥生土器)

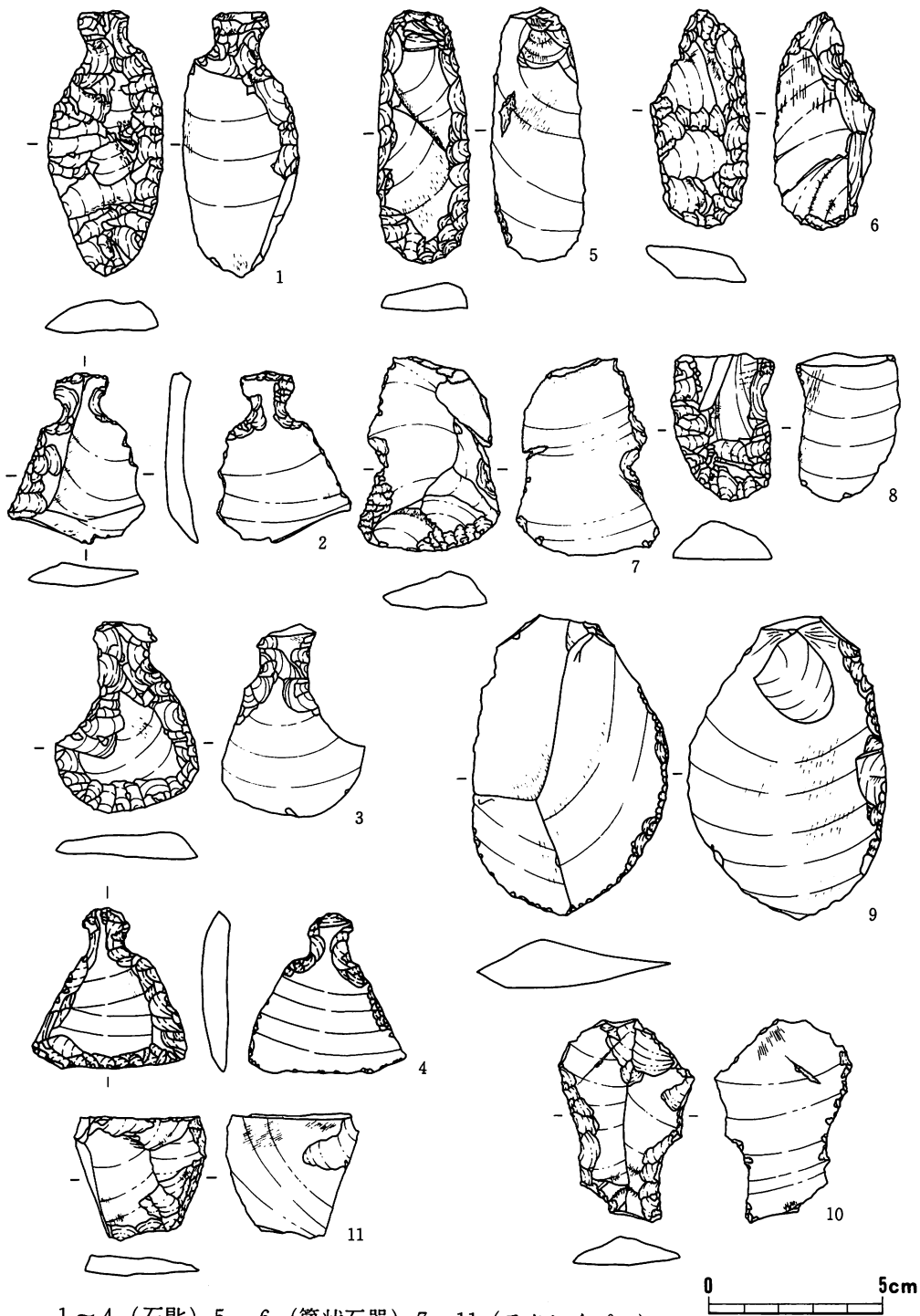


33

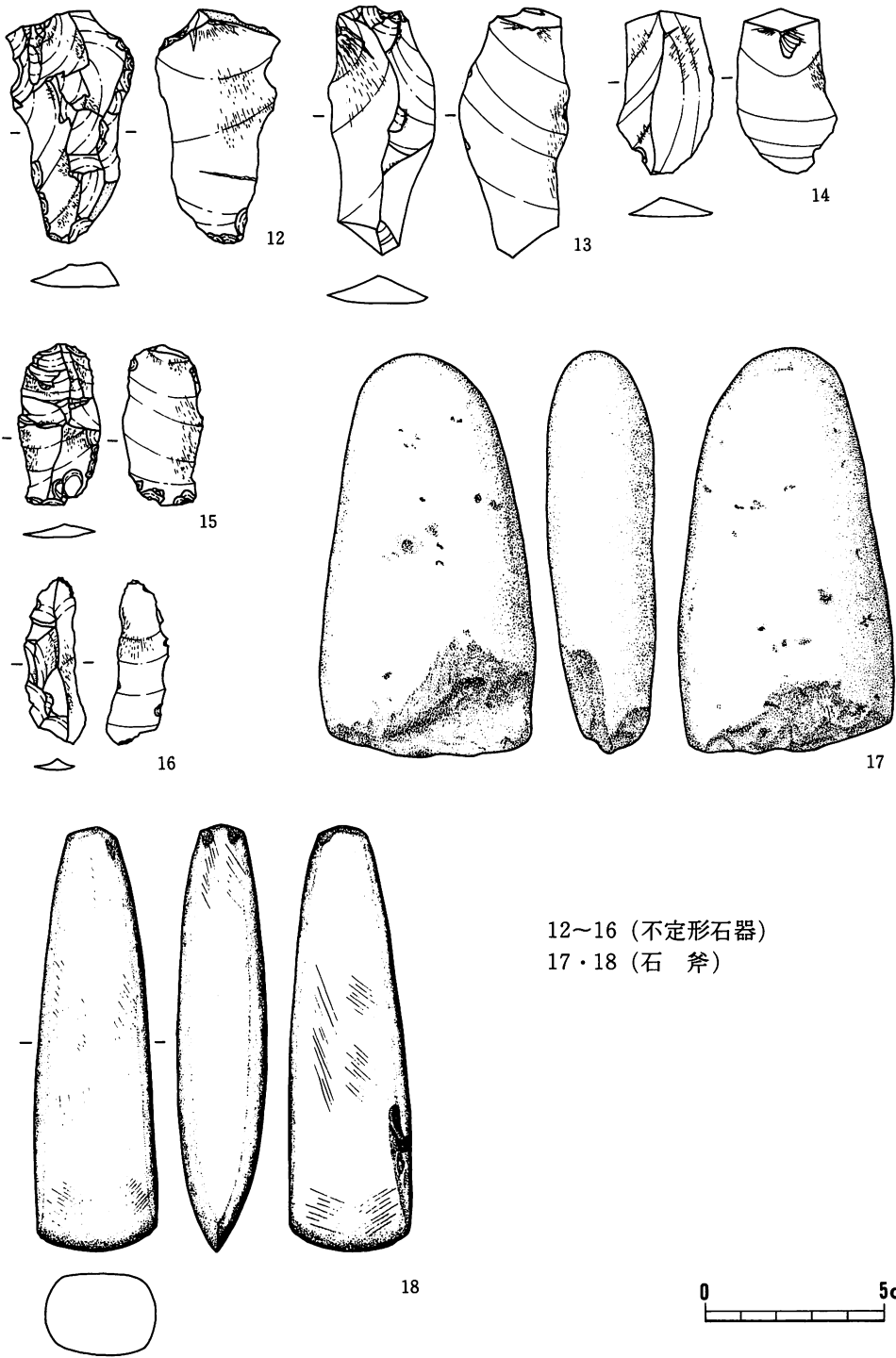
34

0 5cm

図版37 遺構外の出土遺物 (3)

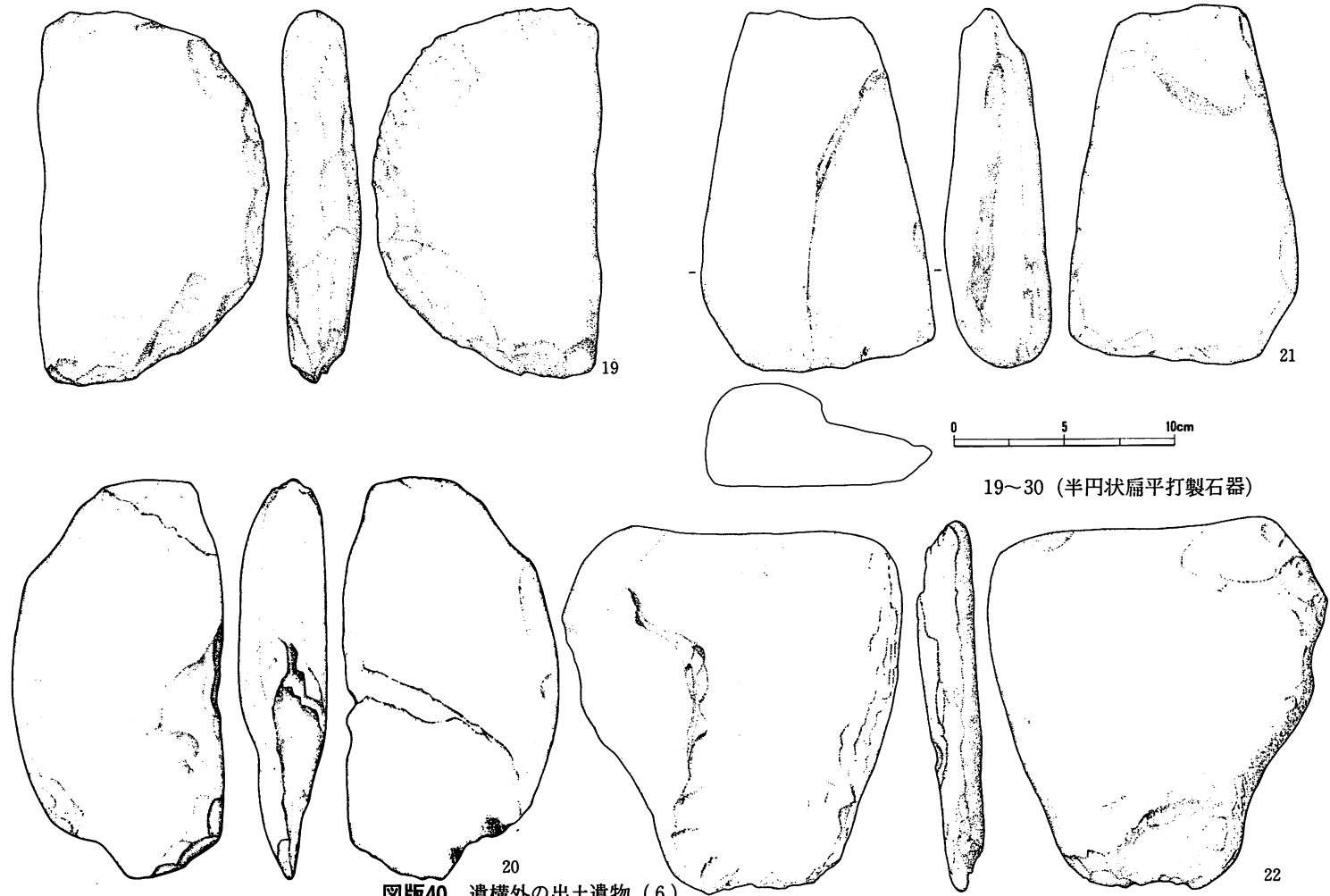


図版38 遺構外の出土遺物(4)

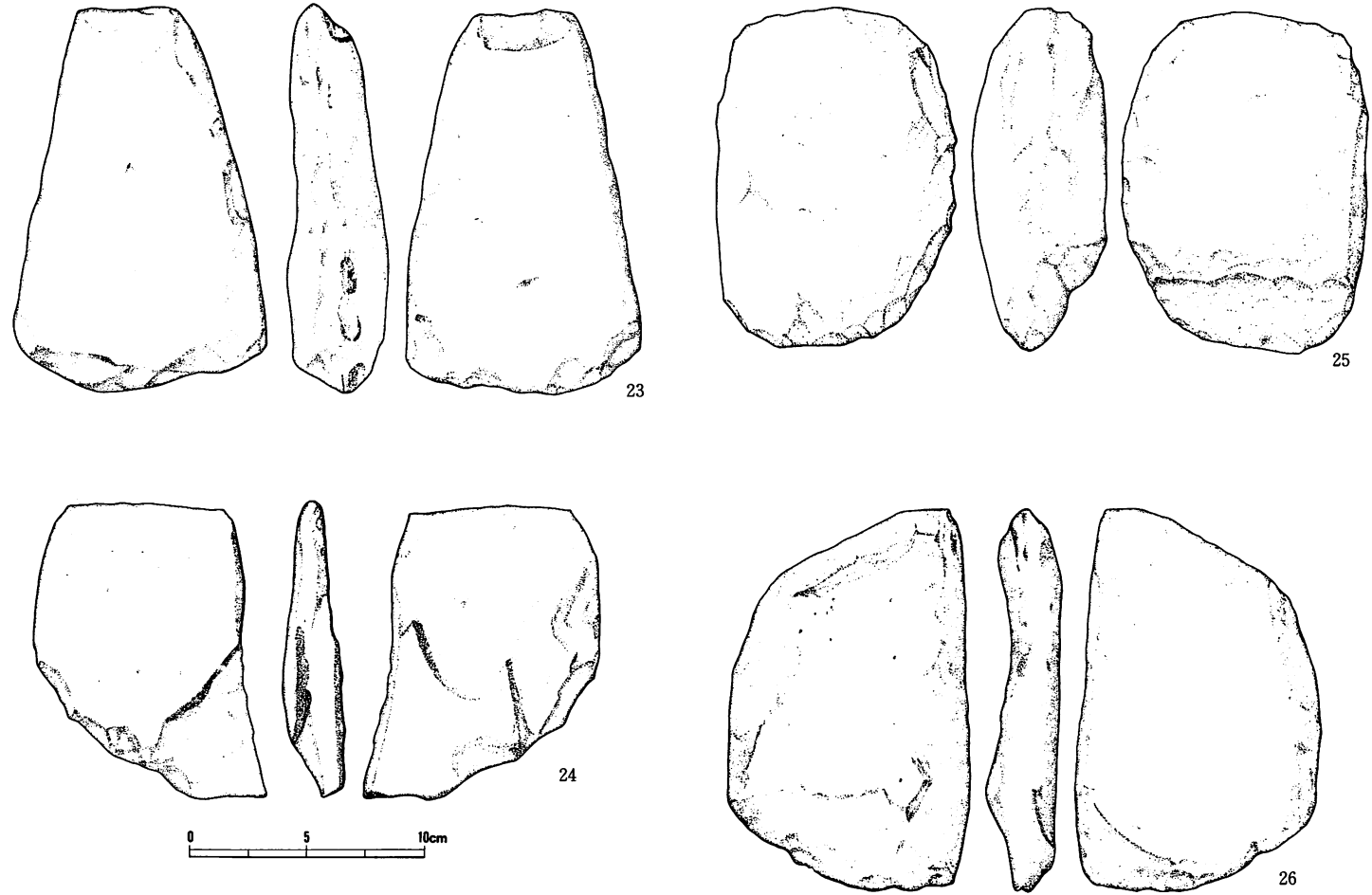


12~16 (不定形石器)
17・18 (石斧)

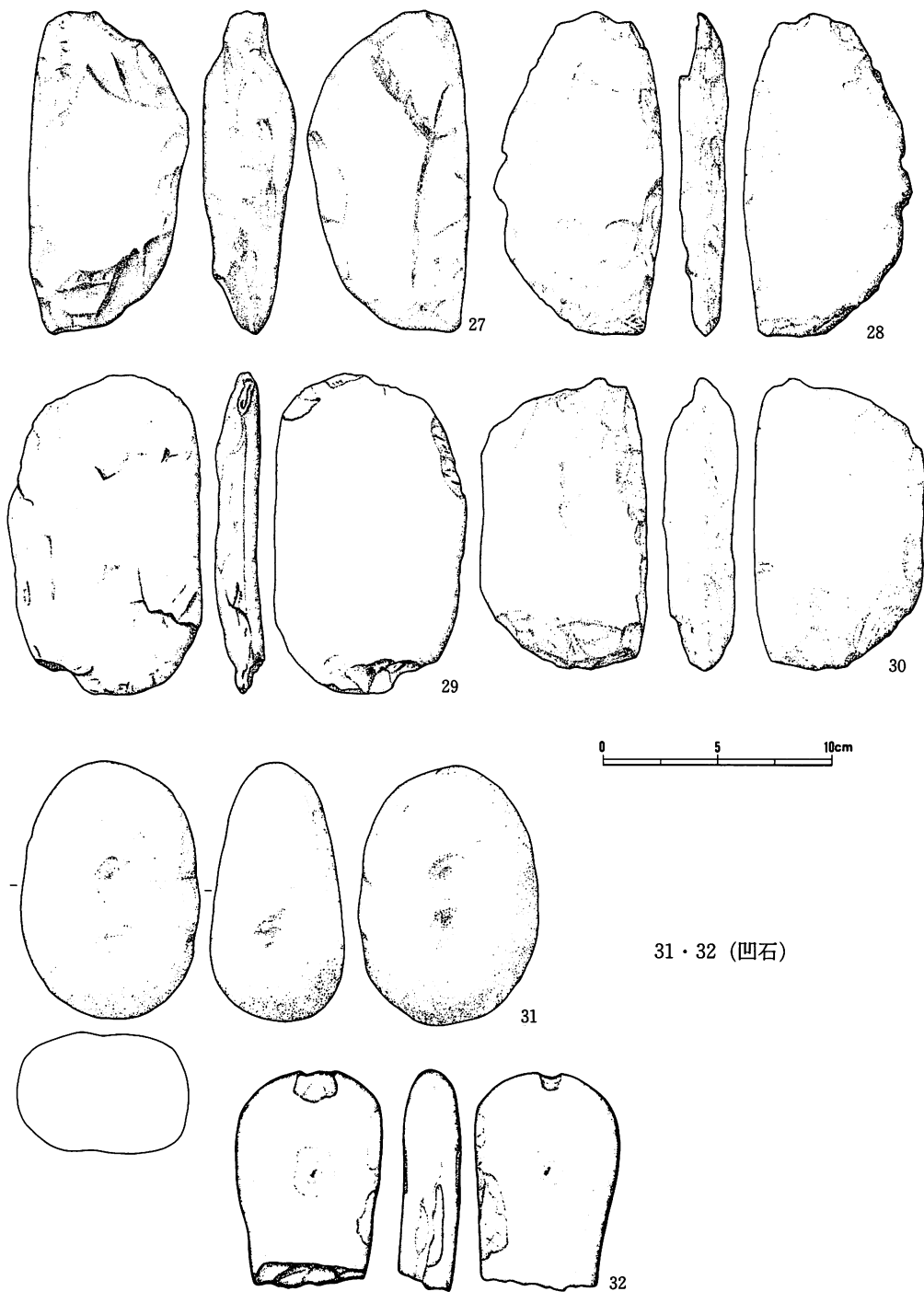
図版39 遺構外の出土遺物 (5)



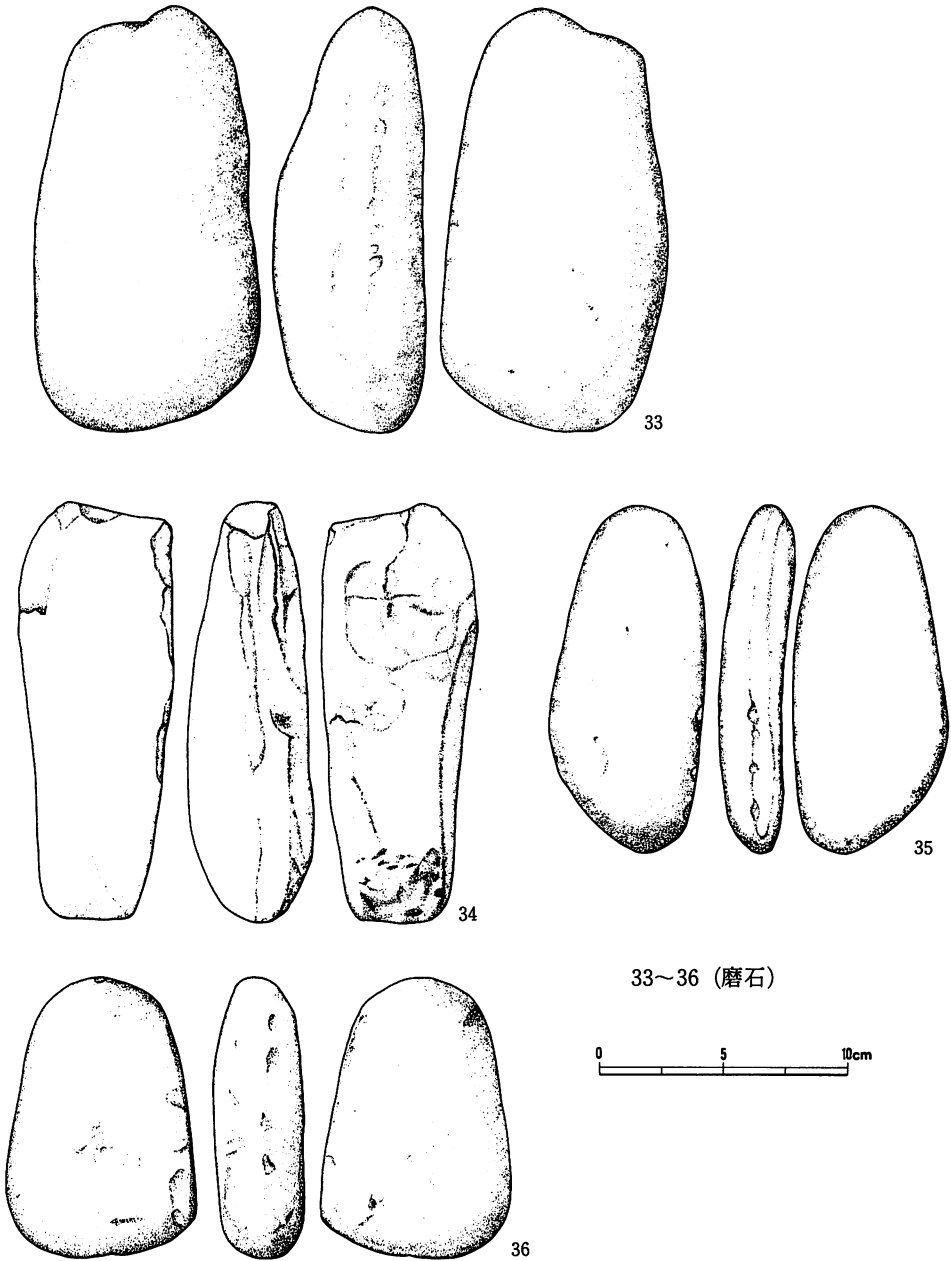
図版40 遺構外の出土遺物 (6)



図版41 遺構外の出土遺物（7）



図版42 遺構外の出土遺物（8）



図版43 遺構外の出土遺物 (9)

3. ま と め

荒屋Ⅱ遺跡の発掘調査の結果、検出された遺構および出土した遺物はこれまでに述べたとおりである。これらについて要約すると以下ようになる。なお、当遺跡の遺構・遺物に関する分析および考察は、後日発行予定の『安代町有矢野遺跡・上の山Ⅹ遺跡発掘調査報告書』の考察編の中で展開する予定である。

(1) 遺 構

① 竪穴住居址

当遺跡で検出された住居址は、すべて縄文時代のものであり合計3棟である。

● 時期

3棟の住居址は、出土遺物・遺構の形態などからみて、次のように時期別に分けられる。縄文時代中期前葉のもの（DⅡ-1住居址・EⅠ-1住居址）、中期末葉のもの（EⅡ-2住居址）となる。これらの住居址は、時期によってその占地在異なるようである。中期前葉のDⅡ-1住居址・EⅠ-1住居址の2棟は、段丘崖から30m±離れたところに立地している。これに対して中期末葉のEⅡ-2住居址は、調査区域南東の段丘崖寄りに立地している。

● 規模および形状

3棟の住居址の規模は、それぞれ最大径が3.1m±（DⅡ-1住居址）・6.9m±（EⅠ-1住居址）・4.7m±（EⅡ-2住居址）のものである。これらの中で、EⅠ-1住居址が他の2棟に比べて大型である。特に同時期のDⅡ-1住居址と比較した場合、長軸・短軸の径とも2倍の長さをもつ点で際立っている。この住居址は、規模や中軸線上に炉が2基配置されていることなどからみて、高橋文夫によって提唱された「大型住居系列」（高橋、1980）に属するものと考えられる。住居址の形状はいずれも楕円形である。

● 柱穴配置

各住居址内部に検出された柱穴の相互関係を検討した結果、次のような柱穴配置が確認された。三角形の配置を示すもの（EⅡ-2a住居址・EⅡ-2b住居址）、長方形の配置を示すもの（EⅠ-1c住居址）、菱形の配置を示すもの（DⅡ-1b住居址・EⅠ-1e住居址）、五角形の配置を示すもの（DⅡ-1a住居址・EⅠ-1b住居址・EⅠ-1d住居址）、六角形の配置を示すもの（EⅠ-1a住居址）、以上の5種類の柱穴配置が認められる。平面的に1棟として把握される住居址の中に、上述のように同じ種類の柱穴配置や異なる種類の柱穴配置が複合した状態で存在している。このような事象については、これまで「建て替え」という形で単純に

処理してきた。しかし異質な柱穴配置が共存することなどから考えて、ただ単に「建て替え」ということだけでは解釈し得ない要素がこの事象の中に含まれているように思われる。以上の点は今後の検討課題である。

● 炉の形態

各住居に伴う炉の形態は、土器埋設炉・土器埋設石囲炉・複式炉の3種類である。土器埋設炉をもつ住居址は、DII-1住居址・EI-1住居址である。土器埋設石囲炉をもつ住居址はEI-1住居址である。複式炉をもつ住居址はEII-2住居址である。したがってEI-1住居址には、形態の異なる炉が共存していることになる。

② 住居址状遺構

当遺跡で検出された住居址状遺構は1棟（EII-1住居址状遺構）である。この住居址状遺構は、先に事実記載の中でもふれたように、精査の結果炉が検出されなかったために「住居址」として認定しなかったものである。しかし炉が伴わないものの、柱穴や周溝が確認されるなど遺構全体の状況からみて、なお「住居」として使用された可能性も否定しきれないため、その可能性を含めた上で「住居址状遺構」の名称を用いた。この住居址状遺構はその主体部が径2.8m±の規模をもち円形の形状を示すものである。床面上に検出された柱穴は三角形に配置されている。所属時期は出土遺物などから縄文時代中期前葉と考えられる。

③ ピット

当遺跡で検出されたピットは合計12基である。これらのピットは、規模・形態から次のように大別できる。

A. 開口部の最大径が110cm±～300cm±の長さを計り、断面形がフラスコ状を呈するもの
この中に含まれるピットは、EI-51ピット・EI-55ピット・EI-56ピット・EI-57ピット・EI-58ピット・EI-59ピット・EII-51ピット・EII-53ピットの8基である。遺物が多く出土したピットは、EI-55ピット・EI-58ピット・EI-59ピットなどである。特にEI-55ピットのもは多く、底面上から完形に近い深鉢が出土している。他の遺構との重複関係が認められるピットはEI-59ピットである。このピットはEI-108陥し穴状遺構によって切られている。

B. 開口部の最大径が60cm±～110cm±の長さを計り、断面形がピーカー状またはフラスコ状を呈するもの

この中に含まれるピットは、EI-52ピット・EI-53ピットの2基である。EI-52ピットはEI-104陥し穴状遺構と一部重複している部分があるが、その新旧関係は不明である。

C. 開口部の最大径が110cm±の長さを計り、断面形が皿状を呈するもの

この中に含まれるピットは、EI-54ピット・EII-52ピットの2基である。2基ともそれ

ぞれ陥し穴状遺構によって切られている。前者はE I -101 陥し穴状遺構によって、また後者はE II -104 陥し穴状遺構によって切られている。

以上のピットの所属時期について断定することは困難である。それは、出土遺物がないものやあっても埋土上部から得られたものであるため時期決定資料とするには問題があることなどによるものである。しかしAに属するピットについては、E I -55ピット・E I -58ピットの出土遺物や遺構の形態などから判断して、縄文時代中期前葉の時期に位置づけられるものと考えられる。

④陥し穴状遺構

当遺跡で検出された陥し穴状遺構は合計33基である。これらの陥し穴状遺構は、規模・形態から次のように大別できる。

A. 底部の最大径が237 cm±～300 cm±の長さを計り、軸長比が0.08～0.14の値を示すもの
この中に含まれる陥し穴状遺構は、E I -102 陥し穴状遺構・E I -103 陥し穴状遺構・E I -104 陥し穴状遺構・E I -105 陥し穴状遺構・E II -103 陥し穴状遺構・E II -107 陥し穴状遺構・E II -108 陥し穴状遺構・E II -109 陥し穴状遺構・E II -110 陥し穴状遺構・E II -111 陥し穴状遺構・E III -101 陥し穴状遺構・E III -102 陥し穴状遺構の計12基である。
以上の陥し穴状遺構の中でE II -103 陥し穴状遺構を除いたいずれのものにも、底面の中軸線上に径2 cm±～8 cm±の副穴が10個前後検出されている。

B. 底部の最大径が123 cm±～190 cm±の長さを計り、軸長比が0.24～0.33の値を示すもの
この中に含まれる陥し穴状遺構は、D I -101 陥し穴状遺構・D I -109 陥し穴状遺構・D III -101 陥し穴状遺構・E I -101 陥し穴状遺構・E I -106 陥し穴状遺構・E I -107 陥し穴状遺構・E I -108 陥し穴状遺構・E II -101 陥し穴状遺構・E II -102 陥し穴状遺構・E II -104 陥し穴状遺構・E II -105 陥し穴状遺構・E II -106 陥し穴状遺構・E III -103 陥し穴状遺構・F I -101 陥し穴状遺構の計14基である。以上の陥し穴状遺構の埋土中には、十和田a 降下火山灰(大池、1972)が堆積している。D I -101 陥し穴状遺構・D I -109 陥し穴状遺構・E I -101 陥し穴状遺構の3基は、十和田a 降下火山灰が埋土中にブロック状に混入しているものである。他の11基は「U」字状に厚い層をなして堆積している。底面に副穴が検出されたものは、D I -101 陥し穴状遺構・D I -109 陥し穴状遺構・E I -101 陥し穴状遺構・E I -106 陥し穴状遺構・F I -101 陥し穴状遺構の計5基である。

C. 底部の最大径が102 cm±～172 cm±の長さを計り、軸長比が0.24～0.29の値を示すもの
Cとしたものは、形態的にBと類似している点もあるが、次の点で明確に異なる。底面までの深さがBのもの約2分の1程度であること、さらに埋土中にBのように十和田a 降下火山灰の堆積がみられないことである。Cに含まれる陥し穴状遺構は、D I -102 陥し穴状遺構・

D I - 103 陥し穴状遺構・D I - 104 陥し穴状遺構・D I - 105 陥し穴状遺構・D I - 106 陥し穴状遺構・D I - 107 陥し穴状遺構・D I - 108 陥し穴状遺構の計7基である。これらの7基は一直線上に並ぶ規則的な配置を示している。なおこのほかにA・Bに含まれる陥し穴状遺構にも規則的な配置を示すものがある。AではE II - 107 陥し穴状遺構をはじめとする7基がほぼ一直線上に並ぶ配置を示す。またBでは残丘状の小丘を取り囲む形でF I - 101 陥し穴状遺構をはじめとする7～8基が弓状の配置を示す。

以上の33基の陥し穴状遺構の所属時期については、現時点では確定し得ないが、E I - 108 陥し穴状遺構やE II - 108 陥し穴状遺構の重複関係の事実から縄文時代中期前葉以降に位置づけられるものと考えられる。なおその下限については今後検討を進めたい。

(2) 遺物

①土器

ここでは縄文土器に関しては、出土点数の多い中期の土器をとりあげる。出土土器を従来の型式名と対比させていくと、円筒上層a式・大木7式・大木8式・大木9式・大木10式に比定される土器群がみられる。荒屋II遺跡でも中期前半は円筒系土器の占有率が高いようである。また後半は大木系土器だけで占められるようになる点も荒屋I遺跡などと共通する。

弥生土器は鉢形土器と高坏形土器の小破片であり、全体の器形や文様については不明である。

②石器

当遺跡で出土した石器は合計51点である。出土点数の多い器種は、石匙・スクレイパー・不定形石器・半円状扁平打製石器である。剥片石器にみられる特徴は石器の一部に打面が残されていることや一次加工あるいは二次加工後折断されていることである。

表1 荒屋II遺跡遺構名訂正表

番号	種 別	旧遺構名	新遺構名
1	住居址	E II-11	D II-1
2	住居址	E I-1	E I-1
3	住居址状遺構	E II-1	E II-1
4	住居址	E II-13	E II-2
5	ピット	E I-9	E I-51
6	ピット	E I-13	E I-52
7	ピット	E I-14	E I-53
8	ピット	E I-6	E I-54
9	ピット	E I-7	E I-55
10	ピット	E I-4	E I-56
11	ピット	E I-3	E I-57
12	ピット	E I-2	E I-58
13	ピット	E I-18	E I-59
14	ピット	E II-18	E II-51
15	ピット	E II-12	E II-52
16	ピット	E II-14	E II-53
17	陥し穴状遺構	D I-8	D I-101
18	陥し穴状遺構	D I-1	D I-102
19	陥し穴状遺構	D I-2	D I-103
20	陥し穴状遺構	D I-3	D I-104
21	陥し穴状遺構	D I-4	D I-105
22	陥し穴状遺構	D I-5	D I-106
23	陥し穴状遺構	D I-6	D I-107
24	陥し穴状遺構	D I-9	D I-108
25	陥し穴状遺構	D I-7	D I-109
26	陥し穴状遺構	E II-9	D III-101
27	陥し穴状遺構	E I-5	E I-101
28	陥し穴状遺構	E I-8	E I-102
29	陥し穴状遺構	E I-10	E I-103
30	陥し穴状遺構	E I-11	E I-104
31	陥し穴状遺構	E I-12	E I-105
32	陥し穴状遺構	E I-17	E I-106
33	陥し穴状遺構	E I-16	E I-107
34	陥し穴状遺構	E I-15	E I-108
35	陥し穴状遺構	E II-17	E II-101
36	陥し穴状遺構	E II-15	E II-102
37	陥し穴状遺構	E II-16	E II-103
38	陥し穴状遺構	E II-3	E II-104
39	陥し穴状遺構	E II-19	E II-105
40	陥し穴状遺構	E II-20	E II-106
41	陥し穴状遺構	E II-2	E II-107
42	陥し穴状遺構	E II-10	E II-108
43	陥し穴状遺構	E II-4	E II-109
44	陥し穴状遺構	E II-5	E II-110
45	陥し穴状遺構	E II-6	E II-111
46	陥し穴状遺構	E II-7	E III-101
47	陥し穴状遺構	E II-8	E III-102
48	陥し穴状遺構	E III-1	E III-103
49	陥し穴状遺構	F I-1	F I-101

表2 荒屋II遺跡出土石器計測表

番号	出土地区	器種	図版番号	法 量				石 質
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	
1	E I-1住居址	石 槍	27-18	5.6	1.8	1.4	12.3	玻璃質安山岩
2	E I-1住居址	石 鏃	27-19	3.3	1.3	0.8	3.1	玻璃質安山岩
3	E I-1住居址	石 匙	27-20	5.8	3.8	1.1	20.2	玻璃質安山岩
4	E I-1住居址	スクレイパー	27-21	3.5	2.5	0.4	4.5	玻璃質安山岩
5	E I-1住居址	不定形石器	27-22	3.3	1.5	0.6	2.9	玻璃質石英安山岩
6	E I-1住居址	不定形石器	27-23	2.3	1.8	0.3	1.0	玻璃質石英安山岩
7	E II-1住居址状遺構	半円状扁平打製石器	27-30	9.3	5.7	2.0	160.0	麥安山岩
8	E I-55ピット	石 鏃	29-41	3.8	2.1	0.5	2.7	玻璃質安山岩
9	E I-55ピット	石 鏃	29-42	3.4	1.3	0.7	2.7	玻璃質安山岩
10	E I-55ピット	石 匙	29-43	2.5	1.4	0.5	1.3	玻璃質安山岩
11	E I-55ピット	石 斧	29-44	5.0	5.5	3.0	120.0	玢 岩
12	E I-55ピット	磨 石	29-45	9.5	7.8	5.0	520.0	安山岩
13	E I-58ピット	石 匙	31-59	3.3	3.4	1.0	9.0	玻璃質安山岩
14	E II-53ピット	磨 石	32-68	8.7	8.0	2.0	172.0	安山岩
15	E I-104陥し穴状遺構	不定形石器	33-77	4.3	2.3	0.7	4.0	玻璃質安山岩
16	E I j 7	石 匙	38-1	7.8	3.3	0.9	26.6	玻璃質安山岩
17	D I区	石 匙	38-2	4.9	4.0	0.7	10.1	玻璃質安山岩
18	E I区	石 匙	38-3	5.5	4.0	1.0	18.9	玻璃質石英安山岩
19	E I i 5	石 匙	38-4	4.7	4.5	0.9	13.5	玻璃質安山岩
20	E II f 5	籠状石器	38-5	7.4	2.7	0.7	18.8	安山岩
21	E II 58	籠状石器	38-6	6.3	2.8	1.2	19.7	玻璃質安山岩
22	F I a 8	スクレイパー	38-7	5.6	4.0	1.0	20.7	流紋岩
23	E III e 0	スクレイパー	38-8	4.3	2.9	1.1	16.3	流紋岩
24	E II e 8	スクレイパー	38-9	8.7	5.7	1.5	70.0	流紋岩

25	E I f 7	スクレイパー	38 - 10	5.7	3.8	0.8	15.8	玻璃質安山岩
26	F II f 8	スクレイパー	38 - 11	3.5	3.8	0.5	8.2	玻璃質安山岩
27	E II e 8	不定形石器	39 - 12	6.5	3.3	1.0	17.6	玻璃質石英安山岩
28	E II e 8	不定形石器	39 - 13	7.1	3.0	1.2	16.6	玻璃質石英安山岩
29	E II e 8	不定形石器	39 - 14	4.6	2.6	1.0	8.0	玻璃質石英安山岩
30	E III 区	不定形石器	39 - 15	4.5	2.3	0.5	5.2	玻璃質安山岩
31	E II f 8	不定形石器	39 - 16	4.5	1.6	0.4	2.9	玻璃質石英安山岩
32	D II 区	石 斧	39 - 17	11.4	6.0	3.0	282.0	安山岩
33	E II e 9	石 斧	39 - 18	15.0	3.4	2.5	172.0	緑色岩
34	D II 区	半円状扁平打製石器	40 - 19	16.8	10.2	3.5	940.0	安山岩
35	E II f 8	半円状扁平打製石器	40 - 20	18.1	9.4	4.0	800.0	安山岩
36	E I 区	半円状扁平打製石器	40 - 21	16.2	10.3	4.6	950.0	安山岩
37	E II e 9	半円状扁平打製石器	40 - 22	16.4	15.5	2.6	825.0	安山岩
38	D II 区	半円状扁平打製石器	41 - 23	16.3	10.8	4.3	855.0	安山岩
39	E III e 0	半円状扁平打製石器	41 - 24	12.4	8.9	2.5	315.0	安山岩
40	E I f 7	半円状扁平打製石器	41 - 25	14.4	10.2	5.7	1,070.0	安山岩
41	E II e 9	半円状扁平打製石器	41 - 26	16.0	10.3	3.0	730.0	安山岩
42	E II 区	半円状扁平打製石器	42 - 27	14.0	7.1	4.0	490.0	安山岩
43	E II e 8	半円状扁平打製石器	42 - 28	14.2	7.4	2.1	300.0	安山岩
44	E II f 8	半円状扁平打製石器	42 - 29	14.0	8.4	2.0	290.0	安山岩
45	D I 区	半円状扁平打製石器	42 - 30	12.6	7.3	3.3	415.0	安山岩
46	E II e 4	凹 石	42 - 31	11.3	7.8	5.8	620.0	安山岩
47	E I 区	凹 石	42 - 32	9.5	6.4	2.5	200.0	安山岩
48	E I 区	磨 石	43 - 33	16.8	9.0	6.0	1,380.0	安山岩
49	E I 区	磨 石	43 - 34	16.9	6.3	5.0	730.0	安山岩
50	E I 区	磨 石	43 - 35	14.0	6.2	2.5	340.0	安山岩
51	E II 区	磨 石	43 - 36	11.2	7.6	3.6	460.0	安山岩

表3 荒屋II遺跡¹⁴C試料測定結果表

番号	試料採取遺構名	日本アイソトープ協会コード	岩手県埋文センターコード	¹⁴ C 年代
1	E I -55ピット	N-3622	I M No. 6	4570±90 y B. P. (4440±85 y B. P.)
2	E III-102陥し穴状遺構(床面)	N-3623	I M No. 7	4630±90 y B. P. (4500±85 y B. P.)
3	E III-103陥し穴状遺構(埋土)	N-3624	I M No. 8	1040±75 y B. P. (1010±75 y B. P.)

(カッコ内はLibbyの値5568年にもとづいて計算されたもの)



写真図版 1 遺跡航空写真（遺構配置状況）

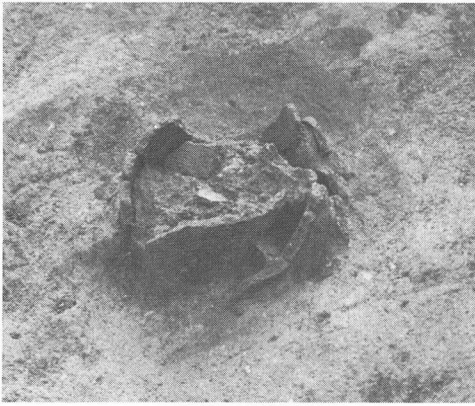


a. 遺跡遠景



b. D II-1住居址

写真図版 2



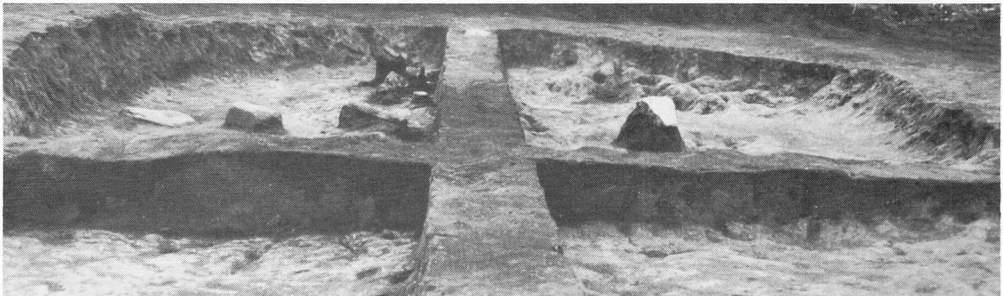
a. D II-1住居址炉



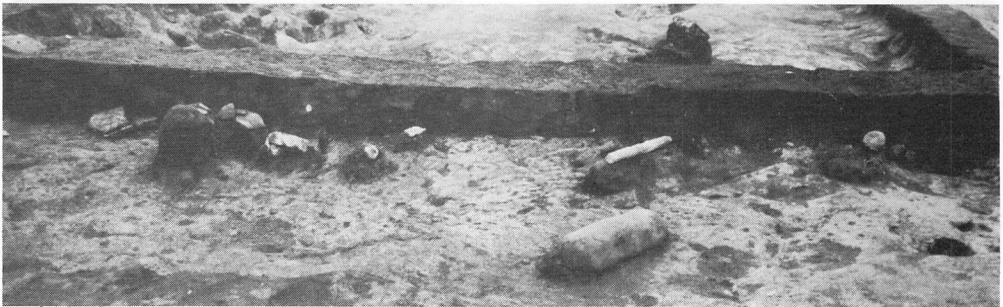
c. D II-1住居址 (土器出土状况)



b. D II-1住居址炉 (断面)



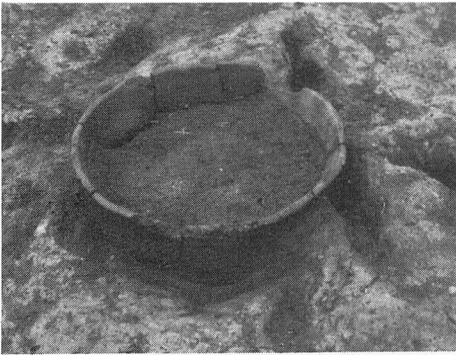
d. E I-1住居址 (土层断面)



e. E I-1住居址 (土层断面)
写真图版 3



a. E I-1住居址



b. E I-1住居址1号炉



c. E I-1住居址1号炉 (断面)

写真図版 4



a. E I-1住居址2号炉



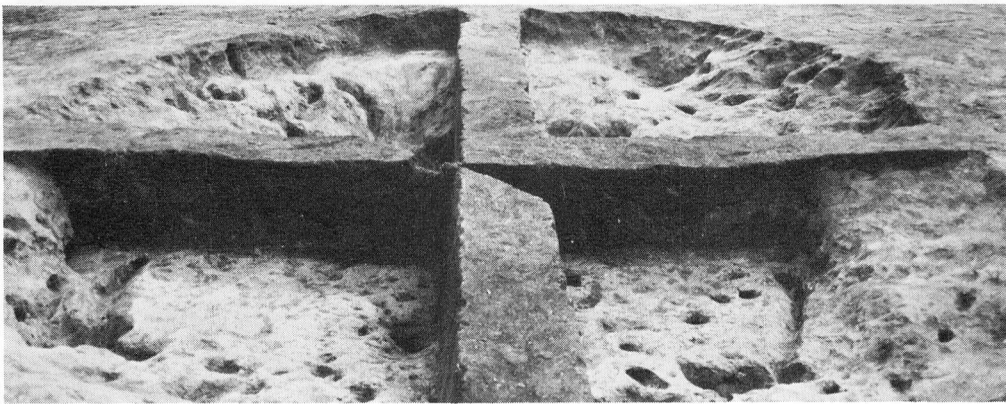
b. E I-1住居址2号炉 (断面)



c. E I-1住居址埋設土器



d. E I-1住居址埋設土器 (断面)

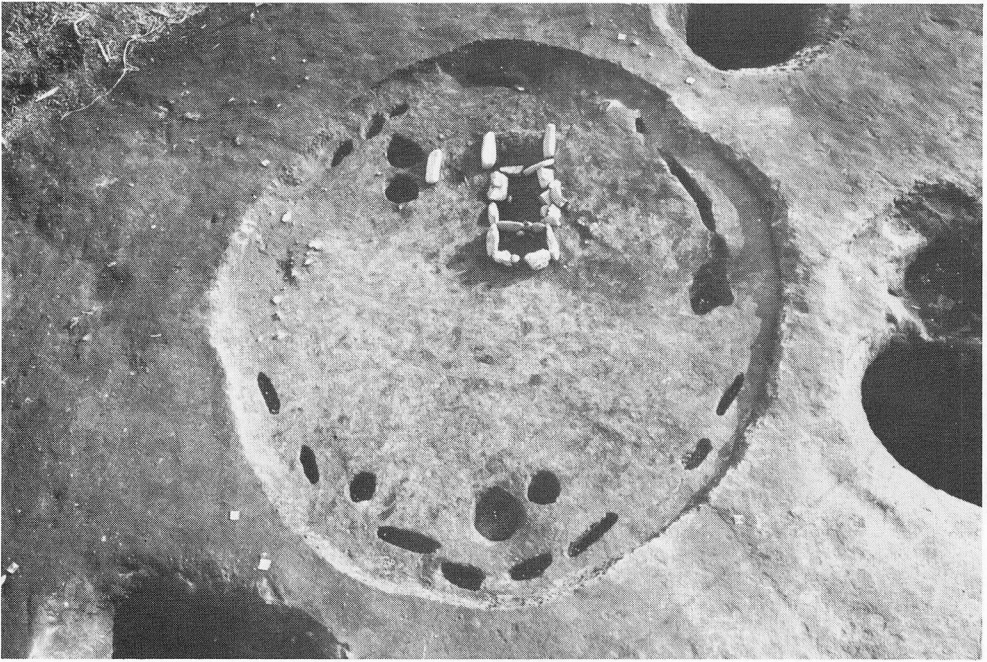


e. E II-1住居址状遺構 (土層断面)

写真図版 5

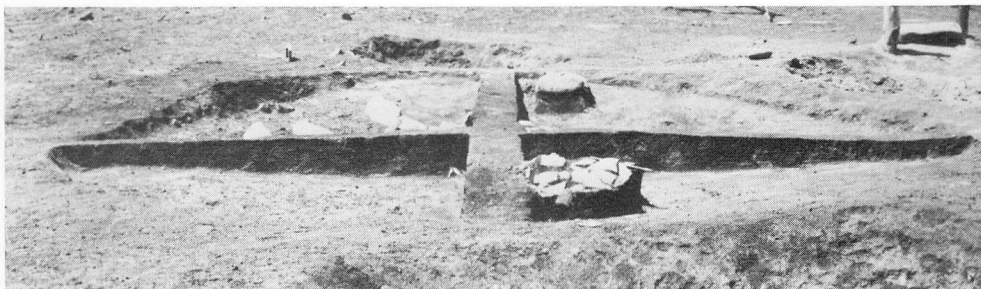


a. E II-1住居址状遺構

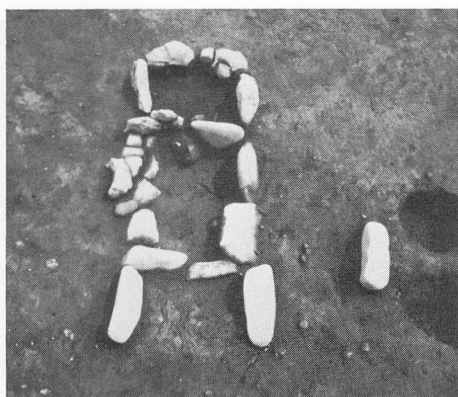


b. E II-2住居址

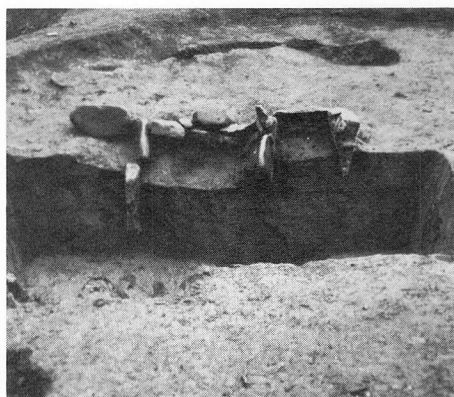
写真図版 6



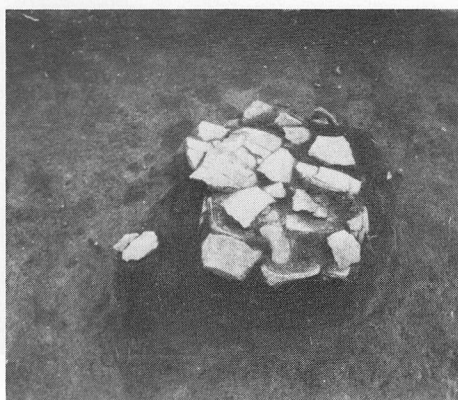
a. E II-2住居址 (土層断面)



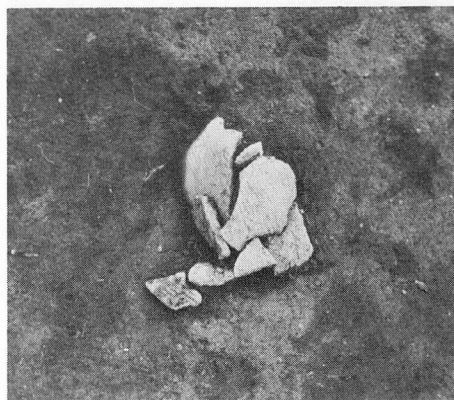
b. E II-2住居址炉



c. E II-2住居址炉 (断面)



d. E II-2住居址 (土器出土狀況)

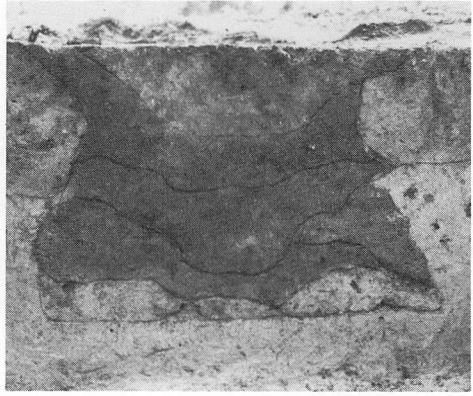


e. E II-2住居址 (土器出土狀況)

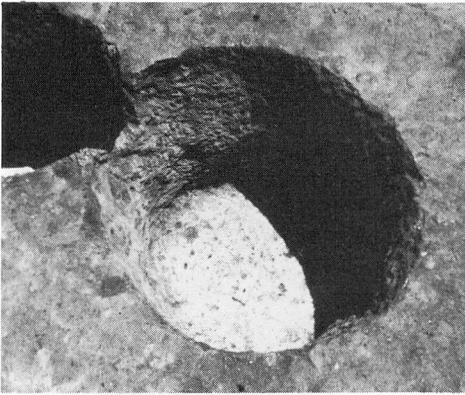
写真図版 7



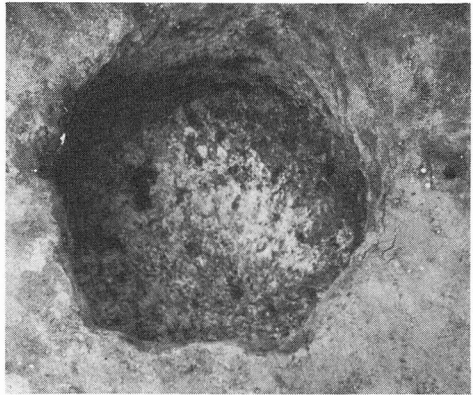
a. EI-51ピット



b. EI-51ピット (土層断面)



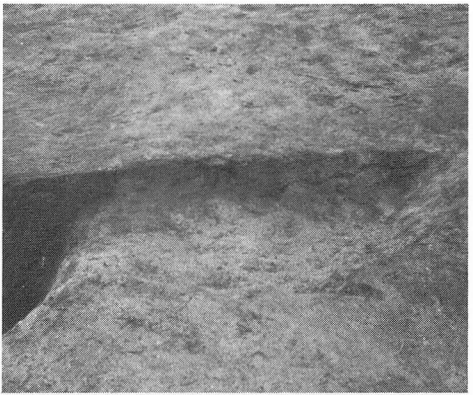
c. EI-52ピット



d. EI-53ピット

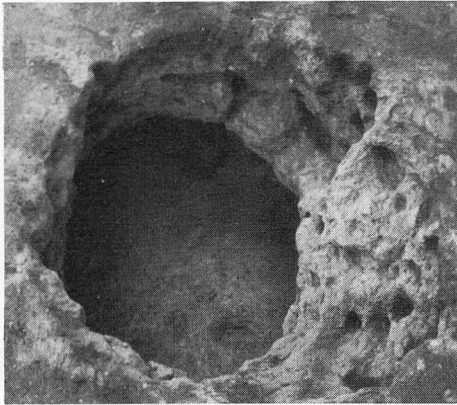


e. EI-54ピット

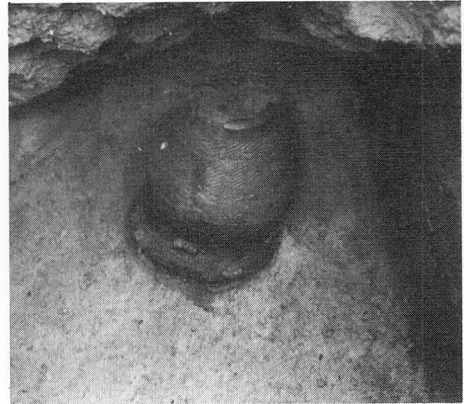


f. EI-54ピット (土層断面)

写真図版 8



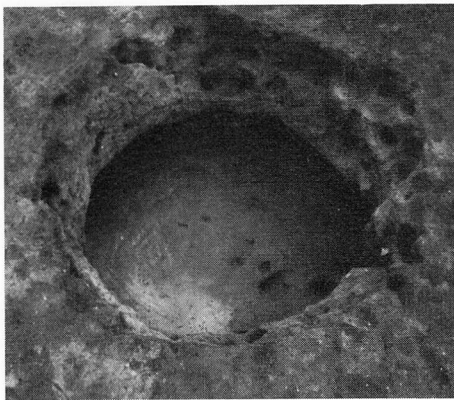
a. EI-55ピット



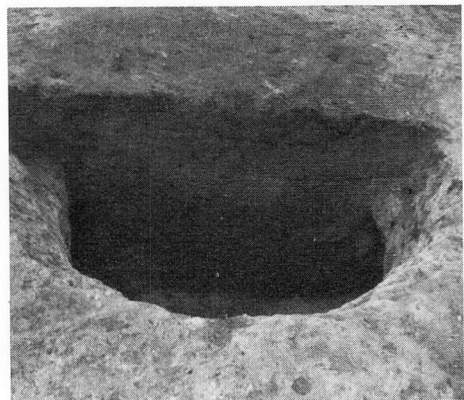
b. EI-55ピット (土器出土状況)



c. EI-55ピット (崩壊状況)

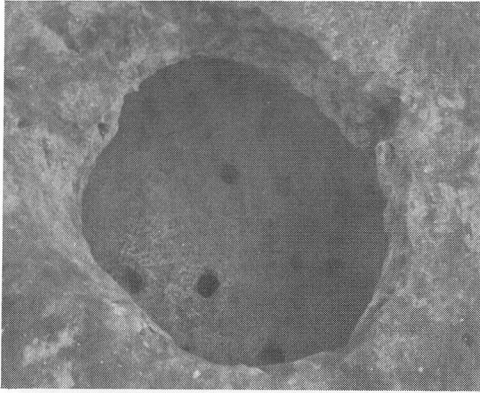


d. EI-56ピット

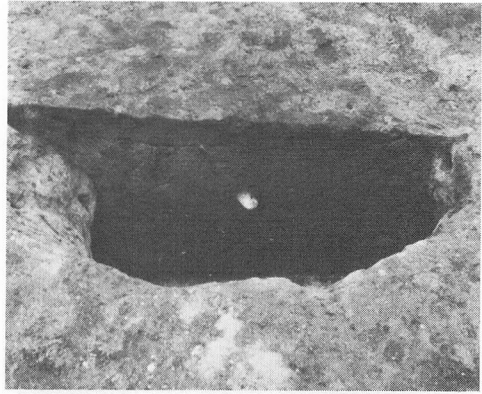


e. EI-56ピット (土層断面)

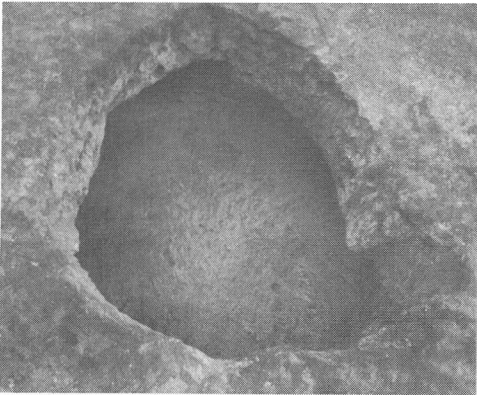
写真図版 9



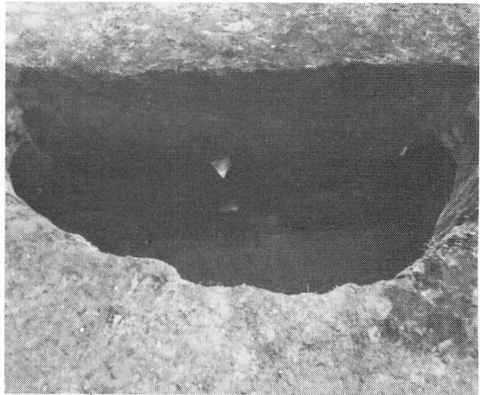
a. EI-57ピット



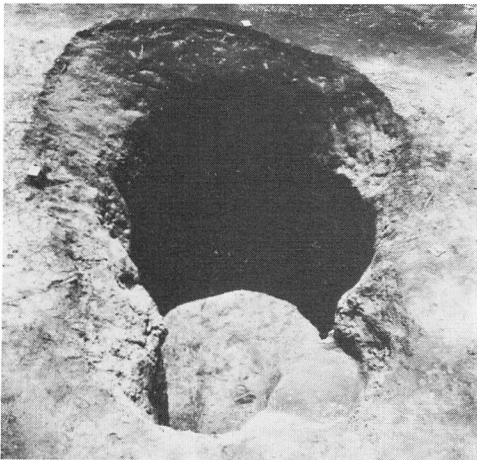
b. EI-57ピット (土層断面)



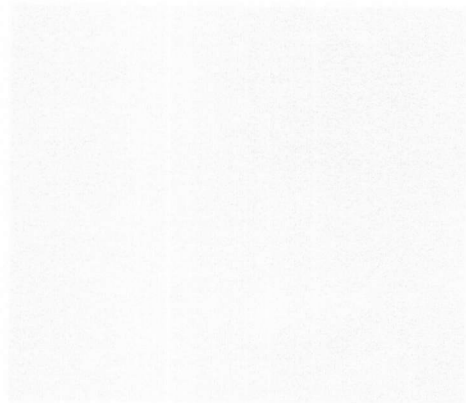
c. EI-58ピット



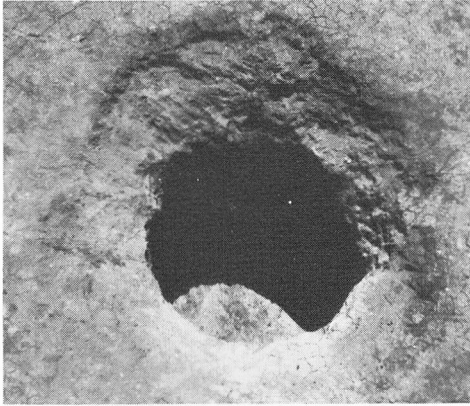
d. EI-58ピット (土層断面)



e. EI-59ピット



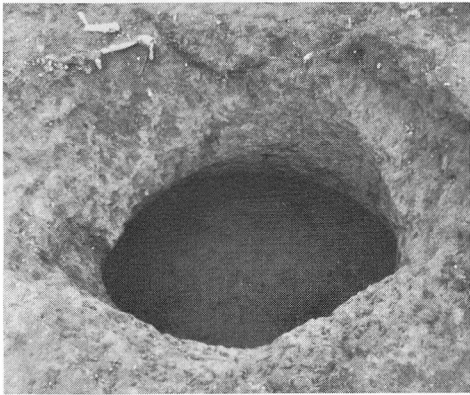
写真図版10



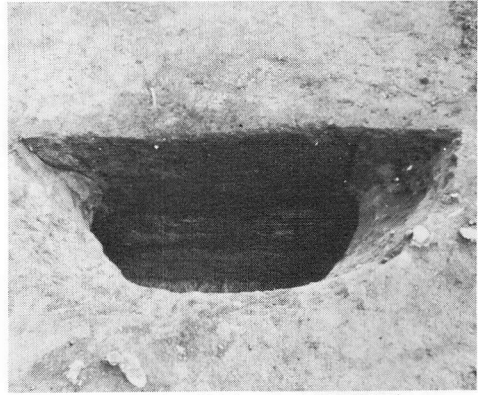
a. E II-51ピット



b. E II-51ピット (土層断面)



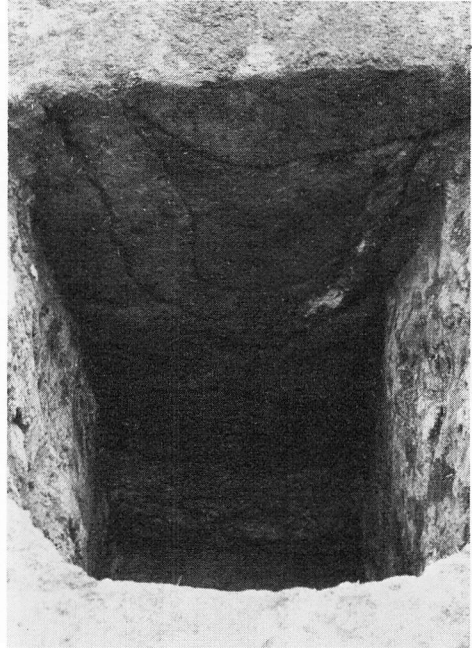
c. E II-53ピット



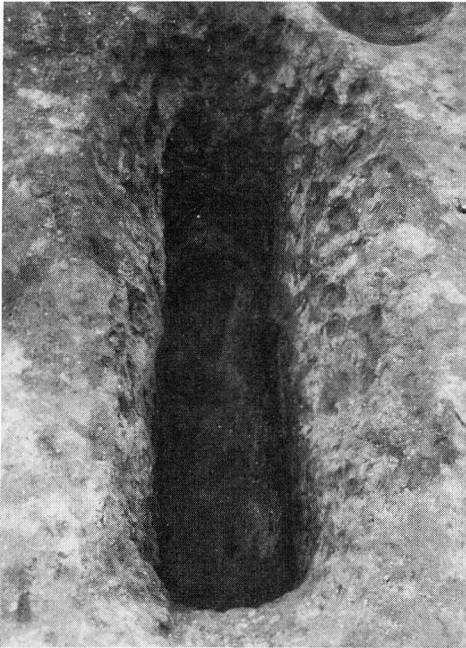
d. E II-53ピット (土層断面)



a. D I-101 陥し穴状遺構



b. D I-101陥し穴状遺構 (土層断面)



c. D I-102陥し穴状遺構

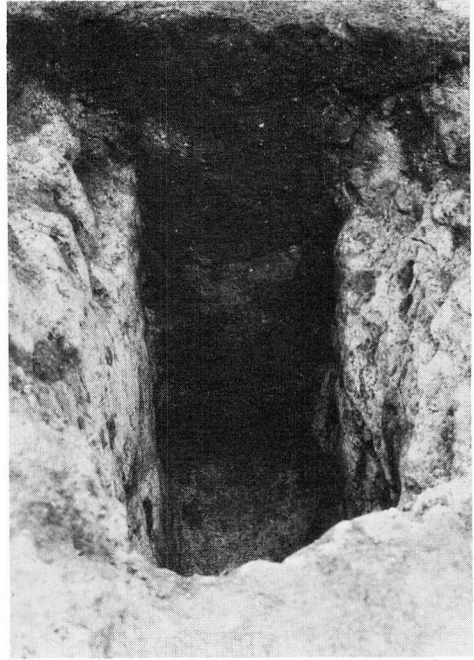


d. D I-102陥し穴状遺構 (土層断面)

写真図版 12



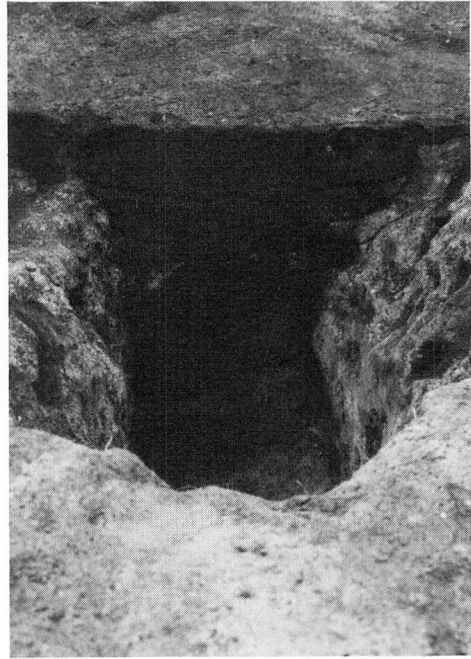
a. D I-103陥し穴状遺構



b. D I-103陥し穴状遺構 (土層断面)

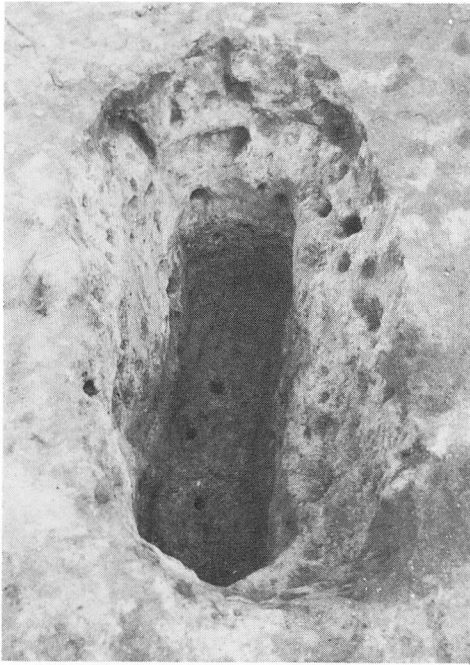


c. D I-104陥し穴状遺構

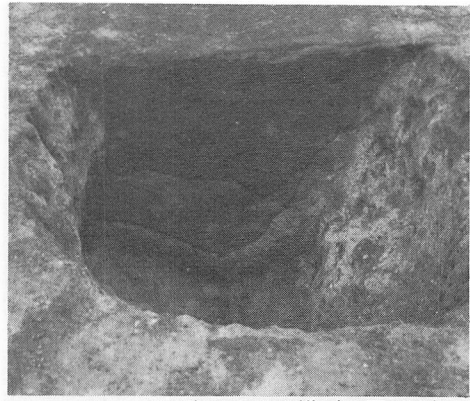


d. D I-104陥し穴状遺構 (土層断面)

写真図版 13



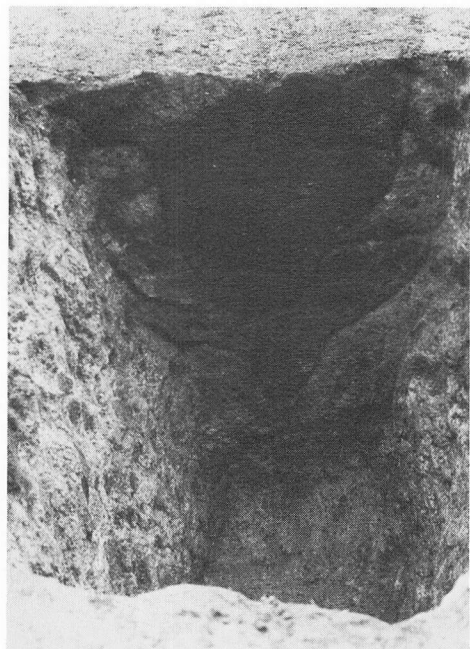
a. D I-105 陥し穴状遺構



b. D I-105陥し穴状遺構 (土層断面)

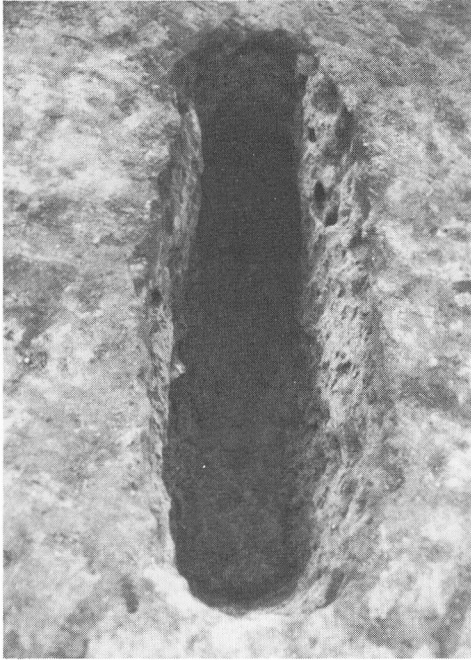


c. D I-106陥し穴状遺構

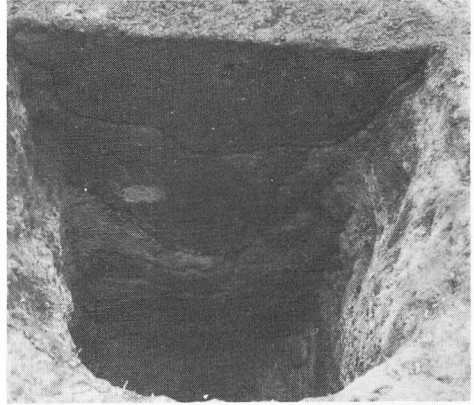


d. D I-106陥し穴状遺構 (土層断面)

写真図版 14



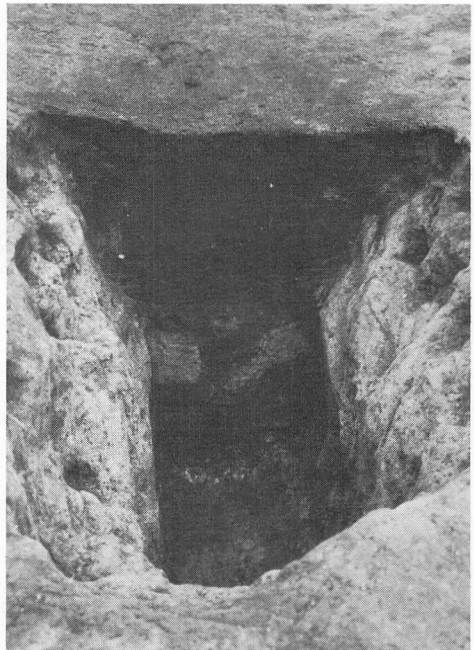
a. D I-107陥し穴状遺構



b. D I-107陥し穴状遺構 (土層断面)



c. D I-108陥し穴状遺構

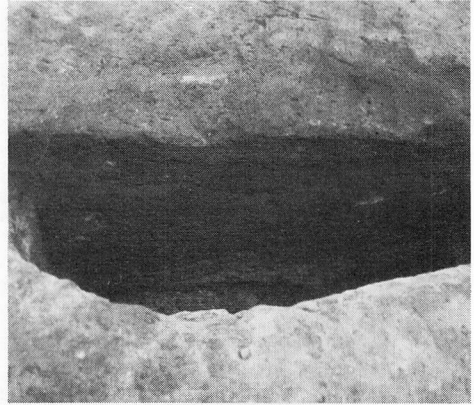


d. D I-108陥し穴状遺構 (土層断面)

写真図版 15



a. D I-109陥し穴状遺構



b. D I-109陥し穴状遺構 (土層断面)



c. D I区 陥し穴状遺構群 (配列状況)

写真図版 16



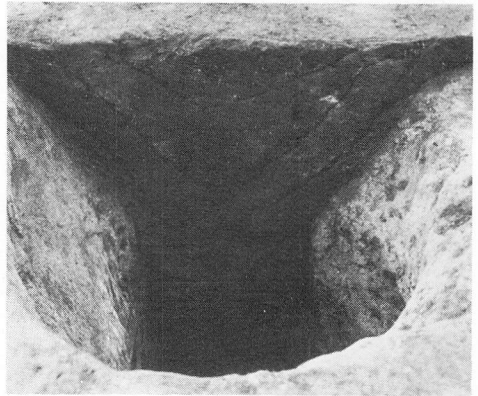
a. D III-101陥し穴状遺構



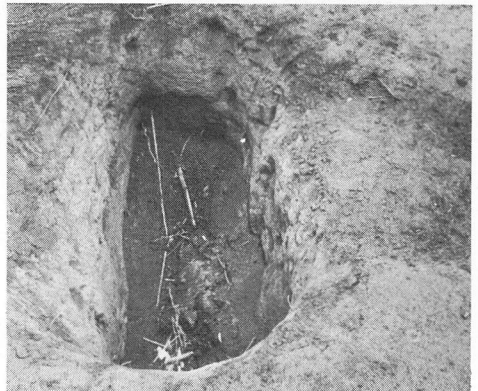
b. D III-101陥し穴状遺構 (土層断面)



c. E I-101陥し穴状遺構



d. E I-101陥し穴状遺構 (土層断面)

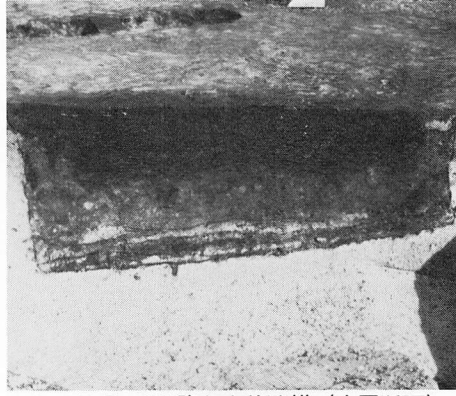


e. E I-101陥し穴状遺構 (崩壊状況)

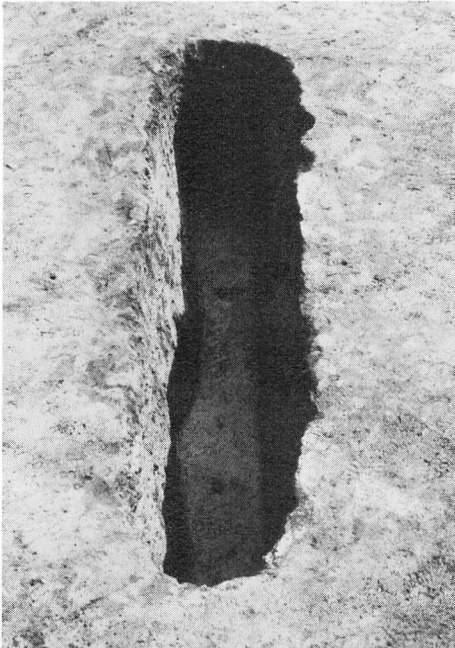
写真図版 17



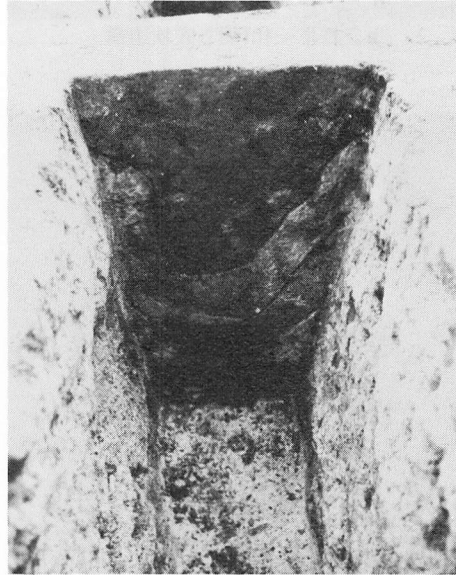
a. EI-102陥し穴状遺構



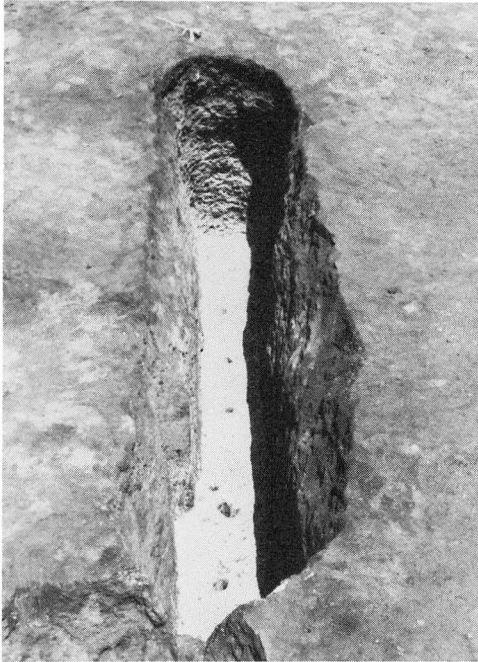
b. EI-102陥し穴状遺構 (土層断面)



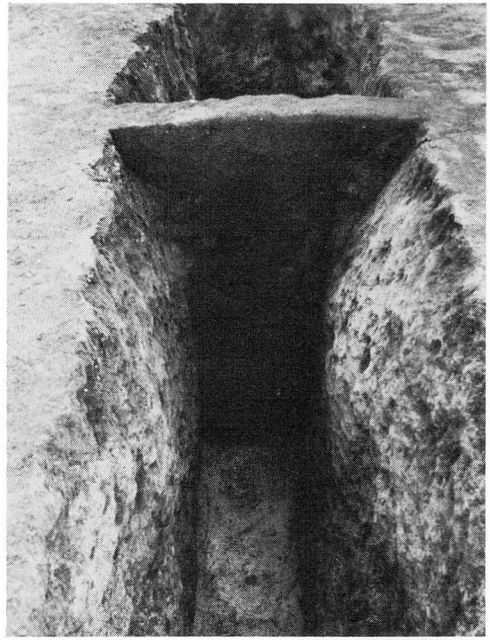
c. EI-103陥し穴状遺構



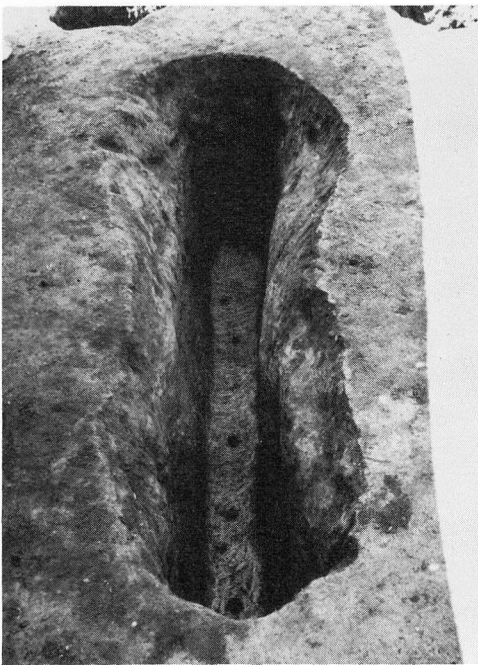
d. EI-103陥し穴状遺構 (土層断面)



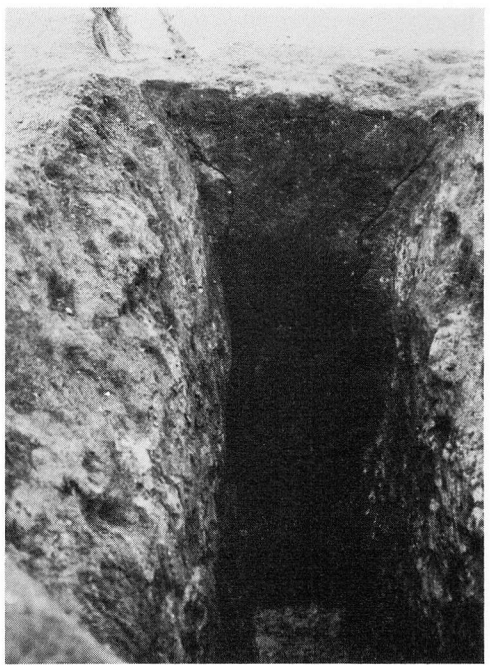
a. EI-104陥し穴状遺構



b. EI-104陥し穴状遺構 (土層断面)



c. EI-105陥し穴状遺構

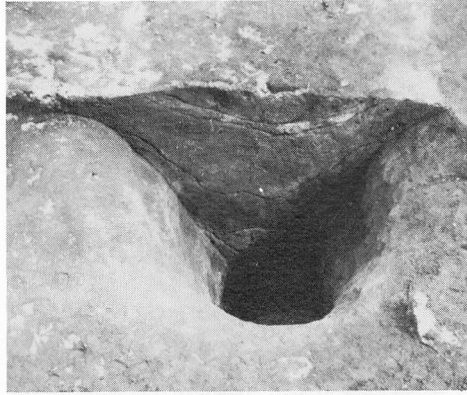


d. EI-105陥し穴状遺構 (土層断面)

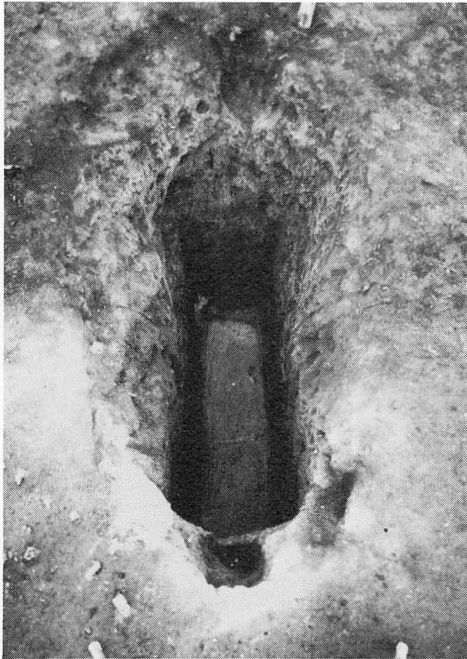
写真図版19



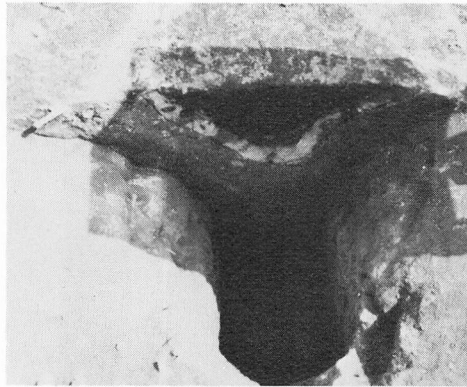
a. E I-106陥し穴状遺構



b. E I-106陥し穴状遺構 (土層断面)

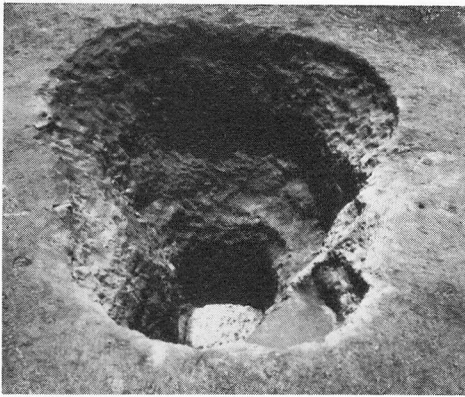


c. E I-107陥し穴状遺構

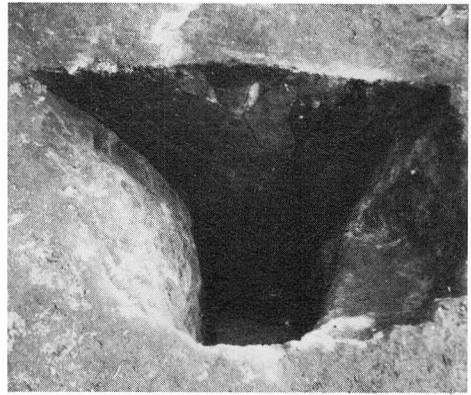


d. E I-107陥し穴状遺構 (土層断面)

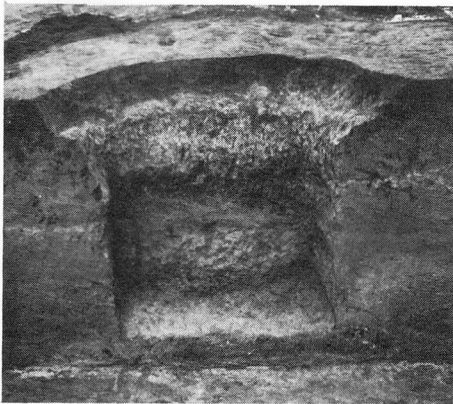
写真図版 20



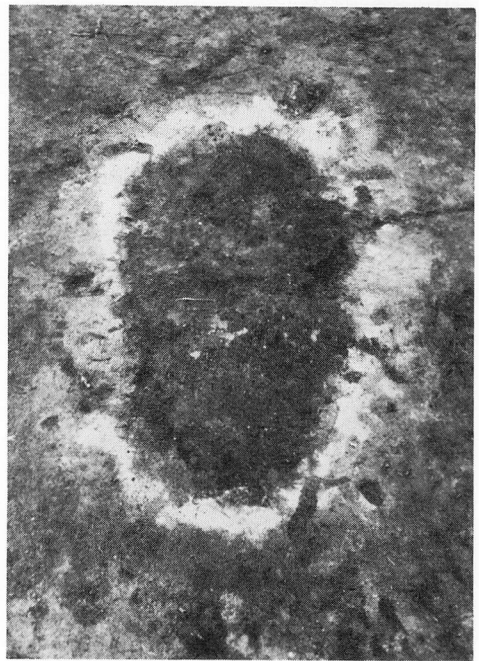
a. E I-108陥し穴状遺構



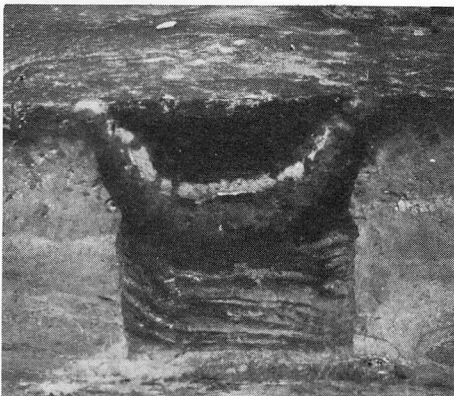
b. E I-108陥し穴状遺構 (土層断面)



c. E II-101陥し穴状遺構

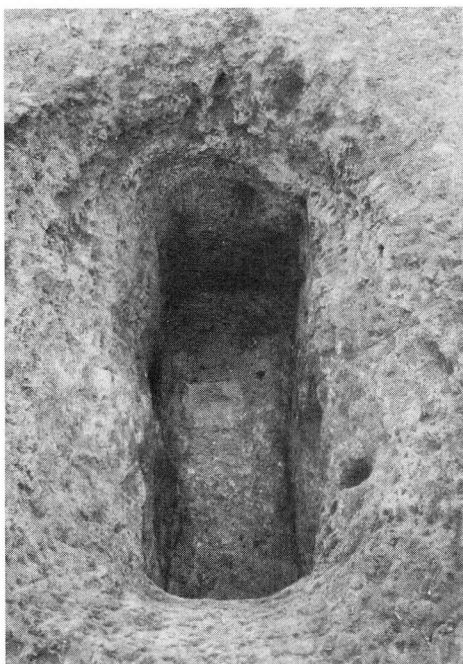


e. E II-101陥し穴状遺構 (検出状況)

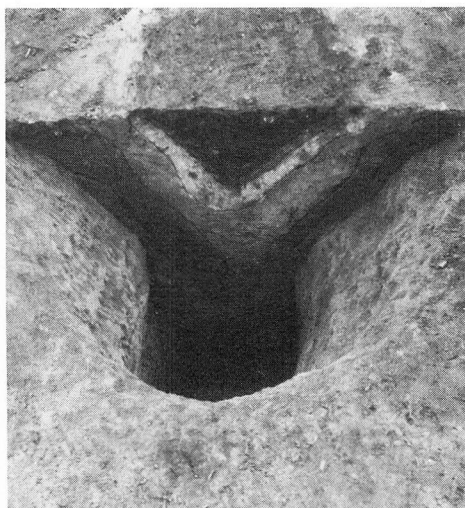


d. E II-101陥し穴状遺構 (土層断面)

写真図版21



a. E II-102陥し穴状遺構



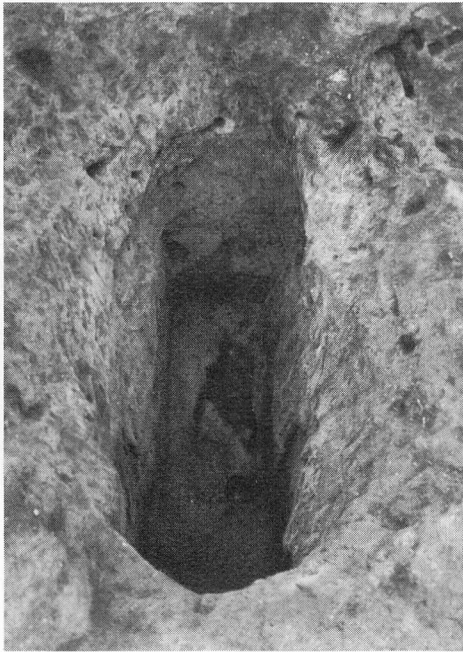
b. E II-102陥し穴状遺構 (土層断面)



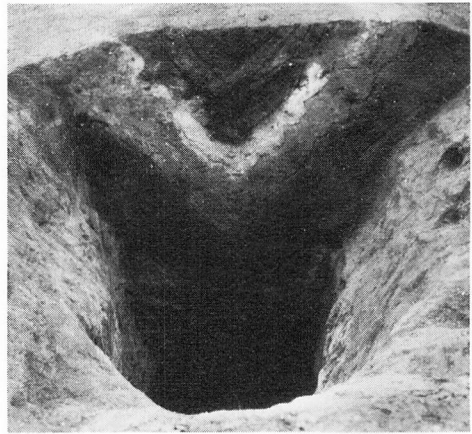
c. E II-103陥し穴状遺構



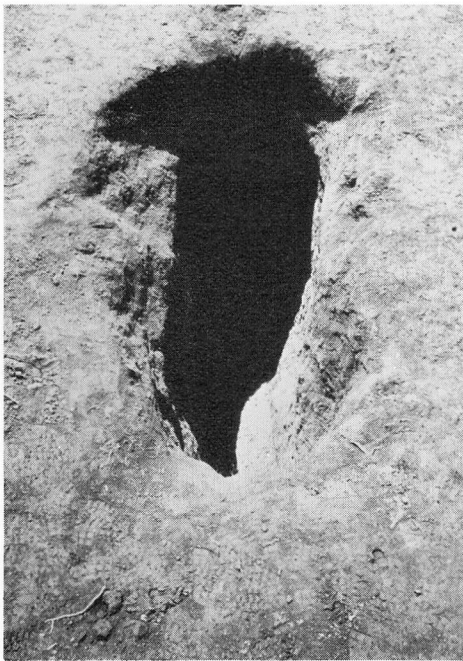
d. E II-103陥し穴状遺構 (土層断面)



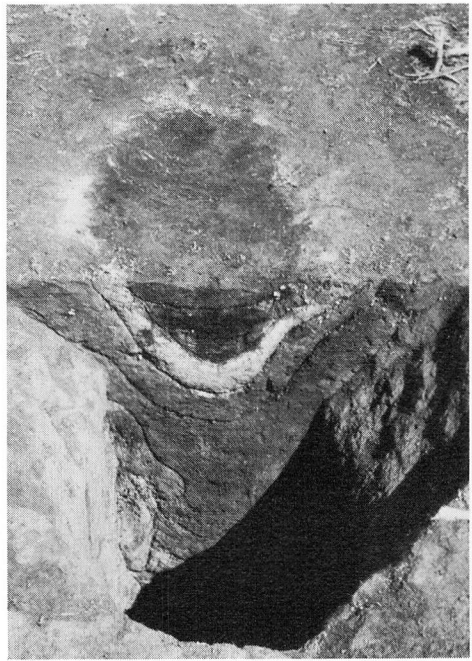
a. E II-104陥し穴状遺構



b. E II-104陥し穴状遺構 (土層断面)

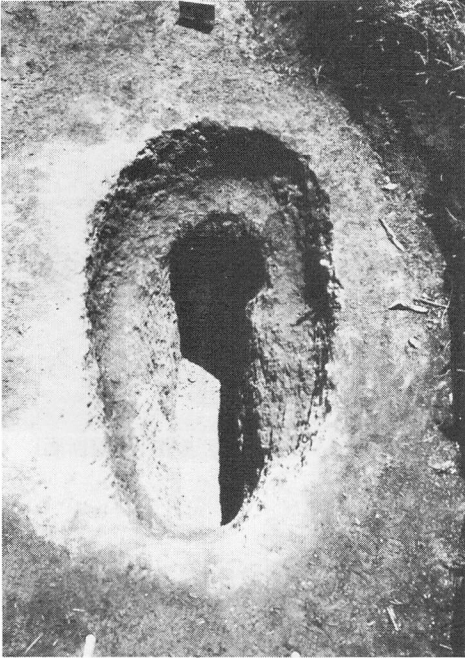


c. E II-105陥し穴状遺構

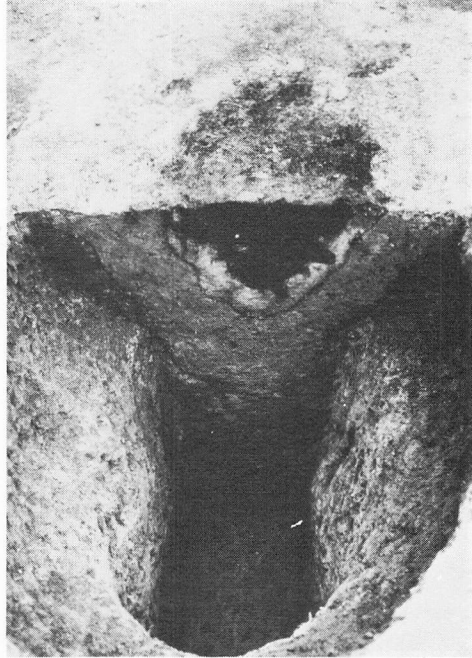


d. E II-105陥し穴状遺構 (土層断面)

写真図版 23



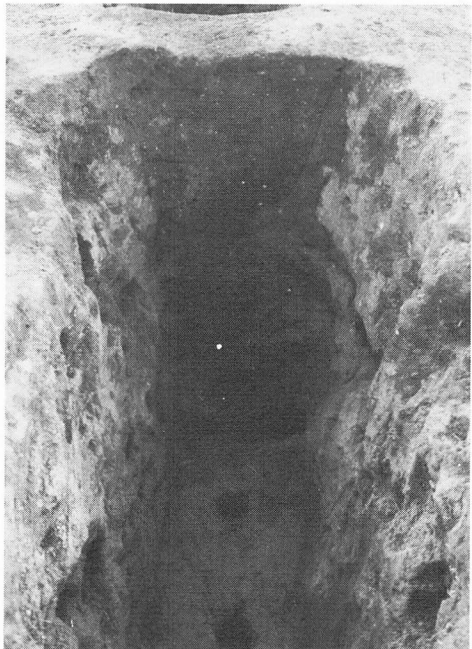
a. E II-106陥し穴状遺構



b. E II-106陥し穴状遺構 (土層断面)

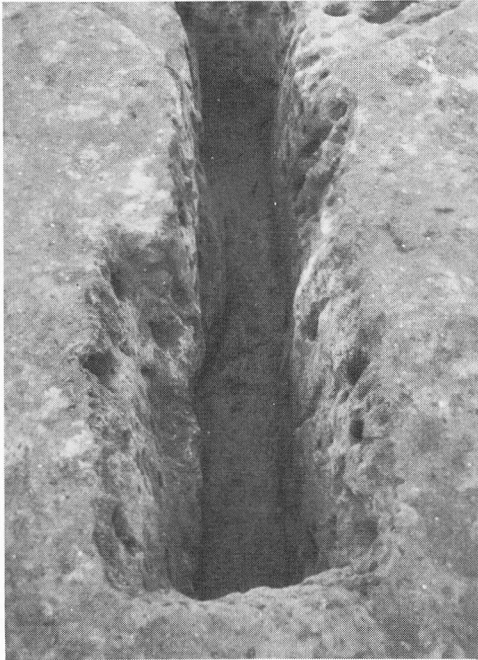


c. E II-107陥し穴状遺構



d. E II-107陥し穴状遺構 (土層断面)

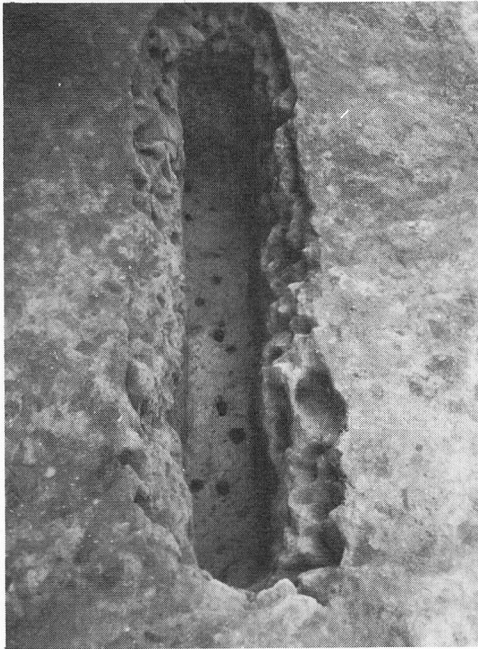
写真図版 24



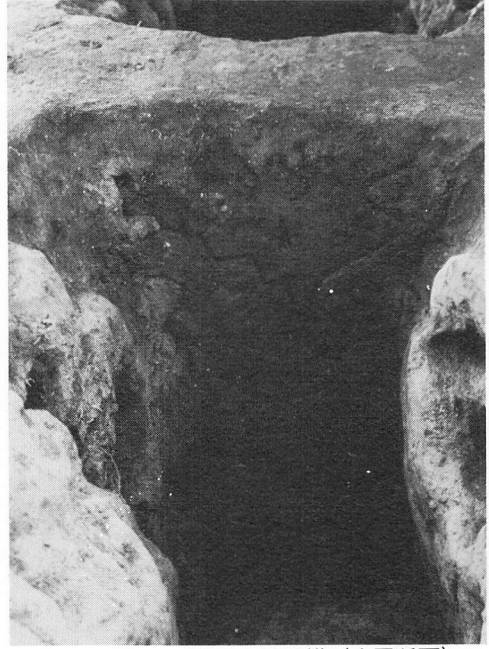
a. E II-108陥し穴状遺構



b. E II-108陥し穴状遺構 (土層断面)

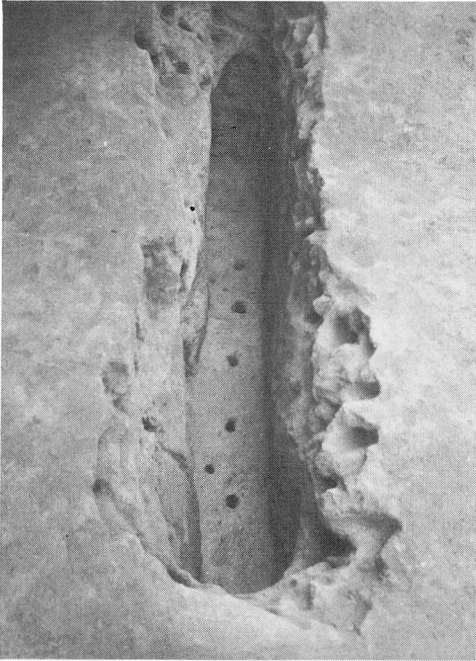


c. E II-109陥し穴状遺構

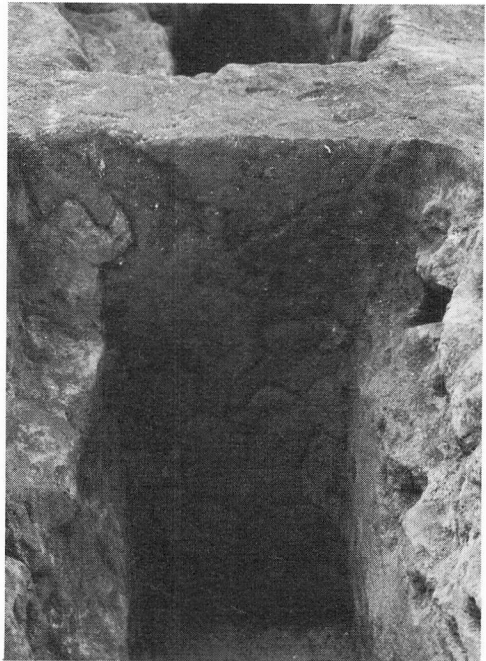


d. E II-109陥し穴状遺構 (土層断面)

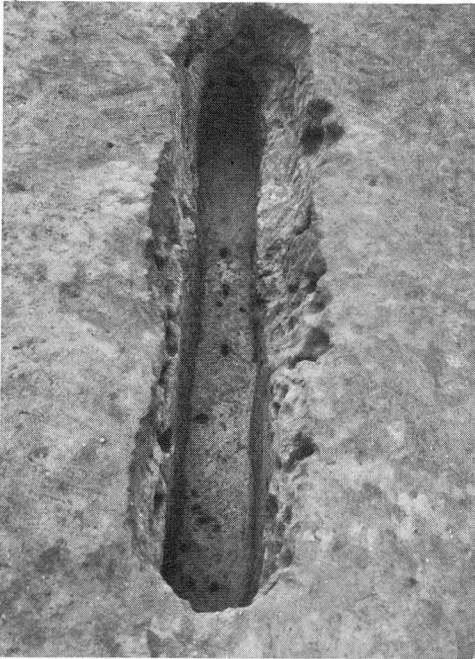
写真図版 25



a. E II-110陥し穴状遺構



b. E II-110陥し穴状遺構 (土層断面)

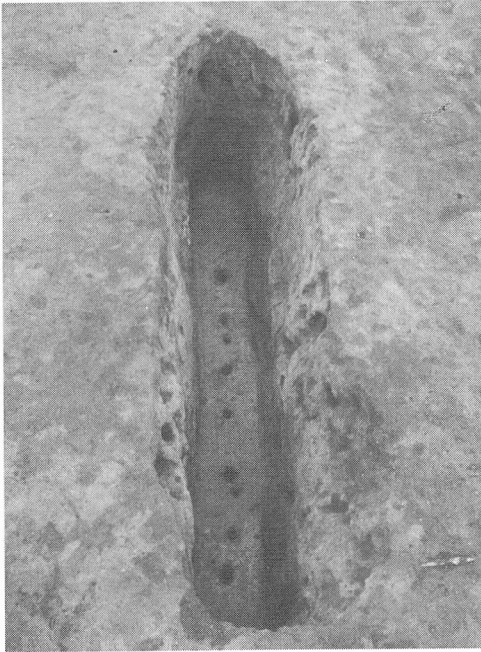


c. E II-111陥し穴状遺構

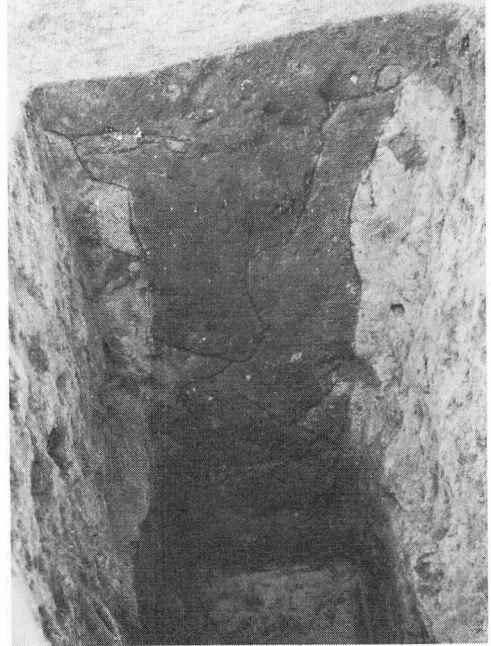


d. E II-111陥し穴状遺構 (土層断面)

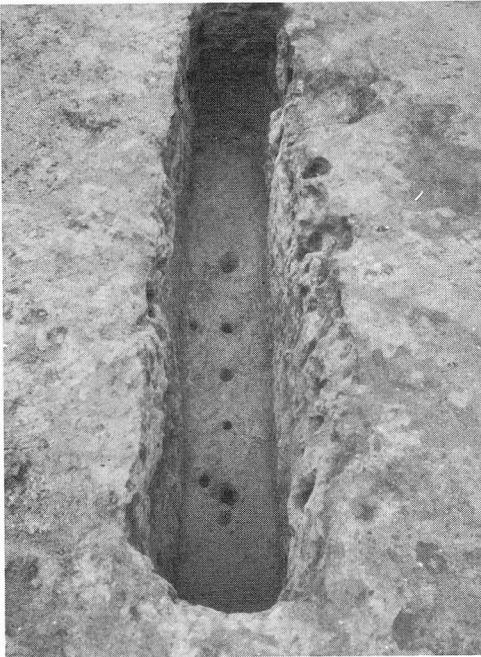
写真図版 26



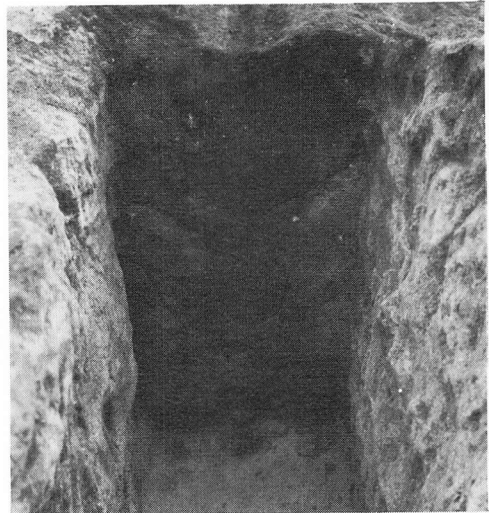
a. E III-101陥し穴状遺構



b. E III-101陥し穴状遺構 (土層断面)

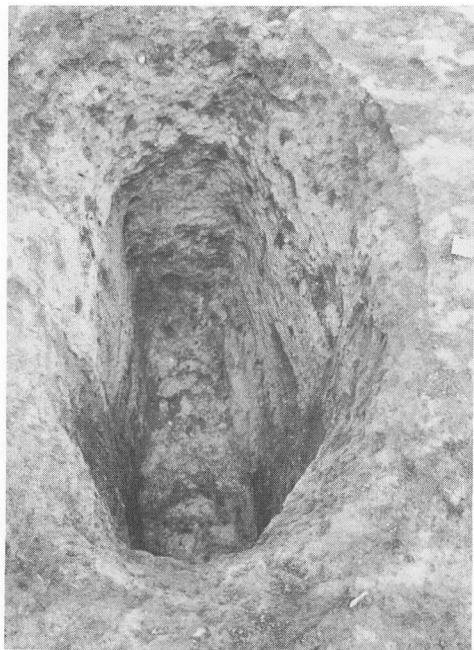


c. E III-102陥し穴状遺構



d. E III-102陥し穴状遺構 (土層断面)

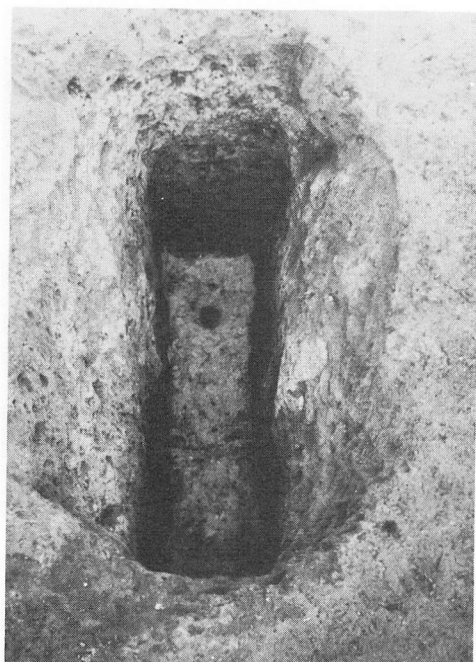
写真図版27



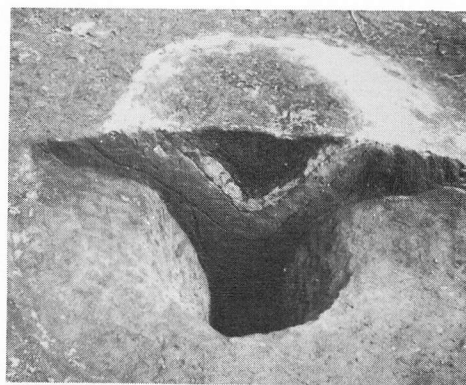
a. E III-103陥し穴状遺構



b. E III-103陥し穴状遺構 (土層断面)

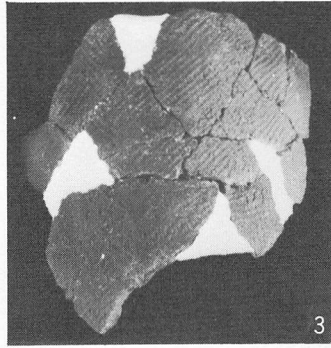
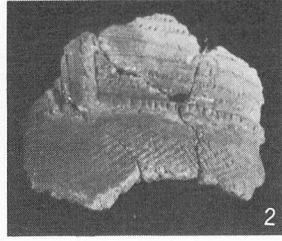
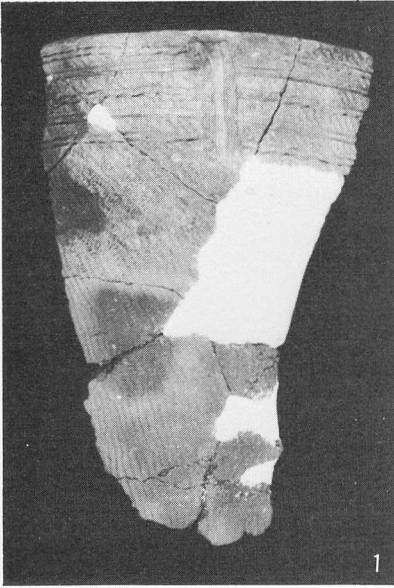


c. F I-101陥し穴状遺構

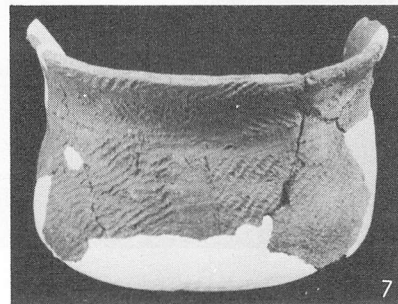
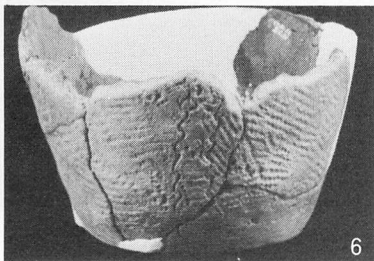
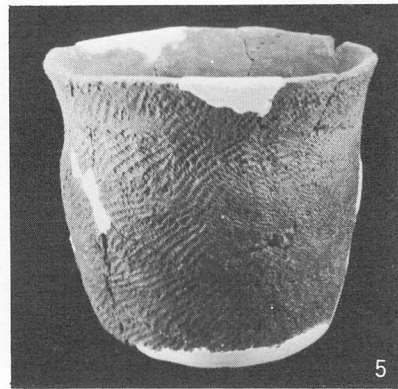
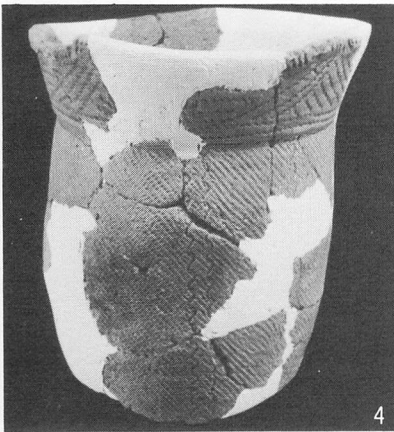


d. F I-101陥し穴状遺構 (土層断面)

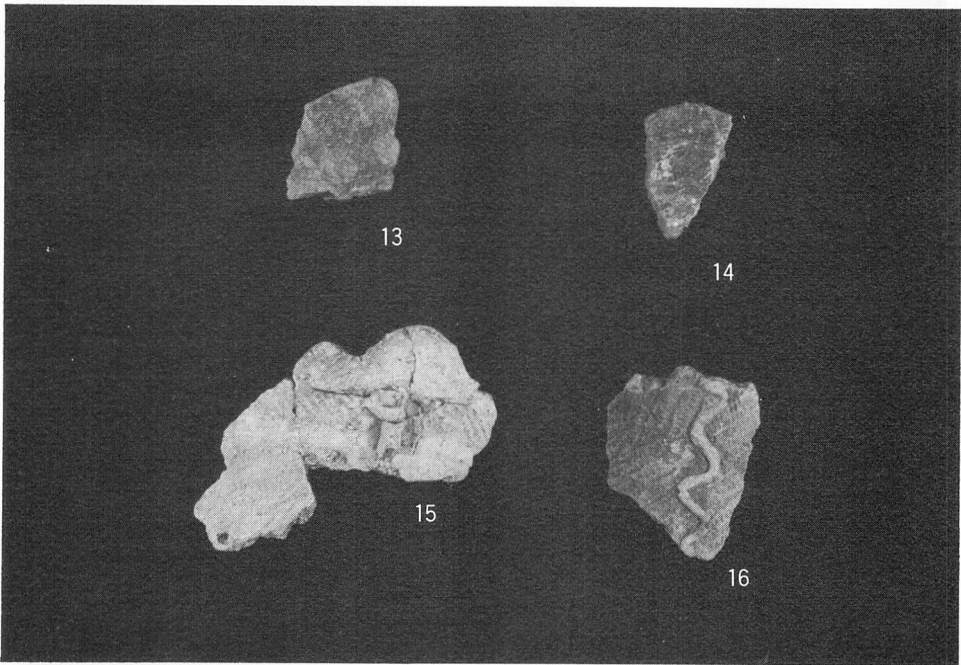
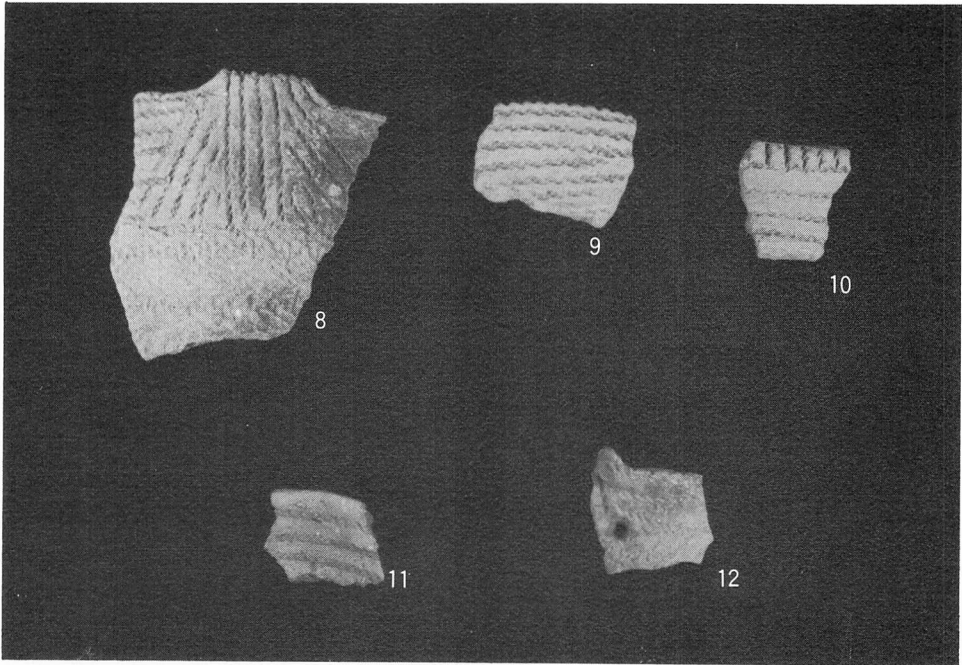
D II-1住居址 (1~3)



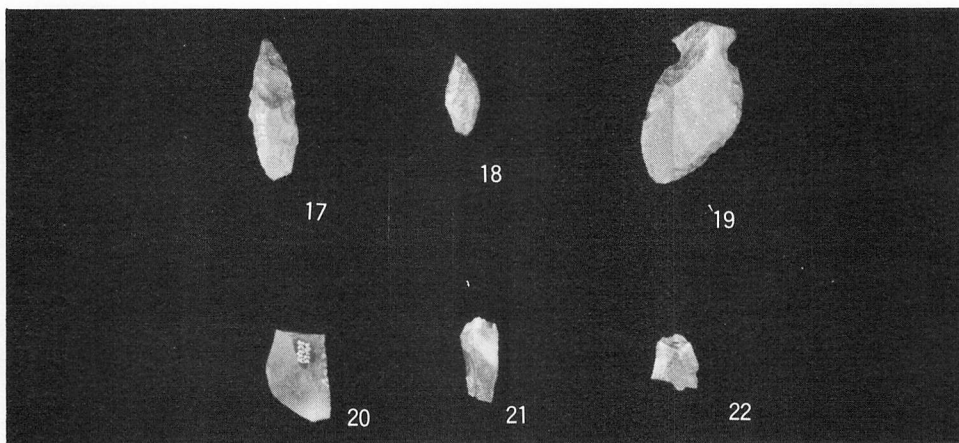
E I-1住居址 (4~22)



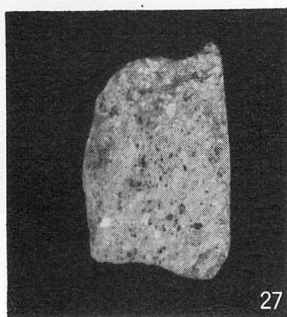
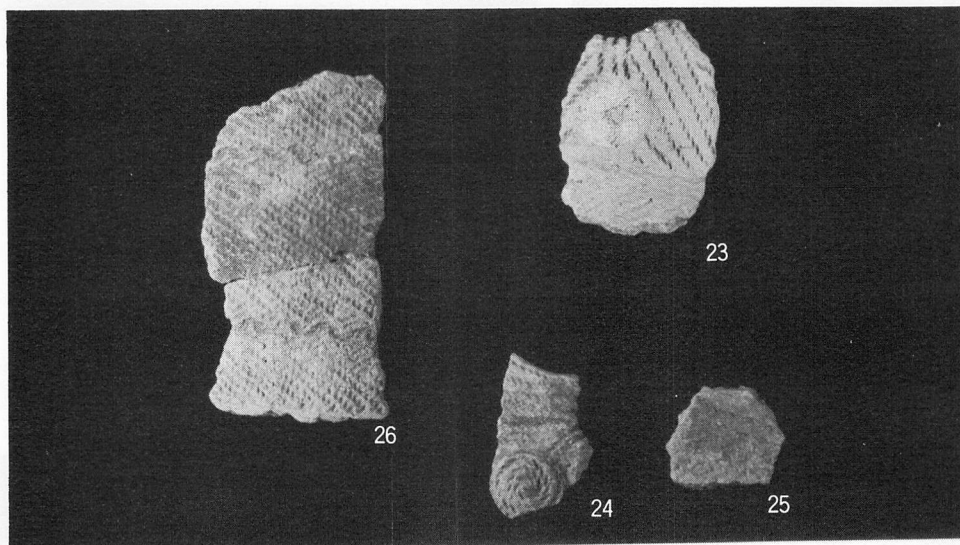
写真図版 29 遺構内の出土遺物 (1)



写真図版30 遺構内の出土遺物 (2)

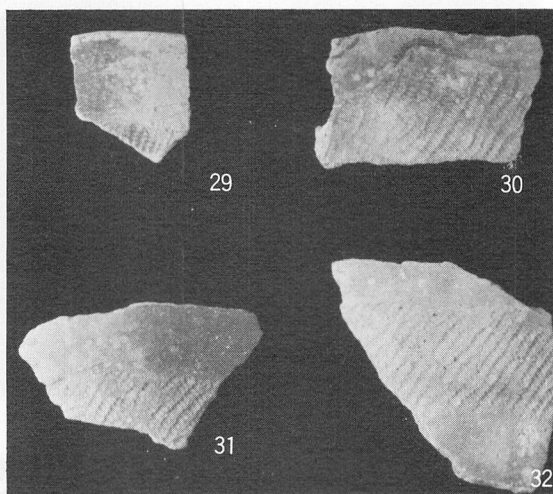
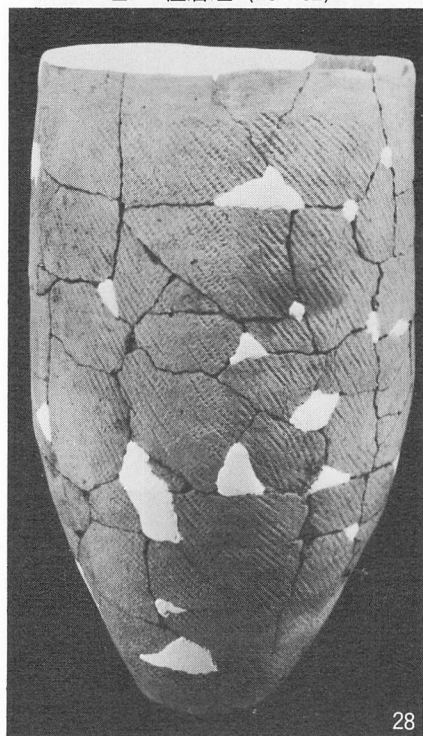


E II-1住居址状遺構 (23~27)

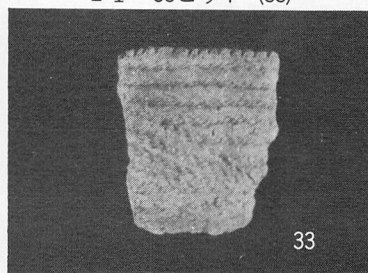


写真図版31 遺構内の出土遺物 (3)

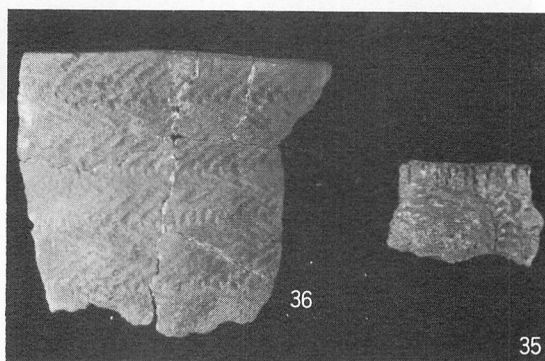
E II-2住居址 (28~32)



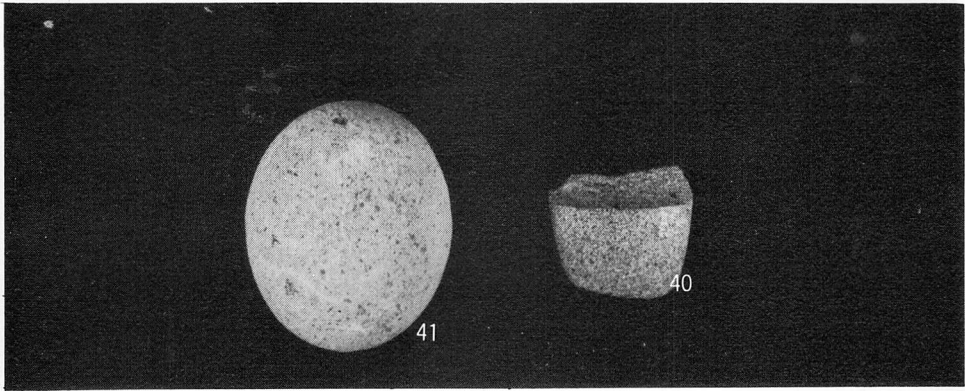
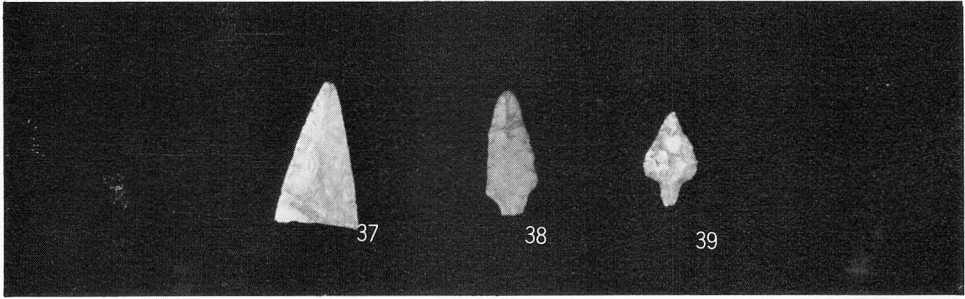
E I-53ピット (33)



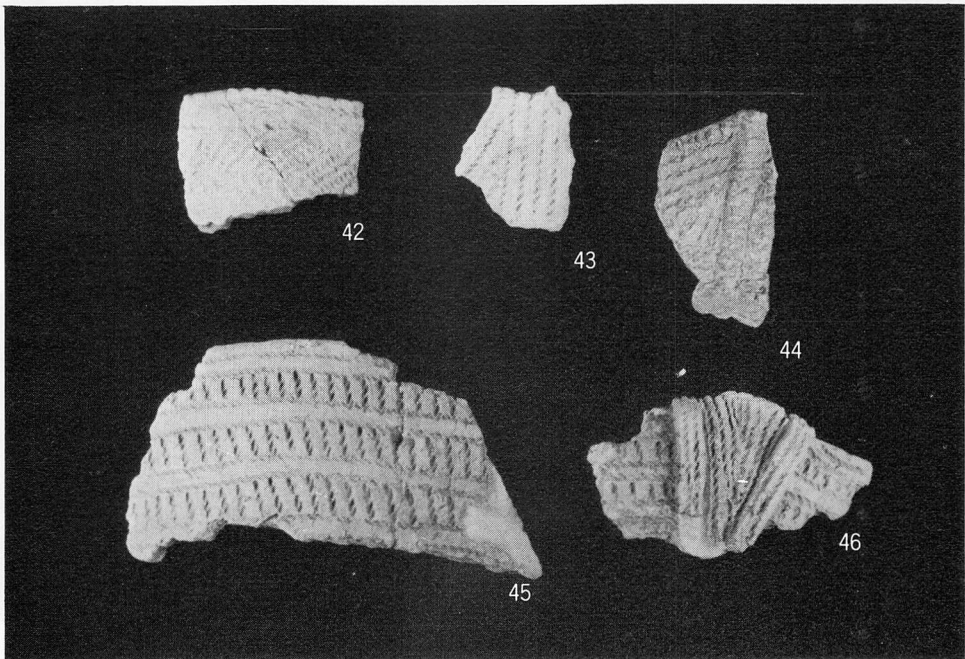
E I-55ピット (34~41)



写真図版32 遺構内の出土遺物 (4)

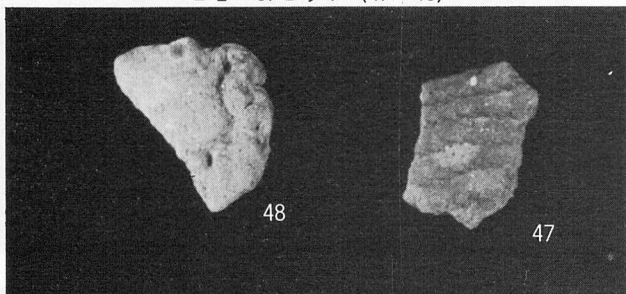


E I-56ピット (42~46)

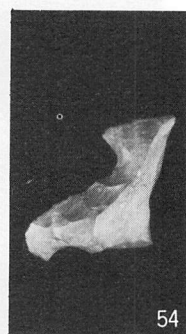
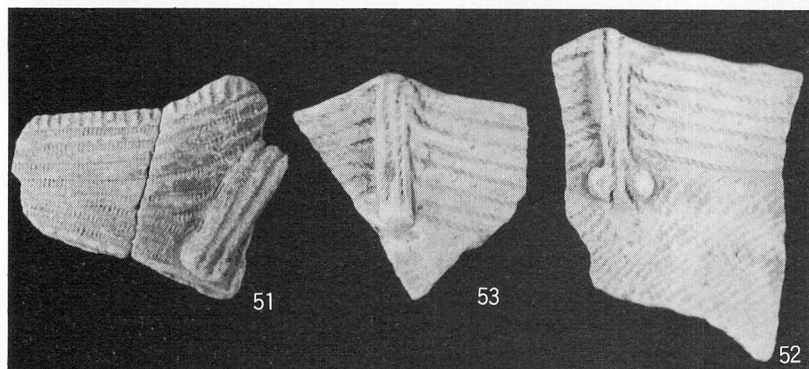
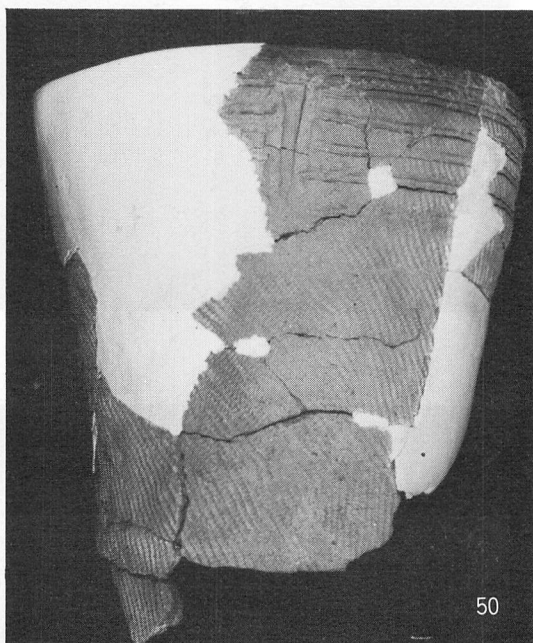


写真図版33 遺構内の出土遺物 (5)

E I-57ピット (47・48)

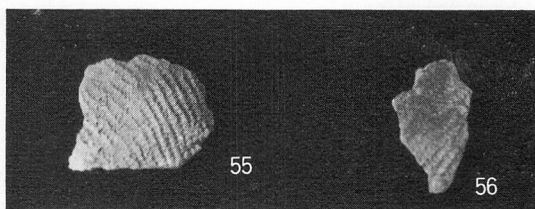
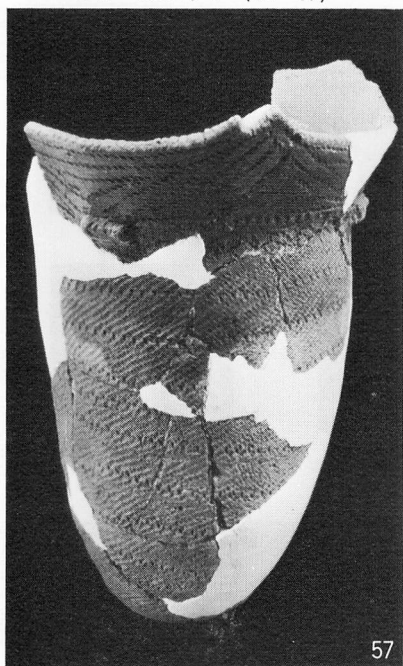


E I-58ピット (49~54)

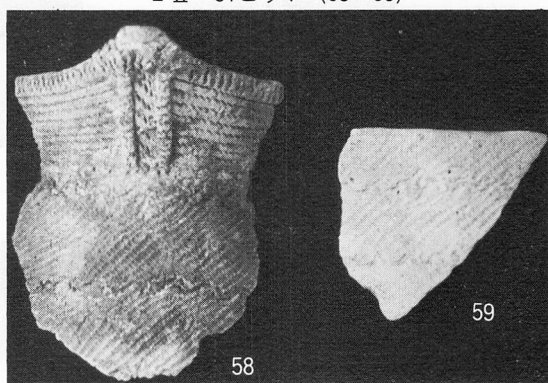


写真図版34 遺構内の出土遺物 (6)

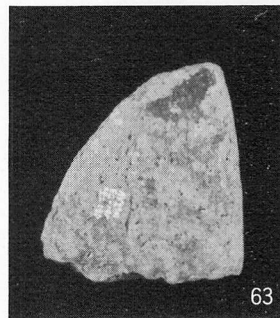
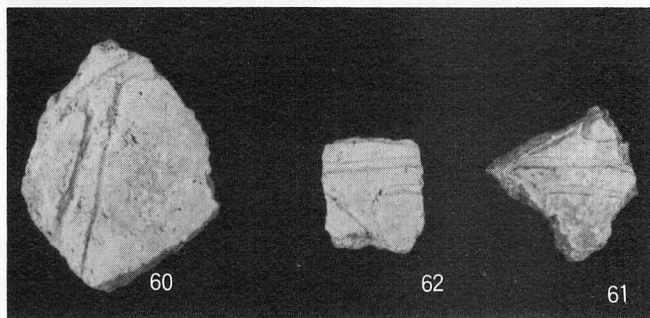
E I-59ピット (55~57)



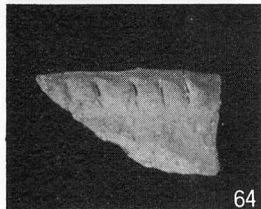
E II-51ピット (58・59)



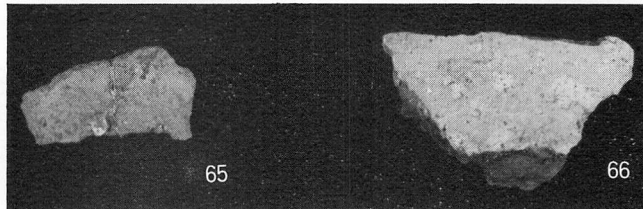
E II-53ピット (60~63)



D I-103陥し穴状遺構 (64)

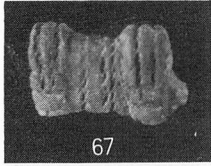


D I-106陥し穴状遺構 (65・66)

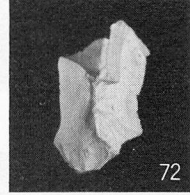
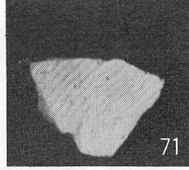
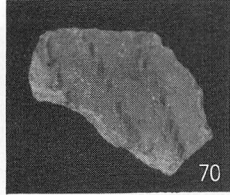
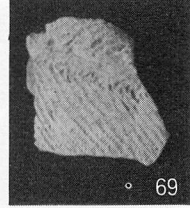
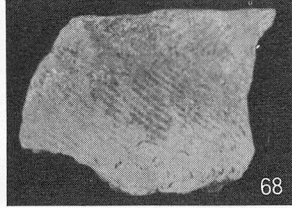


写真図版35 遺構内の出土遺物 (7)

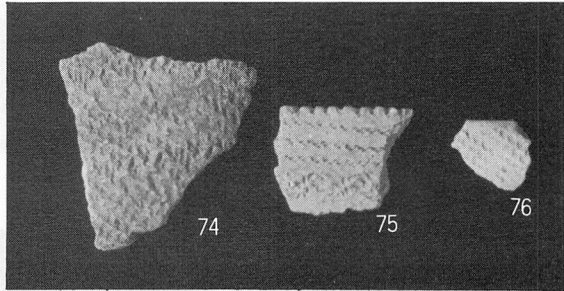
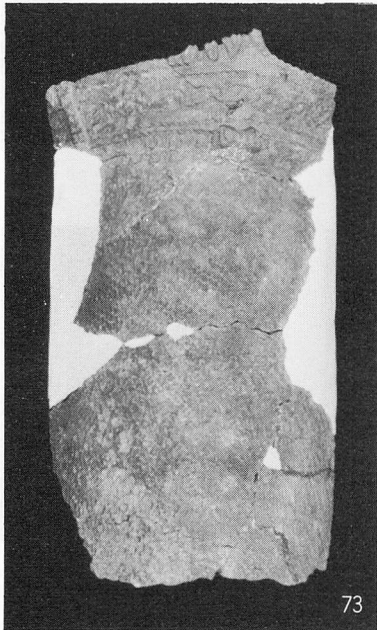
E I-101 陥し穴状遺構 (67)



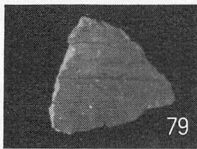
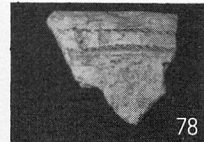
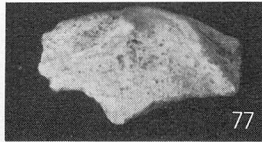
E I-102 陥し穴状遺構 (68~72)



E I-104 陥し穴状遺構 (73~76)



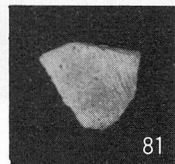
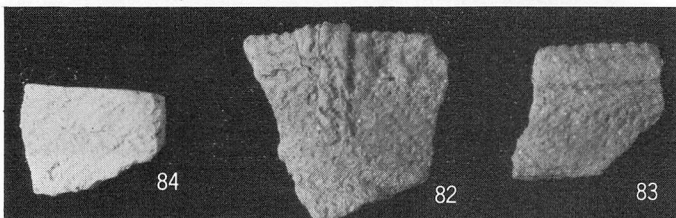
E II-103 陥し穴状遺構 (77~79)



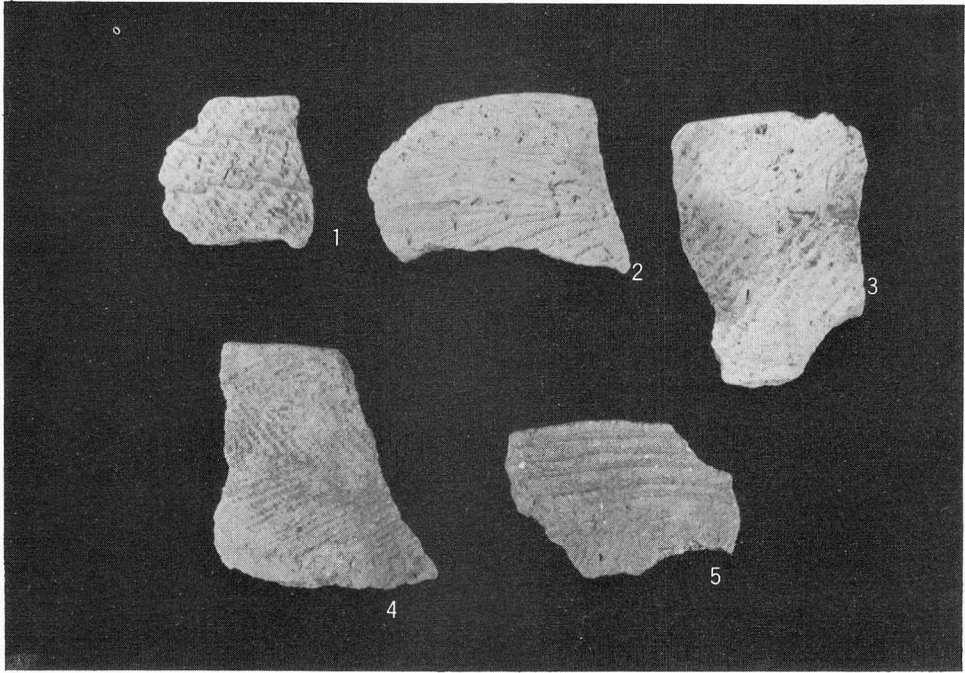
E II-104 陥し穴状遺構 (80・81)



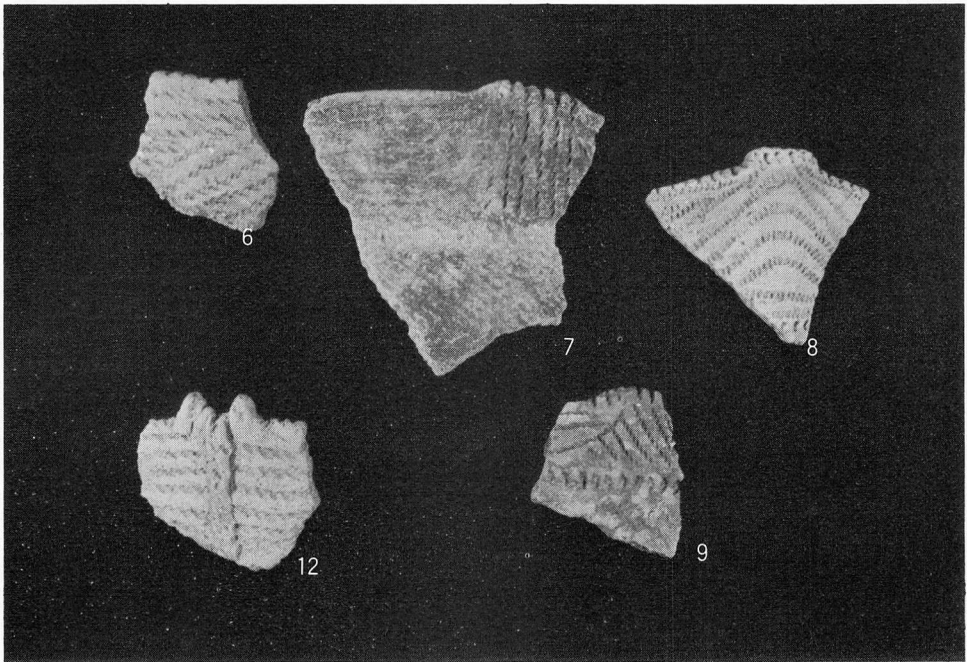
F I-101 陥し穴状遺構 (82~84)



写真図版 36 遺構内の出土遺物 (8)

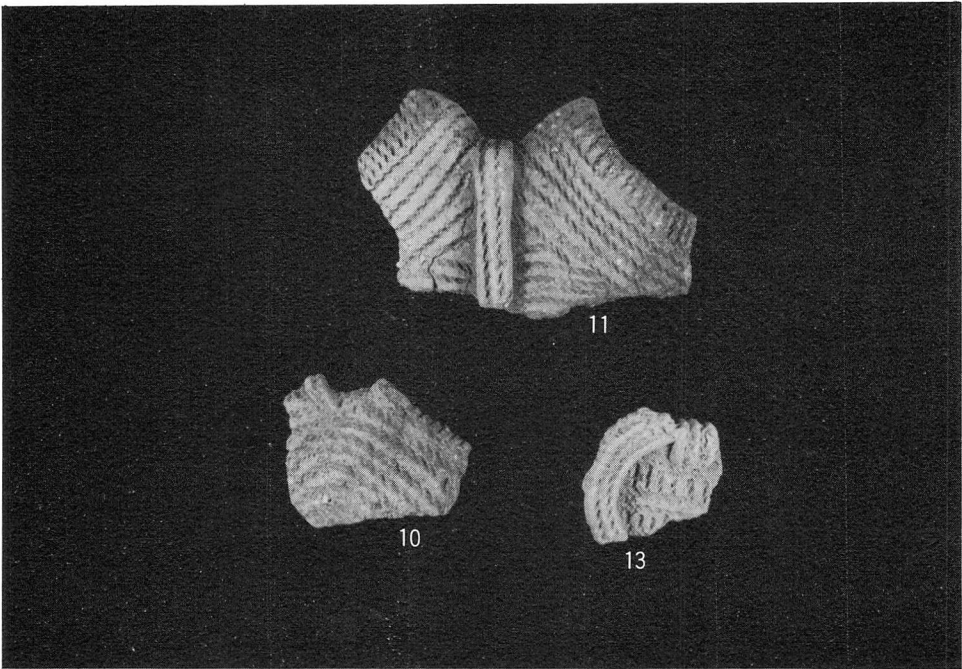


a. 第Ⅱ群・第Ⅲ群土器

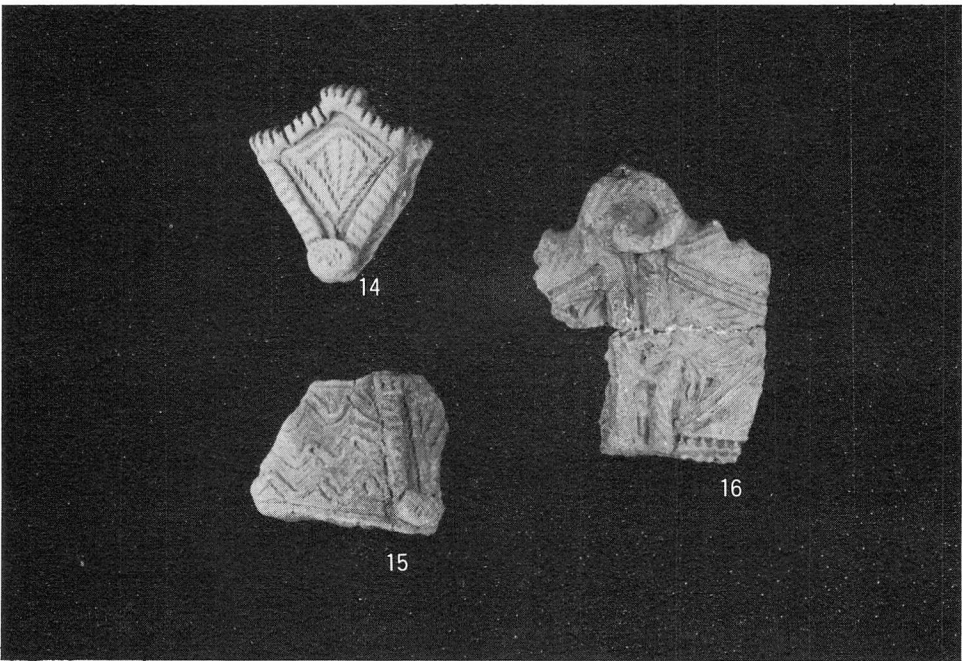


b. 第Ⅲ群土器

写真図版37 遺構外の出土遺物 (1)

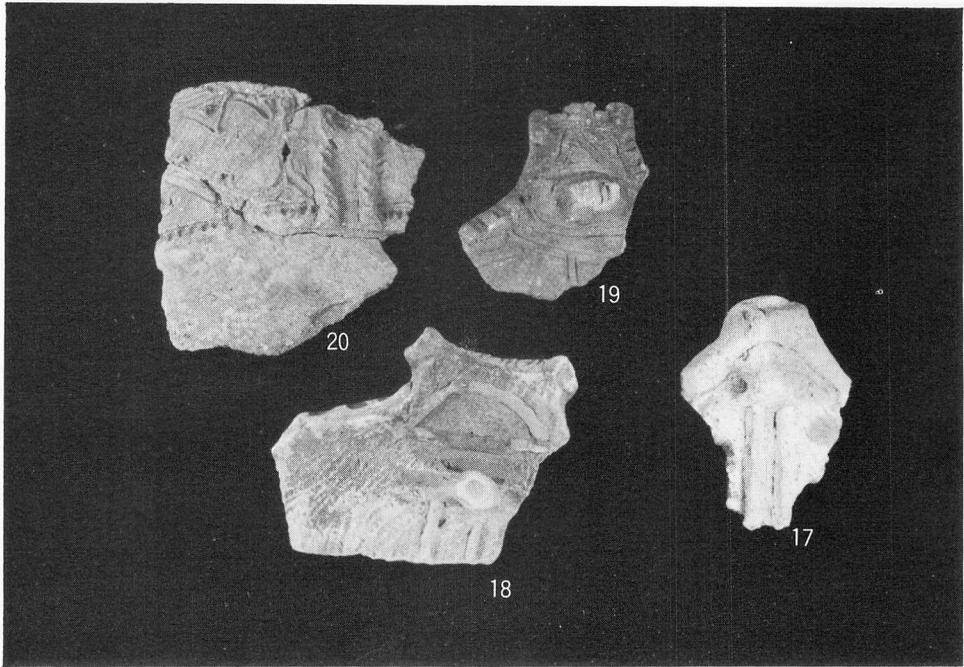


a. 第Ⅲ群土器

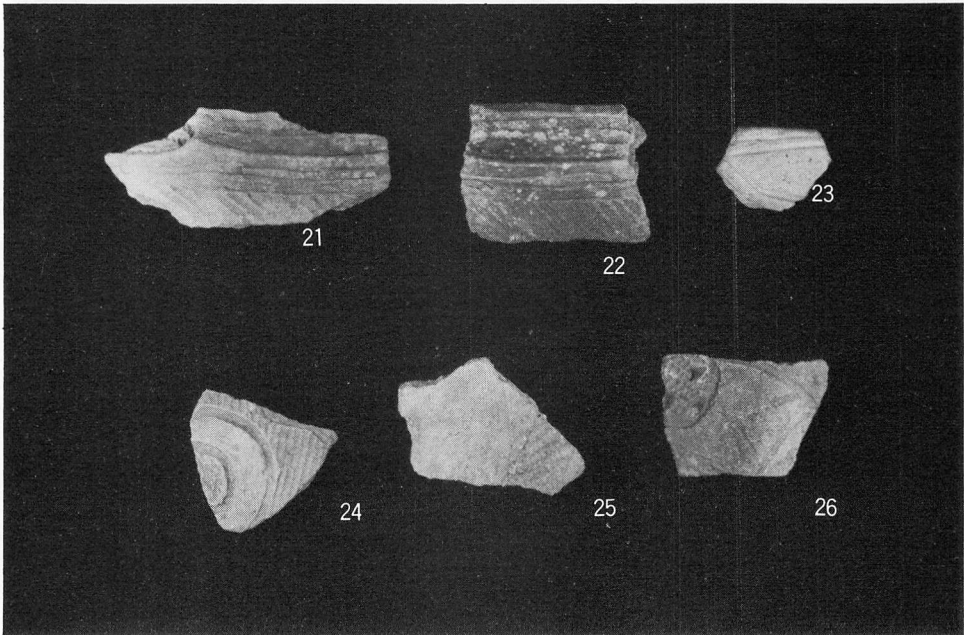


b. 第Ⅲ群土器

写真図版38 遺構外の出土遺物 (2)

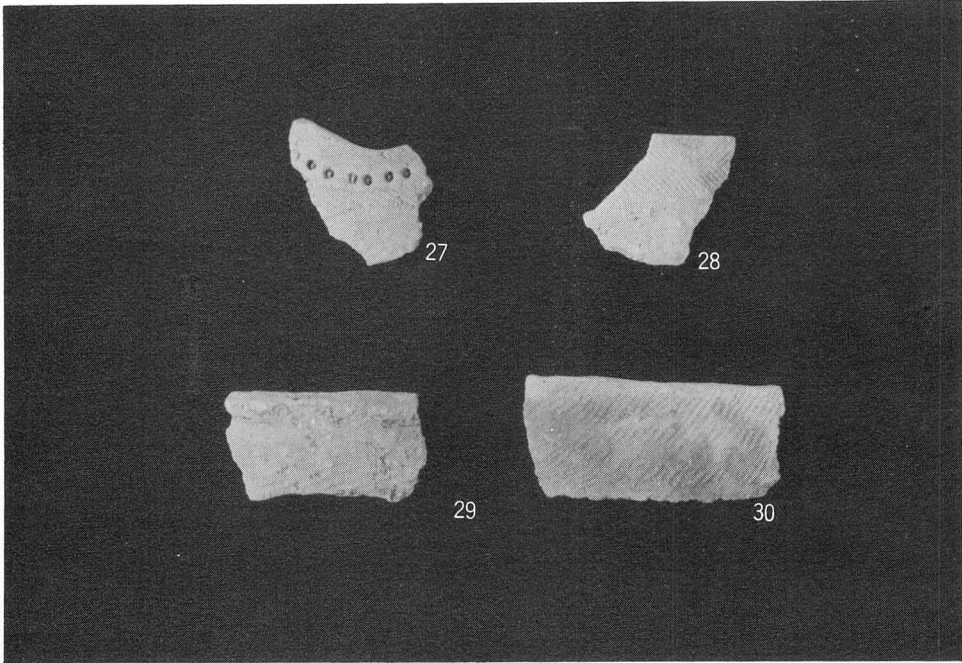


a. 第Ⅲ群土器

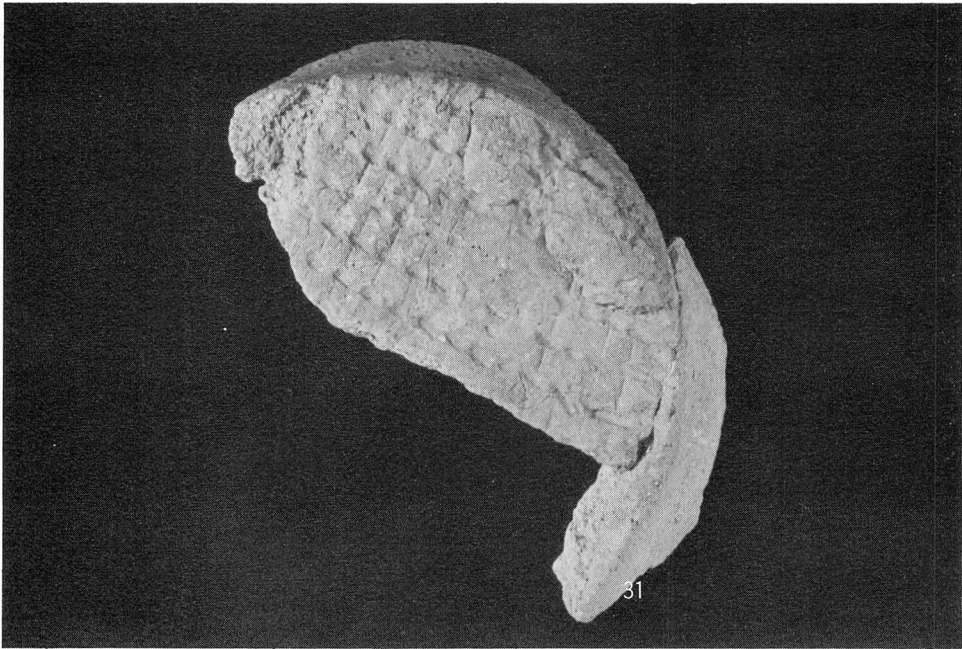


b. 第Ⅲ群土器

写真図版39 遺構外の出土遺物 (3)

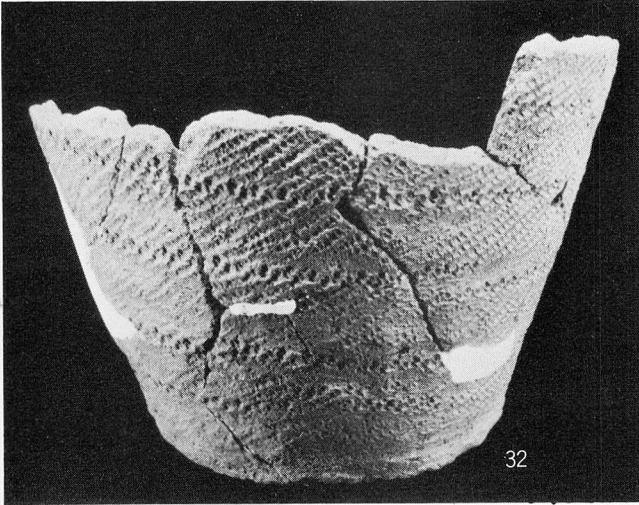


a. 第Ⅳ群土器

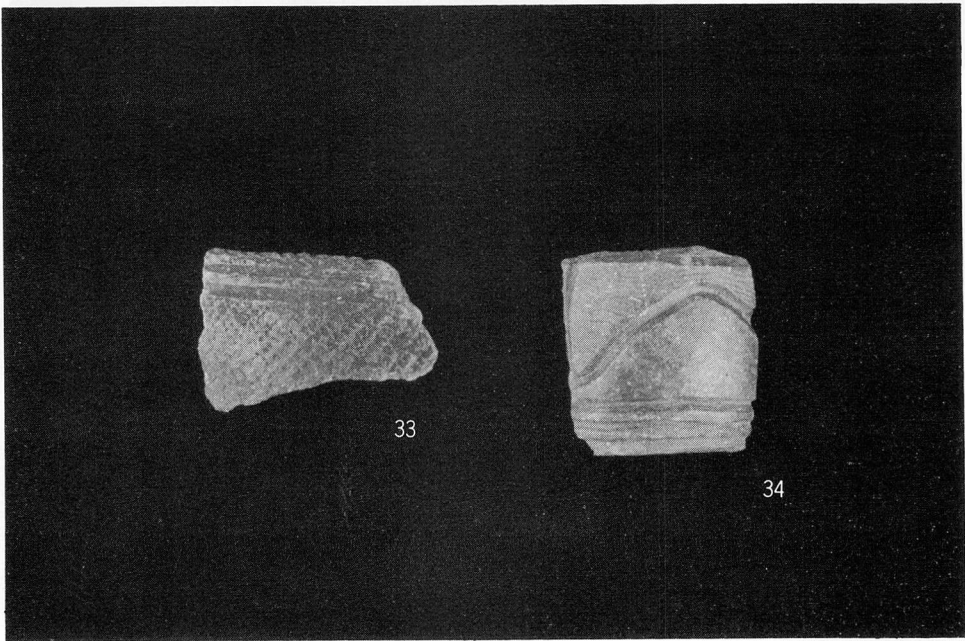


b. 土器底部

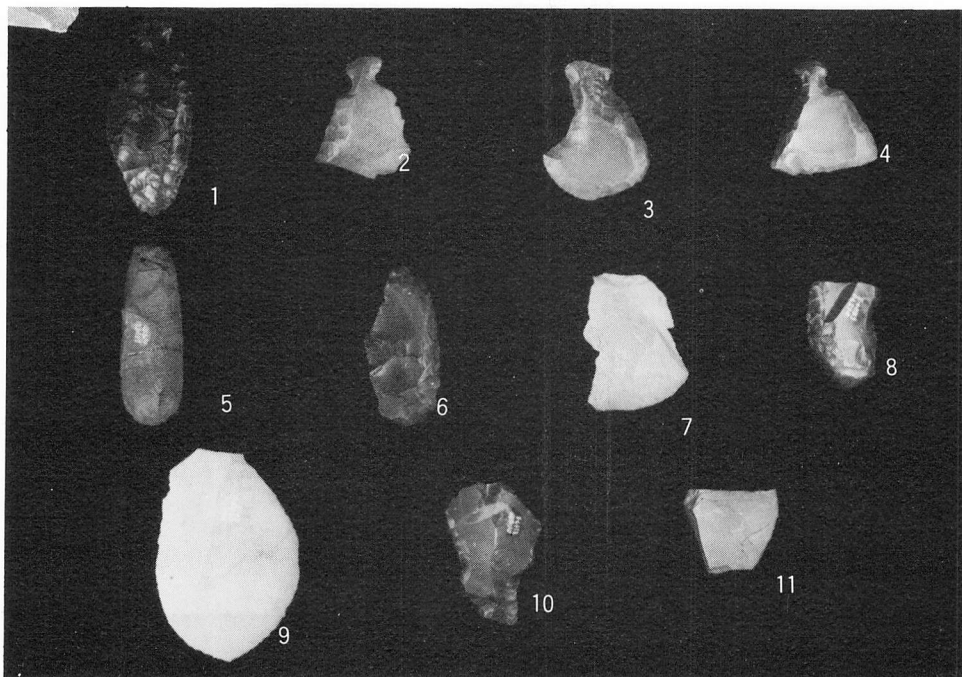
写真図版40 遺構外の出土遺物 (4)



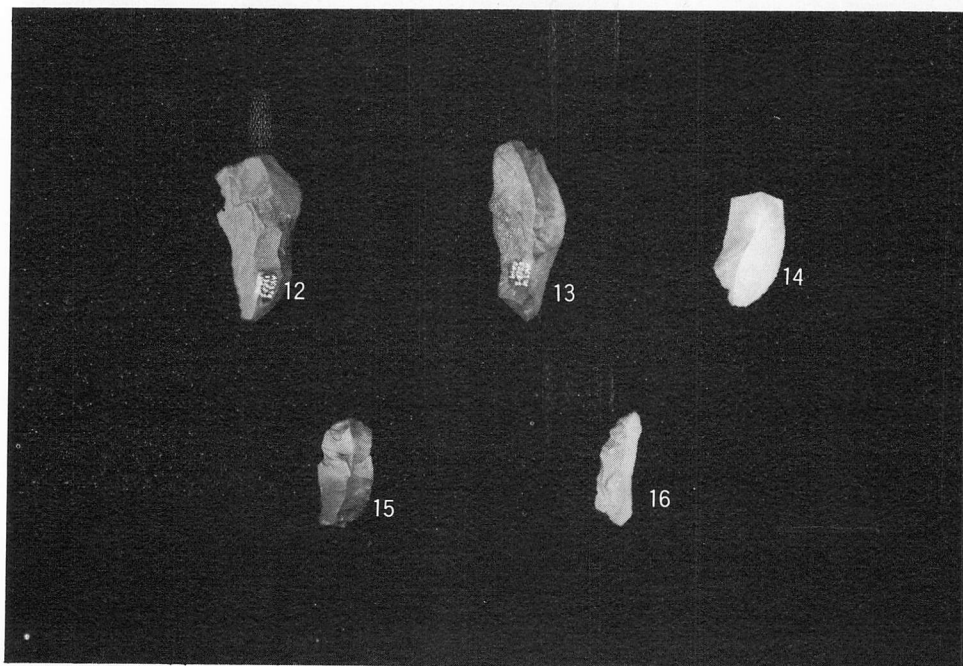
a. 土器底部



b. 弥生土器

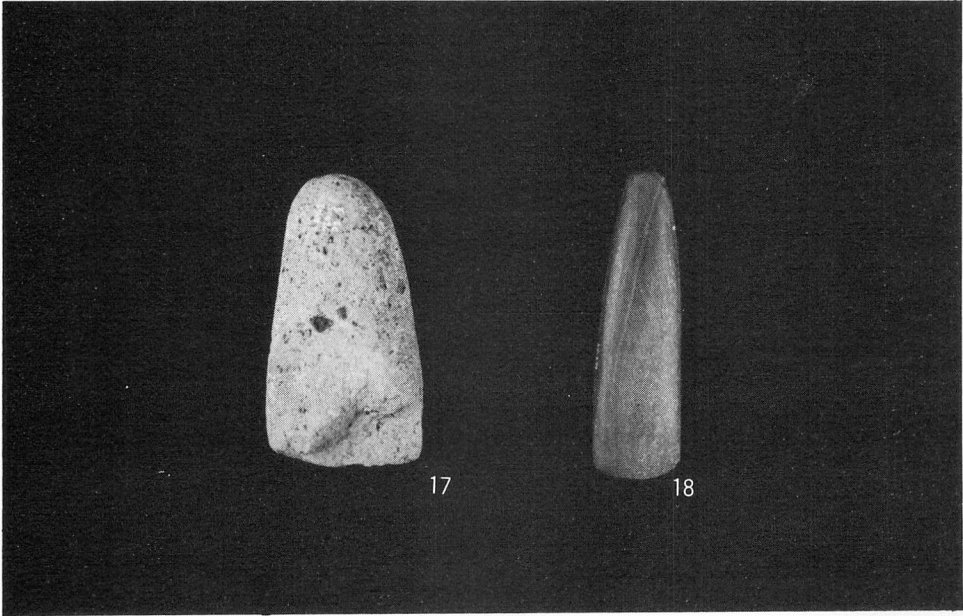


a. 1~4 (石匙) 5・6 (籠状石器) 7~11(スクレイパー)

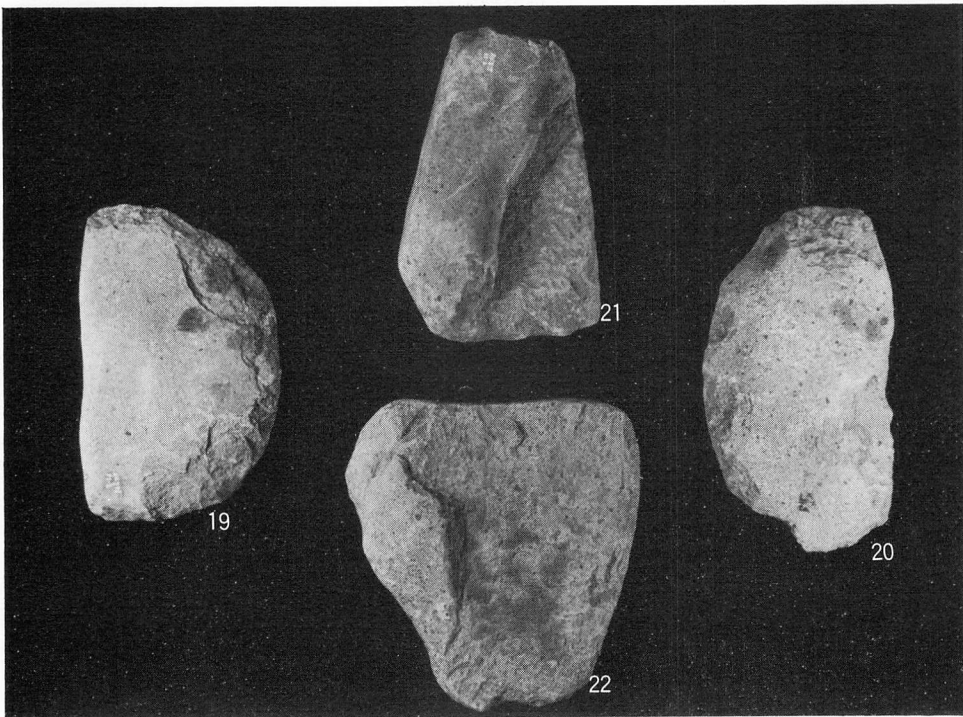


b. 不定形石器

写真図版42 遺構外の出土遺物 (6)

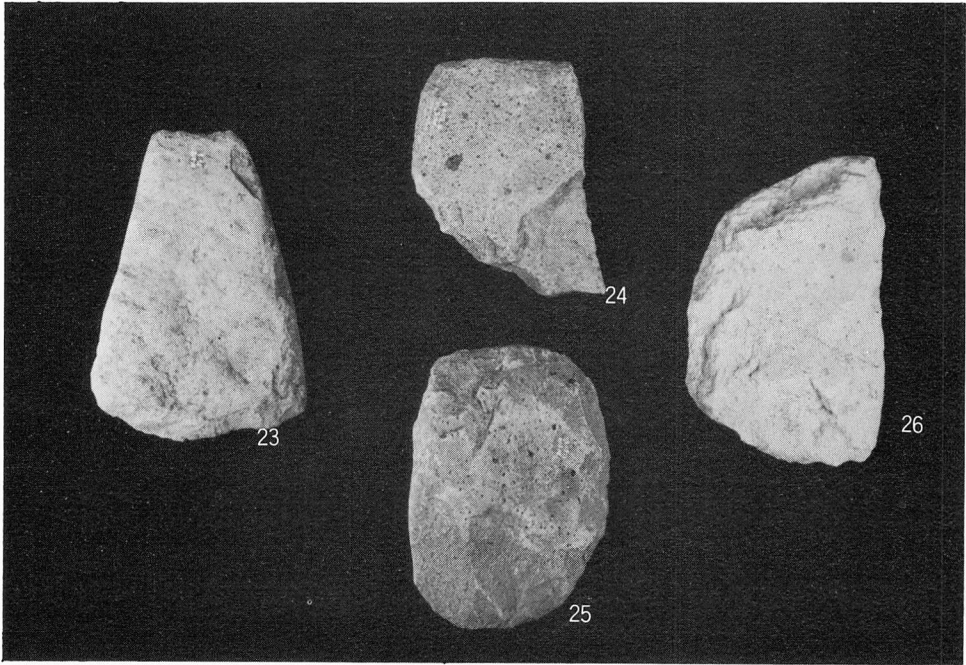


a. 石斧

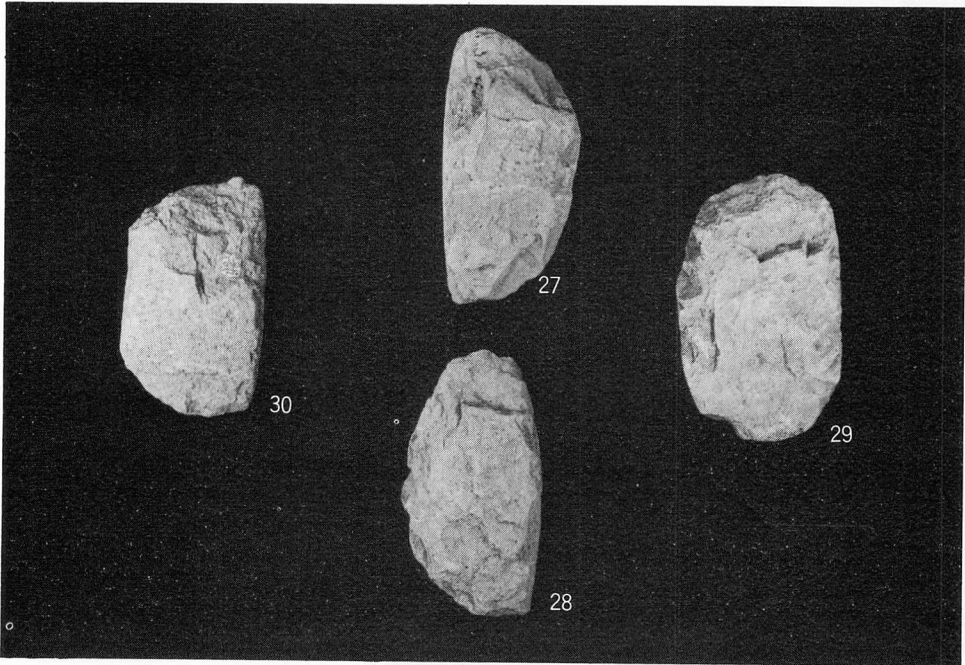


b. 半円状扁平打製石器

写真図版 43 遺構外の出土遺物 (7)

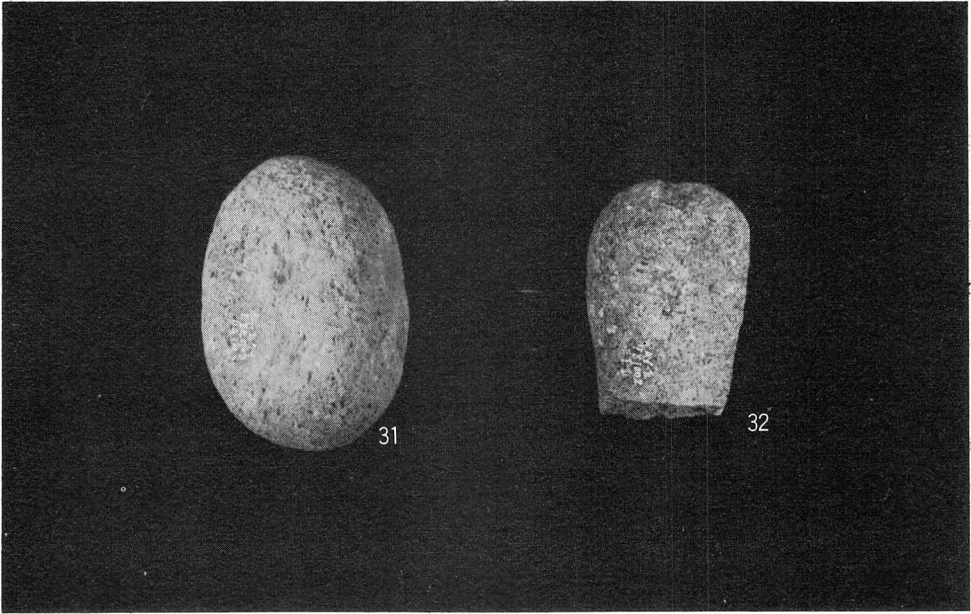


a. 半円状扁平打製石器

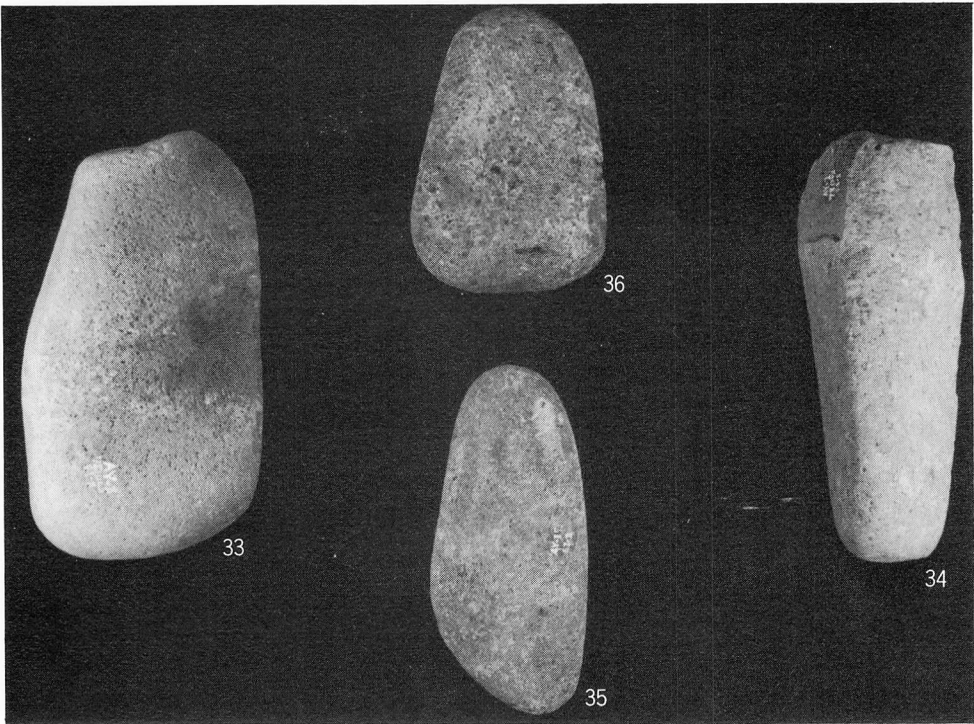


b. 半円状扁平打製石器

写真図版44 遺構外の出土遺物 (8)



a. 凹石

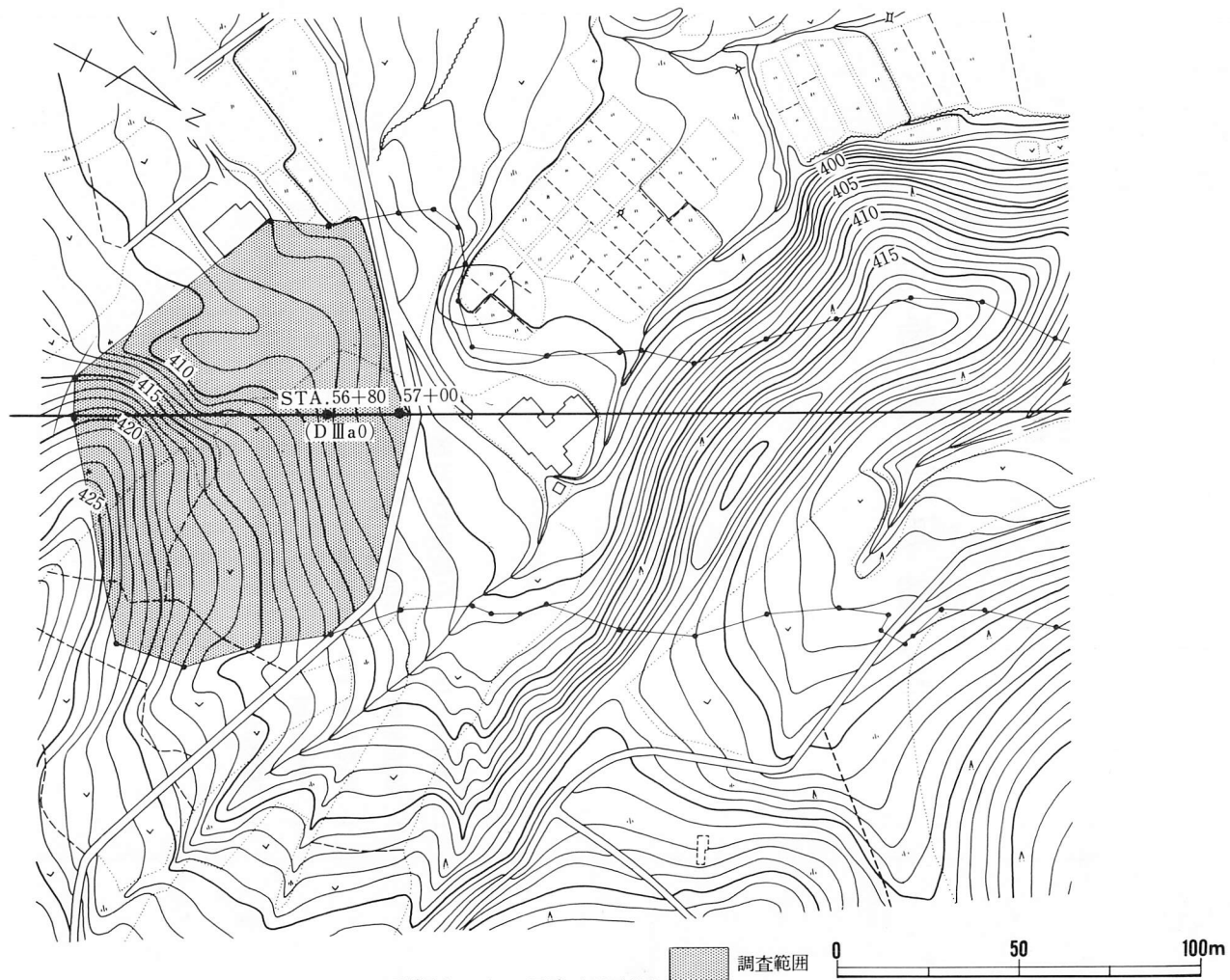


b. 磨石

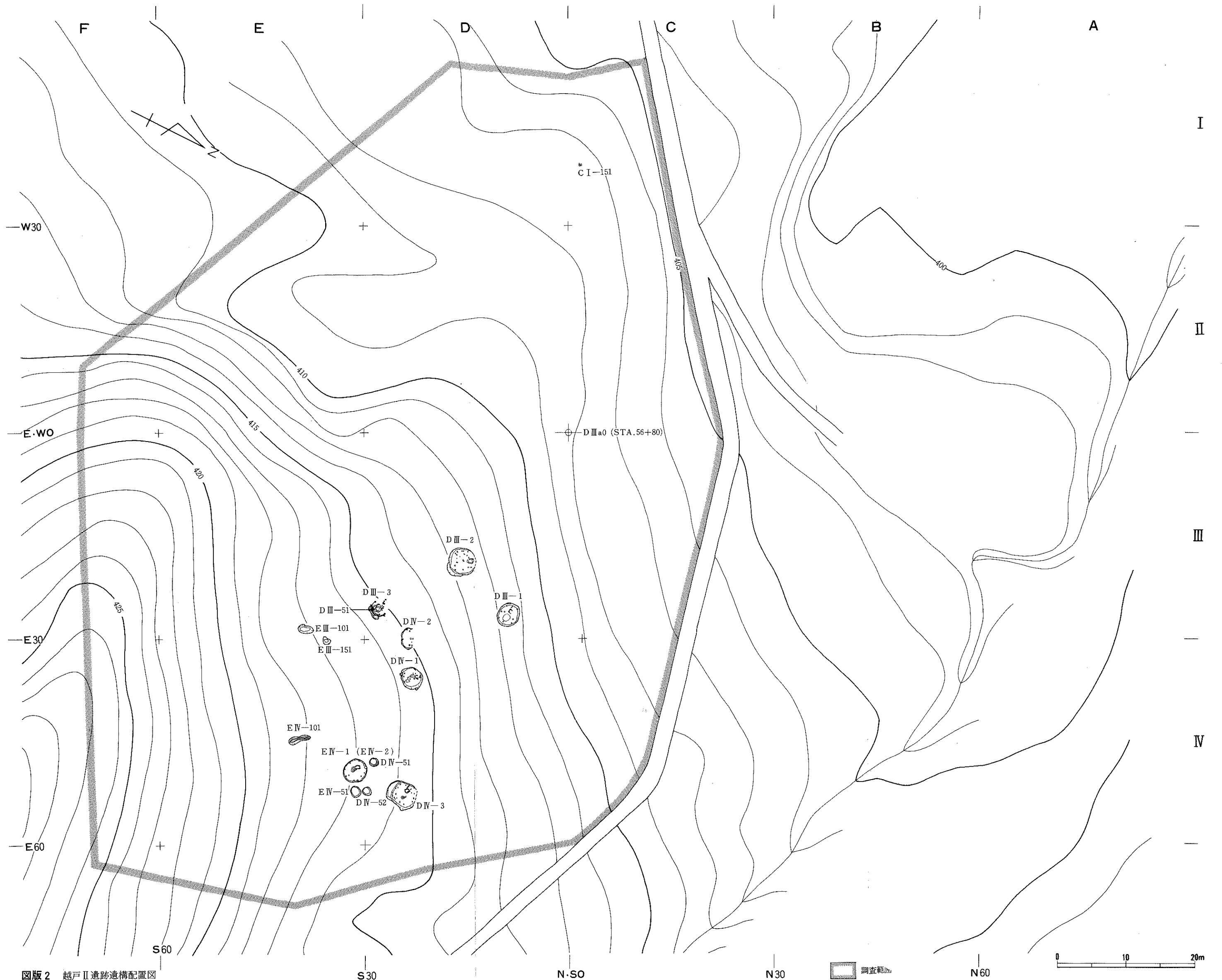
写真図版45 遺構外の出土遺物 (9)

IV. ^{こえ}越 ^と戸 II 遺跡

1. 遺跡所在地 二戸郡安代町字越戸
2. 調査期間 昭和54年9月1日～11月2日
3. 調査対象面積 4,730㎡
4. 発掘面積 4,730㎡
5. 遺跡記号 K T - II79



図版1 越戸Ⅱ遺跡地形図



図版2 越戸II遺跡遺構配置図

1. 検出遺構

(1) 竪穴住居址

D III区

D III-1 住居址

遺構 (図版 3-a・写真図版 2-b、3-a~b)

この住居址は、下位平坦面より北側に下る緩傾斜地に位置する。規模は3.5m±×2.9m±を計り、形状は楕円形を呈する。

埋土は、上位から明褐色土層、暗褐色土層、明褐色土層によって構成される。暗褐色土層には、微量の炭化物が含まれている。

床面は、ほぼ平坦である。住居址の中央やや東寄りに、粘土質の灰白色土が貼られている。径65cm±×45cm±を計り、形状は楕円形を呈する。貼り床部分は非常に堅く、それ以外は軟らかい。

柱穴は、P₁ (径15cm±・深さ11cm±)・P₃ (径16cm±・深さ7cm±)・P₆ (径15cm±・深さ10cm±)・P₈ (径14cm±・深さ6cm±)の4個で構成され、菱形の配置を示している。これらの柱穴の中で、P₁-P₆・P₃-P₈がそれぞれ対になる在り方を示している。以上の柱穴以外に床面には、P₂ (径16cm±・深さ13cm±)・P₄ (径16cm±・深さ6cm±)・P₅ (径14cm±・深さ13cm±)・P₇ (径15cm±・深さ8cm±)・P₉ (径13cm±・深さ11cm±)の柱穴状ピットが見られるが、具体的な位置づけについては不明である。

壁高は、北壁4cm±、東壁70cm±、南壁72cm±、西壁26cm±を計る。

炉は、住居址の中央部からやや西壁寄りに位置する複式炉で、摺鉢状の掘り込み部、石囲部、前庭部の3つの部位からなっている。炉の中心線は、東西方向であり、全長150cm±を計る。摺鉢状の掘り込み部は、径40cm±を計り、形状はほぼ円形を呈している。使用面は、床面より14cm±低く、その使用面下8cm±の深さまで火熱により生じた赤褐色を呈する焼土が形成されている。石囲部は、北側の構成礫を欠くが、ほぼ方形の形状を示すものと思われる。残存部の炉縁径は60cm±を計る。構成礫は、粒径11cm±~26cm±の安山岩類亜角礫で、8個が現存し、いずれもIV層の火山灰土中10cm±~18cm±の深さに埋設されている。使用面は、床面よりやや低い。炉内は、炭化物、焼土を含んだ褐色土で構成されている。前庭部は、石囲部同様北側の構成礫を欠くが、西壁にむかって「コ」の字状に開口する形状を示している。構成礫は、粒形16cm±と25cm±の安山岩類亜角礫で、2個現存している。いずれも火山灰土中8cm±~16cm±

の深さに埋設されている。

出土遺物 (図版13-1~12・写真図版15-1~9)

床面の出土遺物は、深鉢の土器片(体部下半~底部)(2)のみである。体部下半には、単節の斜縄文が、底部と内面には、ミガキが施されている。

埋土中の遺物は、土器片だけであり主に埋土の中位から出土した。1は、深鉢の体部片である。単節の斜縄文を地文とし、沈線によって曲線で構成される文様モチーフを持ち、その内側を磨消している。内外面ともに黒斑があり、外面の一部にススが付着している。7と8は、同一個体の体部片である。3は、深鉢の体部片である。単節の斜縄文を地文とし、沈線と隆起線で区画し、その内側を磨消している。全体にススが付着している。4は、深鉢の口縁部~体部片である。口縁部と体部を沈線によって区画し、口縁部に無文帯を形成し、体部に単節の斜縄文を施している。5は、大型深鉢の外反する口縁部片である。口唇部まで単節の斜縄文が、内面には、丁寧なミガキが施されている。6は、大型深鉢のやや内弯する口縁部片である。口唇部まで無節の斜縄文が、内面には粗いナデが施されている。外面全体にススが付着している。9は網目状の撚糸文が施された深鉢の体部片と思われる。10は、小型鉢の口縁部~体部片である。単節の斜縄文を地文とし、沈線によって区画され、その内側を磨消している。口縁部は内弯する。11と12は、同一個体の体部片であり、外面の一部にススが付着している。

以上の出土遺物、及び遺構の形態から、この住居址は、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

D III-2 住居址

遺 構 (図版3-b・写真図版3-c、4-a~c)

この住居址は、下位平坦面の北側縁辺部に位置する。内部にみられるピット群の相互関係や配列を検討した結果、このD III-2住居址内には、床面、壁、炉のそれぞれを、共有し異なる柱穴配置を示す住居址の存在することが判明した。これらの住居址の新旧関係は不明であるが、一応便宜的にD III-2 a住居址・D III-2 b住居址と呼称する。なお、柱穴配置以外は、一括して記述する。

規模は3.9 m 土×3.8 m 土を計り、形状は隅丸方形を呈する。

埋土は、上位から褐色土層、黒褐色土層、南壁の崩壊した土の流入堆積と思われる黄褐色土層によって構成される。黒褐色土層中には、微量の炭化物が含まれている。これらの土層の層相は、自然堆積相を示している。

床面は、ほぼ平坦で比較的堅くしまっている。壁高は、東壁31cm土、南壁37cm土、西壁27cm土を計る。北壁は斜面下方にあたるため消失して計測できなかった。

炉は、住居址の北壁際に位置する石囲炉と、その南60cm土に位置する地床炉である。石囲炉

は、炉縁径98cm±×70cm±を計り、形状は、ほぼ長方形を呈している。構成礫は、粒径20cm±～48cm±の安山岩類垂角礫8個で、火山灰土中25cm±～30cm±の深さに、横位に埋設されている。使用面は、床面と同じレベルである。炉内は、黒褐色土で構成されている。この土層中には、微細な焼土、炭化物が含まれており、南半分はその量が特に多い。

地床炉は、径70cm±×65cm±のほぼ円形の広がりを持ち、床面上8cm±の厚さで現地性の焼土が形成されている。焼土は比較的軟らかい。この焼土の直上から底部を欠いた1個体分の粗製深鉢土器片が出土した。

D III - 2a住居址

この住居址は、D III - 2住居址内で、次にあげる柱穴配置を示すものである。P₁(径14cm±・深さ12cm±)・P₆(径16cm±・深さ17cm±)・P₇(径14cm±・深さ16cm±)・P₁₁(径12cm±・深さ18cm±)の4個で構成され、菱形の配置を示している。これらの柱穴の中で、P₁ - P₇・P₆ - P₁₁がそれぞれ対になる在り方を示している。

D III - 2b住居址

この住居址は、D III - 2住居址内で、次にあげる柱穴配置を示すものである。P₂(径17cm±・深さ15cm±)・P₄(径15cm±・深さ14cm±)・P₈(径15cm±・深さ22cm±)・P₁₃(径15cm±・深さ32cm±)の4個で構成され、台形の配置を示している。これらの柱穴の中でP₂ - P₁₃・P₄ - P₈がそれぞれ対になる在り方を示している。

出土遺物 (図版13-13~19、14-20~28、15-29・写真図版16-10~17、17-18~24)

出土遺物は、土器片と石器7点である。埋土下位から出土した14の小型無頸壺以外すべて床面上からである。13は、深鉢の口縁部～体部片である。口縁部は、外反し波状口縁を呈する。その口縁に沿って細い粘土紐の貼り付による隆起線が施され、さらに隆起線の上側に棒状工具によって刺突が加えられている。体部の文様は、単節の斜縄文のみである。内面全体にススの付着がみられ、特に上部に厚く付着している。14は、小型無頸壺である。両面ともナデが施されているのみである。15と16は、深鉢の体部下半～底部片であると思われる。15は、体部下半まで、単節の斜縄文が施されている。底部は、磨耗が激しく調整技法等の識別が不可能であった。16は、全体に磨耗が激しく、特に体部下半の文様が識別できない。わずかに底部は網代底である。17は、口縁部の細片である。地文(単節の斜縄文)と細沈線がわずかながら確認されるが、細片のため器形及び正確な文様は把握できない。18~21は、住居址の地床炉から出土した大型深鉢の口縁部～体部片であり同一個体である。底部を欠くが、ほぼ1個分出土した。しかし、破損が激しく、細片化して復元不可能であった。18は、口縁部片でやや外反し、ナデが施されている。19~21は、体部片で単節の斜縄文が施されている。内外面にススの付着が著しく、特に内面に厚く付着している。22は、厚手の底部で、網代底である。

石器は、スクレイパー 6点 (23~28) と磨石 1点 (29) が出土した。スクレイパーは、すべて片面加工で剥片の側縁に刃部を形成し、サイドスクレイパー的な機能を有するものである。特に23は、刃部に入念な押圧剥離が施されている。石質は、24が赤質チャートである以外は、すべて玻璃質安山岩である。29の磨石は、全面が研磨されて球状を呈する。石質は、安山岩である。

以上の出土遺物と遺構の形態から、この住居址は、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

D III-3 住居址

遺 構 (図版 4・写真図版 5-a~d)

この住居址は、上位平坦面西方の緩傾斜地のほぼ中央部付近に位置する。北西側が斜面下方にあたっているため、南側の一部から、西側、北側にかけての壁が消失している。したがって正確な規模、形状を知ることができない。

埋土は、表土除去の際、重機によって南東側の一部を残して大部分削剥された。残存部のみでの観察を記すと、上位から暗褐色土層、褐色土層、炭化物を多量に含む暗褐色土層によって構成される。これらの土層の層相は、自然堆積相を示している。

床面は、若干の凹凸があり、東側から西側にかけてやや傾斜がみられる。全体に軟らかいが、特に後述する石囲炉と地床炉の回りの部分が軟らかい。

柱穴状のピットは、P₁ (径16cm±・深さ21cm±)・P₂ (径18cm±・深さ10cm±)・P₃ (径14cm±・深さ16cm±)・P₄ (径17cm±・深さ29cm±) の4個が検出された。これらのピットは、配置から柱穴と断定できなかった。

壁高は、東壁12cm±、南壁7cm±を計るのみである。

炉は、住居址の中央部よりやや西側に位置する石囲炉と、そのすぐ南東側に位置する地床炉である。石囲炉は、南西側と北西側の構成礫を欠き、南西側にだけ抜き取り痕が認められる。この状況から北西に開口する「コ」の字状の形状を呈するものと思われる。規模は、50cm±×50cm±を計る。構成礫は、粒径13cm±~21cm±の安山岩類亜角礫で、4個が現存している。いずれも火山灰土中5cm±~22cm±の深さに埋設されている。使用面は、床面とほぼ同じレベルにある。また、炉の南東側半分に使用面下4cm±の深さまで火熱により生じた赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。地床炉は、径55cm±×50cm±のほぼ円形の広がりを持ち、層厚7cm±を計る現地性の焼土が形成されている。使用面は、床面と同じレベルにある。なお、この地床炉は、D III-51ピットを閉塞しその上に構築している。

出土遺物 (図版15-30~32・写真図版17-25~27)

床面上の出土遺物はなく、埋土上位から土器片のみが出土した。30~32は、同一個体の深鉢

口縁部～体部片である。細片のため、全体の文様構成は把握できないが、単節の斜縄文を地文とし、沈線によって区画し磨消する装飾文様帯を有する。内面は、ミガキが施され、両面にススの付着がみられる。

以上の出土遺物と遺構の形態から、2の住居址は、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

D IV区

D IV-1 住居址

遺 構 (図版5・写真図版6-a～d)

この住居址は、上位平坦面の西側縁辺部に位置する。規模は3.3m±×3.2m±を計り、形状はほぼ円形を呈する。

埋土は、上位から褐色土層、暗褐色土層、明褐色土層、褐色土層によって構成される。炭化物は、最上位の褐色土層以外、どの土層にも多量に含まれている。

床面は、ほぼ平坦で比較的堅くしまっている。

柱穴状のピットは、P₁(径14cm±・深さ19cm±)・P₂(径14cm±・深さ10cm±)・P₃(径10cm±・深さ11cm±)・P₄(径15cm±・深さ13cm±)・P₅(径16cm±・深さ8cm±)・P₆(径12cm±・深さ4cm±)の6個が検出された。これらのうちP₁・P₂・P₄・P₅の各ピットは、P₁とP₅の間のコーナーに想定されるピットを含めて五角形の配置を示す柱穴であると思われる。他のP₃とP₆のピットについては、その配置から具体的な位置づけについては不明である。

壁高は、北壁7cm±、東壁37cm±、南壁51cm±、西壁7cm±を計る。

炉は、住居址の中央部からやや北西側に位置する石囲炉で、北西の一部が開口する楕円形の形状を呈する。炉縁径は63cm±を計る。構成礫は粒径6cm±～15cm±の安山岩類亜角礫～亜円礫13個で、火山灰土中3cm±～24cm±の深さに埋設されている。使用面は、床面より10cm±低い。その使用面下7cm±の深さまで火熱により生じた赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。

出土遺物 (図版15-33、16-34～40・写真図版18-28～34)

床面上からの出土遺物は、半完形品の土器(33)1個体だけである。33は口縁部と体部の一部を欠くが、ほぼ完形品に近い小型深鉢である。しかし、全体に磨耗が激しく文様が識別できない部分もみられる。口縁部は平縁で外反し、口唇部に小突起が形成されている。この小突起の頂部に凹状のきざみが入れている。また、口縁部と体部を一本の沈線で区画し、口縁部に無文帯を形成する。体部は胴部でやや膨らみを持つ。この体部には下半を一本の沈線で区画

し、文様帯を構成している。文様は単節の斜縄文を地文とし沈線によって楕円形と曲線で構成する文様モチーフを持ち、その外側を磨消している。体部下半から底部にかけては磨耗が激しく文様等の識別が不可能である。内外面にスガが付着している。

埋土中の出土遺物は土器片だけであり、主に埋土の下部から出土した。34は深鉢のやや内弯気味の口縁部片である。細い粘土紐を貼りつけ、ナデによる調整で隆起線が施されている。35は深鉢の口縁部でやや外反する。細沈線で区画され、外側が磨消しされている。38と39は同一個体片である。一部にスガが付着している。36は大型の粗製深鉢の口縁部片である。やや外反し、口唇部と内面にナデが施されている。37は深鉢の口縁部片で外反する。口縁部と体部を隆起線で区画し、口縁部にナデが施されている。40は網代底の底部片である。

以上の出土遺物と遺構の形態から、この住居址は縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

D IV-2 住居址

遺 構 (図版6・写真図版7)

この住居址は、上位平坦面の縁辺部中央に位置する。北西側が斜面下方にあたっているため、北～西～南西側にかけての壁、および床面が消失している。したがって正確な規模、形状を知ることができないが、東～南～南西側の一部にかけて残存する壁の輪郭線から推定すると、規模は径3.0m±を計り、形状は円形を呈するものと思われる。

埋土は暗褐色土、褐色土がマダラ状にまじりあった単層である。そのため、Field Card にその性状を記載しただけで、土層断面図の作成は省略した。

残存部の床面は、ほぼ平坦で堅くしまっている。

柱穴状のピットは、P₁ (径17cm±・深さ34cm±)・P₂ (径16cm±・深さ26cm±)・P₃ (径14cm±・深さ26cm±)・P₄ (径16cm±・深さ24cm±)・P₅ (径17cm±・深さ35cm±)・P₆ (径12cm±・深さ28cm±)・P₇ (径15cm±・深さ32cm±)の7個が検出された。これらのピットは、約半分近く残存する床面から検出された。したがって明確な柱穴配置は把握できなかった。

壁高は、東壁24cm±、南壁52cm±を計るのみである。

炉は、半分以上の床面の消失によって存在するか否か確認ができなかった。

出土遺物 (図版16-41・42・写真図版18-35)

床面上の出土遺物はなく、埋土上位から土器片と石器1点が出土した。土器片は43のみで口縁部片である。地文(単節の斜縄文)を沈線で区画し外側を磨消している。石器は44のスクレイパーである。このスクレイパーは、磨製石斧の破損した剝片を再加工したものである。形態は、楕円形状を呈し、全周縁に調整剝離が施されて、刃部が形成されている。石質は緑色岩である。

なお、この住居址の時期については、遺構の大半が削剝をうけ正確な形態を把握することができず、また時期決定しうる遺物の出土もみられない事から不明である。

D IV-3 住居址

遺 構 (図版7・写真図版8-a~c)

この住居址は、上位平坦面の西側縁辺部に位置する。内部にみられるピット群の相互関係や配列を検討した結果、このD III-2住居址内には床面、柱穴、壁、炉のそれぞれを何らかの形で共有して、異なる柱穴配置を示す住居址3棟存在することが判明した。これらの住居址の新旧関係は不明であるが、一応便宜的にD IV-3 a住居址・D IV-3 b住居址・D IV-3 c住居址と呼称する。なお柱穴配置以外一括して記述する。

規模は3.6 m±×3.5 m±を計り、形状は隅丸方形を呈する。

埋土は、暗褐色土、褐色土がマダラ状にまじりあった単層である。そのため、Field Cardにその性状を記載しただけで土層断面図の作成は省略した。

床面は、ほぼ平坦で軟らかい。

壁高は、東壁43cm±、南壁23cm±、西壁22cm±を計る。北壁は、斜面下方にあたるため消失して計測できなかった。

炉は、住居址の西壁際に位置する複式炉と、ほぼ中央部に位置する地床炉である。複式炉は石囲部と前庭部の2つの部位からなるもので、全長120 cm±を計る。石囲部は、炉縁径65cm±×60cm±を計り、形状はほぼ方形を呈する。構成礫は、粒径15cm±~23cm±の安山岩類亜角礫14個で火山灰土中8 cm±~18cm±の深さに埋設されている。使用面は、床面より僅かに低い位置にある。炉内の埋土は、炭化物、焼土を含んだ暗褐色土層で構成されている。前庭部は、西壁にむけて「コ」の字状に開口する形状を示し、その構成礫は、粒径9 cm±~28cm±の安山岩類亜角礫6個で火山灰土中9 cm±~16cm±の深さに埋設されている。底面は、ほぼ平坦で、粘土質のにぶい褐色土が5 cm±の厚さで貼られている。その貼り床上に、石囲い部の使用面と同じレベルまで5 cm±の厚さで、焼土、炭化物を含む暗褐色土の堆積がみられた。

地床炉は、径48cm±×53cm±のほぼ円形の広がりを持ち、層厚8 cm±を計る現地性の焼土が形成されている。使用面は、床面と同じレベルにある。

D IV-3 a 住居址

この住居址は、D IV-3住居址で、次にあげる柱穴配置を示すものである。

P₁(径13cm±・深さ15cm±)・P₅(径15cm±・深さ18cm±)・P₆(径18cm±・深さ39cm±)・P₉(径11cm±・深さ26cm±)・P₁₃(径14cm±・深さ22cm±)・P₁₅(径12cm±・深さ47cm±)の6個で構成され六角形の配置を示している。これらの柱穴の中でP₁-P₅・P₁₅-P₆・P₁₂-P₉が、それぞれ対になる在り方を示している。

D IV-3 b 住居址

この住居址は、D IV-3 住居址内で、次にあげる柱穴配置を示すものである。

P₁(径13cm±・深さ15cm±)・P₅(径15cm±・深さ18cm±)・P₁₀(径19cm±・深さ19cm±)・P₁₄(径13cm±・深さ14cm±)の4個で構成され、台形の配置を示している。これらの柱穴の中で、P₅-P₁₀・P₁-P₁₄が、それぞれ対になる在り方を示している。

D IV-3 c 住居址

この住居址は、D IV-3 住居址内で、次にあげる柱穴配置を示すものである。

P₃(径14cm±・深さ14cm±)・P₆(径18cm±・深さ39cm±)・P₁₀(径19cm±・深さ19cm±)・P₁₄(径13cm±・深さ14cm±)の4個で構成され台形の配置を示している。これらの柱穴の中でP₆-P₁₀・P₃-P₁₄が、それぞれ対になる在り方を示している。

以上の柱穴以外に床面には、P₂(径13cm±・深さ22cm±)・P₄(径12cm±・深さ26cm±)・P₇(径16cm±・深さ33cm±)・P₈(径10cm±・深さ12cm±)・P₁₁(径10cm±・深さ13cm±)・P₁₂(径14cm±・深さ22cm±)の柱穴状ピットがみられるが、その配置から具体的な位置づけについて不明である。

出土遺物 (図版17-43~61、18-62・63・写真図版19-36~44、20-46~54)

床面上の出土遺物は、土器片と石器である。大半の土器片は、地床炉周辺から出土した。43は、深鉢の口縁部一体部片である。口縁部は、平縁で外反し、胴部でやや膨らむ。口縁部と体部を沈線によって区画し、口縁部に無文帯を形成している。胴部の文様は、地文(単節の斜縄文)を沈線で「丁」字形に区画し、その内側を磨消している。文様は、横方向に展開されており、その文様の接点に棒状工具によって刺突が施されている。内外面にわずかながらススの付着がみられる。44は、深鉢の体部下半~底部片である。体部には、複節の斜縄文が、体部最下部から底部及び内面にミガキが施されている。また、内面に黒斑及びススの付着がみられる。45は、深鉢の外反する口縁部片である。頸部から体部にかけて地文(単節の斜縄文)を、曲線状の沈線によって区画し、その外側を磨消している。その磨消しは口唇部まで及んでいる。56~60は、47の同一個体の体部片である。46は、大型深鉢の口縁部片である。口縁部は外反し、小波状口縁を呈し、その頂部の脇に小突起を作り出している。また口縁部の横方向に1~2本の沈線が施され、その外側の地文(単節の斜縄文)を磨消している。47・48・54・55は、46と同一個体片で、47と48は、口縁部片、54と55は頸部である。一部にススが付着している。

石器の出土は、スクレイパー2点(62・63)である。62・63ともに、剝片の長軸方向に平行する縁辺に刃部が形成されているサイドスクレイパーの機能を有する石器である。特に62は、刃部に入念な押圧剝離が施されている。石質は、ともに玻璃質安山岩である。

埋土中の出土遺物は、土器片だけであり、主に埋土の上部から出土した。49~53は、すべて

粗製深鉢の口縁部片である。49は、口唇部にナデが、その下部は単節の斜縄文が施されている。50と51は、単節の斜縄文、52は横位の羽状縄文、53は横位に単節の縄文が口唇部まで施されている。61は、底部片で笹の葉状の圧痕がみられる。

以上の出土遺物と遺構の形態から、この住居址は、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

E IV区

E IV-1 住居址

遺 構 (図版8・写真図版10-a~c)

この住居址は、上位平坦面のほぼ中央部に位置する。規模は3.6 m±×3.2 m±を計り、形状は楕円形を呈する。

埋土は、暗褐色土、褐色土がマダラ状にまじりあった単層である。そのため、Field Cardにその性状を記載しただけで、土層断面図の作成は省略した。

床面は、若干の凹凸がみられるが、全面に貼床が施されている。貼床は、汚れのほとんどない明褐色の火山灰土で14cm±~16cm±の厚さで貼られている。

柱穴は、P₁(径15cm±・深さ38cm±)・P₄(径17cm±・深さ40cm±)・P₅(径17cm±・深さ18cm±)・P₆(径16cm±・深さ31cm±)・P₇(径18cm±・深さ17cm±)の5個で構成され、五角形の配置を示している。これらの中で、P₆を要としてP₅-P₆・P₄-P₁が、それぞれ対になる在り方を示している。以上の柱穴以外に、床面にはP₂(径13cm±・深さ23cm±)・P₃(径19cm±・深さ23cm±)の柱穴状ピットがみられるが、その配置から具体的な位置づけについて不明である。

壁高は、北壁2 cm±、東壁12cm±、南壁12cm±、西壁5 cm±を計る。

炉は、住居址の中央部からやや西寄りに位置する石囲炉と、その南東60cm±のところにある地床炉である。石囲炉は、炉縁径53cm±を計り、南東に開口する「コ」の字状の形状を呈する。構成礫は、粒径7 cm±~17cm±の安山岩類亜角礫6個で、火山灰土中8 cm±~14cm±の深さに埋設されている。使用面は、床面上4 cm±の位置にあり、その上には炭化物が薄く堆積している。また使用面下14cm±の深さまで火熱により生じた赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。地床炉は、径30cm±~34cm±のほぼ円形の広がりを持ち、層厚6 cm±を計る現地性の焼土が形成されている。使用面は、床面上4 cm±の位置にある。

なお、住居址の「出入口」状施設と思われる安山岩類亜角礫2個が、北西部の壁際に位置している。粒径27cm±と42cm±を計り、いずれも長軸が壁に直交した形で並立に、火山灰土中7

cm土と14cm土の深さに埋めこまれている。この礫の間隔は、内側で21cm土、外側で68cm土を計る。

出土遺物 (図版18-64~70、19-71・写真図版20-57~64)

床面上の出土遺物は、土器片と石器である。土器片は、深鉢の体部下半~底部片(64・65)と思われるもので、ともに体部下半まで単節の斜縄文が施されている。64の底部は、網代底であり、65はナデが施されている。ともに内面にわずかにススが付着している。

石器は、スクレイパー2点(69・70)と磨石1点(71)である。スクレイパーは、剥片の先端部から長軸方向に平行する両側縁に刃部が形成されている。刃部は、入念な押圧剝離が施されている。エンドスクレイパーに属するものと思われる。石質は、玻璃質安山岩である。71の磨石は、楕円球の自然礫を使用し、全面を研磨している。石質は、安山岩である。

埋土中の遺物は、土器片だけであり、主に埋土下位から出土した。66は、深鉢の口縁部片である。波状口縁を呈し、その頂部には、指頭圧痕による小突起が作り出されている。また、口縁部に沿って沈線が施されている。67と68は、粗製の大型深鉢の口縁部片である。いずれも口唇部まで単節の斜縄文が施されている。両方とも、わずかにススが付着している。

以上の出土遺物と遺構の形態から、この住居址は、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

E IV-2 住居址

遺 構 (図版9・写真図版11-a~c)

E IV-1 住居址の炉の直下15cm土の位置から新たな石囲い炉と床面が検出された。精査の結果、壁のみを共有し、異なる2棟の住居址が重複していることが判明した。

この住居址の規模、形状がE IV-1 住居址とほぼ同一なので記述を省略する。また、床面上に、E IV-1 住居址の構築時に貼られた明褐色の火山灰土があるのみで埋土は、存在しない。

柱穴は、P₂(径14cm土・深さ14cm土)・P₇(径15cm土・深さ21cm土)・P₁₀(径11cm土・深さ16cm土)・P₁₁(径15cm土・深さ13cm土)の4個で構成され、台形の配置を示している。これらの中で、P₇-P₁₀・P₂-P₁₁が、それぞれ対になる在り方を示している。以上の柱穴以外に床面には、P₁(径12cm土・深さ11cm土)・P₃(径18cm土・深さ43cm土)・P₄(径17cm土・深さ30cm土)・P₅(径10cm土・深さ18cm土)・P₆(径12cm土・深さ17cm土)・P₈(径14cm土・深さ19cm土)・P₉(径14cm土・深さ13cm土)の柱穴状ピットがみられるが、その配置から具体的な位置づけについて不明である。床面は、ほぼ平坦で堅くしまっている。

壁高は、北壁13cm土、東壁28cm土、南壁27cm土、西壁19cm土を計る。

炉は、住居址の西壁際に位置する複式炉で、石囲い部と前庭部の2つの部位からなっており、全長130cm土を計る。石囲部は、炉縁径55cm土を計り、形状は方形を呈する。構成礫は、粒徑

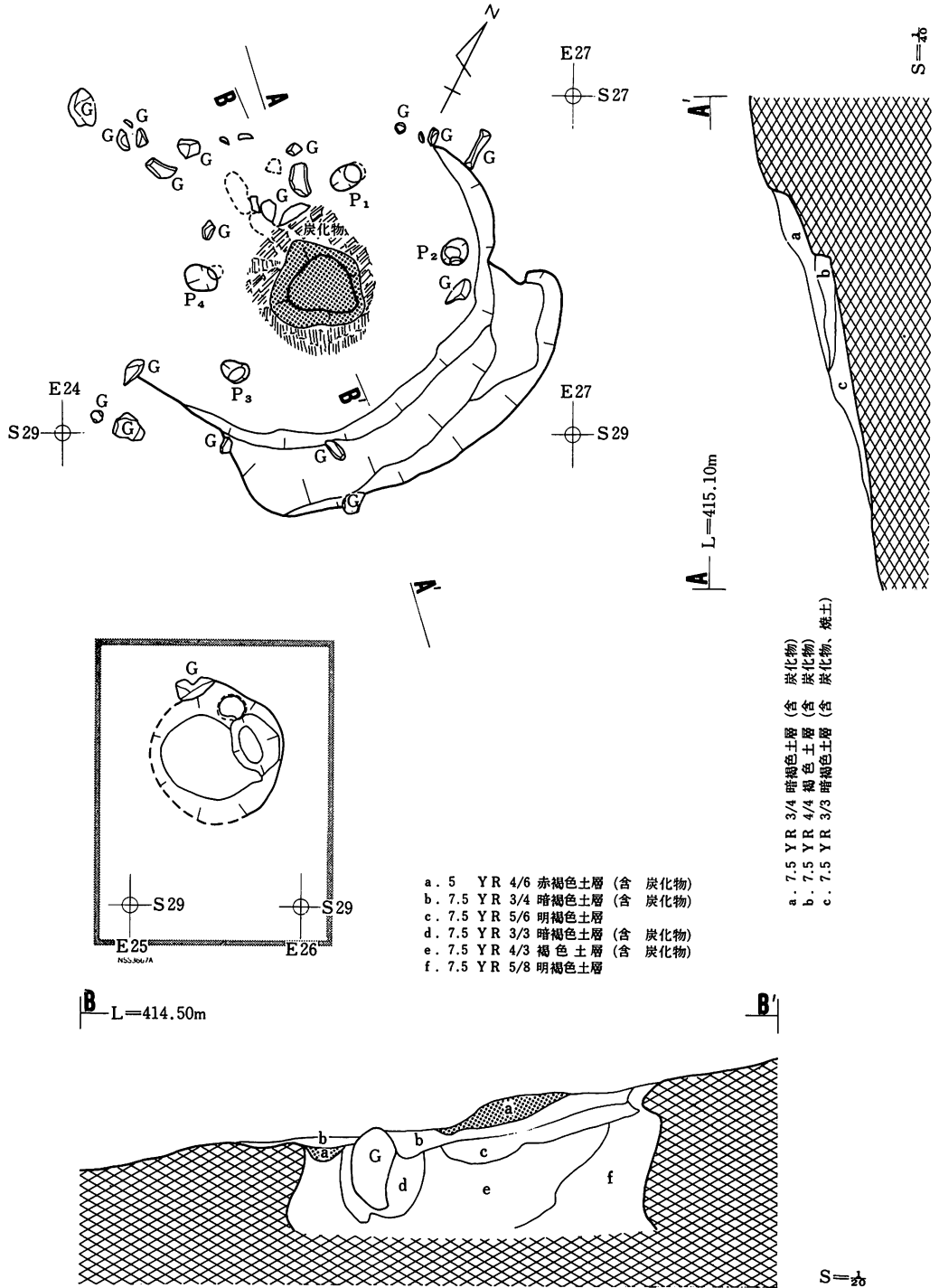
8 cm±～32cm±の安山岩類亜角礫12個で、火山灰土中9 cm±～12cm±の深さに埋設されている。使用面は、床面とほぼ同じレベルにある。炉内の埋土は、焼土を含む褐色土層で構成されている。前底部は、外縁が径85cm±×80cm±を計り、ほぼ方形の形状を呈する。底面は、西壁より石囲部に向って皿状に傾斜するように作られており、最深部で床面より10cm±低い。この前庭部全体が火山灰土で貼られている。その厚さは、2 cm±～5 cm±を計る。

出土遺物（図版-72～75・写真図版21-65～68）

床面から土器片（72～74）と石器1点（75）が出土した。土器片は、それぞれ異なる個体の粗製深鉢の口縁部片（72）と体部片（73・74）である。いずれも単節の斜縄文が施されているのみである。72と73の外面には、わずかにススが付着している。石器は、小型の篋状石器である。片面加工で、両面に第1次剝離面を残す。刃部は、入念な押圧剝離によって形成されている。石質は、流紋岩である。

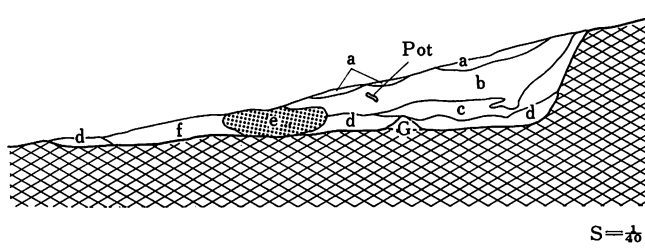
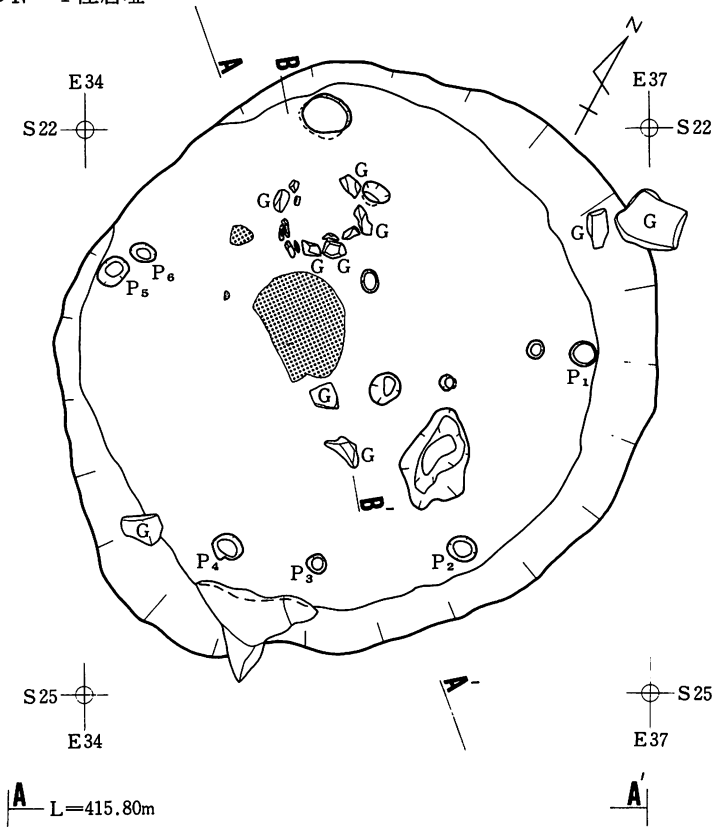
以上の出土遺物のみでは、時期の推定は無理であると思われるが、遺構の形態、及びEⅣ-1住居址との重複関係から、この住居址は、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

D III—3 住居址

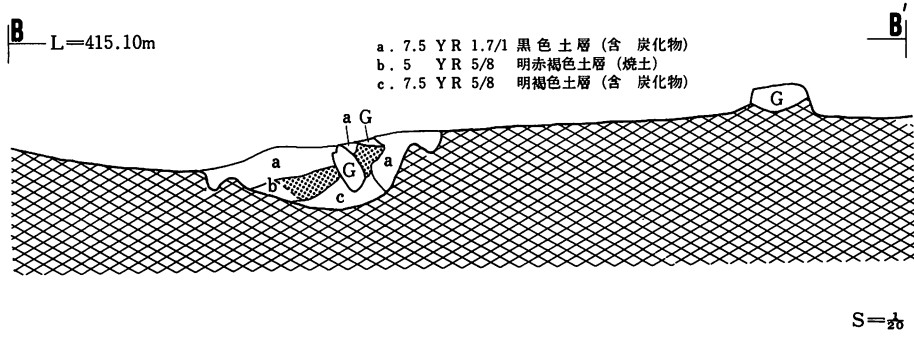


图版 4

D IV-1 住居址



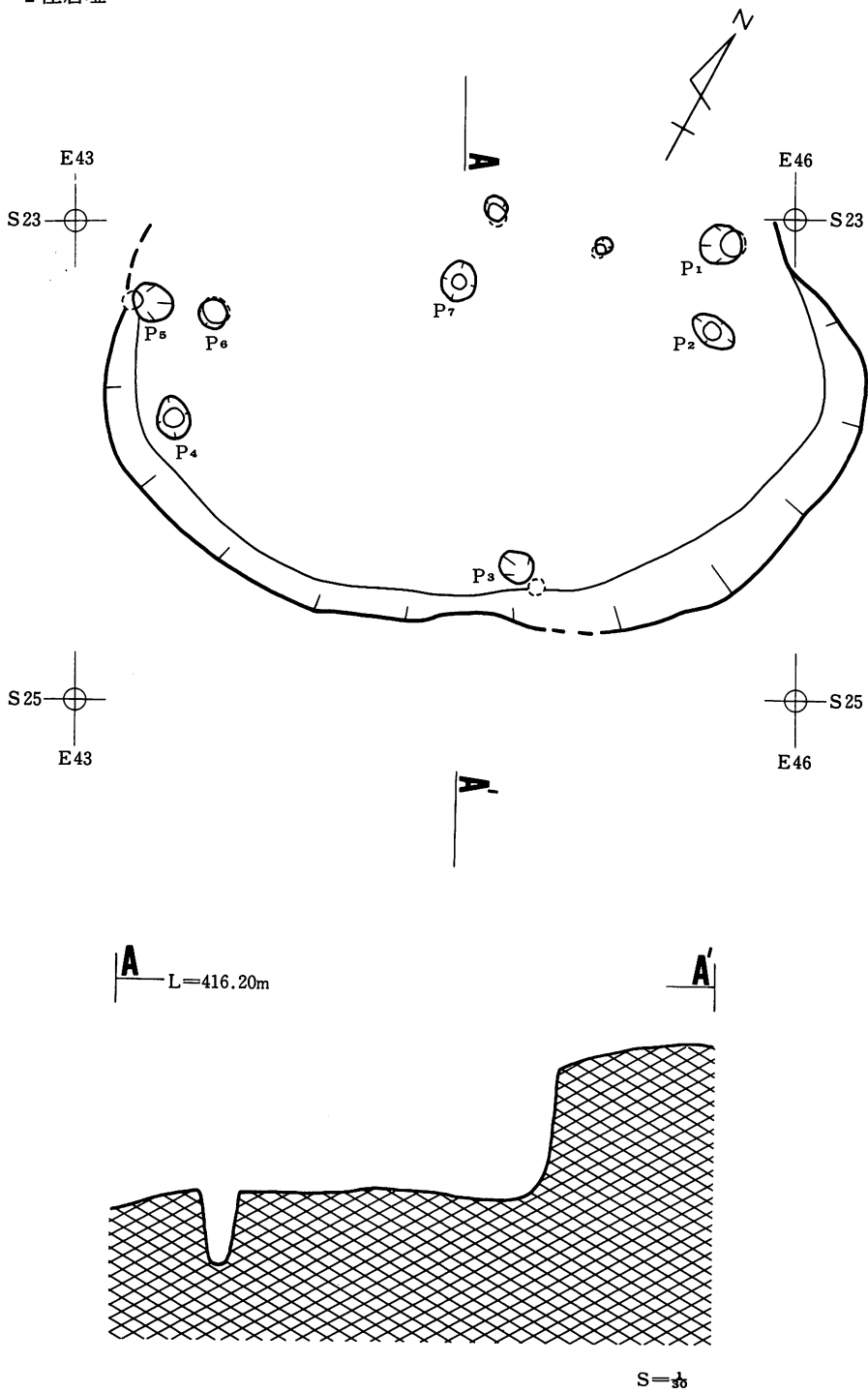
- a. 7.5 YR 4/3 褐色土層
- b. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層 (含炭化物)
- c. 7.5 YR 5/6 明褐色土層 (含炭化物)
- d. 7.5 YR 4/4 褐色土層 (含炭化物)
- e. 2.5 YR 4/8 赤褐色土層 (燒土)
- f. 7.5 YR 3/2 黑褐色土層 (含炭化物)



- a. 7.5 YR 1.7/1 黑色土層 (含炭化物)
- b. 5 YR 5/8 明赤褐色土層 (燒土)
- c. 7.5 YR 5/8 明褐色土層 (含炭化物)

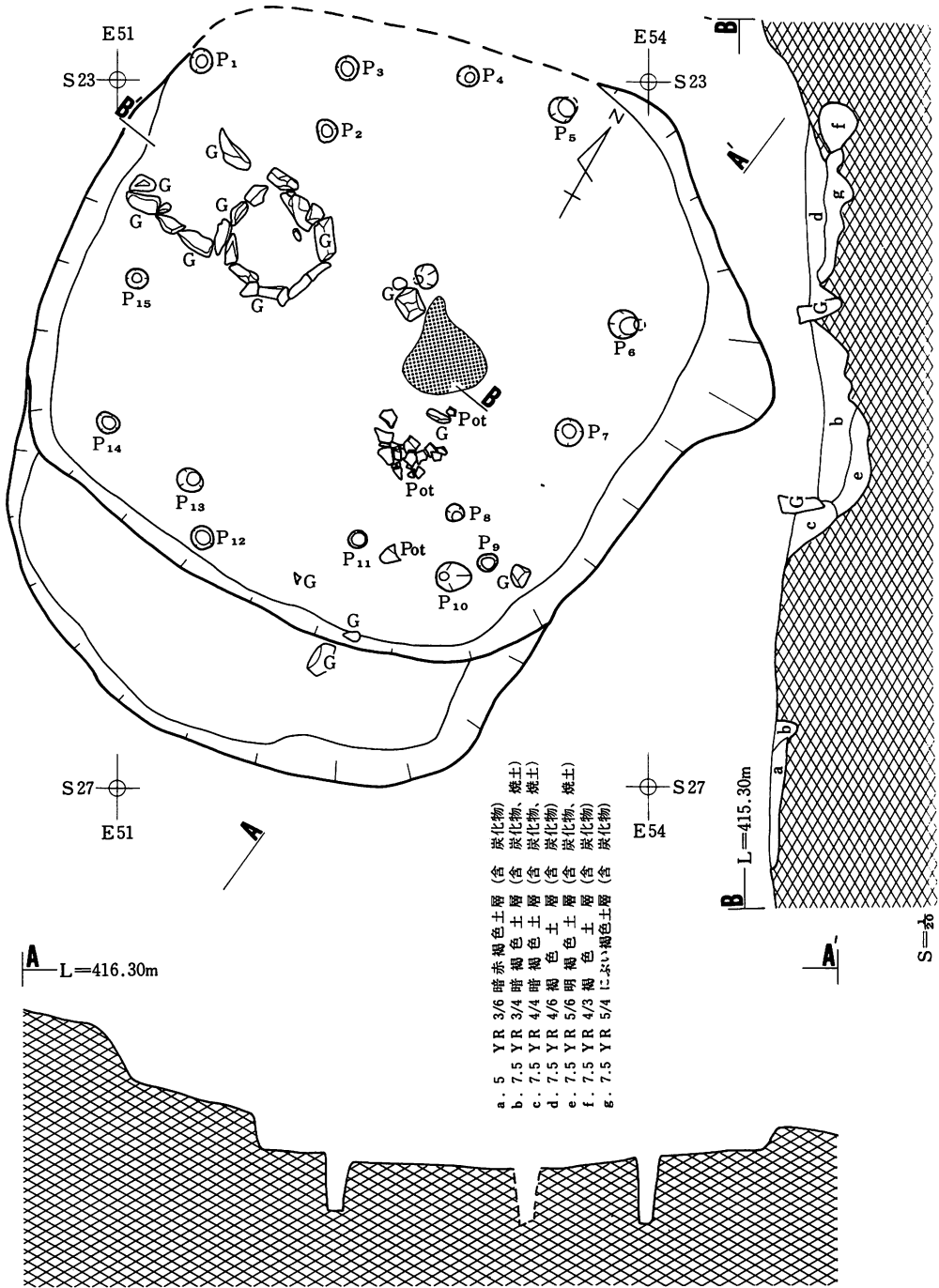
图版 5

D IV-2 住居址



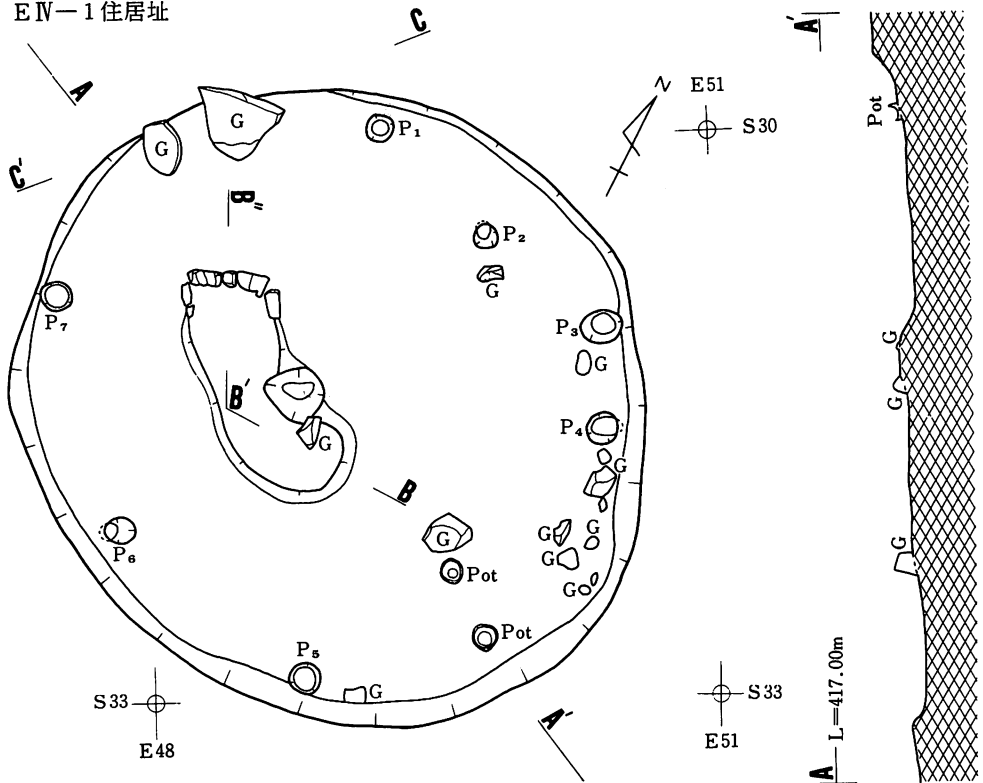
图版 6

D IV-3 住居址



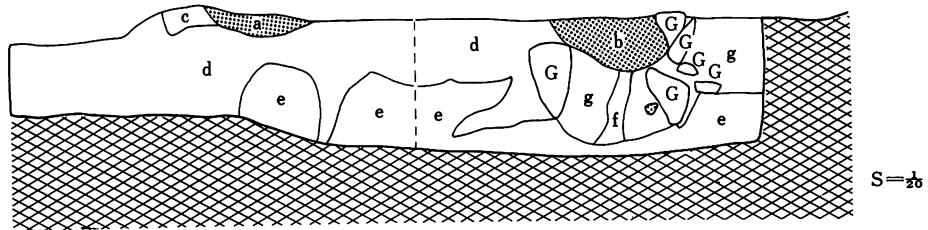
図版 7

EIV-1 住居址

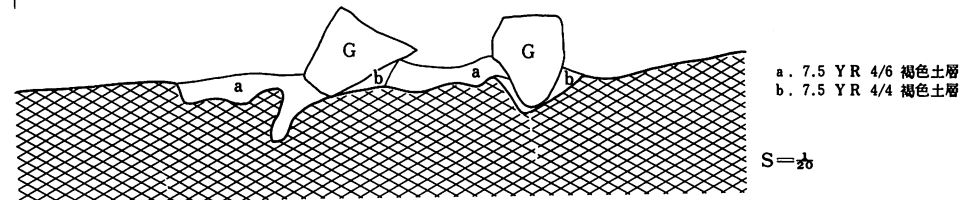


- a. 5 YR 4/6 赤褐色土層 (焼土)
- b. 5 YR 4/8 赤褐色土層 (焼土)
- c. 7.5 YR 3/2 黒褐色土層 (含炭化物)
- d. 7.5 YR 5/4 におい褐色土層
- e. 7.5 YR 5/6 明褐色土層
- f. 7.5 YR 4/4 褐色土層
- g. 7.5 YR 5/4 におい褐色土層

B L=416.80m

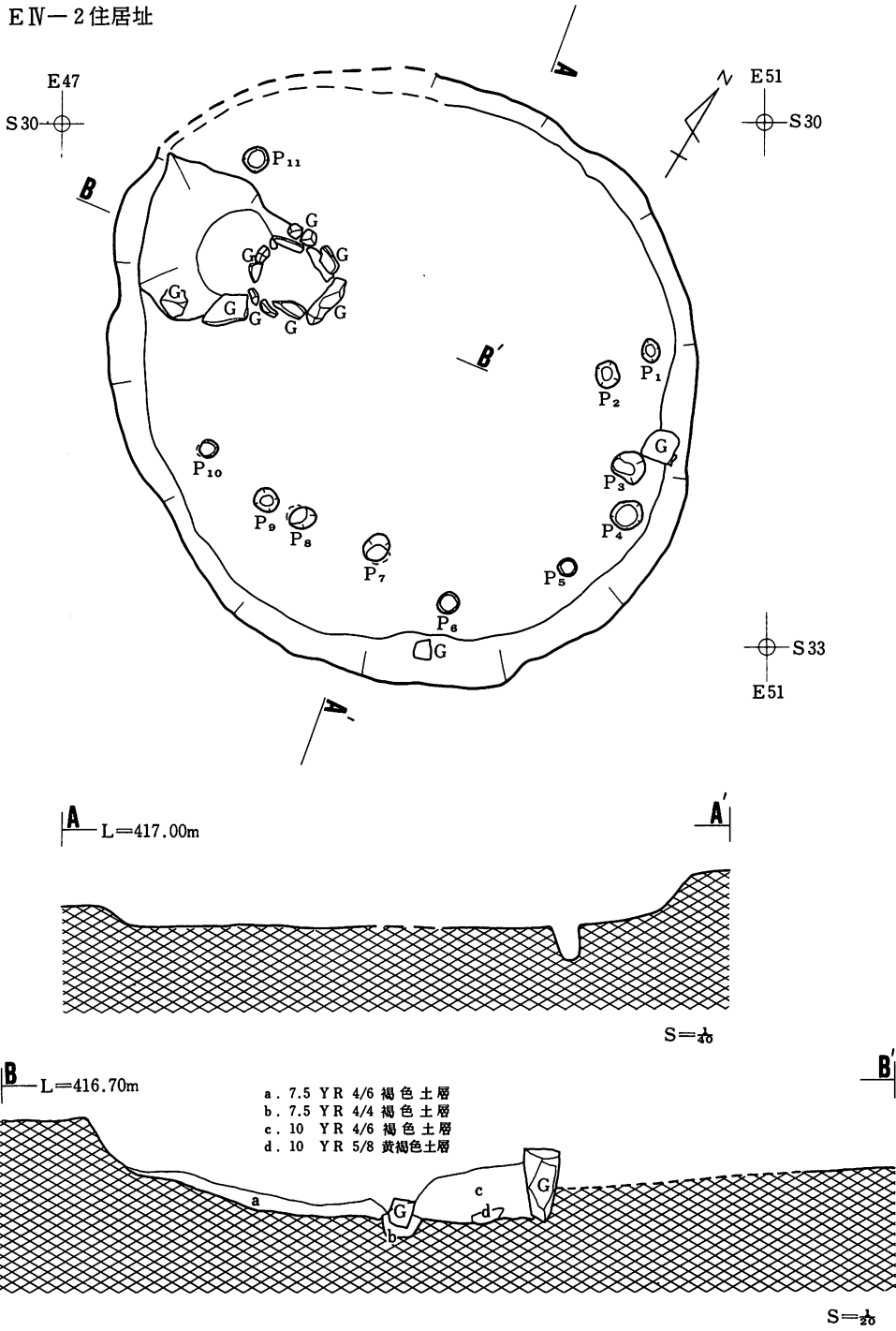


C L=416.80m



図版 8

E IV—2 住居址



图版 9

(2) ピット

DIII区

DIII-51ピット

遺構 (図版10-a・写真図版12-a)

この遺構は、上位平坦面の西方から下位平坦面にかかる斜面上に位置する。DIII-3住居址の床及び、炉によって上位部分が切られ、またDIII-3住居址の炉址の断割りの際に検出されたため、正確な規模、形状は、明らかにし得ない。原形を示す残存部における規模は、開口部径98cm±、頸部径90cm±、底部径120cm±を計り、その平面形状は円形を呈する。深さは52cm±を計り、断面形は、フラスコ状を呈する。

この遺構内の上位きは、DIII-3住居址に伴う床の明褐色土や、炉の構成礫と焼土によって構成され、それより下位が埋土となる。この埋土は、上位より褐色土層、明褐色土層、炭化物を少量含む粘質暗褐色土層によって構成される。出土遺物はなかった。

DIV区

DIV-51ピット

遺構 (図版10-b・写真図版12-b・c)

この遺構は、上位平坦でかつEIV-1住居址の北東に隣接して位置する。規模は、開口部径124cm±、底部径92cm±を計り、その平面形状は円形を呈する。深さ79cm±を計り、その断面形状は、ピーカー状を呈する。南東部の壁の中位から下位にかけては、抉りこみがみられる。

埋土は、暗褐色土の単層より構成され、最大粒径1cmほどの軽石や、最大5mmほどの炭化物を少量含んでいる。

底面は、ほぼ平坦であり、灰黄色土の非常に堅い面となっている。

出土遺物 (図版19-76~79・写真図版21-69~72)

出土遺物は、土器片のみで、主に埋土中位から出土した。76は、深鉢の体部下半~底部片で体部下半まで無節の斜縄文が、底部にはナデが施されている。77と79は、76と同一個体片と思われる。なお、77は口縁部片で、無節の斜縄文を左方向と右方向から、それぞれ1回施文されている。78は、深鉢の体部片で単節の斜縄文が施されている。これら土器片の時期については、粗製の深鉢片であり、かつ細片のため不明である。

D IV-52ピット

遺構（図版10-c・写真図版12-d）

この遺構は、上位平坦面でかつE IV-1住居址の北東に隣接して位置する。規模は、開口部径134 cm±、底部径100 cm±を計り、その平面形状は、北方にやや張り出す卵形を呈する。深さは、23cm±を計り、その断面形状は、浅い皿状を呈する。北方の壁の立ち上りは、南方側に比べて、ゆるい傾斜となっている。

埋土は、褐色土、暗褐色土から構成され、マダラ状に混在する単層である。

底面は、中央部がやや凹状を示し、灰黄色の粘土からなる。出土遺物はなかった。

E IV区

E IV-51ピット

遺構（図版10-d・写真図版12-e・f）

この遺構は、上位平坦面の東方に位置し、E IV-1住居址とD IV-52ピットに隣接する。規模は、開口部径157 cm±、底部径133 cm±を計り、その平面形状は、卵形を呈する。深さは、28cm±を計り、その断面形状は、浅い皿状を呈する。D IV-52ピットの平面形と同形であるが、やや大きい規模をもっている。

埋土は、褐色土、暗褐色土から構成され、マダラ状に混在する単層である。

底面は、ほぼ平坦で灰黄色の粘土からなる。出土遺物はなかった。

(3) 陥し穴状遺構

E III区

E III-101陥し穴状遺構

遺構（図版11-a・写真図版13-a・b）

この遺構は、上位平坦面の西方縁に位置する。長軸は、N-35°-W方向を呈する。検出面が軟弱であったため、埋土との区別の明確さに欠け、南方の壁及び底部を掘りすぎた。長軸方向では、開口部径211 cm±、底部径150 cm±を計り、短軸方向では、開口部径100 cm±、底部径50cm±、深さ57cm±を計る。底部軸長比0.33である。平面形は楕円状を呈する。長軸の断面では、北端の壁が直線的に傾斜し、南端の壁が上位で外反している。短軸での断面形状は、底面と壁の境界に角がみられるものの、ほぼ「U」字状を呈する。

埋土は、上位より黒褐色土層、十和田 a 降下火山灰の薄層、鉄分の多い赤褐色土層、褐色土層によって構成され、その堆積状態は、浅鉢状を呈する。

底面は、検出斜面とほぼ平行で軟弱な灰褐色の粘土であり、湧水がみられる。なお、中央から南方に粒径15cm土の扁平な垂円礫がみられるが、埋設したものの否かは不明である。出土遺物はなかった。

E IV 区

E IV -101 陥し穴状遺構

遺 構 (図版11-b・写真図版13-c・d)

この遺構は、上位平坦面から上方傾斜面にかかる部分に位置する。長軸は、弓なりの曲線を呈し、長軸両端を結ぶ線は、N-50°-E方向を呈する。

長軸方向では、開口部径 316 cm 土、頸部径 245 cm 土、底部径 228 cm 土を計り、短軸方向では開口部径 71 cm 土～100 cm 土、頸部径 32 cm～43 cm 土、底部径 18 cm 土～26 cm 土、深さは 125 cm 土～145 cm 土を計る。底部軸長比 0.11～0.08 である。平面形は長楕円形を呈する。長軸での断面では、南方壁の上位が外反し、北方壁の上位は、段状に崩れている。短軸の断面では、中位から底位にかけてやや広がっているが、全体的なその形状は、細長い「Y」字状を呈する。

埋土は、上位より黒色土層、厚さ 5 cm 土ほどの十和田 a 降下火山灰層、暗褐色土層、褐色土層によって構成される。埋土のほとんどを占める褐色土層の上位には、鉄分の多い赤褐色土が狭在している。底面は、ほぼ平坦であり、その傾斜は、検出面の傾斜よりやや急なものとなっている。出土遺物はなかった。

(4) その他の遺構

C I 区

C I -151 炉址状配石遺構

遺 構 (図版12-a・写真図版14-a・b)

この遺構は、傾斜面の麓の平坦な面に単独に位置する。住居址の炉に比較し、小規模な配石であり、粒径 27 cm 土×17 cm 土ほどの扁平な垂円礫を水平に置き、そのわきに粒径 7 cm 土～10 cm 土ほどの垂円礫 6 個を円状に埋設している。この配石外縁の径は、24 cm 土を計る。

この配石の内部は、炭化物を微量に含む暗褐色土によって埋められており、焼土は認められ

ない。また、焼成等による配石の構成礫の変化もみられない。この配石の周辺には、住居址に伴うものは認められず、この配石の目的は不明である。なお、周辺の検出面には、褐鉄鉱やその中空団塊が集中しており、所謂谷地を示唆している。

出土遺物（図版19-20・写真図版21-73）

出土遺物は、炉内の埋土から土器の細片が出土した。体部片で、曲線の沈線によって区画され磨消しが施されている。時期は、不明である。

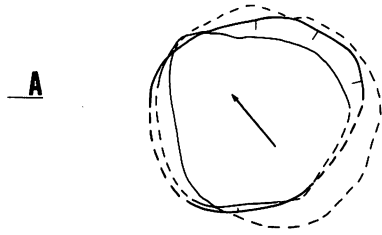
E III 区

E III-151 焼土遺構

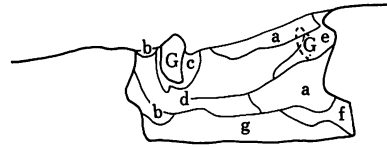
遺 構（図版12-b・写真図版14-c・d）

この遺構は、上位平坦面の西方縁に位置し、E III-101 陥し穴状遺構と隣接する。この遺構の中央部には、焼土と炭化物が混在し、67cm±×50cm±の不整形に分布している。周辺部は、この焼土と炭化物を取り囲む形で、炭化物と暗褐色土が混在して分布し、117cm±×88cm±の不整形に広がる。中央部の炭化物の中には、最大長約10cmの炭化材を多量に含んでいる。掘り込み面は、検出面より深さ5cm±を計り、浅い皿状を呈する。出土遺物はなかった。

a. DⅢ-51ピット

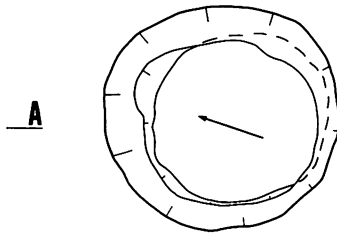


L=414.60m

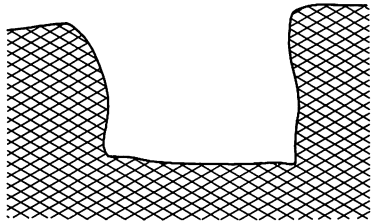


- a. 7.5 YR 5/6 明褐色土層
- b. 5 YR 4/6 赤褐色土層 (含炭化物、焼土)
- c. 7.5 YR 3/3 暗褐色土層 (含炭化物)
- d. 7.5 YR 4/3 褐色土層 (含炭化物)
- e. 7.5 YR 5/8 明褐色土層
- f. 7.5 YR 5/4 にぶい褐色土層
- g. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層 (含炭化物)

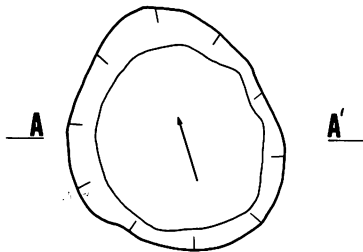
b. DⅣ-51ピット



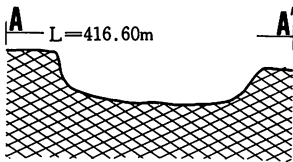
L=416.80m



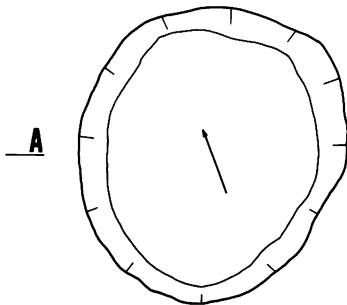
c. DⅣ-52ピット



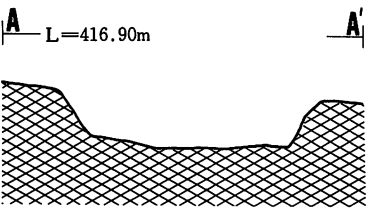
L=416.60m



d. EⅣ-51ピット

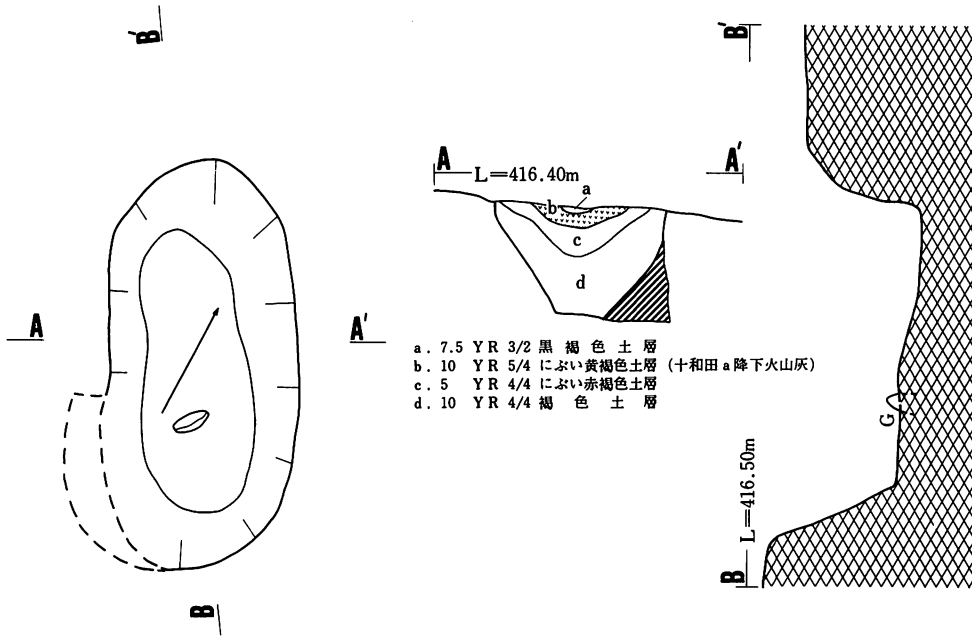


L=416.90m

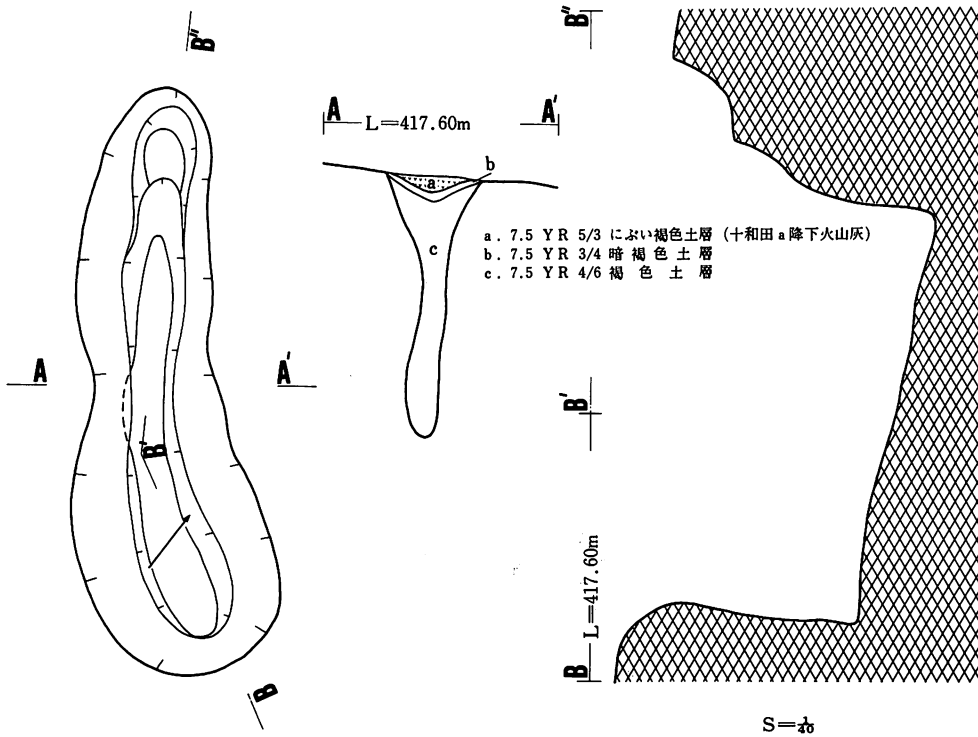


S=あ

a. E III-101 陥し穴状遺構

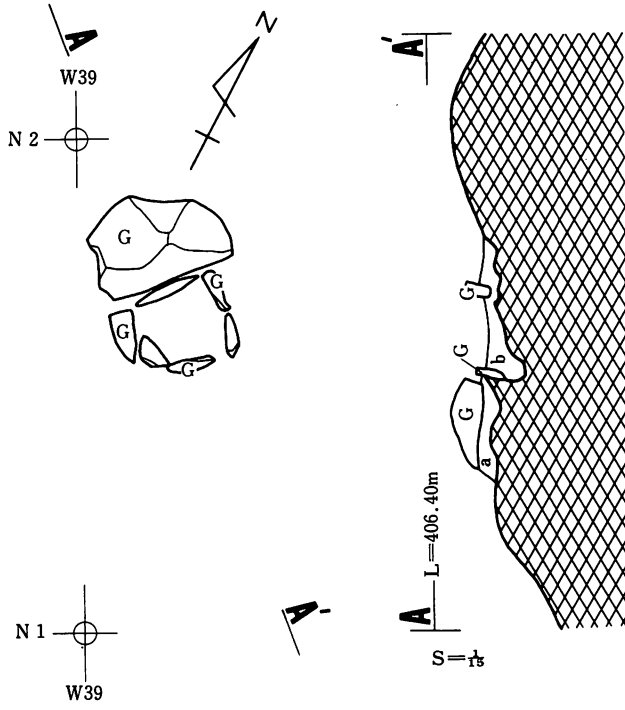


b. E IV-101 陥し穴状遺構



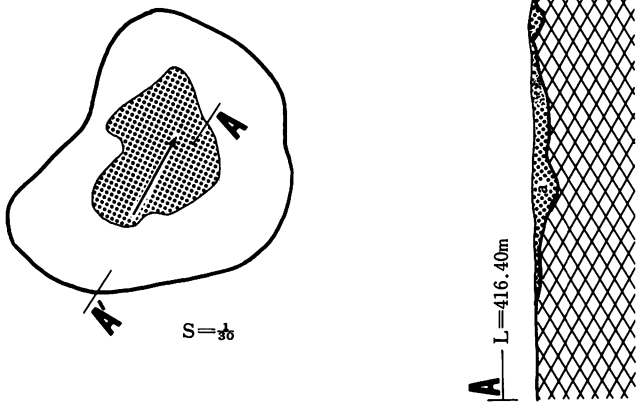
図版11

a. CI—151 炉址状配石遺構



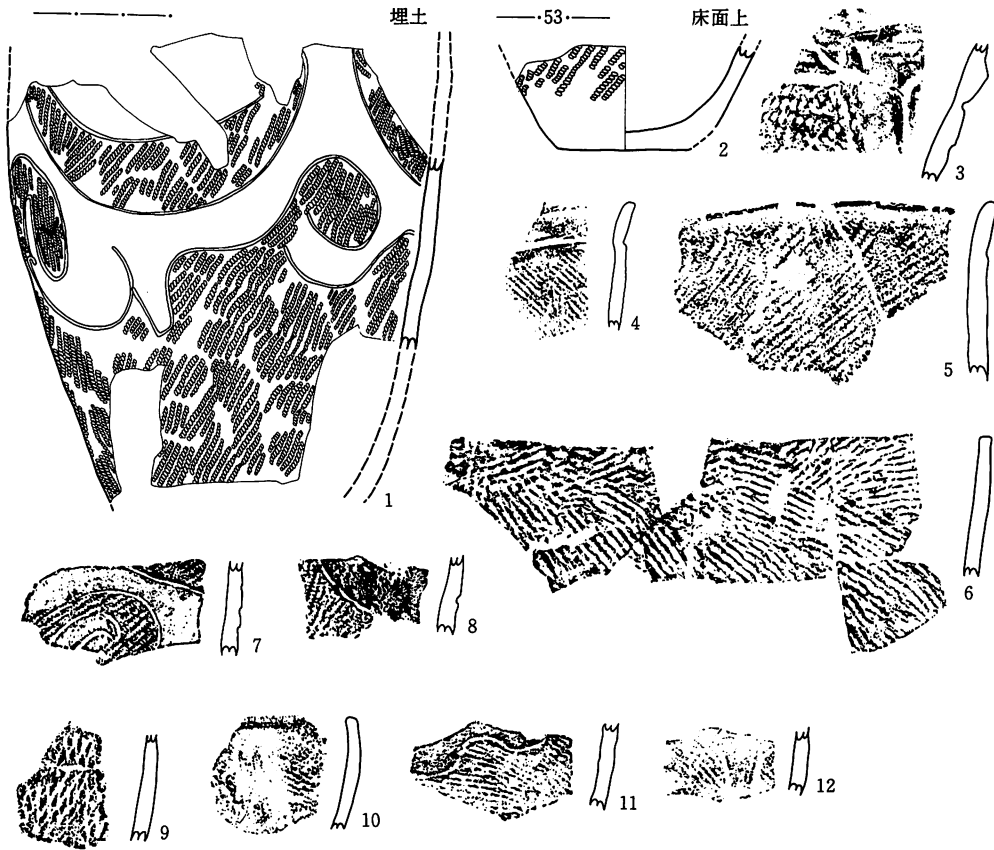
a. 7.5 YR 4/4 褐色土層
b. 7.5 YR 3/4 暗褐色土層 (含炭化物)

b. E III—151 燒土遺構

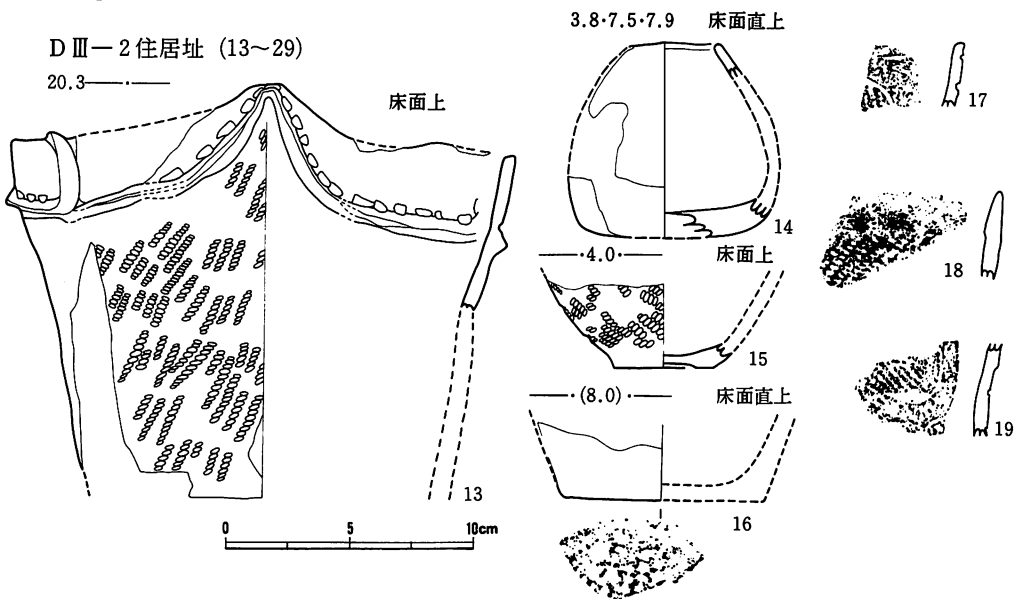


a. 2.5 YR 3/6 暗赤褐色土層 (燒土)

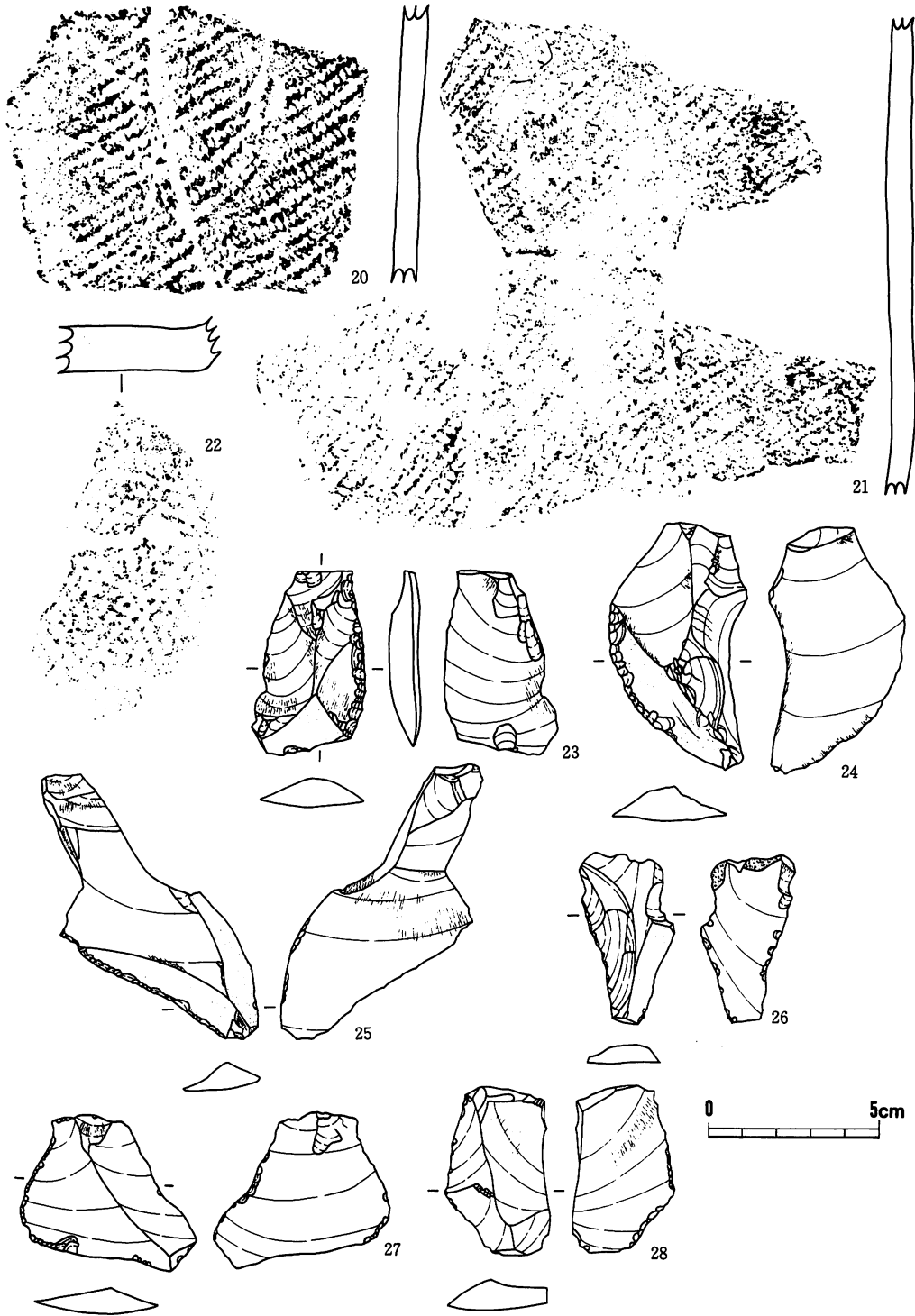
D III-1 住居址 (1~12)



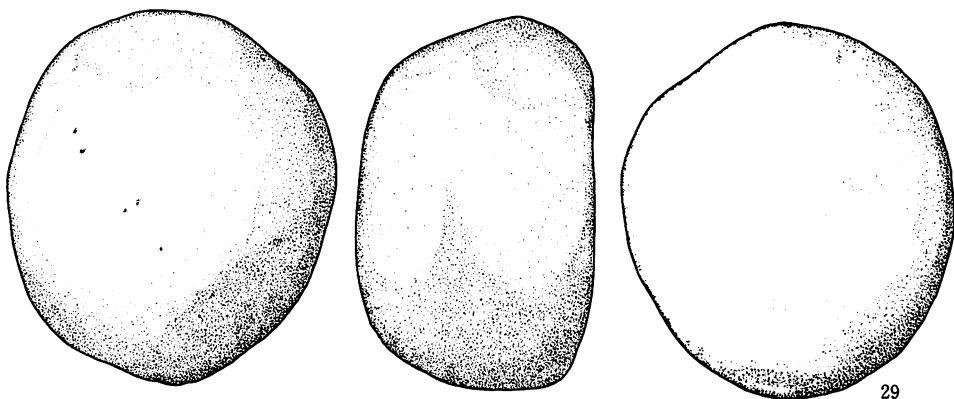
D III-2 住居址 (13~29)



図版13 遺構内の出土遺物 (1)

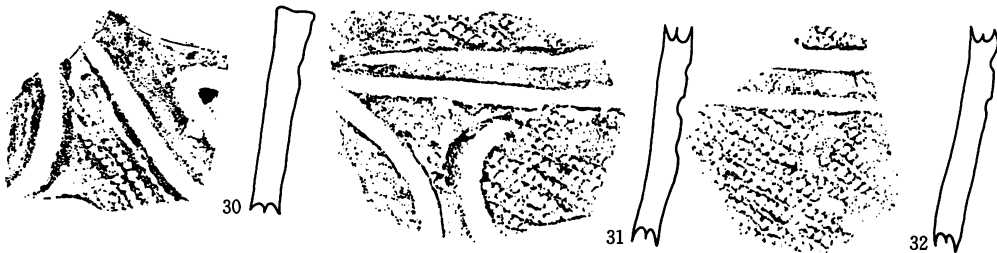


図版14 遺構内の出土遺物（2）



29

D III-3 住居址 (30~32)



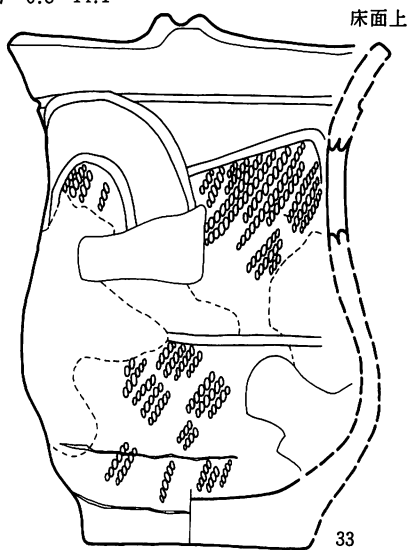
30

31

32

D IV-1 住居址 (33~40)

10.7・6.8・14.1

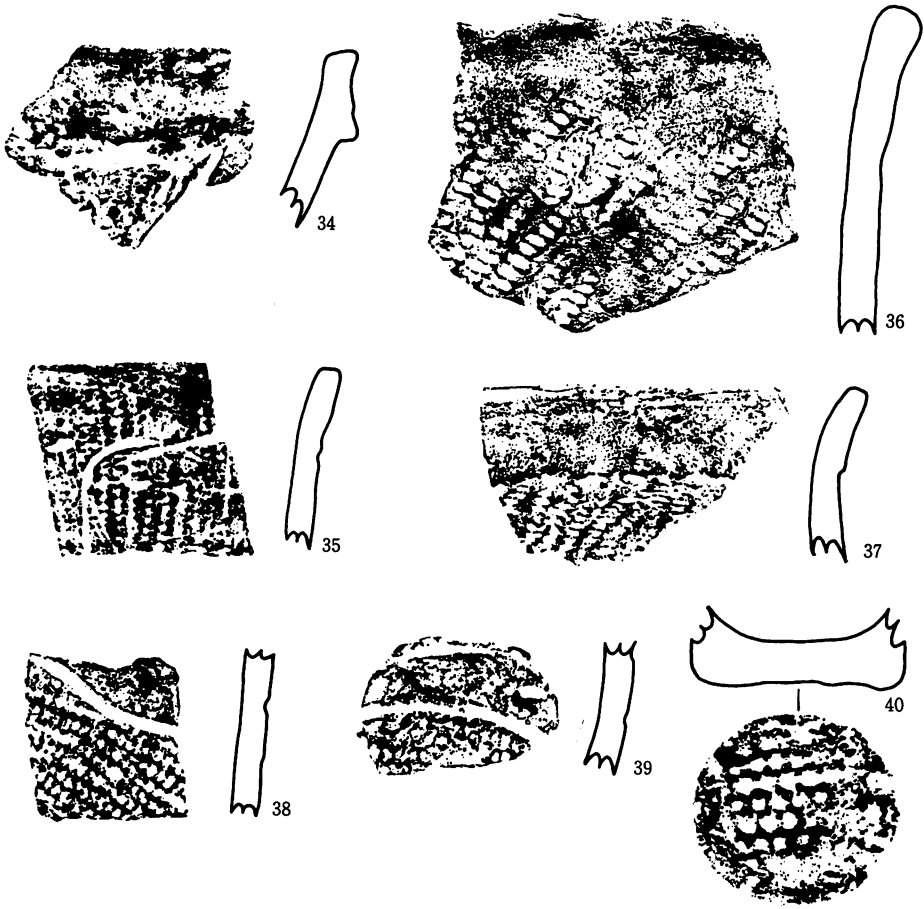


床面上

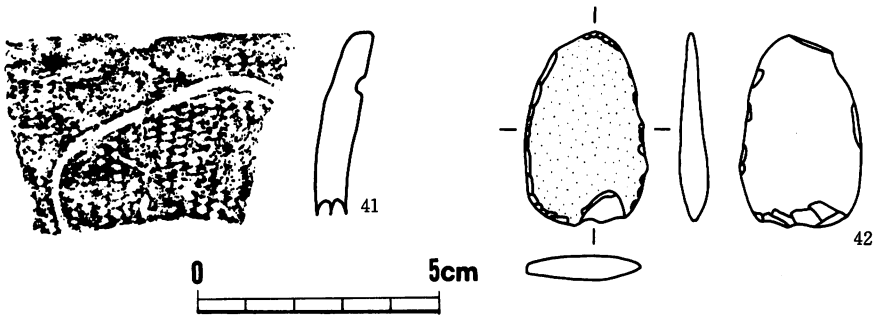
33



図版15 遺構内の出土遺物 (3)



DIV-2 住居址 (41・42)

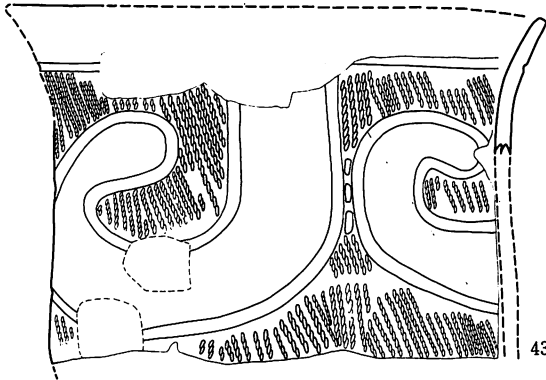


図版16 遺構内の出土遺物 (4)

D IV—3 住居址 (43~63)

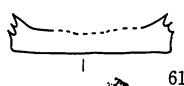
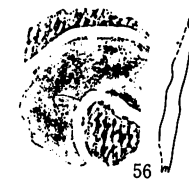
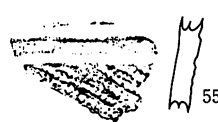
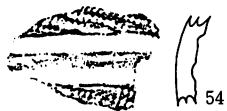
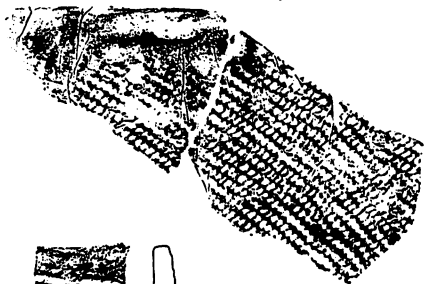
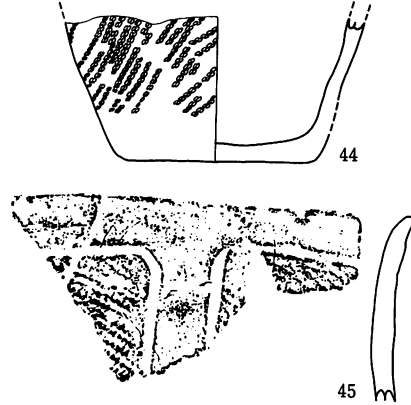
21.9

床面上



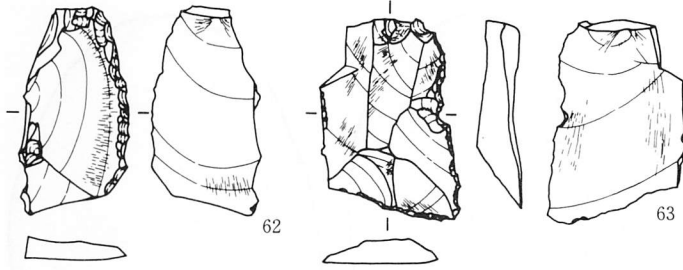
7.2

床面上

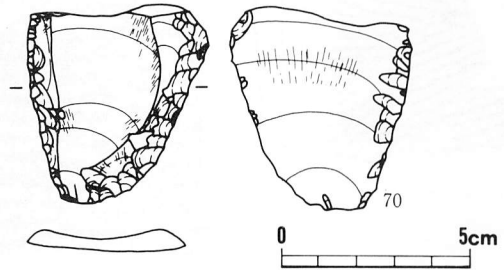
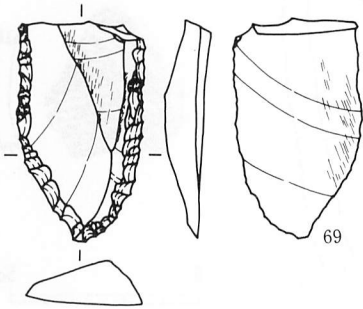
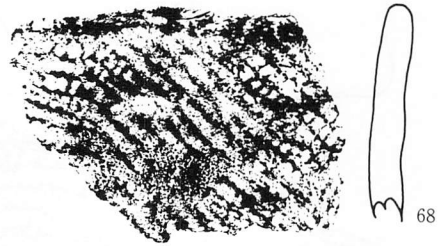
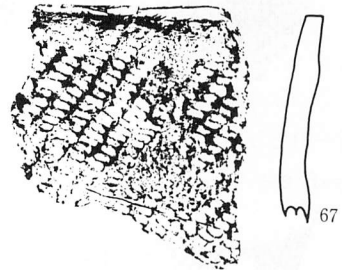
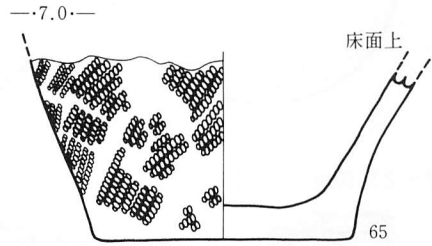
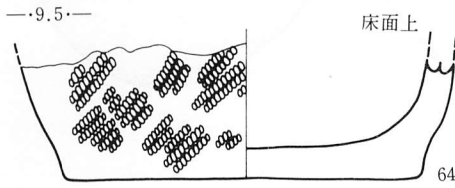


0 5 10cm

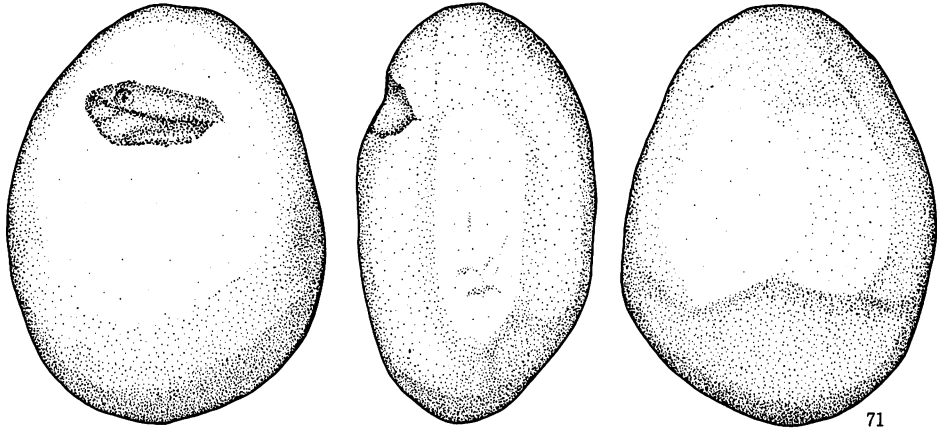
図版17 遺構内の出土遺物 (5)



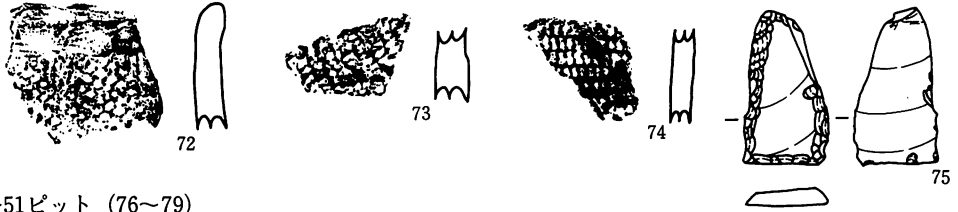
E IV-1 住居址 (64~71)



図版18 遺構内の出土遺物 (6)

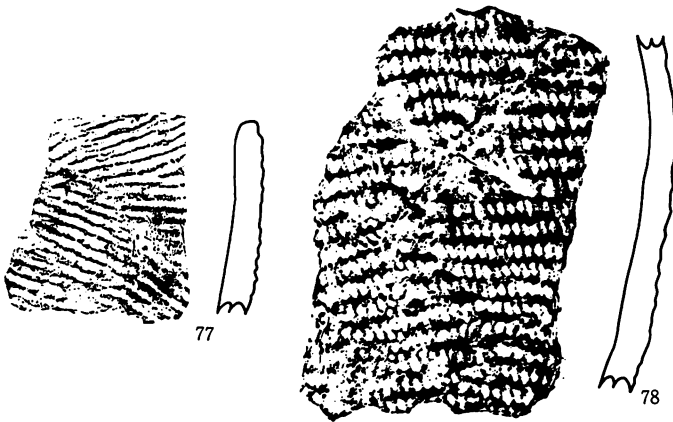
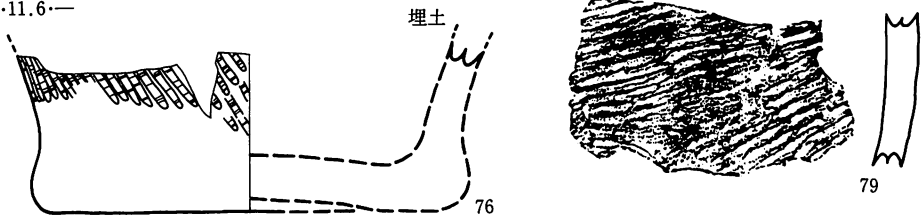


E IV-2 住居址 (72~75)

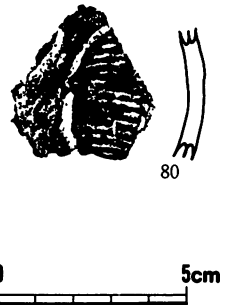


D IV-51 ピット (76~79)

—11.6—



C I-151 炉址状配石遺構 (80)



図版19 遺構内の出土遺物 (7)

2. 遺構外の出土遺物

越戸Ⅱ遺跡の遺構外の出土遺物は、土器と石器からなる。土器は、縄文土器だけであり、石器は、石鏃、石匙、スクレイパー、不定形石器、石斧が出土している。以上の遺物の大部分は、Ⅲ層の下部から出土している。

(1) 土器

縄文土器 第Ⅱ群土器・第Ⅲ群土器・第Ⅳ群土器が出土している。これらの他にいずれの時期に属するか識別しかねる粗製土器の一群、及び底部片がある。この土器群については、項をあらためて述べる。

①第Ⅱ群土器（図版20-1・写真図版22-1）

ほぼ完形品に近い深鉢1個体が出土した。出土地点は、EⅣ-1住居址の南西側凹地のⅢ層最下部である。器形は、底径より口径の方がやや広いが、底部からストレートにほぼ立ちあがる胴長の円筒形を呈する。口縁部は平縁であり、頸部に幅約1cmの細い粘土紐を貼りつけて隆帯を作り、口縁部と体部を区画している。この隆帯上に刺突が施されている。口縁部には、横位と縦位の撚糸圧痕文が施されている。体部の一部には、横位の羽状縄文、それ以下には、縦位の木目状撚糸文が施されている。底部は上げ底風である。なお、胎土には植物質繊維と小礫が混入している。

この土器は、器形及び、文様等から縄文時代前期末葉の円筒下層C式に比定されるものと思われる。

②第Ⅲ群土器（図版20-5・6、21-8~16・写真図版23-5~14）

すべて深鉢の土器片でありⅢ層下部からの出土である。5は、口縁部から体部にかけての土器片である。外反する口縁部と体部を1本の沈線で区画し、口縁部に無文帯を形成している。体部は、地文（単節の斜縄文）を曲線の沈線によって区画し、その外側を磨消している。沈線の内側沿いには、棒状工具によって刺突が施されている。なお全体の文様モチーフについては、破片のため把握できない。6と7は同一個体片である。8は、外反する複合口縁部片である。この複合口縁と体部は、沈線によって区画され、その体部には、無節の斜縄文が施されている。なお、外面にスス状の付着物がみられる。9は、外反する口縁部片である。地文（単節の斜縄文）を曲線の沈線によって区画し、その外側を磨消している。その磨消しは口唇部までおよんでいる。10は同一個体片である。これら土器片の内外面にスス状の付着物がみられる。11は体部片である。地文（単節の斜縄文）を沈線と竹管文で区画し、その外側を磨消している。内面の一部にススが付着している。12は、外反する口縁部の細片である。口縁部と体部を1本

の沈線で区画し、口縁部に無文帯を形成している。内外面にススの付着が著しい。13は外反する口縁部片である。口縁部は、12同様1本の沈線によって区画され無文帯が形成されている。口縁部以下は、地文（単節で横位の縄文）を曲線の沈線によって区画し、その内側を磨消している。また、曲線文の先端部に鱗状の小突起が施されている。14は体部片である。地文（単節の斜縄文）を曲線の沈線によって区画し、その内側を磨消している。また、13同様に曲線文の先端部に鱗状突起が施されている。15は体部片である。地文（単節の斜縄文）を1本の横位の隆起線で区画し、その外側を磨消し、さらに隆起線沿いに棒状工具によって刺突が施されている。外面にススが付着している。16は、小型深鉢の口縁部片である。口縁部と体部を1本の沈線によって区画し、口縁部に半截竹管文が施されている。口縁部以下は、曲線の沈線が施され、その曲線文の先端部に鱗状突起が施されている。

以上の土器片は、器形及び、文様等から縄文時代中期末葉の大木10式に比定されるものと思われる。

③第Ⅳ群土器（図版20-4、21-17~22・写真図版22-4、24-19~22）

すべて深鉢の土器片と思われるもので、Ⅲ層の中位から出土した。4は、大きく外反する口縁部片で、波状の口縁部突起を6個有するものと思われる。この口縁部には、2条の平行する沈線が施されている。19~21は、同一個体の口縁部片と体部片である。細片のため全体の文様モチーフは把握できない。17は口縁部片で、波状口縁を呈する。この波状の頂部に刻みめが施されている。また、口唇部まで無節の斜縄文が施文された後に、2条の平行する沈線が施されている。18は、外反する波状口縁の細片である。口縁部には、2条の平行する沈線が施され、その下半には、網目状撚糸文が施されている。22は、平縁の口縁部片である。口唇部まで無節の斜縄文が施文された後に、2条の平行する沈線が施されている。

以上の土器片は、文様等から縄文時代後期初頭の十腰内Ⅰ式に比定されるものと思われる。

④粗製土器（図版20-2・3・21-23~28・写真図版22-2・3・23-15・16）

一部が復元できた2個体以外すべて土器片である。2は口縁部が平縁で外反し、体部がやや脹みを持つ。文様は、口縁部から体部へ無節の斜縄文のみが施されている。内外面の一部にスス状の付着物がみられる。3は、口縁部が内弯ぎみで小波状口縁を呈する。文様は、口縁部から体部下半まで無節の斜縄文のみが施されている。内外面にススが付着している。土器片は、口縁部と体部片である。口縁部は、複合口縁のもの（23・24・27）、口縁部をナデによる調整で無文帯を形成しているもの（25・26）、口縁部まで地文（単節の斜縄文）が施されているもの（28）、の三種類に大別できる。いずれも平縁で外反し、口縁部以下は、単節の斜縄文のみが施されている。これら粗製土器の大部分は、第Ⅲ群土器と共に出土した。

⑤底 部 (図版21-29・写真図版24-23)

約3の底部片1点のみで、EⅣ-1住居址南西側凹地のⅢ層下部から出土した。網代底の厚い底部片であり、胎土には、粗粒の砂をやや多量に含み、ザラザラした器面となっている。外面にススの付着がみられる。

(2) 石 器

石器の出土数は、わずかに9点であり、すべてⅢ層の下部からの出土である。その内訳は、石鏃2点、石匙1点、スクレイパー2点、不定形石器3点、石斧1点である。

①石 鏃 (図版22-1・2・写真図版25-24・25)

1は膨基で、先頭部の角度が広い。この石器は両面加工されているが、調整剥離が雑である。石質は、火山ガラスである。2は、基部に深い抉り込みを有し、断面は肉薄で、形態は、ほぼ二等辺三角形に近い。両面とも縁辺から入念な調整剥離が加えられている。石質は、玻璃質安山岩である。

②石 匙 (図版22-3・写真図版25-26)

石器の長軸方向に対して直角方向につまみ部をもつ横形石匙である。両面に一次剥離面を残すが、つまみ部から刃部にかけて、両面の縁辺は、入念な調整剥離が加えられている。石質は、玻璃質流紋岩である。

③スクレイパー (図版22-4・5・写真図版25-27・28)

剥片を利用し、片面に剥離調整を加えて刃部を形成する石器である。4は、肉厚の剥片を利用し、石器の長軸方向に平行する縁辺に比較の入念な調整剥離を加えて刃部を形成している。石質は玻璃質安山岩である。5は、扁平肉薄な剥片を利用し、4同様石器の長軸方向に平行する縁辺に簡単な刃部を形成している。石質は、珪質頁岩である。

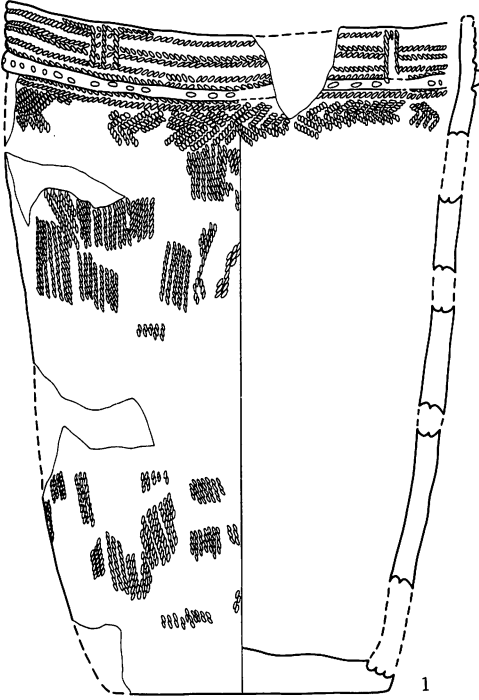
④不定形石器 (図版22-6~8・写真図版25-29~31)

不定形な剥片の縁辺の一部に刃部加工がなされているもので、6は、一部の片面に平坦な刃部を、7は、剥片の両縁辺に凹状の刃部を形成している。8は、打面の反対方向の片面に雑な刃部を形成している。石質は、6と7が玻璃質安山岩、8が流紋岩である。

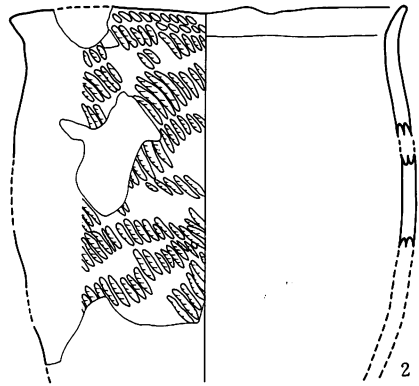
⑤磨製石斧 (図版22-9・写真図版25-32)

頭部と刃部が欠損して体部のみのため、正確な平面形態を把握することはできないが、長方形を呈する石斧と思われる。体部の両面及び両側面は、よく研磨されている。横断面形は、楕円形状を呈する。石質は安山岩である。

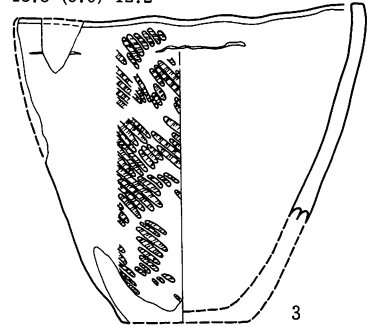
18.9・11.3・28.1



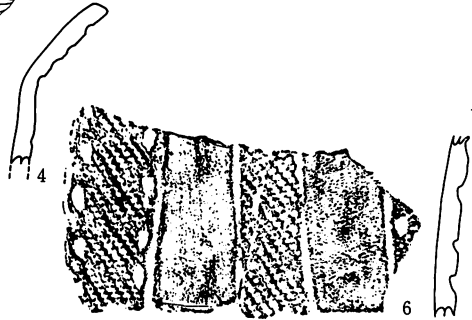
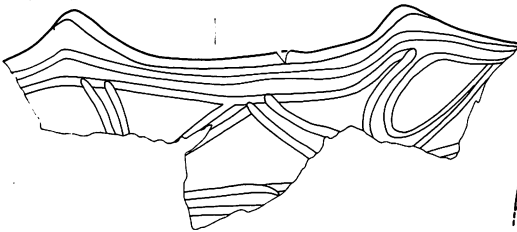
16.0——



13.8・(5.0)・12.2



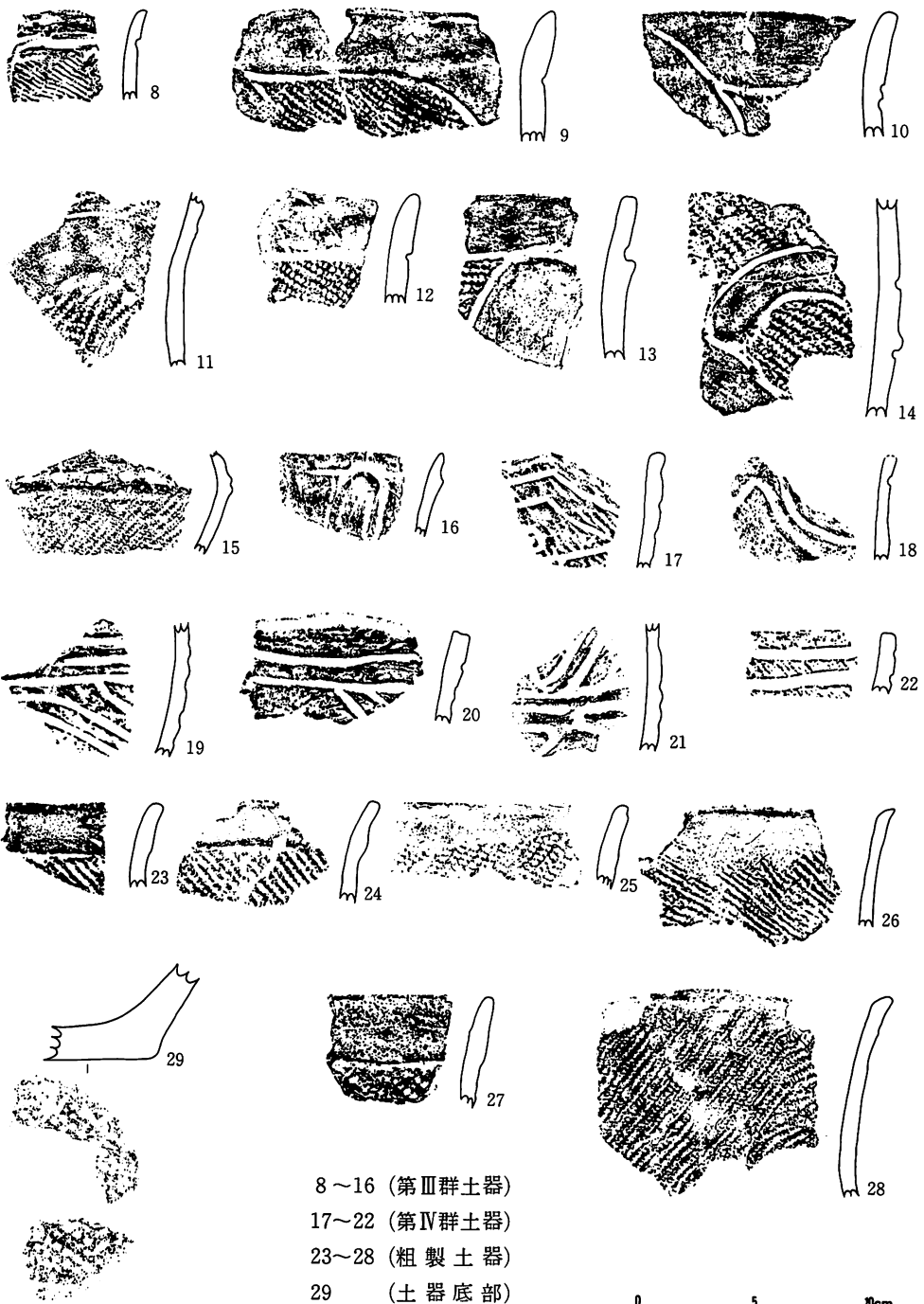
(29.4)——



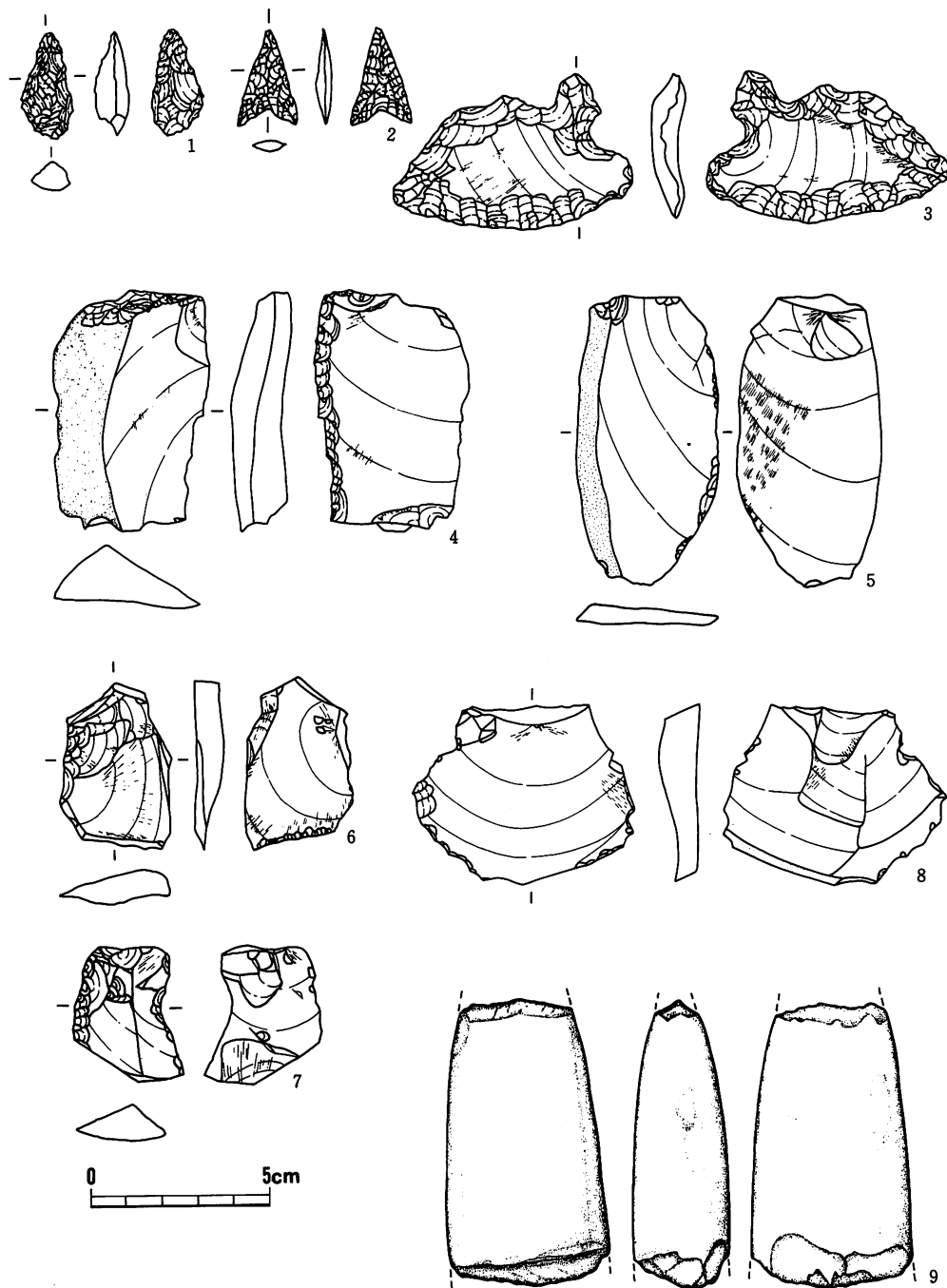
- 1 (第Ⅱ群土器) 2・3 (粗製土器)
4 (第Ⅳ群土器) 6・7 (第Ⅲ群土器)

0 5 10cm

図版20 遺構外の出土遺物(1)



図版21 遺構外の出土遺物(2)



1・2 (石鏃) 3 (石匙) 4・5 (スクレイパー)
6～8 (不定形石器) 9 (石斧)

図22 遺構外の出土遺物 (3)

3. ま と め

越戸II遺跡の発掘調査の結果、検出された遺構および出土した遺物はこれまで述べた通りである。以下これらについて簡単にまとめた。なお、詳細については後日、有矢野遺跡・上の山X遺跡の報告の際の考察編で一括して述べる。

(1) 遺 構

① 竪穴住居址

当遺跡で検出された住居址は、すべて縄文時代のものであり合計8棟である。

●時期

DIV-2住居址を除いた他の7棟は、出土遺物、遺構の形状及び炉の形態からみて、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。なお、DIV-2住居址は、遺構の大半が削剝をうけ、また時期を決定しうる遺物の出土がなかったことから一応時期不明としたが、検出場所及び面、残存部の形状や埋土から他の住居址と同時期のものと推定される。

●規模および形状

正確な規模を計測することができない住居址2棟(DIII-3住・DIV-2住)を除いて他の6棟は、すべて長軸の長さが3～4mの規模のものである。形状については、それが確実に把握できるもの3棟と、残存部分や検出状況から推定できるもの5棟の両者を含めて大別すると、円形(DIII-3住・DIV-1住・DIV-2住)、楕円形(DIII-1住・EIV-1住・EIV-2住)、隅丸方形(DIII-2住・DIV-3住)を呈するものに分けられる。

●柱穴配置

柱穴配置不明な住居址2棟(DIII-3住・DIV-2住)を除いて他の6棟は、四角形(DIII-1住・DIII-2住・DIV-3住・EIV-2住)、五角形(DIV-1住・EIV-1住)、六角形(DIV-3住)の配置を示す。これらの中で四角形は、台形状と菱形に分けられる。なお、DIII-2住は2回、DIV-3住は3回の「立て替え」が確認できた。

●炉の形態

炉が存在するか否か不明なDIV-2住以外の住居址に伴う炉の組合せは、地床炉と複式炉(DIII-1住・DIV-1住)、地床炉と石囲炉(DIII-2住・DIII-3住・DIV-1住・EIV-1住)、複式炉(EIV-2住)のみの三つに大別できる。これらの炉は、地床炉が床面の中央部に、石囲炉及び複式炉は斜面下方の壁側に位置する。なお、石囲炉の使用面には現地性の焼土が形成されているが、複式炉にはそれが認められない。わずかに、複式炉の石囲部に焼

土、炭化物混入の暗褐色土が堆積しているだけである。

② ピット

当遺跡で検出されたピットは4基である。開口部径・底部径が100 cm±～150 cm±、深さが20 cm±～80 cm±の小規模なピットで、断面形がフラスコ状・ピーカー状・皿状等を呈するものである。これらのピットは、住居址と重複しているか（DⅢ-51ピット）、近接した位置にある。出土遺物は、DⅣ-51ピットからの土器片のみである。時期は、立地場所、重複関係、埋土等の状況から住居址群と同時期の縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

③ 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は2基の検出であるが、それぞれ異なる形態を示している。EⅢ-101陥し穴状遺構の平面形は楕円形状を呈し、短軸の断面形状は「U」字状を呈する。EⅣ-101陥し穴状遺構の平面形は、やや弓なりの曲線を示すが、ほぼ長楕円形状を呈し、短軸の断面形状は「Y」字状を呈する。これらの遺構で共通しているのは、埋土の上部に十和田a降下火山灰が浅鉢状に堆積していることである。十和田a降下火山灰の堆積状況を示すこの様な遺構に、荒屋Ⅱ遺跡の陥し穴状遺構がある。

④ 炉址状配石遺構

炉址状配石遺構は1基の検出である。この遺構は、人為的による配石を示し、形態は石囲炉状を呈する。しかし、使用された形跡が認められなかった。時期については不明である。なお、この遺構の周辺から他の遺構は検出されなかったが、縄文時代中期末葉のものと思われる土器片が出土している。

⑤ 焼土遺構

EⅢ-101陥し穴状遺構に隣接する場所から1基検出された。浅い皿状の掘り込み部分を中心に炭化物、焼土が混在して堆積している。なお、出土遺物はなく時期は不明である。

(2) 遺物

① 土器

●縄文土器 本遺跡から出土した土器は、大部分が縄文時代中期末葉の大木10式に比定されるものである。この他に前期後葉の円筒下層C式に比定される土器1個体と、後期初頭の十腰内Ⅰ式に比定される土器の破片が出土した。これらの中で前期後葉と後期初頭の土器は、すべて遺構外からの出土であり、その出土地点が、EⅣ-1住居址等が位置する上位平坦面の南西側凹地からである。この凹地は、上方の斜面に移行する部分にあり、その斜面上方には台地状の平坦面が存在する。また、この遺跡が立地する地形は、崖錐性の傾斜地である等から、これらの土器は調査区外からの流入ではないかと推定される。なお、粗製土器は、大部分が大木

10式に比定される土器と共に出土した。

② 石器

遺構内外から出土した石器は、すべて縄文時代中期末葉の大木10式に比定される土器と共に出土した。これらの出土した石器の特徴は、出土数が少なく、また剥片石器が多いことである。

表1 越戸II遺跡遺構名訂正表

番号	種別	旧遺構名	新遺構名
1	住居址	DIII-6	DIII-1
2	住居址	DIII-3	DIII-2
3	住居址	DIII-1	DIII-3
4	住居址	DIV-2	DIV-1
5	住居址	DIV-10	DVI-2
6	住居址	DIV-7	DIV-3
7	住居址	DIV-4	EIV-1
8	住居址	DIV-11	EIV-2
9	ピット	DIII-5	DIII-51
10	ピット	DIV-5	DIV-51
11	ピット	DIV-6	DIV-52
12	ピット	EIV-7	EIV-51
13	陥し穴状遺構	EIII-2	EIII-101
14	陥し穴状遺構	EIV-4	EIV-101
15	炉址状配石遺構	CI-1	CI-151
16	焼土遺構	EIII-1	EIII-151

表2 越戸II遺跡出土石器計測表

番号	出土地区	器種	図版番号	法量				石質
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
1	DIII-2住居址	スクレイパー	14-23	5.3	3.1	0.8	15.8	玻璃質安山岩
2	DIII-2住居址	スクレイパー	14-24	5.9	3.9	1.0	30.1	赤色チャート
3	DIII-2住居址	スクレイパー	14-25	4.9	5.3	0.8	24.8	玻璃質安山岩
4	DIII-2住居址	スクレイパー	14-26	4.9	2.5	0.5	6.4	玻璃質安山岩
5	DIII-2住居址	スクレイパー	14-27	4.1	4.9	0.8	15.7	玻璃質安山岩
6	DIII-2住居址	スクレイパー	14-28	4.9	3.0	0.9	14.7	玻璃質安山岩
7	DIII-2住居址	磨石	15-29	9.9	8.7	6.3	880.0	安山岩
8	DIV-2住居址	スクレイパー	16-44	3.9	2.5	0.6	7.8	緑色岩
9	DIV-3住居址	スクレイパー	18-64	5.3	2.8	0.6	15.6	玻璃質安山岩
10	DIV-3住居址	スクレイパー	18-65	5.3	3.5	0.7	18.7	玻璃質安山岩
11	EIV-1住居址	スクレイパー	18-69	5.8	3.3	1.1	25.0	玻璃質安山岩
12	EIV-1住居址	スクレイパー	18-70	5.0	4.8	0.6	16.3	玻璃質安山岩
13	EIV-1住居址	磨石	18-71	11.2	8.4	6.3	875.0	安山岩
14	EIV-2住居址	篋状石器	19-75	4.1	2.2	0.4	5.9	流紋岩
15	EIV区	石鏃	22-1	3.0	1.4	0.9	3.0	火山ガラス
16	EIV区	石鏃	22-2	2.2	1.6	0.4	0.8	玻璃質安山岩
17	EIV区	石匙	22-3	4.1	6.5	0.9	28.8	玻璃質安山岩
18	DII区	スクレイパー	22-4	6.7	4.4	1.4	55.9	玻璃質安山岩
19	CII区	スクレイパー	22-5	8.0	4.0	0.5	22.1	珪質頁岩
20	DIV区	不定形石器	22-6	4.4	3.0	0.8	14.8	玻璃質安山岩
21	DIII区	不定形石器	22-7	3.8	2.8	1.0	9.2	玻璃質安山岩
22	DIII区	不定形石器	22-8	4.9	6.1	1.1	30.3	流紋岩
23	DIV区	石斧	22-9	8.1	4.5	2.7	170.0	安山岩

表3 越戸II遺跡¹⁴C試料測定結果表

番号	試料採取遺構名	日本アイソトープ協会コード	岩手県埋文センターコード	¹⁴ C年代
1	DⅢ-3住居址(炉使用面上)	N-3704	IM No. 24	3970±100 y B. P. (3850±100 y B. P.)
2	DⅢ-2住居址(炉使用面上)	N-3705	IM No. 25	3970±100 y B. P. (3860±95 y B. P.)
3	DⅣ-1住居址(炉使用面上)	N-3706	IM No. 26	4210±100 y B. P. (4090±95 y B. P.)
4	EⅢ-151焼土遺構	N-3707	IM No. 27	690±80 y B. P. (670±80 y B. P.)

(カッコ内はLibbyの値5568年にもとづいて計算されたもの)



a. 遺跡遠景

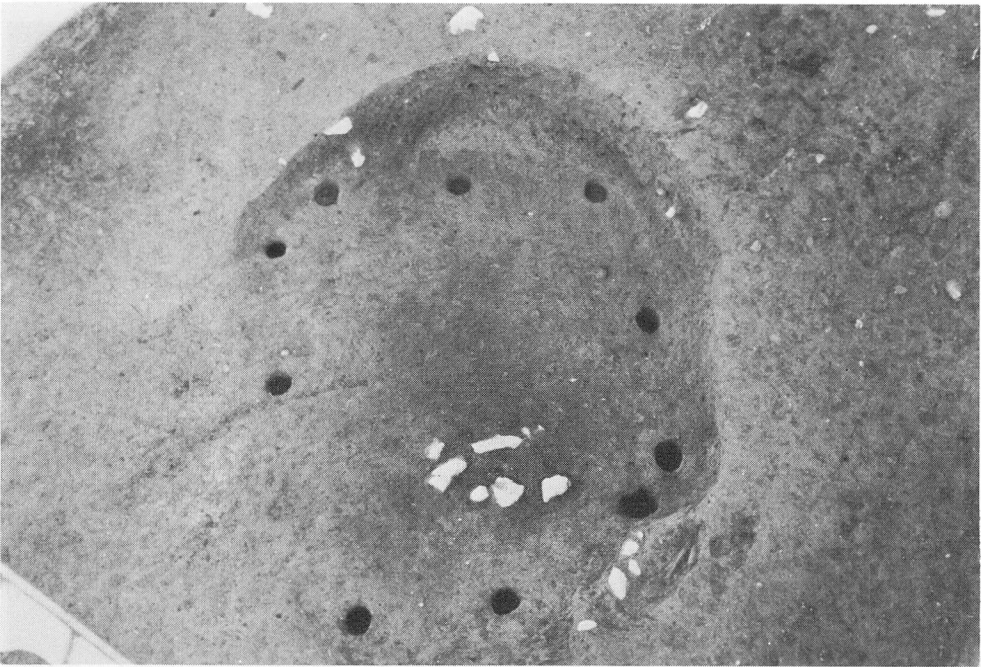


b. 深掘り土層断面

写真図版 1

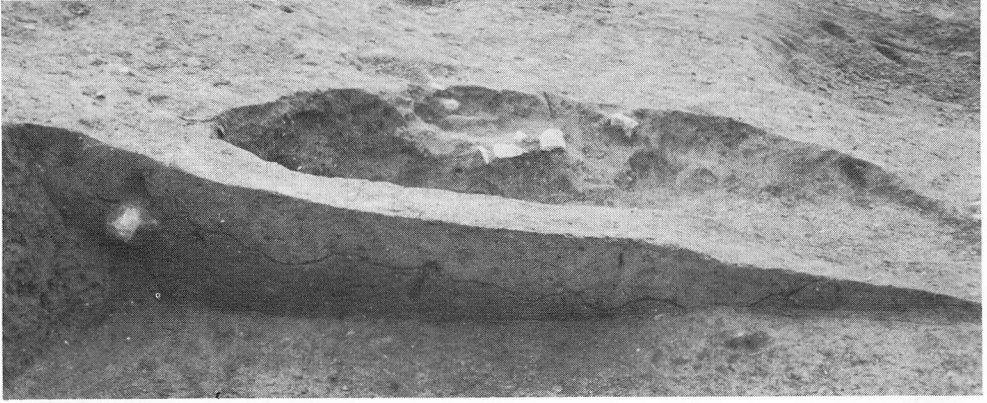


a. 深掘り土層断面



b. DⅢ-1住居址

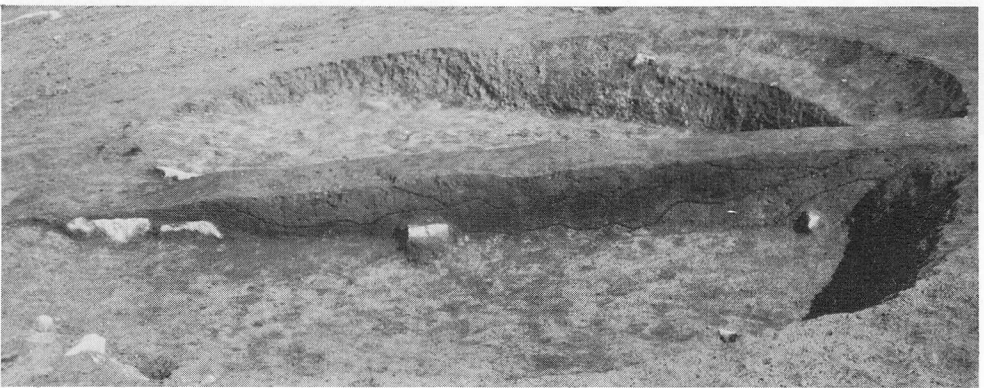
写真図版 2



a. D III-1住居址 (土層断面)

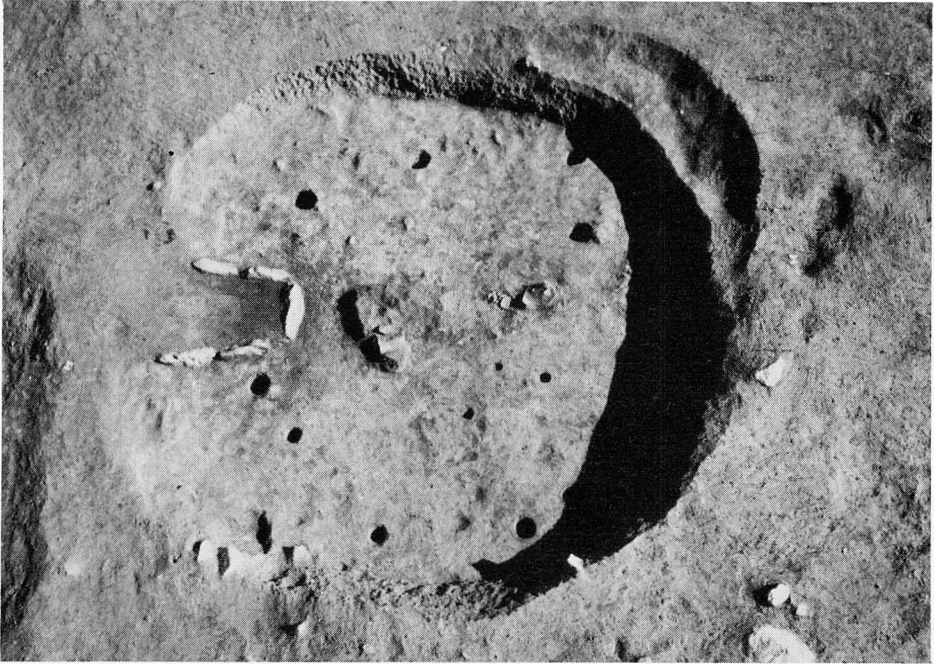


b. D III-1住居址 (土層断面)

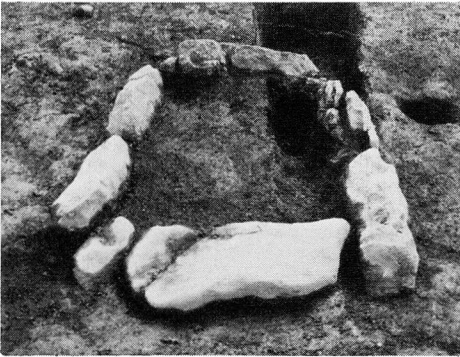


c. D III-2住居址 (土層断面)

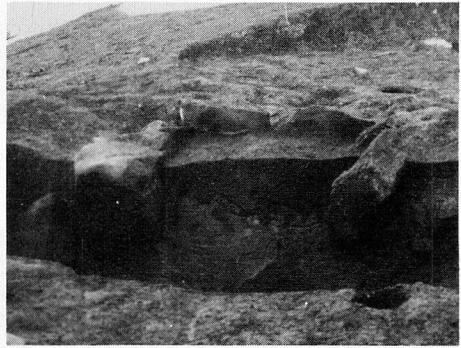
写真図版 3



a. D III-2住居址



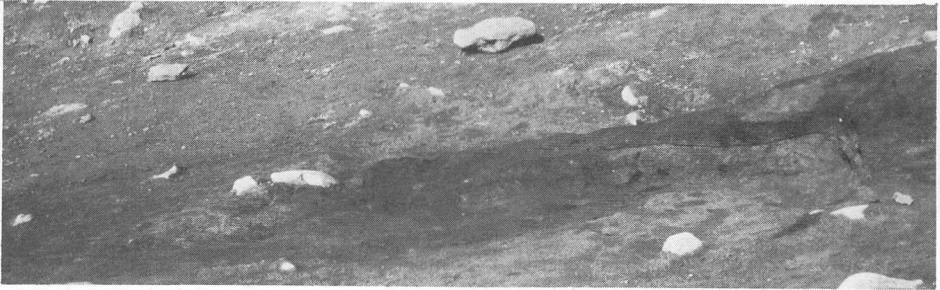
b. D III-2住居址炉



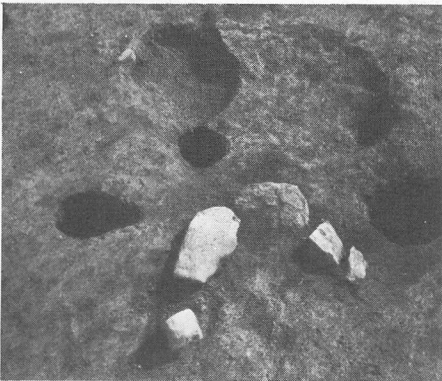
c. D III-2住居址炉 (断面)



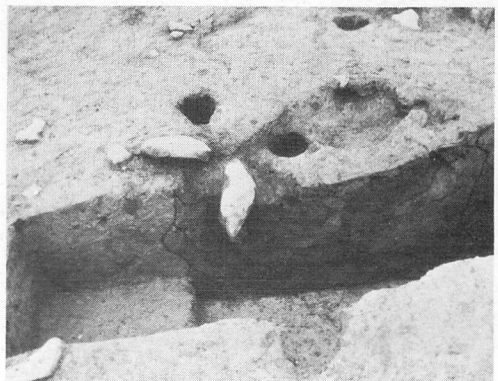
a. D III-3住居址



b. D III-3住居址 (土層断面)



c. D III-3住居址炉

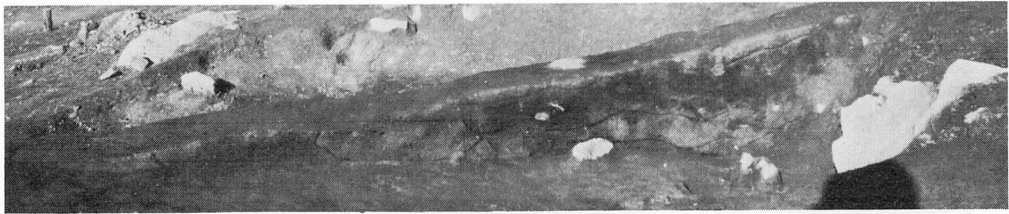


d. D III-3住居址炉 (断面)

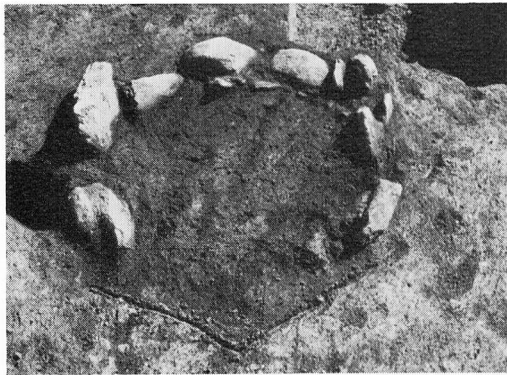
写真図版 5



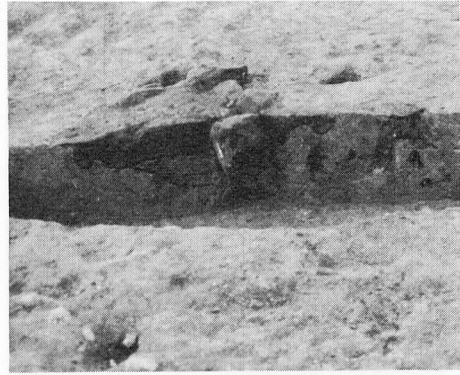
a. D IV-1住居址



b. D IV-1住居址 (土層断面)

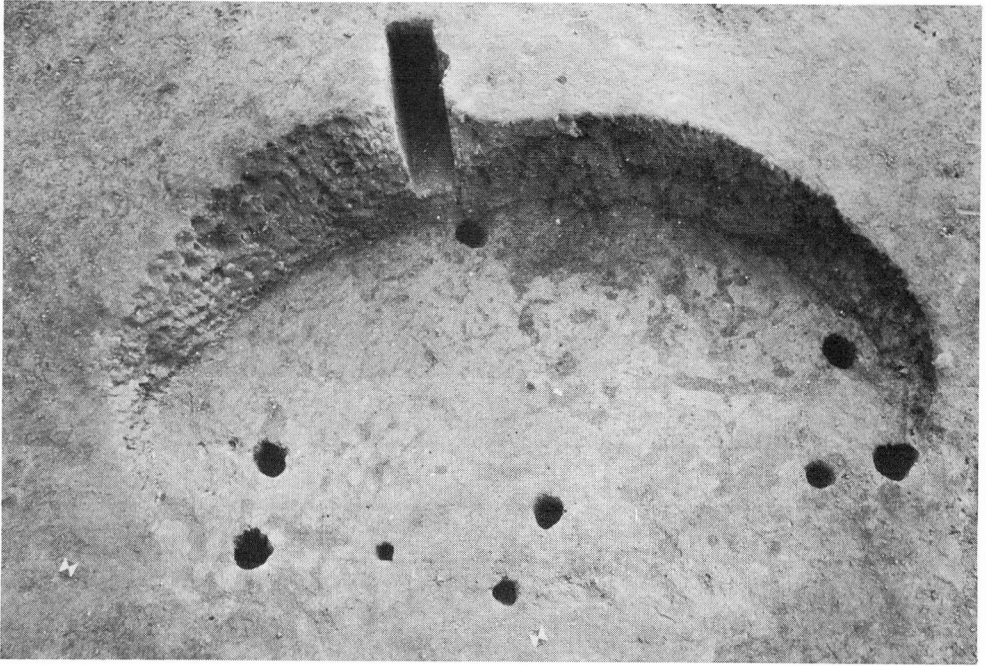


c. D IV-1住居址炉



d. D IV-1住居址炉 (断面)

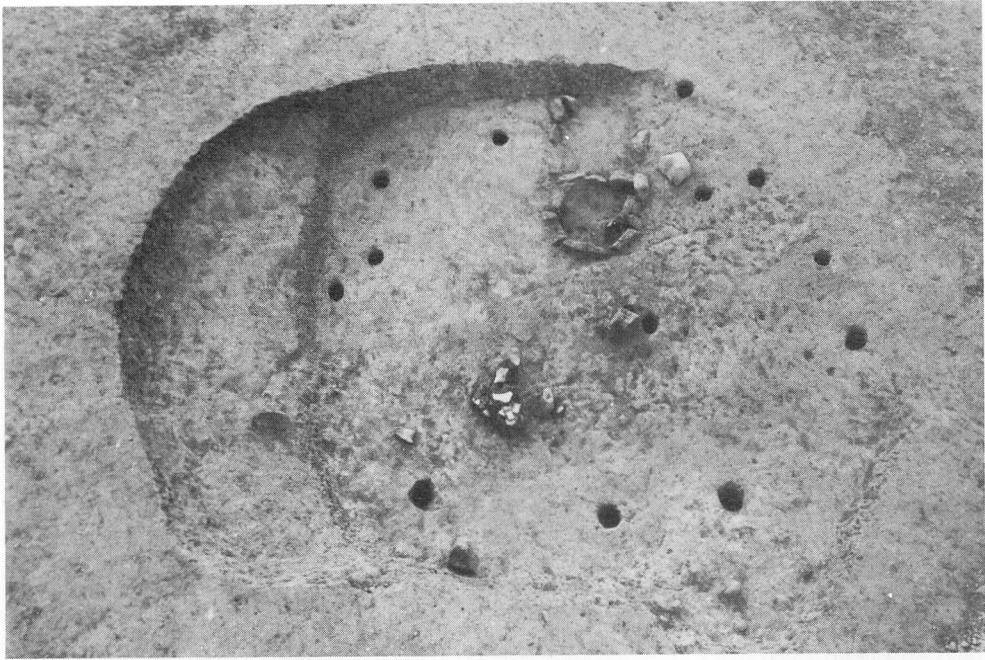
写真図版 6



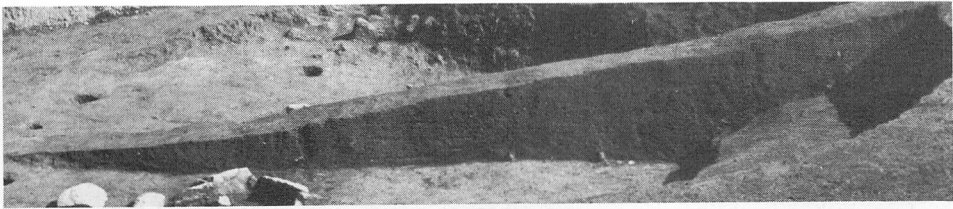
a. D IV-2住居址



b. D IV-2住居址 (土層断面)



a. D IV-3住居址

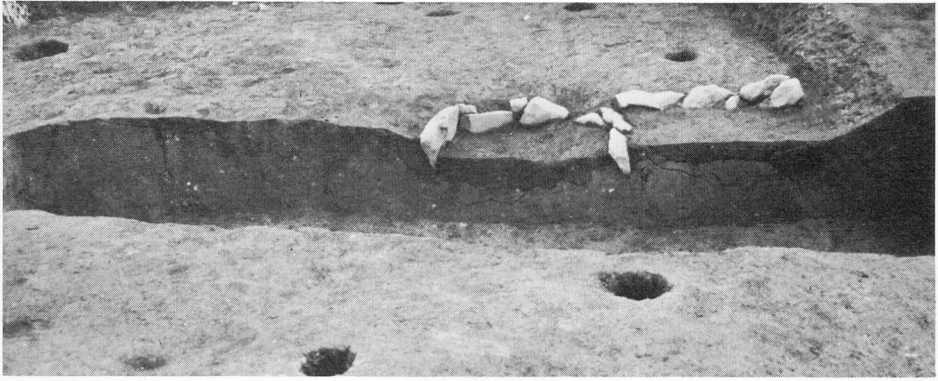


b. D IV-3住居址(土層断面)

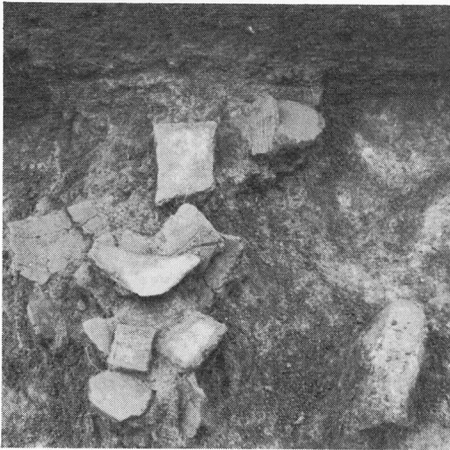


c. D IV-3住居址炉

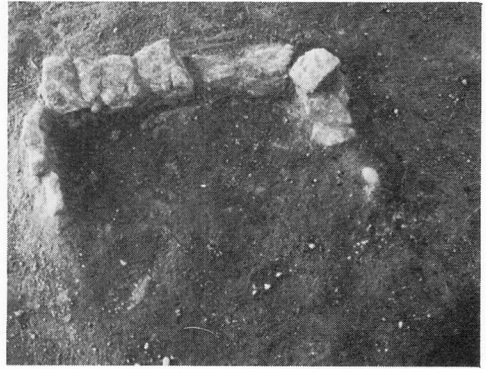
写真図版 8



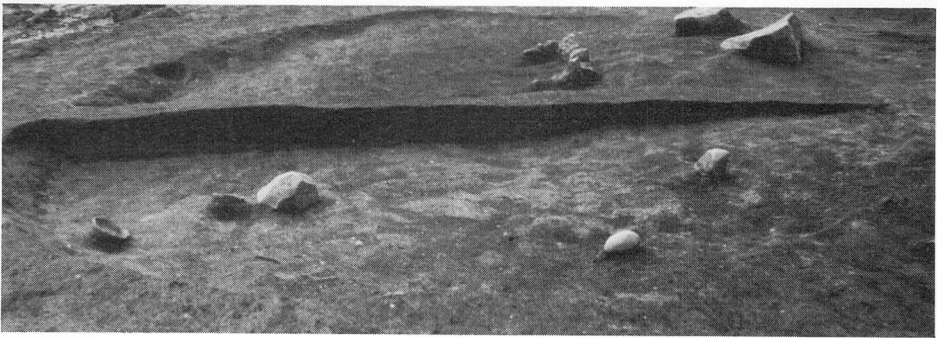
a. D IV-3住居址炉 (断面)



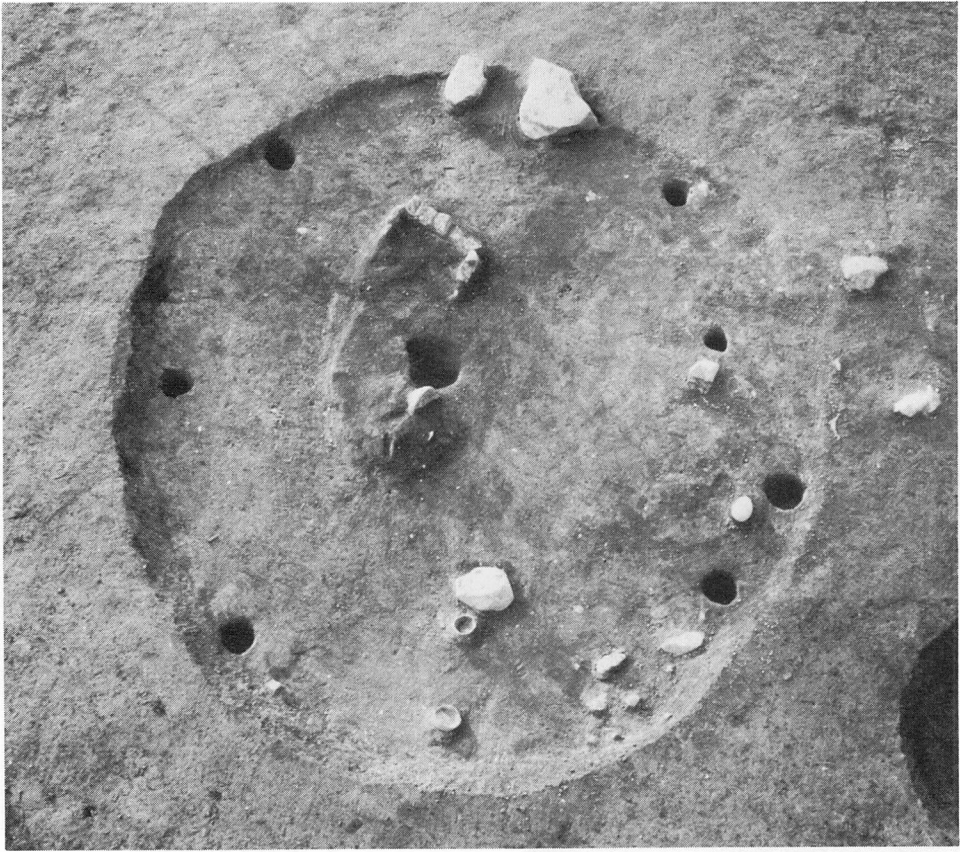
b. D IV-3住居址 (土器出土状况)



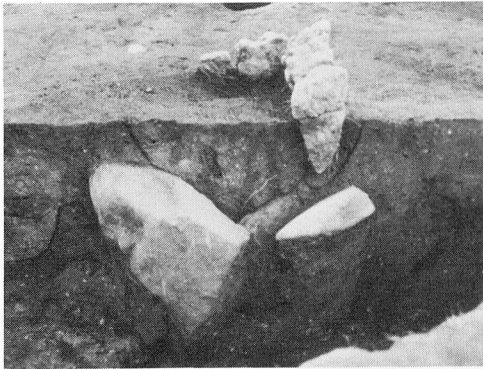
d. E IV-1住居址炉



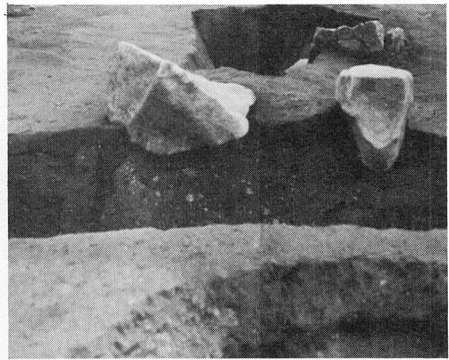
c. E IV-1住居址 (土層断面)



a. E IV-1住居址



b. E IV-1住居址炉 (断面)



c. E IV-1住居址「出入口」状施設 (断面)



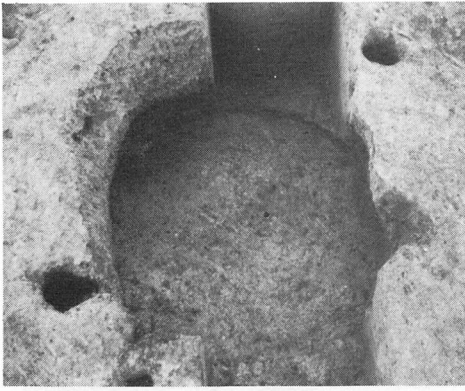
a. E IV-2住居址



b. E IV-2住居址炉



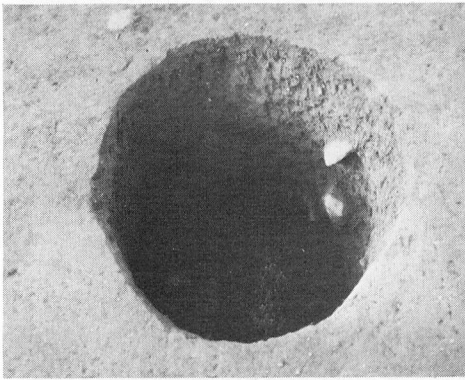
c. E IV-2住居址炉 (断面)



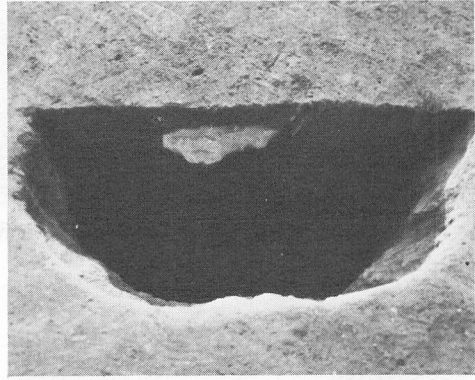
a. D III-51ピット



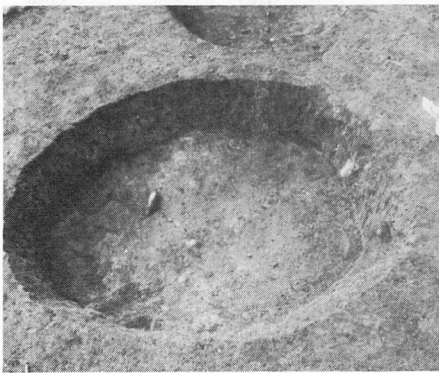
d. D IV-52ピット



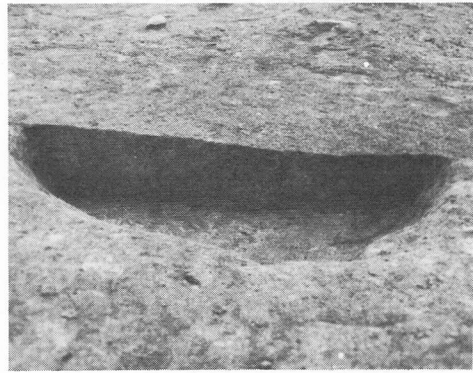
b. D IV-51ピット



c. D IV-51ピット (土層断面)



e. E IV-51ピット

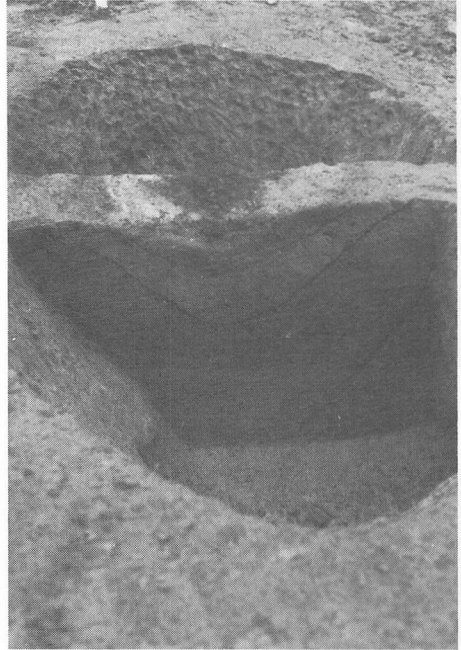


f. E IV-51ピット (土層断面)

写真図版 12



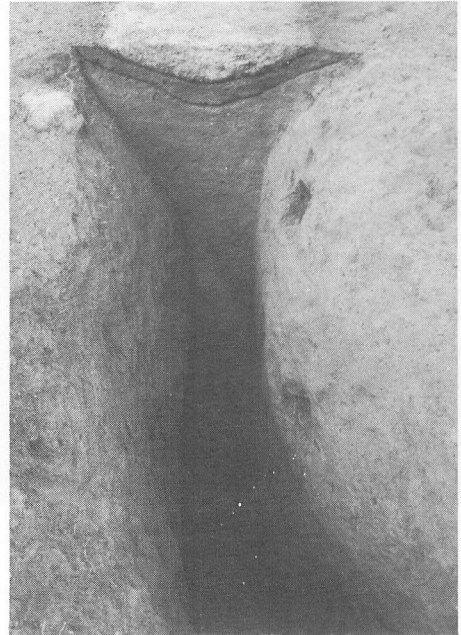
a. E III-101陥し穴状遺構



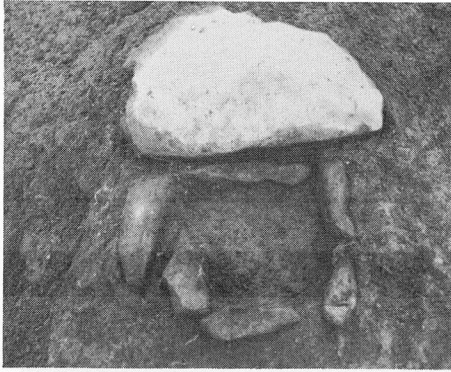
b. E III-101陥し穴状遺構 (土層断面)



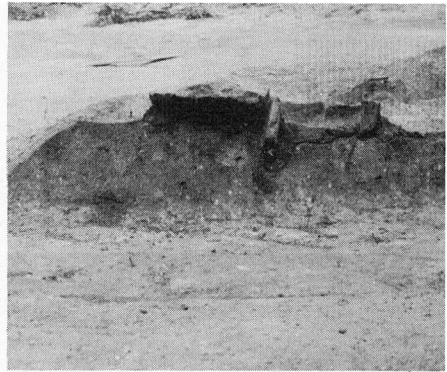
c. E IV-101陥し穴状遺構



d. E IV-101陥し穴状遺構 (土層断面)



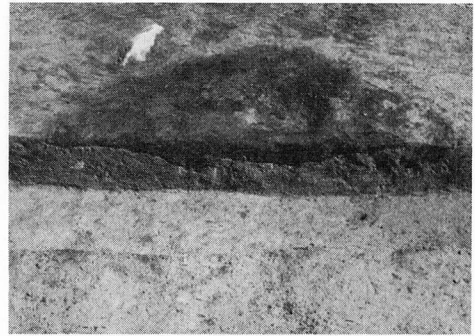
a. C I-151 炉址状配石遺構



b. C I-151 炉址状配石遺構 (断面)



c. E III-151 焼土遺構

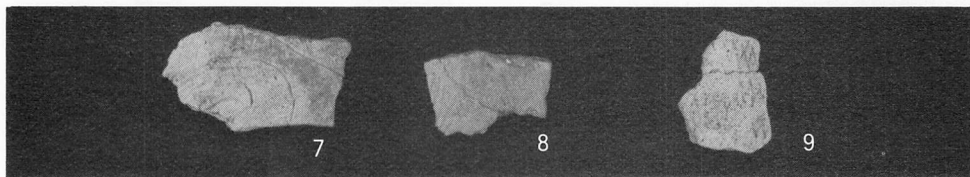
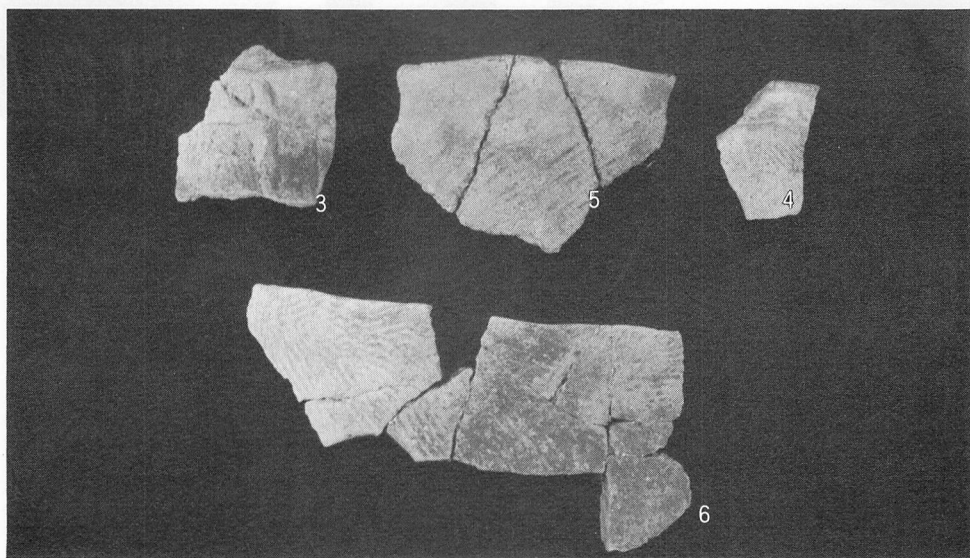
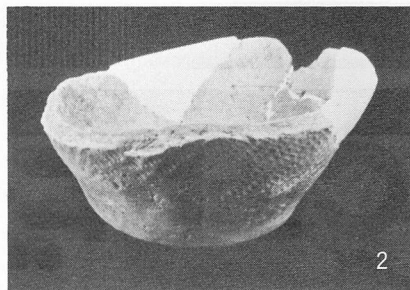
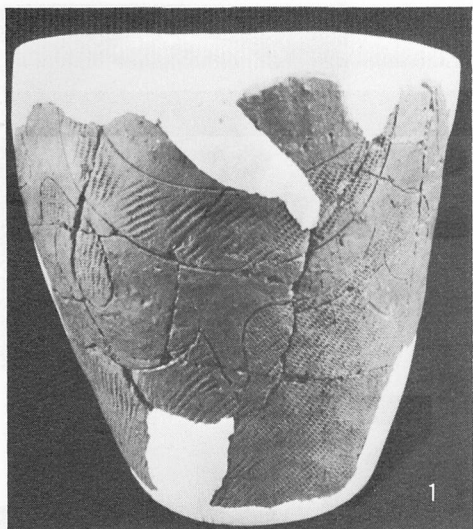


d. E III-151 焼土遺構 (断面)



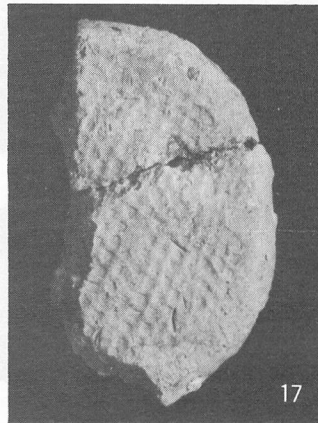
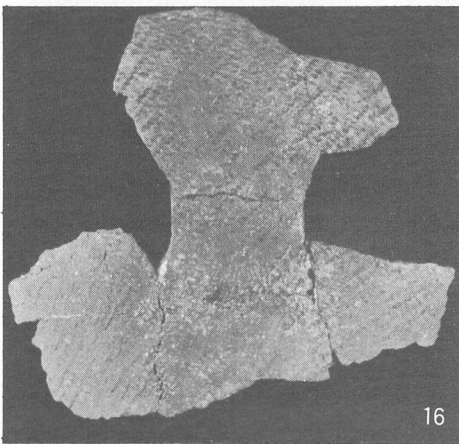
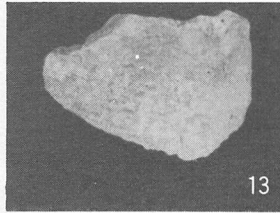
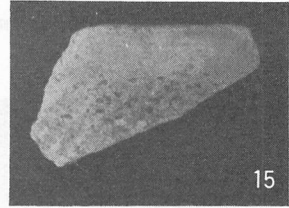
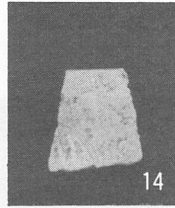
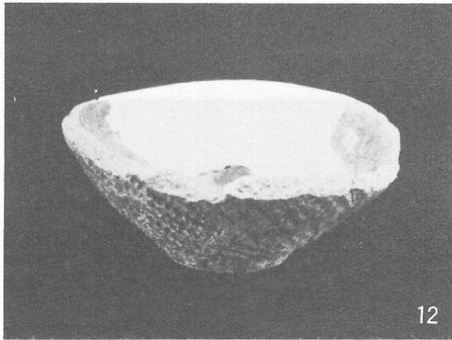
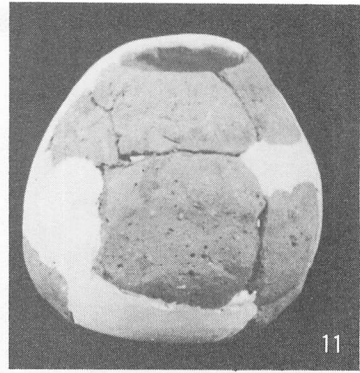
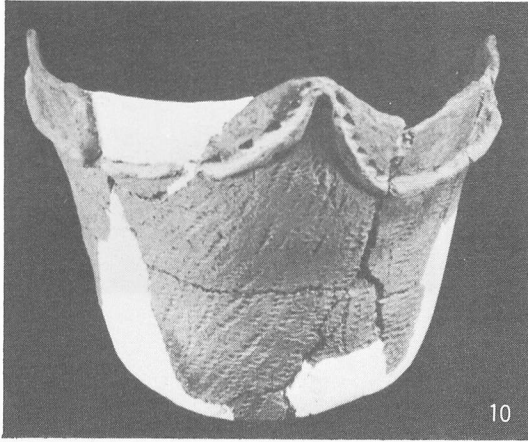
e. E IV区 土器出土状況

D III-1住居址 (1~9)

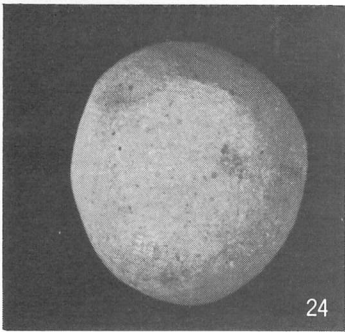
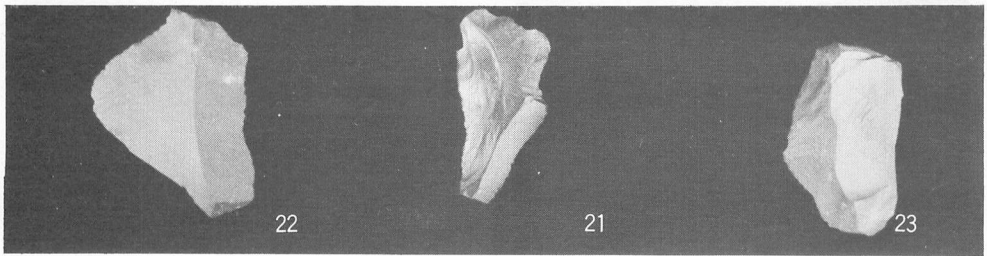
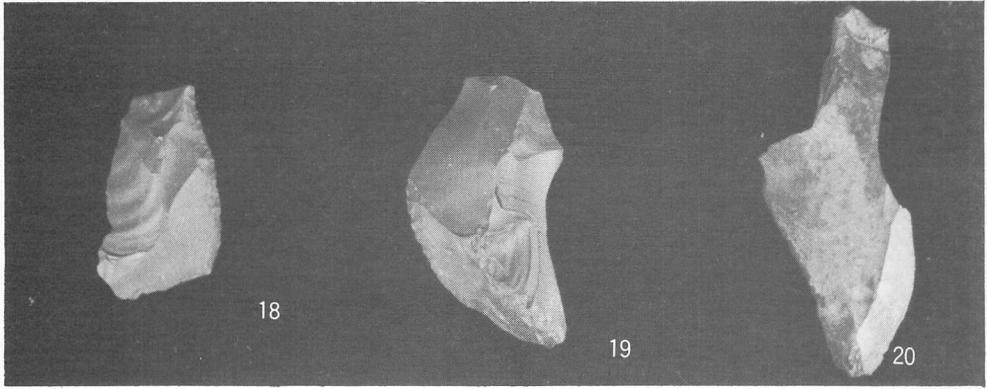


写真図版 15 遺構内の出土遺物 (1)

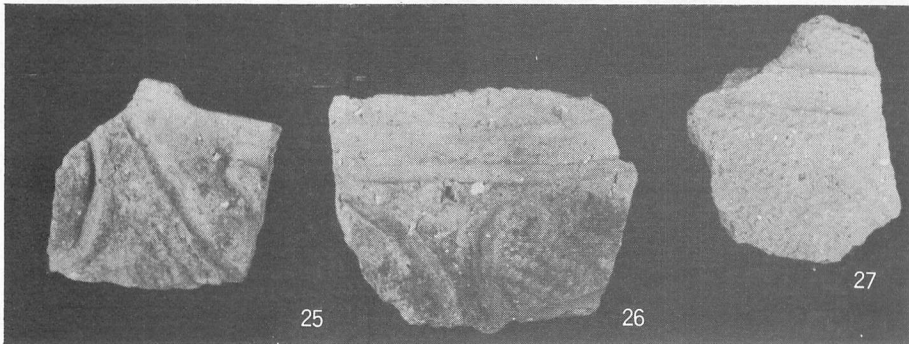
D III-2住居址 (10~24)



写真図版 16 遺構内の出土遺物(2)

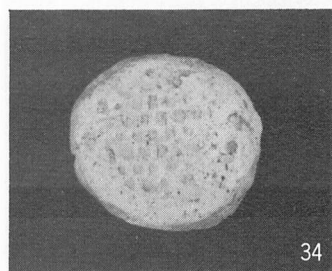
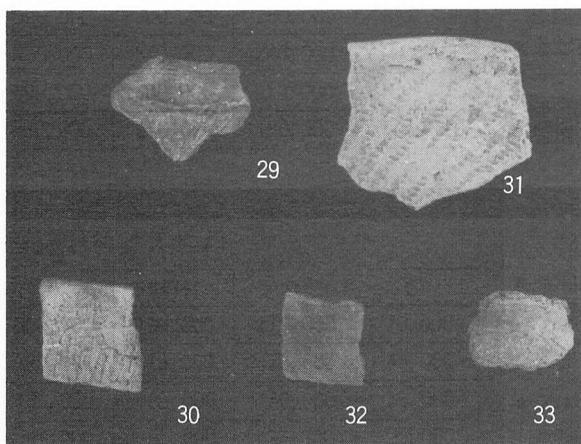
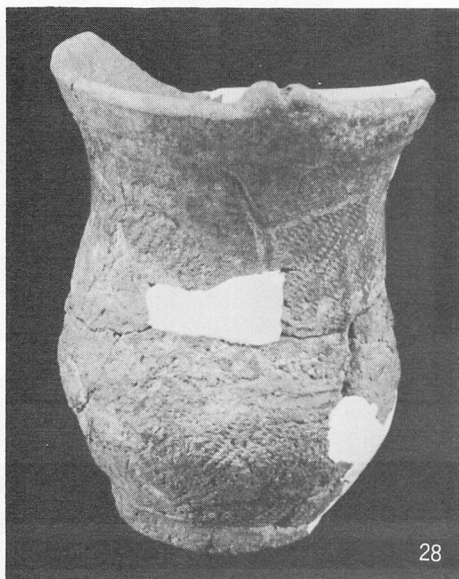


D III-3住居址 (25~27)

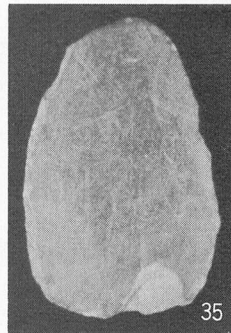


写真図版17 遺構内の出土遺物(3)

D IV-1住居址 (28-34)

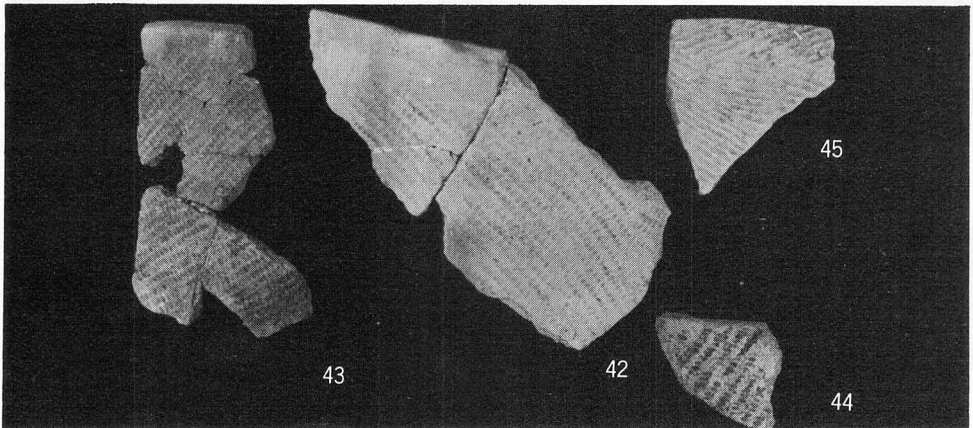
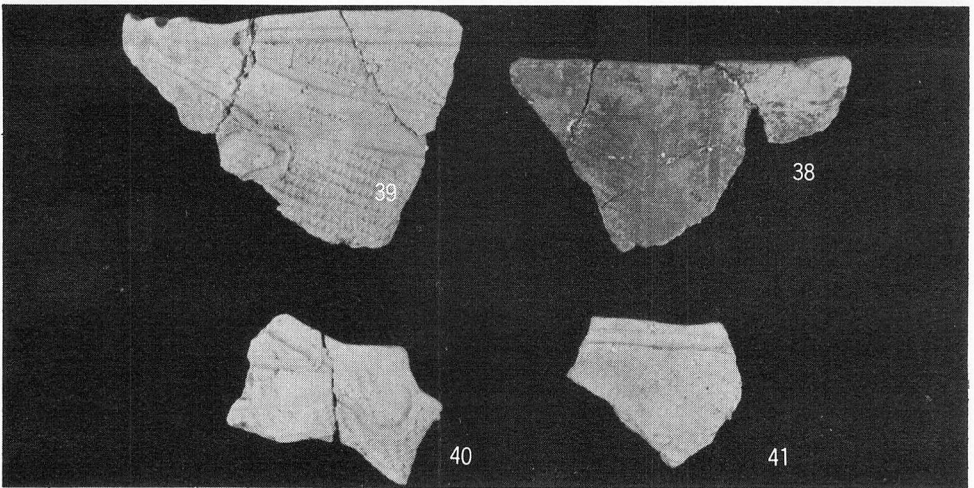
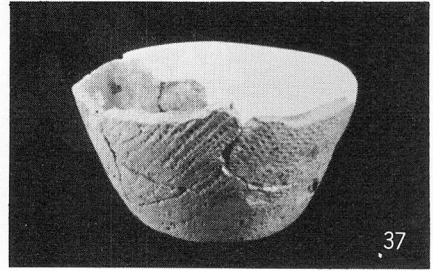
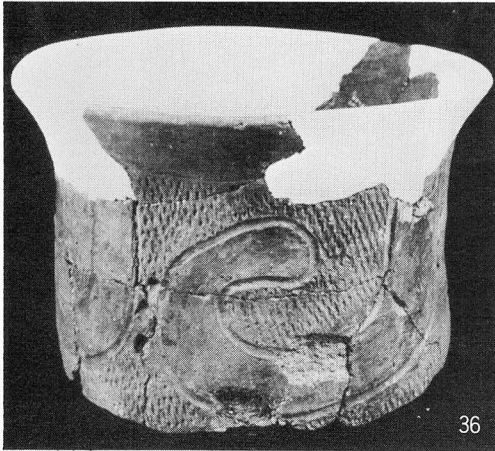


D IV-2住居址 (35)

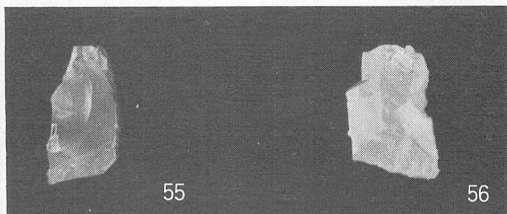
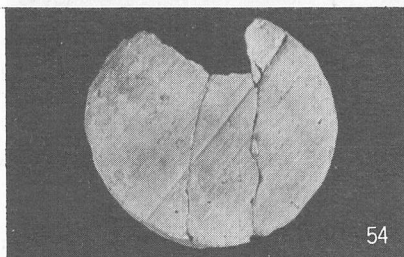
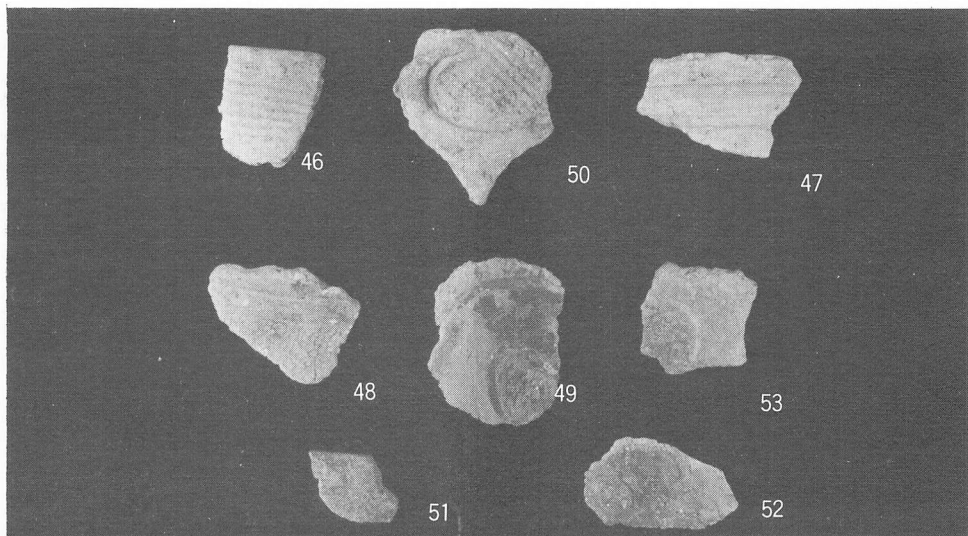


写真図版 18 遺構内の出土遺物 (4)

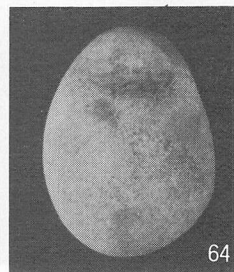
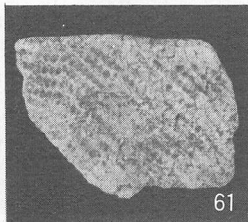
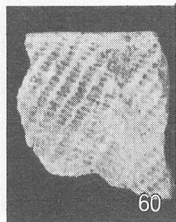
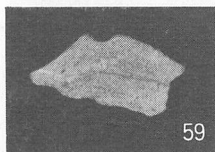
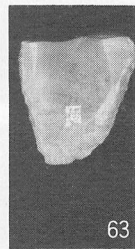
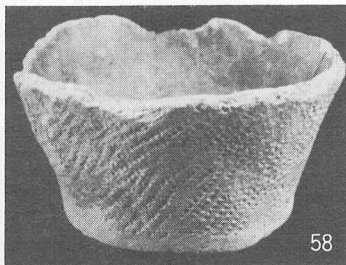
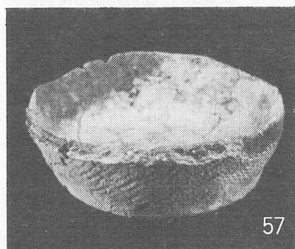
D IV-3住居址 (36~56)



写真図版 19 遺構内の出土遺物 (5)

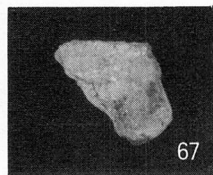
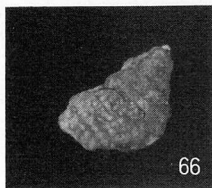
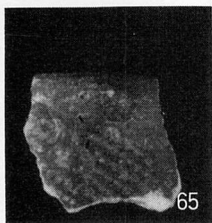


E IV-1住居址 (57~64)

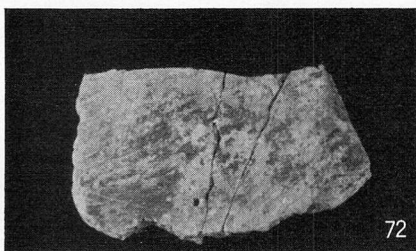
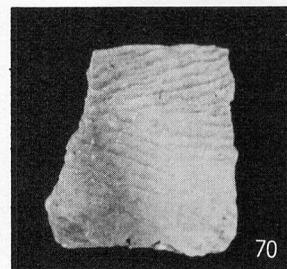
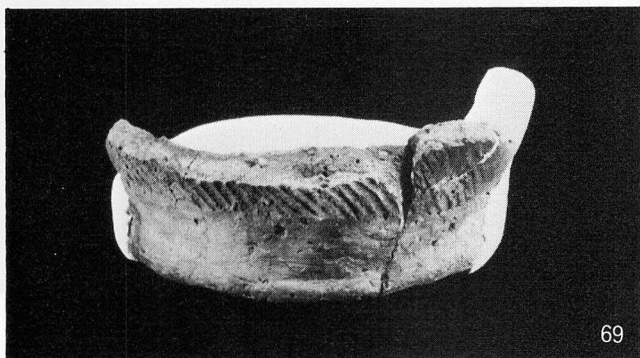


写真図版20 遺構内の出土遺物 (6)

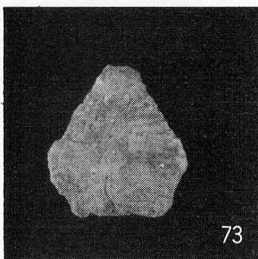
E IV-2住居址 (65~68)



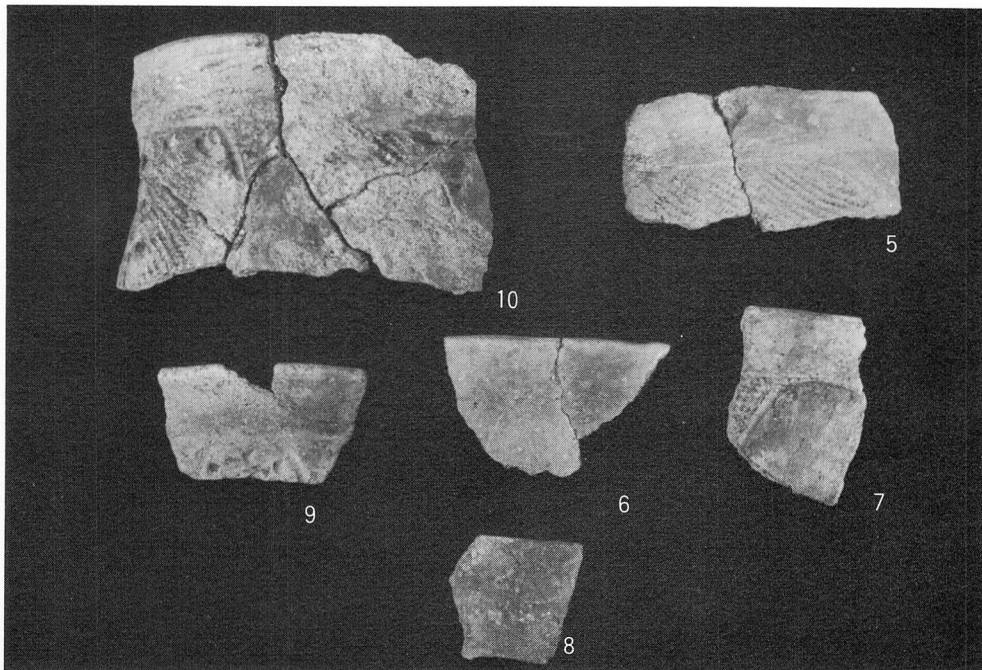
D IV-51ピット (69~72)



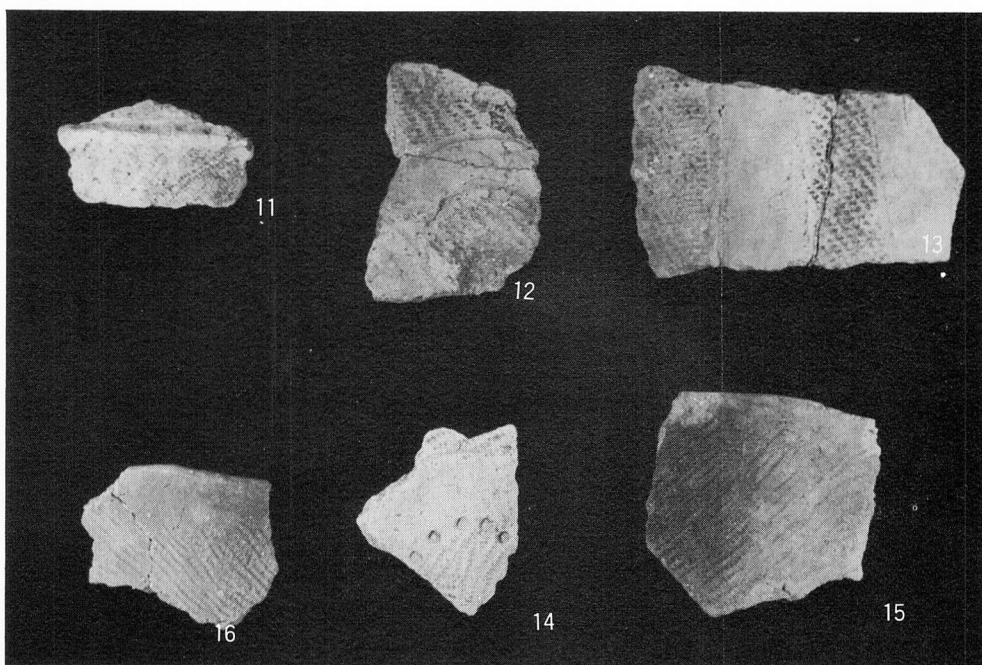
C I-151炉址状配石遺構 (73)



写真図版21 遺構内の出土遺物 (7)

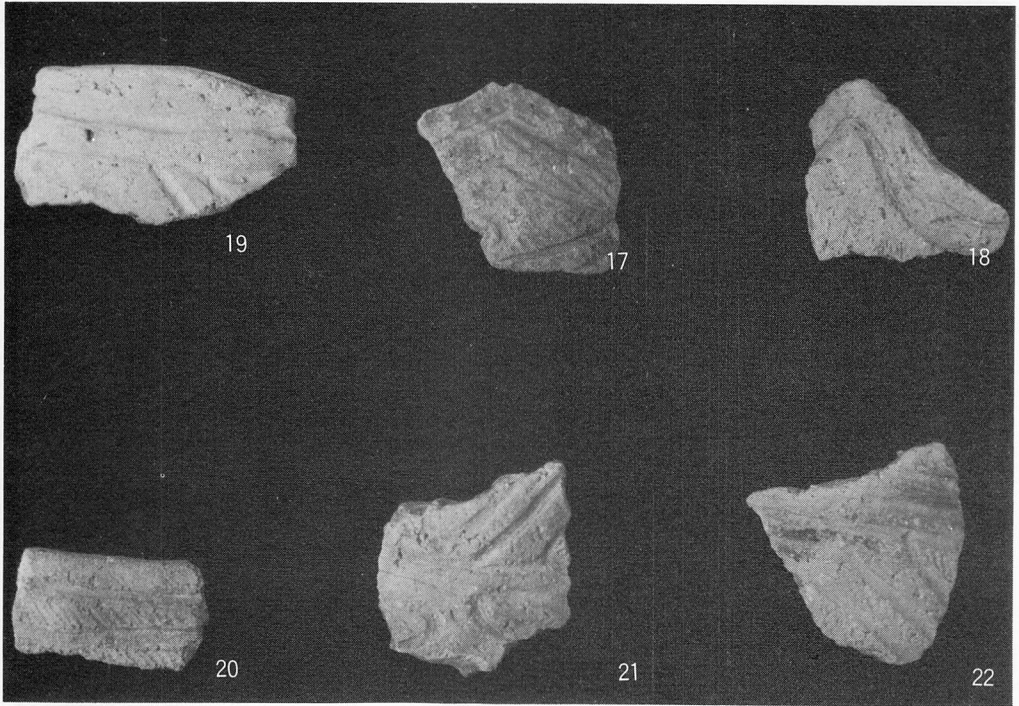


a. 第Ⅲ群土器

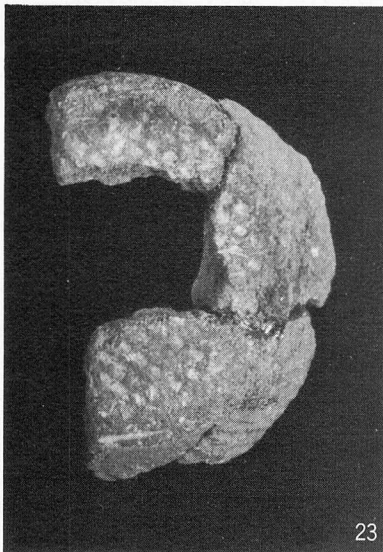


b. 第Ⅲ群土器

写真図版 23 遺構外の出土遺物 (2)

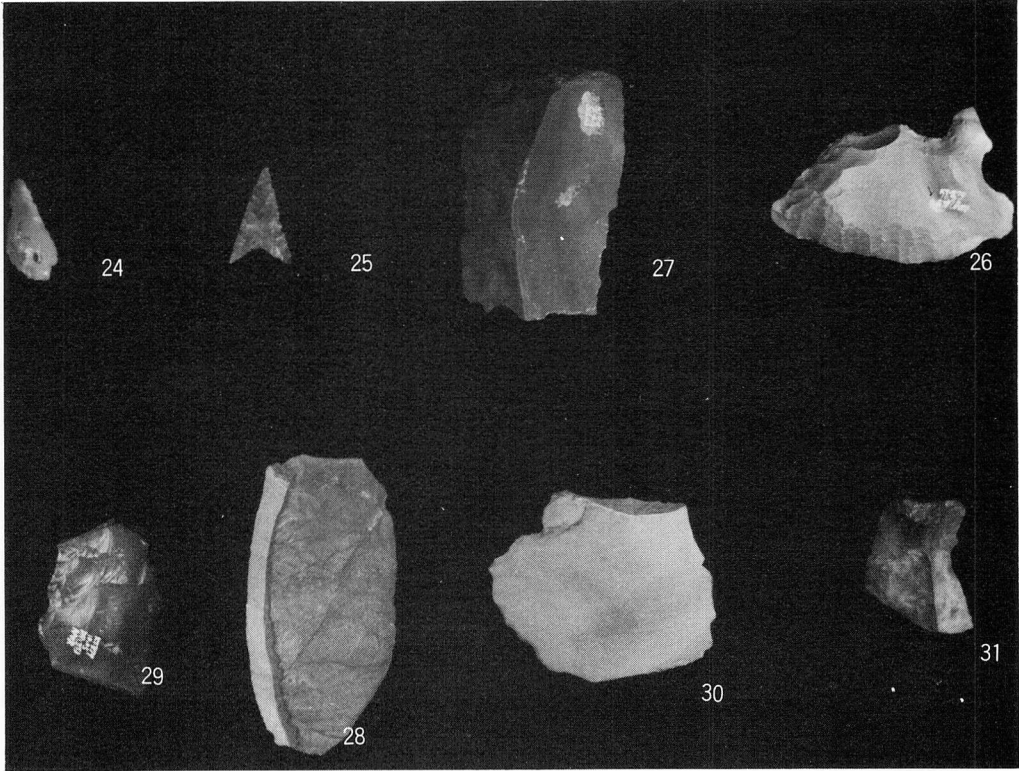


a. 第Ⅳ群土器



b. 土器底部

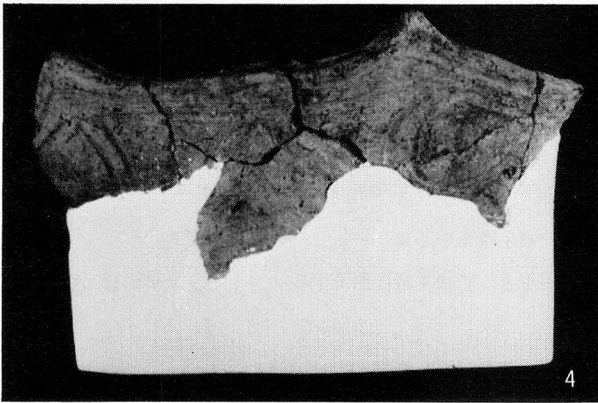
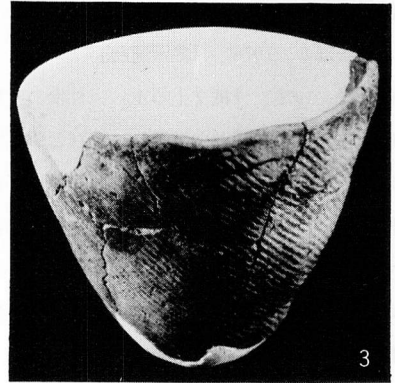
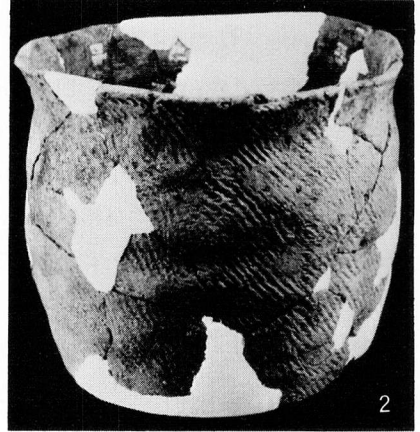
写真図版 24 遺構外の出土遺物 (3)



a. 24・25(石鏃) 26(石匙) 27・28(スクレイパー) 29～31(不定形石器)



b. 石斧



- 1 (第Ⅱ群土器)
2・3 (粗製土器)
4 (第Ⅳ群土器)

写真図版22 遺構外の出土遺物 (1)

参考・引用文献

- 芹沢長介 1972 『石器時代の日本』
- 鈴木孝志 1958 「岩手県岩手郡松尾村水切場遺跡調査概報」 『上代文化第28輯』
- 清水潤三 1959 『亀ヶ岡遺跡——青森県亀ヶ岡低湿地遺跡の研究——』
- 山内清男 1964 『縄文式土器Ⅰ』 日本原始美術Ⅰ
- 林 謙作 1965 「縄文文化の発展と地域性——東北——」 『日本の考古学Ⅱ』
- 草間俊一ほか 1967 『盛岡市一本松熊の沢遺跡』
- 草間俊一ほか 1971 『貝島貝塚』
- 市川金丸ほか 1973 『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』
- 草間俊一ほか 1974 『岩手県大槌町吉里吉里崎山弁天遺跡』
- 村越 潔 1974 『円筒土器文化』
- 村越 潔 1976 「円筒土器に伴う特殊な石器」 『東北考古学の諸問題』
- 三浦謙一ほか 1977 『都南村湯沢遺跡』
- 鈴木克彦ほか 1978 『熊沢遺跡』
- 小林達雄 1979 『縄文土器Ⅰ』 日本の原始美術1
- 佐原 眞 1979 『縄文土器Ⅱ』 日本の原始美術2
- 小岩末治 1961 「弥生式文化の展開」 『岩手県第1巻』
- 武田良夫 1978 「岩手県における弥生式土器について——盛岡地方を主として——」 『考古風土記第3号』
- 鈴木克彦 1978 「青森県の弥生時代土器集成Ⅰ」 『考古風土記第3号』
- 岩本義雄ほか 1979 『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 草間俊一 1965 『岩手県福岡町堀野遺跡』
- 高橋信雄 1976 『保土沢遺跡発掘調査報告書』
- 関 豊 1978 『二戸市中曾根遺跡発掘調査報告書』
- 大池昭二 1972 「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」 『第四紀研究第11巻4号』
- 中川久夫 1972 「青森県の第四系」 『青森県の地質』
- 大池昭二 1974 「十和田火山は生きている」 『国土と教育No. 26』
- 町田 洋 1977 『火山灰は語る』
- 瀬川司男 1978 「縄文期以後の火山灰と遺跡——岩手県を中心に——」 『どるめん19号』
- 小林達雄 1973 「多摩ニュータウンの先住者——主として縄文時代のセトルメント・システムについて——」 『月刊文化財1月号』
- 四井謙吉ほか 1980 『松尾村野駄遺跡、寄木遺跡、西根町崩石遺跡』
- 高橋正之ほか 1980 『広瀬Ⅱ遺跡・堂ヶ沢遺跡・繫Ⅲ遺跡』
- 安田喜憲 1980 『環境考古学事始』
- 高橋文夫 1980 「竪穴住居址」 『松尾村長者屋敷遺跡（Ⅰ）』

岩手県埋文センター文化財調査報告書第21集

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書
荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・越戸Ⅱ遺跡

昭和56年3月20日印刷

昭和56年3月25日発行

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市向中野字向中野39番1号

TEL (0196)35-6622

印刷 株式会社熊谷印刷
